

宮城学院女子大学大学院

人文学会誌

第 26 号



2025年3月

英語・英米文学専攻
日本語・日本文学専攻
人間文化学専攻
生活文化デザイン学専攻

人
文
学
会
誌

第
二
十
六
号

宮
城
学
院
女
子
大
学
大
学
院

宮城学院女子大学大学院

人文学会誌

第 26 号



2025年3月

英語・英米文学専攻
日本語・日本文学専攻
人間文化学専攻
生活文化デザイン学専攻

目次

〈研究ノート〉	多勢 早智	(157)
家政館の共有スペースにおける換気量の実態と改善案		
〈研究ノート〉	三浦 ひより	(147)
異性愛規範と日本語教科書 ― 初級日本語教科書のジェンダー分析から―		
〈研究ノート〉	三浦 ひより	(137)
アフリカ系アメリカ人の芸術文化としてのダンス ― ジャイブを一例に―		
〈研究ノート〉	木口 寛久	(125)
第一言語獲得論の観点からみるScope-Freezingの制約について		
〈修士論文題目及び内容の要旨〉		
Queer Reading of Stepmother and Daughter Relations in Cinderella Story Films: Rebecca and Cinderella	Saki Takeda	(123)
〈修士論文題目及び内容の要旨〉		
感動詞の意味分析 ― 宮城県牡鹿郡女川町における談話調査から―	木村 安未紗	(117)
〈修士論文題目及び内容の要旨〉		
天明から文化年間における庄内藩の肥料確保 ― 気候対策の観点から―	阿曾 愛絵花	(111)
〈修士論文題目及び内容の要旨〉		
明治後半期から大正期における実業補習学校の整備主体の変容 ― 宮城県を事例に―	下山 千晴	(103)
Lesbian Relationships in Cinderella Story Films: Rebecca and Cinderella	Saki Takeda	(73)
感動詞「オウ」の用法 ― 宮城県牡鹿郡女川町における談話調査から―	木村 安未紗	(53)
明治後半期から大正期における実業補習学校の整備主体の変容 ― 宮城県を事例に―	下山 千晴	(31)
本州初の公立日本語学校の誕生と多文化共生のまちづくりの展望		
― 開校前3年間の宮城県大崎市での調査から―		
曖昧さ耐性とわりきり志向および精神的健康の関連について	澤邊 裕子	(11)
	友野 隆成	(1)

参考文献

- 1) 国土交通省：シックハウス対策に係る技術的基準（政令・告示）について、2003.6.24.<https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/build/sickhouse.files/setumeishiryoku.pdf>など
- 2) 新型コロナウイルス感染症対策分科会：感染拡大防止のための効果的な換気について、2022.07.14<https://www.mhlw.go.jp/content/001020788.pdf>など
- 3) 小熊幸一ら：これからの環境分析化学入門、講談社2013.
- 4) 日本規格協会：JISA1406-1974屋内換気量測定方法（炭酸ガス法）
- 5) 空気調和・衛生工学会：SHASE-S102-2022換気規準・同解説
- 6) 厚生労働省：建築物環境衛生管理基準
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/seikatsu-eisei10/>

謝辞

本報の一部は、宮城学院女子大学生生活科学部生活文化デザイン学科小林麗朱さんの2023年度卒業研究として行われた。実測作業や結果分析については彼女の貢献が大きく、ここに謝意を表する。

注記

本報の概要は、2025年度第88回日本建築学会東北支部研究報告会（2025年6月21-22日東北学院大学）にて口頭発表予定である。



写真 8 壁付型の例 (三菱電機 EX-25SC4)

4タイプのなかで最も理想的なのは、天井埋込型である。しかしながら、対象室の天井内スペースの寸法によっては設置が難しい場合もあり、家政館4階の構造に関する情報が不足している現段階では、天井埋込型や天井吊型が実際に施工可能であるか推察することは難しい。

したがって、現段階では既存施設への後付けが容易な床置型が最適であると考えられる。具体的な機種としては、写真7に示す全熱交換器付換気設備を提案する。給排気ダクトの施工および対象室の電源配置を考えた際、室内奥にある東側壁面に設けられた電源付近が設置場所として最適であると考えられる。風量は最大 $500\text{m}^3/\text{h}$ であるため、2台設置により最大 $1000\text{m}^3/\text{h}$ が確保され、対象室の必要換気量 $920\text{m}^3/\text{h}$ を満たすことができる。しかしながら、現状の対象室において設置可能であるのは1台であると想定される。その場合は、在室者数の上限を28人の半分である14人程度として運用することが望ましい。

4. 結論

本報で得られた結論は以下のとおりである。

1) CO_2 濃度計のアプリケーション

標準機の指示値をもとに校正曲線を作成した結果、機種A～Cはどれも精度が高い。したがって、機種Aは室内外問わず幅広い計測に、機種Bは室内に固定して長期計測を行う場合に、機種Cは適切な換気実施のために滞在空間における CO_2 濃度をモニタリングする場合に適していることが分かった。

2) 対象室における換気量の実測

対象室における換気量は、実測結果から $81\text{m}^3/\text{h}$ であることが明らかになった。しかしながら、自然換気では風量が安定せず、現行の建築基準法では常時換気設備の設置が義務付けられているため、設計必要換気量を計算する必要がある。

3) 対象室における換気量増強のための具体的な改善策の検討

対象室の在室者数を28人と想定した場合、設計必要換気量は $920\text{m}^3/\text{h}$ であり、これを満たす機械換気設備を設置しなければならない。

対象室における給排気ダクトの施工位置および電源配置を考慮すると、現段階では床置型全熱交換器付換気設備が最適であると考えられる。しかしながら、対象室内に換気設備が露出することになるので、利用学生にとって見た目がよくないこと、さらに、家政館4Fの構造（耐震強度、天井内スペースなど）に関する情報が不足しているため、実際に設計・施工する際には、他の機種を選定する必要があるかも知れない。

1) 天井隠ぺい型

写真5に、天井隠ぺい型の例を示す。

天井隠ぺい型は、吊りボルトを用いて構造体に固定された本体、それに付随するダクトを天井内スペースに収まるよう設置する。本体が露出しないため見た目がよく、室内に設置スペースを取らない一方で、メンテナンスに手間がかかる。



写真 5 天井隠ぺい型の例 (DAIKIN VAM500KS)

2) 天井吊型

写真6に、天井吊型の例を示す。

天井吊型は、本体が室内に露出している状態で吊りボルトを用いて構造体に固定するため、天井内スペースに余裕がない場合でも設置可能である。本体が露出するため、施工性とメンテナンス性が高く、既存施設への後付けにも適している。懸念点としては、本体の露出による見た目の悪さや、構造体の都合による設置場所の制限などが挙げられる。



写真 6 天井吊型の例 (三菱電機 SCH-50EXC)

3) 床置型

写真7に、床置型の例を示す。

床置型は、本体を床に直接設置する。既存建物への設置に適しており、メンテナンス性も高い。一方で、本体の露出による見た目の悪さ、室内での設置場所の確保などを考慮しなければならない。



写真 7 床置型の例 (三菱電機 SCF-50LX)

4) 壁付型

写真8に、壁付型の例を示す。

壁付型は、屋外に面した壁面や既存の窓枠を利用して取り付ける。安価で施工がしやすい。しかしながら、プロペラファンを通じて屋外に直接排気するため、外気の流入や虫、埃などの異物も室内に入りやすくなる。また、熱交換機能が備わっていないため、他タイプと比較して外気温や湿度の影響を受けやすい。

近似式の指数から、換気回数は0.45回/hであり、換気量は81m³/hが得られた。建築基準法では、非住宅の居室について換気回数0.3回/h以上の風量が確保できる機械換気設備の設置が定められており、対象室の換気量はこれをクリアしていることが分かった。対象室には換気設備が設置されていないものの、屋外に面した窓のすき間や廊下側にあるドアのすき間を通じた自然換気が行われていると考えられる。しかしながら、自然換気の場合、換気量は外部風の風向・風速に左右されるため、常に安定した風量を得ることが難しい。

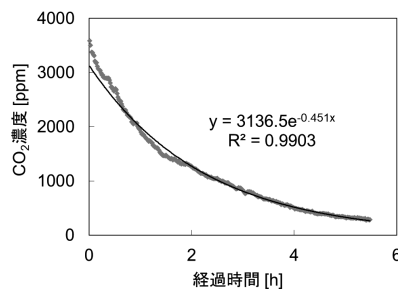


図5 測定結果と近似曲線

3. 3 対象室における換気量増強のための具体的な改善策

現行の建築基準法では居室に対する常時換気設備の設置が必要であり、感染症対策の観点からも、対象室では換気設備の設置により換気量の増強を図ることが望ましい。

そこで、対象室の座席数から最大28人在室することを想定し、(a) 空気調和・衛生工学会 (SHASE) 規準⁵⁾、(b) 建築物環境衛生管理基準 (通称：ビル管法)⁶⁾ に基づいて必要換気量を試算してみる。

(a) SHASE規準に基づく必要換気量

SHASE基準では、1人あたりの必要換気量を30m³/hと規定している。ゆえに設計必要換気量は840m³/hとなる。

(b) ビル管法に基づく必要換気量

ビル管法では、室内空気環境についてCO₂濃度が1000ppm以下であることが規定されている。それを遵守するための換気量は、平衡状態を表す式4により算出することができる。

$$Q = \frac{M}{C - C_o} \quad \dots\dots\text{式 4}$$

M ：汚染物質の発生量 [m³/h]

C ：汚染物質の濃度 [m³/m³]

C_o ：汚染物質の外気濃度 [m³/m³]

学生1人あたりのCO₂発生量を0.018m³/h、外気のCO₂濃度を450ppmとした場合、対象室内のCO₂濃度が1000ppm以下となる必要換気量は約920m³/hである。

以上より、対象室の設計必要換気量は、最大値である920m³/hとなる。

対象室における必要換気量を確保することができるような換気設備を具体的に検討する。

機械換気設備には、設置方法ごとに天井隠ぺい型、天井吊型、床置型、壁付型の4タイプがある。

ら換気回数および換気量を得る。まず式2に、室内容積に対する1時間あたりの空気の入れ替え回数（換気回数）から換気量を算出する式を示す。

$$Q=n \times V \quad \cdots \cdots \text{式 2}$$

Q ：換気量 [m³/h]

n ：換気回数 [回/h]

V ：気積 [m³]

計測結果からExcelを用いて得られる近似式を式3に示す。近似式の指数 n が換気回数であり、これに対象室の気積 V を乗じれば換気量 Q が得られる。

$$y=y_0e^{-nx} \quad \cdots \cdots \text{式 3}$$

y ： x 時間後における対象室空気中のCO₂濃度

y_0 ：測定開始時点（ $x=0$ ）における対象室空気中のCO₂濃度

x ：経過時間 [h]

3. 結果および考察

3. 1 CO₂濃度計のアプリケーション

図2～4に、機種A～Cの校正曲線を示す。ガス校正を行った標準機の指示値を x 軸、同時刻の他機種による指示値を y 軸として、機種A～Cについての校正曲線を求めている。

図3より機種Bの指示値は若干低めではあるものの、いずれの機種も測定原理としてNDIR方式を採用しており、高精度なデータを得られることが分かる。

機種Aは小型で安価であることに加え、数日間にわたる電池駆動が可能で最大データ保存数も多い。また、屋内外問わず使用可能なので、さまざまな状況におけるCO₂濃度測定に適用できる。

機種Bは高価ではあるものの、最大データ保存数が最も多いため、室内に固定して長期測定をする場合に適している。

機種Cは、Bluetooth無線通信によって端末との通信がある状態でのみロギングができるが、本体と端末との距離や遮蔽物によって接続が途切れる可能性があり、安定したロギングが難しい。また、使用中は常時電源を必要とするため、居室内の電源がとれる位置に設置し、室内CO₂濃度をモニタリングする場合に最適である。

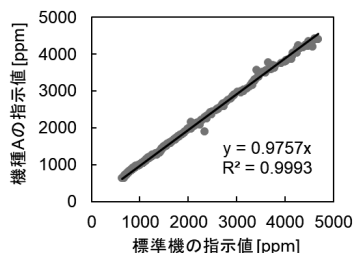


図2 機種Aの校正曲線

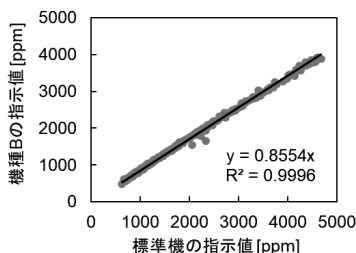


図3 機種Bの校正曲線

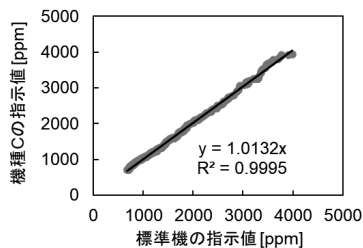


図4 機種Cの校正曲線

3. 2 対象室における換気量の実測

図5に、対象室における換気量の実測結果としてCO₂濃度の経時変化を示す。



写真 1 空気質計測器(KANOMAX MODEL2211)



写真 2 機種 A



写真 3 機種 B



写真 4 機種 C

2. 3 換気量の測定手順

対象室内の換気量は、濃度減衰法（トレーサガス法）⁴⁾により2023年秋に測定した。以下に、その手順を示す。

- (1) 対象室の開口部（窓やドア）を全て開放し、室内CO₂濃度が外気と等しくなるようにして、外気CO₂濃度 C_0 を測定する。
- (2) 対象室の開口部を全て閉鎖し、トレーサガスとしてドライアイスを溶解させてCO₂を発生、扇風機を用いてかくはんし、対象室内の濃度が均一になっていることを確認してから初期濃度 C_i を測定する。 C_i は、本研究で採用した濃度計の測定範囲上限の最小値である5000ppmとする。
- (3) その後の対象室内CO₂濃度を1分間隔で測定、 C_0 に近似した濃度まで、あるいは定常状態に至るまでの時間帯について減衰過程の測定点を得る。

得られた測定結果を用いて、物質平衡を表す式1により換気量を求める。

$$Q = 2.303 \frac{V}{t} \log_{10} \frac{C_i - C_0}{C_t - C_0} \quad \dots\dots \text{式 1}$$

Q ：換気量 [m³/h]

V ：その室の気積 [m³]

t ：第1回目の測定時刻からその測定までの経過時間 [h]

C_i ：第1回目の測定時刻（ $t=0$ ）における室内空気中のCO₂濃度 [m³/m³]

C_t ： t 時間後における室内空気中のCO₂濃度 [m³/m³]

C_0 ：給気中のCO₂濃度 [m³/m³]

今回の実測では、CO₂濃度の経時変化を計測し、Excelを用いて近似曲線を描き、近似式の指数が

椅子の数をもとに28人とした。

2. 2 使用機器

表1に本研究で使用したCO₂濃度の計測機器4種の仕様を、写真1～4にそれらの外観を示す。

4機種とも、CO₂ガス検出には非分散型赤外線吸収（non dispersire infrared absorption:NDIR）方式が採用されており、気体分子がそれぞれ固有波長の赤外線を吸収する性質をもとに、吸収された赤外線量からガス濃度を測定できる³⁾。

対象室における換気量の実測には、写真1に示した空気質計測器（KANOMAX MODEL2211）を採用した。この計測器は、ゼロガスとスパンガスを利用して校正ができるので、高い精度が維持される。これをCO₂濃度測定 of 標準器として、以下の小型3機種を同じ位置で同時に用い、現場実測などのアプリケーションについて検討した。

機種Aは、屋内、屋外の双方で使用可能であり、測定項目は温度・湿度・CO₂濃度、データの回収や設定は専用ソフトを用いて、PCとUSB接続により行うものである。

機種Bは、屋内環境の計測機器で、測定項目は温度・湿度・CO₂濃度、USB通信に加えて、Bluetooth通信機能があり、専用アプリをインストールしたモバイル端末で利用できる。

機種Cは、主に感染対策として居室の換気状況を常時確認することを想定した機器である。測定項目はCO₂濃度のみで、濃度が1000ppm以上となるとモニター左に配置されたランプの色が変わって点滅し、注意を促す機能がある。

表1 本研究で採用したCO₂濃度計

機種	標準機	A	B	C
メーカー名	KANOMAX	T&D	米国オンセット	ガステック
型式	MODEL2211	TR-76Ui	HOBO MX 1102A	CD-1000
価格 [円]	360,000	49,800	92,000	43,000
CO ₂ センサ	非分散型赤外線吸収(NDIR)方式			
測定範囲 [ppm]	0~5000	0~9999	0~5000	0~9999
応答性	約45秒（90%応答、校正キャップ使用時）	1分（90%応答）	1分（90%応答）	記載なし
校正機能	ガス校正	手動校正	自動校正 手動校正 標高補正	自動校正 強制校正機能
ロギング機能	あり	あり	あり	なし
記録データ数	最大1500データ	最大8000データ	最大84,650データ （128KB）	-
電池駆動	可	可	可	不可

家政館の共有スペースにおける換気量の実態と改善案

多勢 早智

1. 背景および目的

2003年7月に施行された建築基準法の改正では、シックハウス症候群への対策を目的として、原則としてすべての建築物における居室への機械換気設備設置が義務付けられた¹⁾。また、換気は感染症対策としても非常に重要であり、新型コロナウイルス感染症の流行時には、三密の回避と徹底した換気が促された²⁾。このように、近年では換気設備により室内空気環境を健康に保つ重要性は高まっているといえる。しかしながら、2003年以前に建てられた本学には換気設備のない居室が存在し、そこでは不特定多数の学生が食事や勉強をしながら過ごしている姿が見受けられる。学生たちが利用する際には窓開けによる換気も行われておらず、感染対策上問題であるため早急に改善が求められる。

本研究では、以下の点について明らかにする。

- 1) CO₂濃度計のアプリケーション
- 2) 対象室における換気量の実測
- 3) 対象室における換気量増強のための具体的な改善策

つまり、高精度CO₂濃度計および小型CO₂濃度計3種を用いて、対象室の換気量を測定しながら、アプリケーションの検討を行い、さらに、各種基準に従い対象室の設計必要換気量を算出して、対象室に適したタイプの換気設備について市販機種を参考に選定してみる。

2. 測定概要

2. 1 対象室の概要

図1に、実測対象室の平面概略図を示す。

対象室は家政館4Fのラウンジで、面積約60m²、高さ3m、気積180m³である。西面および北面は引き違い窓（1700×1400^H×7ヶ所）で、南側は廊下との間に引き違いドア（1000×2000^H×1ヶ所）がある。引き違いドア欄間部分には左右両端にすき間（300×300×2ヶ所）があり、東側の階段室を介してエントランスからの外気が漏入している。

一般にこの居室は、不特定多数の学生が授業の前後や昼休みの時間帯に食事や休憩、自習などを目的として利用している。在室者数は時間帯や曜日によって異なるが、必要換気量の算出に用いる在室者数は、設置されている

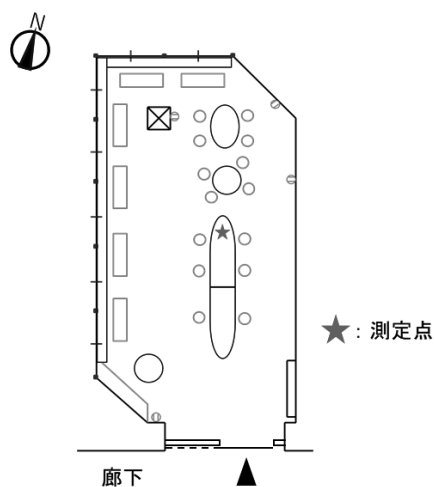


図1 対象室の概略図

書分析のレポートをもとに、研究ノートとしてまとめたものである。

参考文献

- 東優子（2013）「セクシュアル・マイノリティ」木村涼子伊田久美子熊安貴美江編著『よくわかるジェンダー・スタディーズ：人文社会科学から自然科学まで』pp.186-187、ミネルヴァ書房
- 阿部ひで子（2024）「性自認・性的指向と言語実践：トランス女性の場合」『日本語学』2024年春号、pp.84-92
- 有森丈太郎（2017）「ジェンダー・アイデンティティの多様性から考える日本語教育」『CAJLE2017Proceedings』<https://www.cajle.ca/conference-proceedings/cajle2017-proceedings/>（2025.2.15最終閲覧）
- 石黒圭（2023）『日本語は「空気」が決める：社会言語学入門』光文社
- 大野裕（2019）『『げんき』がめざしたもの』今井新悟伊藤秀明編著『日本語の教科書が目指すもの』pp.37-46、凡人社
- 鈴木伸子（2015）『日本語教育能力検定試験に合格するための異文化理解13』アルク
- 天童睦子（2018）『女性・人権・生きること：過去を知り未来をひらく』学文社
- 中村桃子（2024）『ことばが変われば社会が変わる』筑摩書房
- 三橋順子（2023）『これからの時代を生き抜くためのジェンダー&セクシュアリティ論入門』辰巳出版

た文の主語（人称代名詞）に合わせて、「夫」と「妻」、「彼氏」と「彼女」が使い分けられていることが明確になった。さらに観点3の分析から、手を繋いだり腕を組んだりといった男性キャラクターと女性キャラクターの仲睦まじい様子が描かれている挿絵は存在するが、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルのキャラクターの仲睦まじい様子が描かれている挿絵は存在しないという結果が得られた。これらの結果から、分析対象にした日本語の教科書はすべて異性愛規範に基づいて作成されたものであり、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に配慮のある設問や会話文は非常に限られていることが明らかになった。この背景には、日本社会のLGBTQ+の人々への認知と理解が不足していることがあるのではないだろうか。実際に、日本語教科書でLGBTQ+が不可視化されていることに関して、有森（2017）は「著者や出版社の偏見および社会における性別二元論や異性愛規範が反映されているのではないだろうか」（p.28）と分析している。

分析対象にあげた初級の日本語教科書は、日本国内で幅広く使用されている。これらの教科書がLGBTQ+の学習者を配慮した構成になることをひたすら待つのは現実的ではない。日本語教師は、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に対して、教科書に記載してある設問や語句をそのまま学習者に提示するのではなく、「彼氏/彼女/パートナー」のような選択肢を出したり、恋愛や結婚に関する内容が不快であれば設問をパスすることを許可したりするなどの工夫を行う必要がある。日本語教育において、日本語教科書のすべてを教えなければならないというルールは存在しない。日本語教師は日本語教科書が十分ではないことを念頭において、学習者にとって適切な設問や会話例を選択するべきであろう。

一方、LGBTQ+の学習者にとって安心できる教室環境を提供するために、LGBTQ+の学習者にカミングアウトをするよう強要したり、宗教上の理由で同性愛を受け入れることができない他の学習者にLGBTQ+について理解を示すよう押し付けたりするようなことはあってはならないだろう。この点についても、有森（2017,p.31）は「当事者が「自分らしく」いられる環境を作ることは大事だが、クラスメイトや教師との関係性において、どれだけ自己開示をするかは当事者が決めることである」と述べ、当事者の決定を尊重する重要性を指摘している。現在、教育現場における性の多様性の意識が高まっている。しかしながら性の多様性に配慮した日本語教育の研究はまだ萌芽的な段階にあり、今後さらなる蓄積が必要であると考えられる。

6. 今後の課題

本研究では、ジェンダーの構成要素のうち「性的指向」に着目し、対象をレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に設定した。しかし「性的指向」に着目するのであれば、好きになった人を性的な対象とはみなさない、エイセクシュアルの学習者も対象とするべきであったが、本研究では扱うことができなかった。実際の日本語教育の現場でLGBTQ+の学習者の声を聞くことを今後の課題としたい。さらに、LGBTQ+の学習者の声を日本語教育の現場で反映できるように、日本語教育の現場でインクルーシブな環境を提供できるように努めていきたい。

付記

本稿は、宮城学院女子大学大学院人文科学研究科授業科目「日本語教授法Ⅱ」で行った日本語教科

『げんきⅡ』	24
『できる』	12

異性愛を前提とした挿絵が一番多く記載されたのは『げんきⅠ』『げんきⅡ』であった。『げんきⅠ』『げんきⅡ』には、観点2の分析と重なるが、交際している男性と女性の挿絵が多く挿入されていた。例えば、『げんきⅠ』には、腕を組んで歩く男性と女性のカップル (p.123)、彼氏から電話をもらって喜ぶ女性 (p.282) の挿絵などである。『げんきⅠ』に掲載されている挿絵の多くは、上記の例にあげたように、カップルの仲睦まじい姿を描いたものである。一方で、『げんきⅡ』に掲載されている挿絵は、二人の間に不穏な空気が漂っているものが多かった。例えば、デートで事前にシャワーを浴びてこなかった男性に対して怪訝な顔をしている女性 (p.155) や、たけしとのデートがつまらなかったことを理由に怒っているメアリーの挿絵などが挙げられる (p.177)。『げんきⅡ』でネガティブな挿絵を挿入する背景には、受身などの『げんきⅠ』よりも複雑な文型を扱っていることがあると考える。

異性愛を前提とした挿絵の数が次に多い『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』は、会話には『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』に登場する主要な登場人物、練習問題には練習問題にのみ登場するオリジナルのキャラクターを起用していた。全体として、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』では彼氏/彼女にプレゼントを渡す挿絵、結婚式の挿絵が多く記載されていた。例えば、『みんなの日本語Ⅰ』には彼女からもらったネクタイを誇らしげに友だちに見せる男性のオリジナルキャラクター、『みんなの日本語Ⅱ』には主要な登場人物であるワットといずみの結婚式 (p.131) の挿絵などである。結婚式に関する挿絵が多いことは、観点2の分析と重なるところがある。また『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』は『げんきⅠ』『げんきⅡ』のカップルの挿絵と比較して、手を繋ぐなどの身体接触が極端に少ないことも特徴のひとつとしてあげられる。

『できる』の挿絵には、課のはじまりのイラストは白黒写真のようにリアルな人物、練習問題などのそれ以外のページには『できる』の主要な登場人物が登場していた。『できる』の挿絵は、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』や『げんきⅠ』『げんきⅡ』の挿絵のように目立った特徴はない。他の日本語教科書と同様に、渋谷に食事をしに行く男性と女性のカップル (p.97)、彼氏にチョコレートを渡す女性 (p.149) などの仲睦まじいカップルの挿絵が挿入されていた。

5. まとめ

本調査では初級学習者向けの日本語教科書の中でレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者への配慮がどの程度なされているかについて分析を行った。その結果、観点1の分析結果からは日本語教科書の中には「彼氏/彼女/パートナー」のように恋愛対象にある人の呼び方を学習者に選択させたり、恋愛対象にある人の性別を特定しない「恋人」や「好きな人」などの呼び方が提示されていたりといった工夫がなされたものもあったが、全ての日本語教科書の設問でこのような配慮があったわけではないことが明らかになった。また観点2から、日本語教科書では恋愛や結婚に関する内容が多く取り上げられ、日本語教科書に登場するキャラクターの見た目の性別あるいは「僕」や「私」といっ

最後に、『できる』では異性愛を前提とした設問や会話文がほぼ見られなかった。『できる』は『げんきⅠ』『げんきⅡ』や『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』と比較して、恋愛や結婚をテーマにした内容が極端に少なかったとも言える。具体例としては、『できる』にでてきた設問や会話文のなかで異性愛規範に基づいていると判断できたところは、デートに誘う場面と友だちに二人の関係性を確認する場面だけであった。他に、恋愛対象にある人に向けた「好き」ではないが、テレビに登場するアイドル（推し）に向けた「好き」は紹介されていた。

例：『できる』(p.152)

パク：あ、ナタボンさん、この人は誰ですか。

ナタボン：どの人ですか。

パク：この髪が短くて、目が大きい人です。

ナタボン：あ、その人は国の友達です。

パク：その隣の人は？

ナタボン：奥さんです。

パク：えっ！？この人は結婚していますか。

ナタボン：はい。子どもが2人います。

パク：そうですか。

(3) 観点3 異性愛を前提とした挿絵の有無

観点3に基づく分析では、日本語教科書において異性愛を前提とした挿絵があるかどうかを明らかにすることを目的としている。異性愛を前提としているかについては、異性同士のキャラクターに手を繋ぐといった身体接触があるか、二人のキャラクターの距離が近いのか、イラストのなかにハートマークがあるかなどをもとに判断した。

分析の結果、初級の日本語教科書には異性愛を前提とした挿絵が存在することが明らかになった。表3に示すように、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』が26、『げんきⅠ』『げんきⅡ』が41、『できる』が12であった。さらに、分析対象の日本語教科書のなかに、レズビアンやゲイを思わせるキャラクターは存在しないことも明らかになった。

表3 観点3の異性愛を前提とした挿絵の数¹⁾

教科書名	挿絵の数
『みんなの日本語Ⅰ』	16
『みんなの日本語Ⅱ』	10
『げんきⅠ』	17

1 著作権に配慮し、本稿では日本語教科書に載っている挿絵を掲載するのを控える。

8. この人は結婚していますか。

(「わたしはだれですか」という読解用の文章を読み、上記の質問に回答する)

例2：『みんなの日本語Ⅰ』(p.143)

5. ワンさんは()いますか。

…いいえ、独身です。今一人で神戸に()います。

(「結婚します」/「住みます」という語を使用して空欄を埋める)

例3：『みんなの日本語Ⅱ』(p.50)

5. 彼女と結婚するんですか。

…ええ、ことしの秋に結婚するつもりです。

『げんきⅠ』『げんきⅡ』も『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』と同様に、異性愛を前提とした設問や会話文を多く含んでいた。しかし『げんきⅠ』『げんきⅡ』は結婚よりも、交際に関する内容を取り上げていた。大野によると、『げんきⅠ』『げんきⅡ』は「女性と男性の間の異性愛の物語」(大野,2019,p.45)である。実際に、『げんきⅠ』『げんきⅡ』には、交際関係にある、日本人キャラクターの木村たけしとアメリカから来た交換留学生のメアリー・ハートの会話がいくつも載っていた。また、たけしとメアリー以外にも、交際している男性と女性の二人の出来事や様子に関する設問もあった。それらの設問の隣に男性と女性の仲睦まじいイラストが描かれていたり、一人称の「ぼく」の文章に「彼女」という語が使用されていたりしていたことから、男性と女性が交際関係にあると想像する。以下に、例をあげる。

例1：『げんきⅠ』(p.282)

(1) 彼から電話がありました。(この語を使用して悩みを相手に打ち明ける)

(1 1) 彼女と別れました。(この語を使用して悩みを相手に打ち明ける)

例2：『げんきⅡ』(p.64)

彼女がほしいです。でも、できないんです。

(「gotoaparty」/「joinclub」/「giveup」という選択肢を用いて、アドバイスをする)

例3：『げんきⅡ』(p.114)

ソラ：けさ、駅でたけしさんに会ったよ。

けん：たけしさんが卒業してからぜんぜん会ってないけど、元気だった？

ソラ：ずいぶん疲れているみたい。毎晩四、五時間しか寝ていないそうだよ。

けん：やっぱりサラリーマンは大変だね。

ソラ：それに、忙しすぎてメアリーとデートする時間もないって。

けん：そうか。ぼくだったら、仕事より彼女を選ぶけど。あの二人、大丈夫かなあ。

林：あ、知らないんですか。この間婚約したそうです。

高橋：えっ、だれですか、相手は。

林：IMCの鈴木さんですよ。

高橋：えっ、鈴木さん？

林：ワットさんの結婚式で知り合ったそうですよ。

高橋：そうですか。

林：ところで、高橋さんは？

高橋：僕ですか。僕は仕事が恋人です。

(2) 観点2 異性愛を前提とした設問と会話文の有無

観点2に基づく分析では、日本語教科書において異性愛を前提とした設問や会話文、つまりレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者が答えにくいと感じる内容があるかどうかを明らかにすることを目的としている。具体的には、日本語教科書に登場するキャラクターの見た目の性別に合わせて、「夫」と「妻」、「彼氏」と「彼女」を使い分けられているか、デートを連想させるような場面で男性と女性のやりとりがあるかどうかに着目した。また分析対象の日本語教科書は全て日本を舞台としているため、「結婚」は異性愛者同士が婚姻関係にある状態として捉えた。

分析の結果、初級の日本語教科書には異性愛を前提とした恋愛や結婚に関連する設問や会話文が多く存在することが明らかになった。表2からもわかるように、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』が75、『げんきⅠ』『げんきⅡ』が73、『できる』が5であった。

表2 観点2の異性愛を前提とした設問と会話文の数

教科書名	設問と会話文の数
『みんなの日本語Ⅰ』	34
『みんなの日本語Ⅱ』	41
『げんきⅠ』	25
『げんきⅡ』	48
『できる』	5

異性愛を前提とした設問や会話文の数が最も多い『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』には、『げんきⅠ』『げんきⅡ』や『できる』と比較して、結婚に関する内容が多く取り上げられている。特に、日本語教科書に登場しているキャラクターに「結婚していますか」のように既婚か未婚かを問うものは複数回出題されている。「結婚します」という語は『げんき』でも、動詞の活用や「～ています」の文型を練習するときに使用されている。しかし「結婚」に関する語がドリル練習や例文などで何度も用いられているのは、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』だけである。以下に、例をあげる。

例1：『みんなの日本語Ⅰ』（p.130）

するが、分析対象の教科書のなかで見受けられたのは上記の4種類だけであった。

全体として、3つの教科書シリーズのなかで最もレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に配慮があると考えられた教科書は、『げんきⅠ』『げんきⅡ』であった。学習者自身で呼び方を選択できたり、日本語だけではなく英語の設問でも恋愛対象にある人の性別を特定しない呼び方を提示したりするなど、様々な配慮が見られた。以下に、その例をあげる。

例1：『げんきⅡ』(p.107)

3. 彼/彼女/パートナーに何をしてもらいたいですか。

(このセリフを使って相手に質問する)

例2：『げんきⅡ』(p.218)

8. 付き合っている人がふる(この語を使って相手に質問する)

→付き合っている人にふられたことはありますか。

例3：『げんきⅡ』(p.266)

(b). _____まで結婚しません。

5. ジョン tillhefindsanidealpartner (この語を日本語に直し空欄を埋める)

『できる』では、恋愛対象にある人の性別を特定しない「恋人」という呼び方が提示されていた。『できる』には、『げんきⅠ』『げんきⅡ』や『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』と比較して、イラストが多く取り入れられているという特徴がある。他の教科書のように設問や会話文のなかに「恋人」という語の使用はなかったが、挿絵の中あるいは挿絵の下に「恋人」という語が示されてあった。例えば、バレンタインデーに女性が男性にチョコレートを渡す挿絵の下に「恋人」(p.149)、友だちの付き合っている人が日本に来ることを別の友だちに伝える挿絵の中に「マルコさんの恋人」(p.254)と記されていた。『できる』では、『げんきⅠ』『げんきⅡ』で使用されていた「パートナー」や「付き合っている人」などの他の呼び方は提示されていなかった。

一方、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』は、『できる』と同様に、「恋人」という語のみが使用されていた。しかし『できる』とは異なり、「恋人」という語は会話文や読解用の文章のなかで提示されていた。以下に、その例をあげる。

例1：『みんなの日本語Ⅱ』(p.59)

読解問題のテーマ：「今月の星占い」

恋愛…一人でコンサートや展覧会に出かけると、いいでしょう。

そのとき会った人が将来の恋人になるかもしれません。

例2：『みんなの日本語Ⅱ』(p.181)

高橋：渡辺さん、このごろ早く帰りますね。どうも恋人ができたようですね。

バイセクシュアルが不在になっている現状があることについて触れている。「性的指向」がヘテロセクシュアル（異性愛者）とは異なる、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者への配慮について検討する本研究が、日本語教育の分野において少しでも貢献できることがあれば幸いである。

4. 調査

4-1 調査方法

本研究では学習者にとって身近な存在である教科書の中でレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者への配慮がどの程度なされているかを明らかにするために初級学習者向けの日本語教科書を対象として教科書分析を行った。分析の対象としたのは、表1に示した5冊である。初級学習者向けの日本語教科書を対象とした理由は、学習者に自己開示を求めるような設問が多くあり、学習者のジェンダーアイデンティティ、特にセクシュアリティの開示と関わりがあると考えたからである。なお、本調査では補助教材や日本語教員を対象とした教え方に関する手引書などは含めず、日本語教科書の本冊のみを対象とした。分析の観点として、以下の3つを設定した。

観点1 レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者への言及や配慮の有無

観点2 異性愛を前提とした設問と会話文の有無

観点3 異性愛を前提とした挿絵の有無

調査にあたってはこれら3つの観点に基づいて、関係する教科書の本文（例文、設問を含む）をピックアップし、データベースを作成した後、教科書ごとの傾向や特徴などを検討した。

表1 分析対象の日本語教科書

『みんなの日本語初級I第2版』（スリーエーネットワーク、2012年）以下、
『みんなの日本語I』
『みんなの日本語初級II第2版』（スリーエーネットワーク、2013年）以下、
『みんなの日本語II』
『初級日本語げんきI第3版』（ジャパントイズ出版、2020年）以下、『げんきI』
『初級日本語げんきI第3版』（ジャパントイズ出版、2020年）以下、『げんきI』
『できる日本語初級本冊』（アルク、2011年）以下、『できる』

（1）観点1 レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者への言及や配慮の有無

観点1に基づく分析では、日本語教科書においてレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に配慮がどの程度なされているかを明らかにすることを目的としている。具体的には、「彼氏」や「彼女」などの呼び方を学習者自身で選択できるような工夫がされているか、恋愛対象にある人の性別を特定しないような呼び方が使用されているかについて調査した。

分析の結果、分析対象の教科書のなかには、「彼氏/彼女/パートナー」ように学習者自身で選択できる設問もあったが、全ての教科書でこのような配慮があったわけではなかった。また分析対象の教科書において見受けられた性別を特定しない呼び方は、「恋人」「パートナー」「好きな人」「付き合っている人」が抽出された。性別を特定しない呼び方は他にも、「連れ合い」や「配偶者」などが存在

に振る舞うかを表す「性表現」、出生届を提出するときに割り当てられる「身体の性的特徴」である。

この性の在り方は自分がLGBTQ+属性に当てはまるか、当てはまらないのか、それとも当てはめたくないのかを決定するときにも用いられる。LGBTは「Lesbian=レズビアン（女性同性愛者）、Gay=ゲイ（男性同性愛者）、Bisexual=バイセクシュアル（両性愛者）、Transsexual/Transgender=トランスジェンダーの頭文字の集合体」（東,2013,p.186）のことである。そしてLGBTの後につくQ+には、自己のアイデンティティとして、LGBTあるいは異性愛者などの既存のカテゴリーがしっくりこない、あるいは明確な自己認知を確立していないクエスチョニング（Questioning）や好きになった人を性的な対象とはみなさないエイセクシュアル（Asexual）などが含まれる（東,2013）。

本研究では、LGBTQ+に属す人々のうち、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの人々に着目する。上記の3つのカテゴリーに属する人々は、異性愛規範に当てはまらず、「性的指向」以外の要素は生まれ持った性別と重なることが多い。レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの人々のなかには、異性愛規範をよしとする環境において、他者の視線や言動で傷つかないように自分のセクシュアリティを公にしない人もいる。自己のセクシュアリティに嘘をつくことは、たとえ一時的だったとしても、ありのままの自分を抑え否定することにつながりかねない。ここではLGBTQ+に属する人々にカミングアウトを強制的にさせることがよいと言っているのではない。カミングアウトをするかどうかは当事者本人が決定することである。LGBTQ+に属する人々がカミングアウトしてもしなくても、安心して発言できるような環境を整えることが重要である。これは本研究で着目するレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者が安心して日本語の学習を進めるためにも求められていることなのではないだろうか。

3. 先行研究

言語教育とジェンダーに関する先行研究はいくつもある。日本語教育の分野では、男性語や女性語の分析など、性別二元論をもとにした研究が中心となっている。日本語は男性語と女性語が分かれている言語である。例えば、石黒圭によると、命令するときに「静かにしろ」とぞんざいな言い方をすれば男性的に、「静かにして」と丁寧な言い方をすれば女性的になるという（石黒,2023）。他にも文頭の感動詞「よお」や「あら」、文末の終助詞「ぞ」や「わ」など、どの語を使用するかによって、聞き手に与える印象は異なる（石黒,2023）。学習者が日本語で自分らしさを表現するために、男性語や女性語の違いを知ることは大切である。しかし2章の性の多様性で述べるように、性の在り方は多様で、男性と女性の観点だけで考えることには限界がある。

LGBTQ+のひとつである、トランスジェンダーの学習者と日本語についての研究がある。阿部（2024）は「性自認・性的指向と言語実践：トランス女性の場合」のなかで、トランスジェンダーの女性の中には既存の「女らしい言葉・表現」を自分独自の言語行為に取り込んでいる人もいれば、「女らしさ」の追求はせずに自分らしい言葉や表現を追求する人もいと述べている。さらに、トランスジェンダーの人々が直面する社会的・政治的に困難な現実には十分に理解されていないと強調した。

日本語教育あるいは日本語学の分野で、LGBTQ+の学習者を対象にした研究は限られている。LGBTQ+のなかでも、トランスジェンダーやゲイの人々を対象にした研究は見られるものの、バイセクシュアルの人々を対象にした研究は不足している。実際に、三橋（2023）はLGBTQ+のなかでも

〈研究ノート〉

異性愛規範と日本語教科書 —— 初級日本語教科書のジェンダー分析から ——

三浦 ひより

1. はじめに

今日の日本の社会では、自分らしく生きることに対して少しずつ寛容になってきている。これは去年の年末までに全ての都道府県でパートナーシップ制度が導入されたことから明らかである。しかし依然として、あらゆるところに異性愛規範が根強く残っている。日本語教育の現場や日本語の教材もその例外ではない。異性愛規範とは、「異性愛を自然で自明で望ましく特権的でさらには必然的なものとして奨励し作り出している構造、制度、関係性、行為」(中村,2024,p.67)のことを指す。異性愛規範には同性愛を排除するだけでなく、異性愛規範に従わない者を周辺に追い払うという強制力も備えている(東,2013)。

わざわざ公の場でカミングアウトをしていなくても、日本語教師や学習者のなかにはLGBTQ+の当事者などの異性愛規範から排除されてきた人々がいるだろう。実際に、鈴木(2015)には、次のような日本語教師のエピソードがある。ある男性の学習者は鈴木に、日本人のサラリーマンと一緒にお酒を飲むとよく「どんな女の子が好き？」と聞かれるという話をした。その話を聞いた鈴木は、「うん、確かにそうかもしれませんね。それで、キミはどんな女の子が好きと答えたの？」と質問した。すると、その男性の学習者は突然表情を曇らせながら「僕には「彼」がいますから…」と返答したという。この例からもわかるように、性に関するステレオタイプは、学習者のジェンダーアイデンティティを否定するだけでなく、ときには日本語教師と学習者との間の信頼関係を揺るがす危険性をもはらんでいるのだ。

本研究では、初級レベルの学習者にとって身近な存在である日本語教科書を異性愛規範の観点から分析する。調査結果をもとに、日本語教師には異性愛規範から排除されたレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者に対してどのような配慮や工夫が求められているかについて検討していきたい。この調査では、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの学習者が安心して自己開示をできる教室環境を提供する際の一助となることを目指している。

2. 性の多様性

1章で述べたように、性の在り方は多様である。ジェンダーという言葉が普及してから久しいが、ジェンダーとは「社会的・文化的につくられた性別」(天童,2018,p.18)のことを指す。これは、生まれもった身体的性別とは異なる場合もある。性はグラデーションであり、男性や女性の2つに分けることはできない。性の在り方は、「性的指向」「性自認」「性表現」「身体の性的特徴」によって構成される。具体的に、恋愛や性的な感情をどの性別の人に抱くか/抱かないかを表す「性的指向」、男性や女性、それ以外の属性のうち自分はどれに当てはまるかを認識する「性自認」、社会的にどのよう

ーバグのようにダンスの名前とダンスの特徴を提示した。しかしリンディー・ホップとジッターバグは似ているダンスという説明にとどめ、具体的にどのような点が共通していて、どのような点が異なっていたのかを明確に示すことができなかった。さらに、ジッターバグがジャイブへとどのように変化していったのかを述べることもされていない。リンディー・ホップとジッターバグ、ジッターバグとジャイブの動画を分析し、手の組み方やステップ、リフトなどがどのように変化してきたのかを明らかにし、さらにそれらがアフリカ系アメリカ人の芸術文化としてどのような役割を果たしたのかについて考察することを今後の課題としたい。

引用文献

French, Hilary. *Ballroom: A People's History of Dancing*. Reaktion Books LTD, 2022.

Glass, Barbara S. *African American Dance: An Illustrated History*. McFarland & Company, Inc., 2007.

Hylton, Robert. *Dancing in Time: The History of Moving and Shaking*. British Library Board, 2023.

アンチオーブ、ガブリエル『ニグロ、ダンス、抵抗：17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』（石塚道子 訳）人文書院（2001）。

井上淳生「イギリスにおけるカップルダンスの標準化」『藤女子大学文学部紀要 54号』。藤女子大学、2007。219-236。

上杉忍『アメリカ黒人の歴史』中央公論新社（2013）。

田中正之「アーロン・ダグラス《黒人生活の諸側面》をめぐって：美術における黒人アイデンティティの表象」『ハーレム・ルネサンス：＜ニュー・ニグロ＞の文化社会批評』（深瀬有希子 常山菜穂子 中垣恒太郎 編著）。明石書店、2021。375-397。

中田崇 杉野健太郎「アメリカの音楽」『アメリカ文化入門』（杉野健太郎 編著）。三修社、2023。192-227。

バーダマン、ジェームズ・M『アメリカ黒人：奴隷制からBLMまで』（森本豊富 訳）ちくま新書（2020）。

深瀬有希子「序章「ハーレム・ルネサンス」批評の現在」『ハーレム・ルネサンス：＜ニュー・ニグロ＞の文化社会批評』19-25。

プライデン、ネマータほか『黒人の歴史：30万年の物語』（沢田博 訳）キャップス（2023）。

メスキータ、バチャ『文化はいかに情動をつくるのか：人と人のあいだの心理学』（高橋洋 訳）紀伊國屋書店（2024）。

派手な色の靴下、革靴などを着ていた。テディ・ガールズは、きらびやかなブローチやベルベットの襟、上品なアクセサリを身につけていた（フレンチ 187）。彼らはイギリスの貴族階級の服装に、独自のスタイルを取り入れていったのだ。これは、3-1 にでてきたチャールストンと重なるところがある。チャールストンは「近代性と新たな若い活力のシンボル」であった（ヒルトン 119）。チャールストンを踊る若い女性は、短くしたボブカットのヘアスタイルに、はっきりとした化粧をして、ストレートなシルエットでフリンジやビーズなどで装飾されたフラップドレスを身につけていた。これまでの女性像とは異なるファッションで、ジャイブと同様に、保守的な大人に抵抗し自分の在り方を模索していたのだ。

最後に、ジッターバグやジャイブを含むベアダンスには、人種差別をすることを許容する社会の負の側面を見つめ直す役割がある。1940年代のはじめ、ジッターバグがイギリスに伝わった頃、アメリカ国内で制定された白人とアフリカ系アメリカ人を分離するジム・クロウ法が、イギリス国内に滞在していたアメリカ軍兵士の間でも適用されていた（ヒルトン 158）。そのため、白人とアフリカ系アメリカ人がともに踊ることはありえなかった。しかしヒルトンの書籍のなかに、1943年の7月17日にピクチャー・ポスト誌に掲載した1枚の写真がある（159）。その写真にはロンドンのクラブで、複数のアフリカ系アメリカ人の兵士と白人女性のカップルが手をつないで踊る姿が映し出されている。残念ながら写真だけでは何を踊っているかはわからないが、中央のアフリカ系アメリカ人の男性は白人女性の肩越しに笑みを浮かべ、右側でアフリカ系アメリカ人の兵士と踊っている白人女性も微笑んでいる。この写真には、人種に関係なく楽しく踊るというベアダンス本来のあるべき姿がある。

5. おわりに

アフリカ系アメリカ人の文化芸術として、音楽や絵画、彫刻がよく取り上げられる。しかしダンスもアフリカ系アメリカ人の文化のひとつであることを忘れてはならない。なぜならダンスはアフリカ系アメリカ人の音楽が労働歌からブルースやジャズへと変化してきたのと同じ様に、その国の歴史や経済、国際関係、法律など様々な社会的な影響によって変化するからである。アフリカ系アメリカ人のダンスを研究することは、アフリカ系アメリカ人の音楽や絵画、彫刻以外の優れた側面を強調するきっかけになるのではないだろうか。ヒルトンはリンディー・ホップの復興に関して、「黒人コミュニティをはじめ、離散したアフリカ人の心にカタルシスをもたらし、あらゆる面で虐げられてきた彼らに誇り活力を取り戻す可能性がある。それはアフリカ文化の深みと思想、リズムの多様性を賛美する手段にもなるだろう」（145）と述べている。このことは、リンディー・ホップの復興だけではなく、アフリカ系アメリカ人のダンスを文化芸術として捉えることにも当てはまるだろう。

またダンスの背景にある歴史を知ることが、ダンサーにとって大きな意味を持っている。残念ながら、ダンスの背景にある歴史を知ることが、ダンスの表現がどのくらい変わるのかを数値化して示すことはできない。しかしダンサーの体の内側から滲み出る、ダンスをただ模倣するだけでは得られない感情や感覚は、見ている観客をさらに引き込むことにつながるだろう。

6. 今後の展望と課題

本稿ではジャイブが生まれた経緯を説明する際に、チャールストンやリンディー・ホップ、ジッタ

テディ・ボーイズは、たびたびダンスホールに行ってはマネージャーの手に負えないような行動をしていた。テディ・ボーイズがダンスホールに行っていたことからわかるように、1950年代になると、ダンスホールは上流階級や中流階級向けのものではなく、労働者階級向けのものになっていた（フレンチ187-89）。

1950年代から1960年代にかけて、ダンスホールには、人種差別があったり、競技ダンスと社交ダンスの分裂が顕著になったりといった問題が残っていたものの、ダンスホールの人気は衰えることはなかった。この背景には、ダンスホールが男性と女性の出会いの場になっていたことがあげられる。信頼できる統計のデータはないが、結婚したカップルのうち60パーセントがダンスホール由来すると主張している人もいたという（190）。1960年代に入ると、テディ・ボーイズによって広められたジャイブは、マンチェスターの高級ホテルであるリッツでも容認されるようになった。リッツは毎週月曜日から土曜日の午後と夜に、ティーダンスを開催していた。年配の人や若者、子どもなどあらゆる顧客がダンスを楽しめるように、低照明で豪華な装飾をした場所を提供していた。そこでは、大人がひとつのコーナーで少人数でジャイブを踊ること、子どもがジャイブを踊ることは許容されていた。しかしテディ・ボーイズと「ホット」ジャイビング（セクシーなジャイブ）は禁止されたままであった（193）。

ジャイブが社交ダンスの種目として追加されたのは、1968年のことであった。1970年代の初頭には、社交ダンスの1種という一定の地位を得たはずであったが、ジャイブはひとつのコーナーでしか踊ることが許されていなかった（184）。今日のように、ジャイブが幅広い世代に受け入れられるようになるまでは多くの時間を必要とした。

4- 4. ジッターバグとジャイブの役割

4- 3でも述べたが、ジッターバグやジャイブには文化交流の役割があった。第2次世界対戦中、アメリカの兵士は軍事の専門知識や武器以外にも、ダンスや音楽を持ち込んだ（ヒルトン 164）。ジャイブの原型であるジッターバグは、ジャイブと同様に、ペアダンスのひとつである。ペアダンスの最大の魅力は、互いの手や体に触れ合うことによって、言葉を使わなくてもコミュニケーションをとることができることである。社会心理学者のバチャ・メスキータは、怒りや悲しみ、喜びなどの一時的で急激な感情の動きを表す「情動」を主題にした書籍のなかで、ペアダンスを例にあげ、「自己の情動と他者の情動は、パートナーとペアを組んでダンスをするときのようにお互いを補完し、導き合いながら、ふたりのやり取りを形成していく」（242）と述べている。ペアダンスは、異なる文化を持つ人や異なる言語を話す人、その日出会ったばかりの他人でも、互いの気持ちをその場で共有し、その二人の間に温かなつながりを作ることができる。これはジッターバグやジャイブが文化交流としての役割を担った大きな要因のひとつであろう。

ジャイブは若者の抵抗のダンスであり、自立を探るためのダンスでもあった。4- 3でも触れたが、ジャイブは、1950年代のイギリスで、保守的で伝統を重んじる大人に抵抗するテディ・ボーイズやテディ・ガールズによって社会に広まっていった。テディ・ボーイズやテディ・ガールズは上品で伝統のある社交ダンスではなく、エネルギーに満ち溢れた新しいジャイブを楽しんだ。彼らは服装でも「抵抗」を表現していた。テディ・ボーイズは、ゆったりとした裾の長いジャケットに細身のズボン、

ンスの技術を高め、進展させること、そして過去から引き継がれた品位と威厳をまもること」(224)を目的に設立された。ジャイブが生まれた経緯を知るとは、まさに「過去から引き継がれた品位と威厳をまもること」(224)にもつながるのではないだろうか。

4-3. ジャイブがイギリスの社会の中で受容された過程

ジャイブはイギリスの社会ですぐに受容されたわけではなかった。1940年代初頭に、ジャイブの原型であるジッターバグがアメリカの兵士によってイギリスに持ち込まれた(フレンチ 183)。戦争とダンスとの間につながりがあるようにはみえないが、ジッターバグやジャイブは第二次世界大戦中の文化交流の一部であった(ヒルトン 164)。ジャイブが文化交流の一部であったことは、4-4で詳しく述べることにする。当時、アメリカ兵士がイギリスに持ち込んだジッターバグは、3-1にもあるように、パートナーを高く持ち上げたり、あらゆる方向にキックしたりといった、エネルギーに満ち溢れたペアダンスであった。ジッターバグは、第2次世界大戦で疲弊しているイギリスの若者にとって、戦争という悲惨な状況を一瞬で忘れることができるものであり、明日生きるための活力を蓄えるためのものでもあったと考えられる。しかし、イギリスの伝統的で保守的なダンスを支持する大人にとって、女性のブルマーが見えるほど激しく踊るジッターバグは「低俗なダンス」であったため、多くのダンスホールではジッターバグを踊ることを禁止していた(フレンチ 184)。フレンチによると、社交ダンスのバイブルとも呼ばれる*Ballroom Dancing* (1936) という書籍を執筆した巨匠アレックス・ムーア(Alex Moore, 1901-1991)は、1940年の*Dancing Times*のなかでジッターバグの大会について、「私が今までのボールルームで見たなかで、最も不快で品位を落とす光景であった」と酷評したという。さらにムーアは「現在の私たちのボールルームには穏やかなジッターバグダンスの余地はある」と、ジッターバグへの多少の理解を示したものの、「チャールストンのように「平均的なイギリス人ダンサーが持って生まれたセンスの前に、誇張された動きはすぐに消えるだろう」と示唆した。次第に、多くのダンスホールで「穏やかなジッターバグダンス」を踊ることが容認されるようになった。しかし1950年代にロックンロールが登場したことで、ダンスホールでは再び若者のダンスが問題となった(184)。

ジャイブの発展はロックンロールの流行に大きく関係している。ロックンロールは、もともとアフリカ系アメリカ人のコミュニティによってつくられた音楽のジャンルのひとつである。世界的に有名な歌手である、エルヴィス・プレスリー(Elvis Presley, 1935-1977)は、アフリカ系アメリカ人の音楽を国民的音楽へと転換させた。ロックンロールの歌詞には、恋愛やパーティ、学校など若者にとって身近なものが多く、若者から絶大な支持を得た(中田ほか 219)。しかし、白人の大人はロックンロールを下品な音楽だと見なしたのだ。大人世代の意見を無視した若者たちによって、「若者の音楽=ロックンロール」は社会現象となり、人種による区別ではなく世代間の区別を象徴するものとなっていった(219)。この現象はアメリカだけではなくイギリスにもみられた。

ロックンロールとジャイブは、テディ・ボーイズの文化と結びつき、若者の間で急速に広まっていた。テディ・ボーイズの特徴については4-4で詳しく述べることにするが、保守的な大人世代に抵抗したイギリスの不良少年の集団のことである。ロックンロールは非行を助長させるものではなかったが、テディ・ボーイズの暴力的な振る舞いによって、ロックンロールの悪名は高まっていた。

など、アフリカ系アメリカ人の文化的アイデンティティのひとつであるダンスを幾度となく描いている。現存している《黒人ダンスの発展》には、音楽を奏でる男性の側で、男性と女性が楽しそうに向かい合って踊る様子が描かれている。画家であるダグラスが音楽とダンスをモチーフにするのは、「1920年代や30年代のハーレムの文化、そしてハーレムに限らず当時の黒人の大衆文化と密接に関わっていたから」(386)だと田中は分析している。

ダグラスの他に、ウィリアム・ヘンリー・ジョンソン (William Henry Johnson, 1901-1970) は、ジッターバグを描いた《Jitterbugs (I) 》(1940-1941)、アフリカ系アメリカ人の兵士と女性が近くでそれぞれ踊っている《Dancer with Soldier Boy》(1942)、アフリカ系アメリカ人の兵士とドレスを着た女性が組んで踊っている《Soldiers Dancing》(1942-1943) など、ダンスを主題とした作品をいくつか生み出した。またアーチボルド・ジョン・モトリー・ジュニア (Archibald John Motley, Jr., 1891-1981) は、複数のアフリカ系アメリカ人が生演奏に合わせてペアダンスを楽しんでいる《Blues》(1929) や、複数のアフリカ系アメリカ人のカップルが互いの手や背中に触れながら激しく踊っている《Nightlife》(1943) を描いた。

複数のアフリカ系アメリカ人の画家が、ダンス (ペアダンス) をテーマに絵を描いたことは単なる偶然ではない。それほどアフリカ系アメリカ人の文化や社会にとってダンスは重要な存在であり、アフリカでの遠い記憶と結びつける役割を担っていたといえる。

4. ジャイブの変遷

4- 1. ジャイブ

ジャイブは、アフリカ系アメリカ人のペアダンスとヨーロッパの文化が融合したことによって生まれたダンスである。ジャイブは非常に軽快な音楽に合わせて、ターンやキックをするエネルギッシュなペアダンスである。「ジャイブ」という言葉は、キャブ・キャロウェイ (Cab Calloway, 1907-1994) が1939年に制作した曲、「ジャンピン・ジャイブ」(Jumpin' Jive) で有名になった。もともと「ジャイブ」は、ハーレム・ルネサンスの時期にジャズの愛好家やアフリカ系アメリカ人ミュージシャンの間でストリート・スラングとして使用され、いい加減で馬鹿げた人間の態度を指した言葉であった (ヒルトン 164)。ジャイブは後に述べるように紆余曲折を経て、次第にイギリスのダンスホールで受け入れられていった。現在、ジャイブは社交ダンスのひとつとして、世界中で親しまれている。

4- 2. 社交ダンスとしてのジャイブ

ジャイブは先述したように、現在社交ダンスのラテン・アメリカン種目のひとつとなっている。社交ダンスはスタンダード5種目 (ワルツ、タンゴ、スローフォックストロット、クイックステップ、ヴェニーズワルツ) とラテン・アメリカン5種目 (ルンバ、チャチャチャ、サンバ、パソドブレ、ジャイブ) の計10種目で構成されている。社交ダンスのいくつかの種目はヨーロッパに起源があるが、ルンバやチャチャチャはキューバで生まれるなど、他の国で生まれたダンスも含まれている。ペアダンスの標準化を主導した組織に大英帝国ダンス教師協会 (Imperial Society of Teachers of Dancing: ISTD) がある (井上 224)。ISTDの前身である Imperial Society of Dance Teachersは、1904年に「ダ

たい。ジッターバグは、「人を空中に投げ上げたり、あらゆる方向に蹴ったりという激しい動き」（フレンチ 183-184）を含むダンスである。リンディー・ホップとジッターバグは、人気を博した時期だけではなく、踊り方自体も非常に似ている。そのため、バーバラ・グラスの *African American Dance: An Illustrated History* に記載されている、1939年に撮影されたアフリカ系アメリカ人の男性と女性が手を繋いで笑顔で踊る写真の下には、“This couple is dancing the Lindy or Jitterbug in 1939” という説明がついている（251）。著者であるグラスも、音楽や動きを伴わない写真だけではリンディー・ホップなのかジッターバグなのか判断することは不可能であった。1950年代になると、ジッターバグはロックンロールミュージックと適応し、リンディー・ホップにも含まれていたブレイクアウェイの大部分は消えていった（254）。

ここまで社交ダンスのジャイブにつながるアフリカ系アメリカ人のペアダンスについて述べてきた。リンディー・ホップやジッターバグはいずれも弾むダンスであり、リズム＆ブルース、ブギ・ウギ、スウィングなどの様々な音楽に合わせて踊られてきた。早いリズムに合わせて、ステップを踏み、体全体を使って大きく踊るという特徴はアフリカ系アメリカ人のダンスから始まったというより、アフリカ人のダンス自体に見られるものであった。その一例として、「足を踏み鳴らしながら、四肢や胴を平手で「パッティング」することにより、即興のソロやダンス対決の伴奏となるリズムカルな音を生み出した」（ヒルトン 44）とされる、パッティン・ジュバというダンスがあげられる。このアフリカあるいはアフリカ系アメリカのダンスの特徴は、現在の社交ダンスのジャイブにも垣間見ることができるだろう。

3- 2. 芸術作品から読み解くアフリカ系アメリカ人とダンスの関係性

アフリカ系アメリカ人の文化にとって、ダンスは重要である。これは、アメリカのハーレム・ルネサンスに代表されるアフリカ系アメリカ人の画家3人のそれぞれの絵画から読み取ることができる。ハーレム・ルネサンスとは、「1920年代から1930年代初頭にかけてニューヨーク州マンハッタン北部に位置するハーレム地区を拠点に、アフリカ系アメリカ人を主たる担い手として展開した文化社会運動」（深瀬 20）のことである。¹ ハーレム・ルネサンスに参加したアーティストは、すべてのアフリカ系アメリカ人に共通する「アフリカ」の伝統文化に誇りを見出し、過去に貼られた「劣等」のレッテルをはがし、希望と約束のシンボルになることが、アメリカでアフリカ系アメリカ人として生きることだと定義しなおした（プライデン 244）。

国立西洋美術館の館長である田中正之は、壁画で有名なアフリカ系アメリカ人の画家、アーロン・ダグラス（Aaron Douglas, 1899-1979）について、「アフリカに由来し、同時代のアメリカの黒人へと発展的に継承されたものとしてのダンスや音楽は、ダグラスの作品で繰り返し主題として取り上げられている」（387）と述べている。ダグラスは、アフリカ系アメリカ人の間で人気があったペアダンスのリンディー・ホップを主題にしたハーレムのクラブ・エボニーの壁画（1927）やシカゴのホテル・シャーマンのレストランの壁画《ダンス・マジック》（1930）、《黒人ダンスの発展》（1933）

1 本稿3-2で言及する絵画作品の制作年は必ずしも1920年代から1930年代とは限らないが、3人のアーティストはいずれもハーレム・ルネサンス期に活躍し、その時期の特徴を色濃く有した作品を描いている。

3. アフリカ系アメリカ人のダンス

3- 1. アフリカ系アメリカ人のペアダンスの変遷

社交ダンスのラテン・アメリカン種目であるジャイブは、アフリカ系アメリカ人のペアダンスに由来している。具体的に、ジャイブはチャールストンやリンディー・ホップ、ジッターバグ（日本名：ジルバ）から変化したものである。ダンスは社会情勢によって繁栄したり衰退したりするが、どのダンスもその前に流行したダンスの面影を残しており、ひとつのダンスがいつからいつまで踊られていたかについて明確に示すのは難しいことを前提に、以下ダンスの変遷について述べてみたい。

まず1920年代に一世を風靡したチャールストンは、「頭から肩、胴、膝、足にいたるまで全身の全てを使い、キャラクターがにじみ出るようなリズムカルなダンス」（ヒルトン 112）である。チャールストンの最大の魅力は、リズムに合わせて、足を交互に跳ね上げる動作にある。1920年代に人気を博した、作曲家ジェームズ・P・ジョンソン（James P. Johnson, 1894-1955）の曲「チャールストン」は、リズムとエネルギーに満ち溢れており、チャールストンのダンスの特徴をよく表している。また女性は煌びやかなフラッパードレス、男性はおしゃれなスーツを着て踊っていた。チャールストンでは、スタイルが非常に重視されていた。現在、チャールストンは、ひとつのステップとしてアフリカ系アメリカ人のダンスであるヒップホップダンスやロックダンスのなかで踊られている。

そしてリンディー・ホップは、1927年にアフリカ系アメリカ人が多く居住しているニューヨーク州ハーレム地区のサボイ・ボールルームで生まれ、1930年代から1940年代にかけて人気を博したダンスである（132）。リンディー・ホップは、スウィング・ミュージックに合わせて、チャールストンのステップとブレイクアウェイの動きの両方を取り入れたダンスである（グラス 249）。ブレイクアウェイとは、カップルが離れて、互いに向き合うまたは向き合わないでソロのステップを踏む瞬間のことである（250）。このダンスはもともと「ホップ」と呼ばれていた。しかし、このダンスの先駆者であるジョージ・ショーティー・スノーデン（George Shorty Snowden, 1904-1982）が、チャールストンのダンス・マラソンで優勝した後のインタビューで、彼が披露した新しいアクロバティックなステップの名前を「リンディー」と答えたことで、リンディー・ホップという名前が広がった（ヒルトン 132）。「リンディー」という名前は、1927年にチャールズ・リンドバーク（Charles Lindbergh, 1902-1974）が初めてニューヨーク・パリ間の大西洋単独無着陸横断飛行に成功したことを祝福する新聞の記事の見出し、“Lindy Hops the Atlantic”（132）から来ている。リンディー・ホップの最大の魅力は、「パートナーを肩越しに投げ飛ばす、持ち上げる、受け止める、あるいは互いに飛び去っては戻るといった動作を猛烈な速さで行なう」（135）エア・ステップにある。エア・ステップはひとつでも間違えれば、お互いに怪我をしてしまう非常に危険なステップである。しかしその危険性とその美しい芸術性が多くのダンサーを魅了した。ロバート・ヒルトンは、今日リンディー・ホップの知名度が低いことに関して、「それ（リンディー・ホップ）を覚えることの難しさを別にすれば、奴隷の歴史、ひいては黒人の歴史が歴史のメインストリームから切り離されているからかもしれない」（145）と分析している。

最後に、ジッターバグ（日本名：ジルバ）は、リンディー・ホップと同様に1930年代から1940年代にかけて人気を博したダンスである。日本語話者にとって Jitterbug という音は発音しにくいいため、日本ではジルバと呼ばれている。しかし今日、日本で親しまれているジルバとは異なることに留意し

言葉や暴力ではなく、身体表現という言語を使用したことはアフリカ人奴隷だからこそ成し遂げられたのではないだろうか。

2- 3. アフリカ人奴隷が踊る理由（2）共同体における連帯の強化

アフリカ人奴隷のダンスには、共同体の一員であることを確かめ、共同体の結びつきを一層強めるという役割がある。2- 1でも述べたが、過酷な環境で働き被人的な扱いを受けていたアフリカ人にとって、仲間同士のつながりは生きるために必要であった。自由を奪われた身のつらさが奴隷たちの間に強い連帯感を生んだのである（128）。

またアフリカ人奴隷は、キリスト教の信仰のために踊っていた。歴史学者の上杉忍は、「激しく全身を揺さぶりながら歌う彼らの歌（賛美歌）は、家族と切り離され、移動を強いられた悲しみや、労働のつらさ、日常生活の絶望と希望を表現していた」（35）と述べている。2- 2の労働歌とリズムからもわかるように、宗教においても、アフリカ人奴隷にとって歌とリズムを切り離すことは不可能であった。現在のいくつかの黒人キリスト教会でも、ダンスは重要な要素となっている。

2- 4. アメリカ化されたダンス

現在、世界中で親しまれているアフリカ系アメリカ人のダンスは、ヨーロッパ文化とアフリカ文化が融合したことによって生まれたものだと考えられている。ヒルトンも「ヨーロッパの文化とアフリカの文化の相互作用という新たな段階が生じたことで、アフリカのダンスはアメリカ化された」（40）と述べている。アフリカ系アメリカ人のダンスが二つの文化に由来することは、次に述べるようにタップダンスとケーキ・ウォークというダンスから明らかである。

まず、タップダンスは爪先とかかとに金属板がついた「タップス」と呼ばれる専用の靴を履き、その靴で床を踏み鳴らしながら踊るダンスである。タップダンスは細かな足捌きで正確なリズムとステップを要求される難易度が高いダンスであるが、東京ディズニーリゾートのダンスショーで披露されるほど、今日でも人気を博している。タップダンスは、ブリテン諸島の軽快なリズムと足捌きが必要とされるジグやクログ、リールといったダンスとアフリカのリズムカルに足を踏み鳴らして踊るバック・ダンスに由来している（40）。

そしてタップダンスのように現存していないが、奴隷制の時代にはケーキ・ウォークというダンスがあった。ケーキ・ウォークはヨーロッパ人のダンスをふざけて真似た奴隷のダンスである（45）。ケーキ・ウォークは別名プライズ・ウォークとも呼ばれるが、これはダンスを見た農園主（奴隷主）が奴隷にケーキなどの賞を与えたことが関係している（バーダマン 52）。ヨーロッパ人とアフリカ人奴隷でケーキ・ウォークの捉え方が異なっていることは、このダンスの最大の特徴である。ジェームズ・M・バーダマンによると、ヨーロッパ人はケーキ・ウォークを極度に誇張されたグロテスクで滑稽なダンスであると解釈していたが、アフリカ人奴隷はケーキ・ウォークを抑圧的な奴隷主に対する風刺、隠された抵抗の表す手段としていたという（52）。今日、世界中で親しまれているアフリカ系アメリカ人のダンスは、ヨーロッパ文化とアフリカ文化の交流なしには存在しなかっただろう。

互いに鎖で繋がれていた。このような過酷な環境で、赤痢や天然痘などの感染症が流行することは容易に想像できる。航海中に感染症で息絶えた約200万人のアフリカ人は、乗組員によって海に捨てられた（118-121）。

アフリカ人が死亡することは、奴隷売買の商人にとっては不都合なことであった。なぜなら「商品」の数が減少すると、収入も減少するからである。乗組員はアフリカ人に、生きるために最低限必要な食事と運動の時間を提供していた。この背景には健康なアフリカ人の方が高く売買することができるという事情があった。アフリカ人には「日課としての散歩の権利」（アンチオーブ 170）が与えられ、この散歩がアフリカ系アメリカ人のダンスの起源となった。アフリカ人にとって、ダンスが必ずしも楽しい時間だったとは限らない。歴史家のガブリエル・アンチオーブはフランスの研究者かつ小説家であるヴェシリエール夫妻の「毎朝8時頃には積荷（アフリカ人奴隷）を甲板に上らせ、必要とあらば鞭を使用して歌わせ、踊らせるというよりはむしろ跳躍させる」という記述を援用し、ダンスが療法的なものであったと述べている（170）。現在、ダンスはエンターテインメントのひとつとして捉えられるが、アフリカ系アメリカ人の祖先であるアフリカ人のダンスは他の目的のために踊らされていたのである。

2-2. アフリカ人奴隷が踊る理由（1）奴隷制を生き延びる手段と抵抗

アフリカ人奴隷が踊る理由はいくつかある。まずアフリカ人奴隷は逃亡の指示を伝えるために踊っていた。ロバート・ヒルトンが「こうした動き（アフリカのリズムに合わせて胴や腕、膝を曲げたり、ねじったりし、大胆なポーズを取るダンス）はヨーロッパ人には見慣れないものであっても、奴隷だったアフリカ人にとっては意味を持ち、逃亡のための指示を伝えたり、生き延びて霊的な癒しを得たりするための手段だった」（45）と述べているように、ダンスは生き延びるために必要なものだったといえるのではないだろうか。このアフリカ人奴隷の魂を揺さぶるようなダンス、しかしヨーロッパ人から見て「野蛮な」ダンスは、後のアフリカ系アメリカ人のダンスの発展に大きな影響を与えた。

そしてアフリカ人奴隷は、人種を理由に過酷な労働を強いられる辛い日常を忘却するために、その辛い現実から逃れるために踊っていた。アンチオーブは、「畑や風車場で集団労働が始まるやいなや、そこにはもう歌とリズムがあった。アフリカやヨーロッパと同様に、新世界のプランテーションでもリズムを伴わない労働の身体動作は稀であった」（170）と述べている。

アフリカ人奴隷のダンスは、抵抗のダンスでもある。皮肉なことに今日のアフリカ系アメリカ人のダンスは、残虐行為や紛争、植民地支配への抵抗がなければ生まれなかった。アンチオーブによると、「ダンスは語り、メッセージを伝える。ダンスは無音の口承であり、その言葉は動きと身振りである。奴隷は下賤な奴隷制度を拒否し、身体的自己と同様に文化的自己を取り去られることを拒否するルサンチマンを表現する言語としてダンスを運用するようになる」（238）という。奴隷は奴隷主や社会に対して暴力で抵抗することはできなかった。奴隷は奴隷主との共通言語が理解できたとしても、言葉を使用して抵抗することはできなかった。なぜなら暴力や言葉で抵抗したとしても、奴隷主と奴隷との間の支配・被支配の関係がさらに強化されるだけだからである。実際に、農場の経営者（奴隷主）には奴隷を鞭で打ったり拷問したりといった奴隷を罰する権利が認められており、奴隷主の所有物であった奴隷を殺しても罪には問われない状況があったのだ（ブライデン 127）。抵抗の手段として、

アフリカ系アメリカ人の芸術文化としてのダンス

— ジャイブを一例に —

三浦 ひより

1. はじめに

近年ヒップホップダンスやブレイキンなど、アフリカ系アメリカ人が生み出したダンスは世界中で親しまれている。社交ダンスのラテン・アメリカンの種目であるジャイブの原型のジッターバグもアフリカ系アメリカ人によって生み出された。しかし、ダンサーであるロバート・ヒルトンが「ジャイブはそれを生んだ黒人の社会的背景をまったく知らないダンサーたちによって受け入れられたため、英国をはじめとする多くの国々では、ジャイブはその背後にある人々や歴史よりも、単なるダンスとして理解された」（164）と述べるように、現在の多くのダンサーがジャイブの起源について知らないままステップを踏み楽しんでいる。ジッターバグを含む、アフリカ系アメリカ人のダンスは、奴隷としての過酷な労働や人種差別などの悲惨な出来事をいくつも乗り越えてきたアフリカ系アメリカ人だからこそ生み出すことができたと言えるだろう。ここでは、アフリカ系アメリカ人のダンスに由来するジャイブが生まれた経緯や背景、イギリスの社会で受容されていった過程を明らかにし、アフリカ系アメリカ人の芸術文化としてのダンスについて考察を進めていきたい。なお、本論ではアフリカからアメリカに連れてこられた人々を「アフリカ人」、アメリカで奴隷労働を強制された人々を「奴隷」または「アフリカ人奴隷」、奴隷制廃止後の元奴隷及びその子孫を「アフリカ系アメリカ人」と表すことにする。

2. アフリカ人のダンス

2- 1. 奴隷としてアメリカに連れてこられたアフリカ人とダンスの関係性

アフリカ人が奴隷としてアメリカに連れてこられた当時の状況について、ネマータ・ブライデン他『黒人の歴史：30万年の物語』では次のように述べられている。アフリカ系アメリカ人の祖先であるアフリカ人は船によって、アメリカに連れてこられた。16世紀から19世紀にかけて、南北アメリカに運ばれたアフリカ人奴隷の数は約1250万人であったという。これは、人間の強制移住としては最大かつ最も長く続いた事例であり、アフリカと南北アメリカの歴史を変えた出来事でもあった。奴隷船には、できるだけ多くのアフリカ人を積むことができるよう工夫がされていた。現在、記録が残っている奴隷船のひとつは、乗組員が広々と乗ることができるフロア、最大600人のアフリカ人を収容することができるフロア、飲み物や食料を積んでいるフロアの3層構造で設計されていた。奴隷売買の商人にとって、アフリカ人は「商品」であったため、「商品」に人間らしい生活を送ることができない快適なスペースは必要ないと考えていたのだ。アフリカ人が収容されていた環境は非常に劣悪であった。アフリカ人が収容されていた外の光が届かない船底は換気の機能が不十分であったため、室内の温度は高く、排泄物と汗の匂いが充満していたという。そのうえ、アフリカ人の逃亡を防ぐため、

案を提示した。当然、どちらの説明法がより適切なものかを見定めることが引き続きの検討課題である。

最後に、本稿で明らかにしたように、第一言語獲得に関する実証的知見と、大人の文法に見られる制約とが一致しない場合、その不一致の要因を検討することは、人間言語に内在する抽象的統語操作の規則性を解明するための有力な手がかりとなる可能性があることを、改めて強調しておきたい。

参考文献

- Bruening B. 2001. QR Obeys Superiority: Frozen Scope and ACD, *Linguistic Inquiry* 32. 233-277.
- Crain, S. & R. Thornton 1998. *Investigations in universal grammar: A guide to experiments on the acquisition of syntax and semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fox, D. 2000. *Economy and semantic interpretation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Franselow, G., M. Schlesewsky & R. Vogel 2011. Animacy effects on crossing wh-movement in German, *Linguistics* 49, 657-683.
- Friedmann, N., A. Belletti & L. Rizzi 2009. Relativized relatives: Types of intervention in the acquisition of A-bar dependencies, *Lingua* 119, 67-88.
- Johnson, K. 2000. How far will quantifier go? *Step by step*, eds. by R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka, 187-210. Cambridge, MA: MIT Press.
- Larson, R. 1990. Double objects revisited, *Linguistic Inquiry* 21. 589-632.
- Marantz, A. 1993. Implications of asymmetries in double object constructions. In *Theoretical aspects of Bantu grammar*, ed. Sam A. Mchombo, 113-150. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- May, R. 1977. *The grammar of quantification*. Doctoral dissertation, MIT.
- Richard, N. 1997. *What moves where when in which language?* Doctoral dissertation, MIT.
- Rizzi, L. 1990. *Relativized Minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rudin, C. 1988. On multiple questions and multiple WH fronting, *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Su, Y.-C., 2001. *Scope and specificity in child language: a cross-linguistic study on English and Chinese*, Doctoral Dissertation, University of Maryland.
- Su, Y.-C. & S. Crain 2000. Children's scope taking in double-object constructions. *CLS 36: the Panels*, 485-498.
- Thornton, R. 1990. *Adventures in long distance moving: The acquisition of complex wh-questions*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Thornton, R., H. Kiguchi & B. Cory. 2018. *Scope ambiguity and scope freezing in double object sentences*. Paper presented at Ambigo: A workshop on Ambiguity - Theory, Development, and Processing.

(16) I told someone you would visit everyone. (Johnson 2000) *every >some

LF: [every [_{TP}...some [[_{TP}...[_{VP} visit t]]]]



もう一つの可能性はThornton, Kiguchi and Cory (2018)で示唆されているようにtheta-役割の問題に帰すものである。Thornton, Kiguchi and Cory (2018)そしてSu and Crain(2000)およびSu(2001)の実験では二重目的語構文には2つの数量詞が修飾する名詞のanimacyが異なっていた。つまり第一目的語はanimateであり、第二目的語はinanimateであった。一方で、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験での場所目的語構文では両方の名詞はinanimateであった。ドイツ語の大人を用いた実験ではwh-疑問文におけるSuperiority-効果が2つのwh-句のanimacyが異なる場合に厳格になるという報告がある(Franselow et.al 2011)。ここでの結果に、animate素性によるIntervention-効果が関与しているとすれば、二重目的語構文ではなく、場所目的語構文でのみSuperiority効果が表れることも合点がいく。すなわち、場所目的語構文の下位の目的語が上位の目的語を交差して移動する際に上位の目的語がもつ同様の素性[-animate]が介入して、その移動が妨げられる。一方で二重目的語構文では二つの目的語のもつanimate素性の値が異なるため、そのような効果は観察されなかったことになる(Rizzi (1990), Friedmann, Belletti and Rizzi (2009))など参照)。

(17) Snow White stuffed a drawer with every tiara.

[v [_{VP1} Obj_i [V₁ [_{VP2} V₂ Obj_{ii}]]]] 場所目的語構文: Interventionあり
[-animate] [-animate]

(18) Snow White gave a lady every cupcake.

[v [_{VP1} Obj_i [V₁ [_{VP2} V₂ Obj_{ii}]]]] 二重目的語構文: Interventionなし
[+animate] [-animate]

9. おわりに

本稿では、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)そしてSu and Crain (2000)およびSu (2001)の実験で報告された幼児の文法でのQRの規制のゆるさ、すなわち4歳の英語母国語話者の文法では二重目的語構文においてScope-freezing効果を発現する機構(とくにここではBruening (2001)を想定した)が未獲得であることを示す実験結果について注目した。そして、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験では、場所格交代構文ではScope-freezing効果が観察されたことから、幼児の文法にはScope-freezing効果を発現する機構が内在することが示され、問題の所在が、なぜ二重目的語構文ではScope-freezing効果が発現しないのかという点にあることが明らかになった。そして、本稿では、こうした分析的視点を踏まえて焦点化された問題について、連続性仮説の立場から再考を試みた。

とくに、Bruening (2001)によるScope-freezing効果の分析、すなわちQRもSuperiorityに従うという提案をもとに、二重目的語構文と場所格交代構文は別々の項構造をもつ分離した構文であるという可能性と、名詞句のもつanimacyの素性の値によるIntervention効果によるとする可能性の二つの

論に基づき、コピーの削除が不完全であるためと説明される。同様の現象はドイツ語の大人の文法でも見られ、埋め込み節の主語位置および文頭にwh-句が現れる例が報告されている。

これらの観察結果から、子どもの文法と大人の文法の違いは人間言語が許容する操作の範囲内であると考えられる。子どもは、母国語に特化した文法に到達するため、潜在的な人間言語の構造から最適なものを選び抜く過程にある。このように連続性仮説は、子どもの文法が大人の文法と完全に異なるのではなく、発達の一段階であるとする立場をとるものである。

8. 考察

連続性仮説を想定すると、幼児の二重目的語構文でのScope-Freezingの効果の欠如は、多言語で観察される文法規則の反映、とくに複数の要素が移動する際の制約に関わるものと思われる。(7)でブルガリア語が複数のwh-移動においてSuperiorityに従うことをみたが、実は複数のwh-移動を起こす言語でSuperiorityに従わない言語も存在する。ポーランド語がその一例である。

(15) Polish (Rudin 1988)

- a. Kto co robil ?
 who what did
- b. Co kto robli ?
 what who did

もし、これらの言語のwh-移動ようにQRもSuperiorityに従わない余地が人間言語に残されているのであれば、幼児の文法もこのような操作を容認し(14b)のような表示に到達しているものと考えられる。

しかし、重大な問題が当然残る。もし、英語母語話者の幼児の文法のQRがSuperiorityに従わないとするならば、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験で報告された場所格交代構文での幼児の文法にはScope-freezing効果が観察されることが説明できない。

本稿ではこの点について明確な説明を持ち合わせておらず今後の研究課題であるが、2つの可能性を示しておきたい。まずは、二重目的語構文と場所格交代構文はLarson (1990)、Marantz (1993)そしてBruening (2001)などで同一の項構造をもつと分析、主張されているが、実は双方は別々の項構造をもつ分離した構文であるという可能性である(Terje Lohndal氏、私信)。この方向性によれば、二重目的語構文では幼児の文法はまず(15)のポーランド語のようなSuperiorityに従わない移動をQRに適用し、のちにブルガリア語タイプのSuperiorityに従う移動をQRにも適用させていく。一方で場所格交代構文のとくに場所目的語構文では、そもそも同じ主要部の指定部に2つの数量詞がQRによって移動するのではなく、別々の主要部に移動しているのであれば、ここでSuperiorityの問題とされていた現象は単に移動の局所性の問題として再分析される。(3a)でみたように、少なくとも大人の英語でもQRは定型節を越えることは容認されない。

について、Bruening (2001)の提案を想定して統語的分析を試みる。二重目的語構文でScope-freezing効果がみられず、(9a)のような例でも数量詞の表層の構造とはあべこべのinverse-scopeの読みが容認されるということは、少なくとも二重目的語構文でもQRが適用されていることを示唆する。これは脚注2でもとりあげたように先行詞内削除の解釈の問題からのBruening (2001)の指摘と合致する。さらに、Kiguchi and Thornton (2002)で筆者らは英語母語話者の幼児が先行詞内削除を適切に解釈できる実験結果を報告している(Syrett and Lidz (2011)も参照)。ただし、当該構文ではScope-freezing効果は観察されず、この結果だけみれば、Bruening (2001)が提唱するようなQRにおけるSuperiorityは幼児の文法には内在していないように思われる。しかし、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)での場所格交代構文を用いた実験では、幼児の文法にもScope-freezing効果が観察された。Bruening (2001)の分析によれば、これはQRにおけるSuperiorityは幼児の文法に内在していることを示唆する。

(14)にここまでの分析を図示した。(14a)のように場所格交代構文では二つの数量詞のQRがSuperiorityに従い、複数の依存関係が交差する表示のみを得る。一方、(14b)のように二重目的語構文では二つの数量詞のQRがSuperiorityに従わない、複数の依存関係が入れ子状になる表示を得ることも幼児の文法では可能ということになる。

- (14) a. Snow White stuffed a drawer with every tiara. *every > a

LF: [a drawer_i [_{VP} every tiara_{ii} [_v [_{VP1} t_i [_{V1} [_{VP2} V₂ t_{ii}]]]]]]]

- b. Snow White gave a lady every cupcake. every > a (幼児の文法)

LF: [every cupcake_i [_{VP} a lady [_v [_{VP1} t_i [_{V1} [_{VP2} V₂ t_{ii}]]]]]]]

ここまでで英語母語話者の幼児の文法ではScope-Freezingの効果は少なくとも二重目的語構文ではみられず、QRに関して大人の文法より規制がゆるいことが明らかになった。Bruening (2001)の分析に従えば二重目的語構文の2つの目的語のQRはSuperiorityに従わず、必ずしもtuck-inを行使しない派生も容認されることになる。

7. 連続性仮説

上でみたようにQRの振る舞いに関して、子どもの文法と大人のそれとの乖離がみられることが判明した。子どもの文法と大人の文法には乖離が見られることは当然さまざな局面で観察されることであるが、この点について、生成文法理論に基づく言語獲得論では、子どもの文法は大人の文法と本質的には変わらないとする連続性仮説が提唱されている。この仮説は、子どもの文法が人間言語が許容する範囲内で大人の文法から一時的に異なるものであり、最終的には母国語に特化した文法に到達する過程であると説明する。

Thornton (1990) による研究では、英語を母国語とする幼児において長距離wh-移動構文が調査され、移動元や中間痕跡の位置にwh-句のコピーを残す現象が観察された。この現象は移動のコピー一理

5. Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験

Su and Crain (2000)およびSu (2001)によって、英語の二重目的語構文におけるScope-freezing効果が英語母語話者の幼児には観察されないという報告がなされた。さらにThornton, Kiguchi and Cory (2018)で、筆者らは英語母語話者の幼児の文法でのScope-freezing効果について二重目的語構文と与格構文のペアだけでなく以下のような場所格交代構文のペアについても遂行した。

- (13) a. Snow White stuffed a tiara into every drawer. a > every; every > a
 b. Snow White stuffed a drawer with every tiara. a > every; *every > a

二重目的語構文と同様に、(13a)のような移動物目的語構文では2つの項の数量詞はどちらも他方より高い作用域をとる読みが可能であるが、(13b)のような場所目的語構文ではScope-freezing現象が確認され、下位の数量詞が上位の数量詞より広い作用域をもつ読みは容認されない (Larson 1990, Bruening 2001)。

Thornton, Kiguchi and Cory (2018)は、まず、さきの(9)にある二重目的語構文についての実験を行った。被験者は16名の英語母語話者の幼児(平均年齢4.4歳)および14名の英語母語話者の大学生であり、実験手法は真理値判断課題が用いられた。その結果、やはり、(9a)のような二重目的語構文でのScope-freezing効果が表れるはずの刺激文に対しては45%の割合で大人の文法において不正な読み、everyがaより広い作用域をとる解釈を受け入れた。すなわち、Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験でもSu and Crain (2000)およびSu (2001)同様、英語母語話者の幼児の文法ではBruening (2001)が提唱するようなScope-freezing効果をもたらず操作は獲得されていないことを示唆する結果が得られた。

一方、引き続き行われた(13)にあるような場所格交代構文についての実験では14名の英語母国語話者の幼児(平均年齢4.5歳)が被験者であった。実験手法は真理値判断課題が用いられた。その結果、(13a)のような移動物目的語構文では幼児はどちらの作用域も他方より高い作用域をもつ読み、すなわち「一個しかないティアラをすべての引き出しに入れた」という解釈も「すべての引き出しに異なるティアラを一個づつ入れた」という解釈も容認した。しかし、一方で、(13b)のようなScope-freezing効果が表れるはずの場所目的語構文に対しては、大人の文法において不正な読みであるeveryがaより広い作用域をとる読み、すなわち「すべてのティアラをそれぞれ個別の引き出しに入れた」という解釈を20%の割合しか受け入れなかった。

Thornton, Kiguchi and Cory (2018)の実験結果により、やはり、二重目的語構文でのScope-freezing効果は英語母語話者の幼児の文法には観察されないこと、すなわちSu and Crain (2000)およびSu (2001)によって報告された実験結果が再検証された。しかし、一方で二重目的語構文と同様の三項動詞構文である場所格交代構文では大人の文法と同様にScope-freezing効果は英語母語話者の幼児の文法に内在することが示唆された。

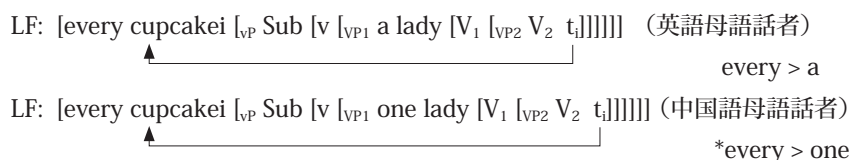
6. 論点の整理

以上の2つの実験報告を踏まえて、英語を母国語とする幼児のScope-freezing効果にかかわる文法

また、どちらの動詞補部の数量詞ももう一方より広い作用域をとることが可能とされる(9b)のような与格構文を刺激文に用いた実験においては、(10)のようなストーリーが展開されたあと、英語母語話者の子どもたちはそれを77%の割合で、それをストーリーに合致する文だと回答した。一方で中国語母語話者の子どもたちは28%の割合でそれをストーリーに合致する文だと回答した³。

このように、Su and Crain (2000)およびSu (2001)の実験では、英語の母語話者の子どもたちには二重目的語構文においてScope-freezing効果は表れなかった。この実験結果からSu and Crain (2000)およびSu (2001)は、Scope-freezing効果を生じさせる統語的制約(例えば先にみたBruening (2001)のようなメカニズム)は、英語母語話者は4-5歳までに獲得できておらず、中国語母語話者はその時点までに件の制約を獲得していると示唆しているものの、これでは単なる実験結果の再記述にとどまってしまう。そこで、Su and Crain (2000)およびSu (2001)は、(11)にあるように中国語母語話者も4-5歳までにはScope-freezing効果を生じさせる統語的制約を獲得しておらず、LFでは下位の数量詞がQRによって上位の数量詞を追い越す移動を起こしているが、第一目的語の数量詞、英語の不定冠詞aに当たる*yi-ge*が4-5歳の時点で数詞のoneとしてしか扱われないため、結果として非あいまいな解釈をとるとの説明を与えた。

(11) Snow White gave a lady every cupcake.



(12)にあるように数詞oneはeveryより必ず広い作用域をとることが知られている。以下の例では「すべての学生がある特定のエピソード1話を覚えている」という意味にしかならず、「すべての学生がそれぞればらばらに何か1話のエピソードを覚えている」という意味にはならない。

(12) Every student remembers one episode. *every > one

よって、もし、*yi-ge*をoneとしてのみ解釈していなければ、中国語母語話者には(11)の例で、みかけ上はScope-freezing効果が表れるが、それはBruening (2001)が提案するような統語的操作(の欠落)からなるのではなく、*yi-ge*という単語の機能の獲得によることになる。この分析をSu and Crain (2000)およびSu (2001)はthe lexical factor hypothesisとして提唱している。

3 後者の結果はむしろ数量詞の表層の構造とはあべこべの inverse-scope の読みが中国語母語話者では優勢であることを示唆することになるが、ここではこの問題についてはとりあげない。

は等距離であると考えられる。だとすれば、2つの項のどちらも他方に優先してQRをvまで繰り上げる派生が可能であり、どちらも他方の下の指定部に押し込まれる派生が考えられる。

このようにBruening (2001)は、二重目的語構文と与格構文は独立した構造をもつことを想定し、前者にのみScope-freezing現象がみられるのはQRがSuperiorityに従っているためであると分析、主張した。









4. Su and Crain (2000)およびSu (2001)の実験

Scope-freezing現象に関する第一言語獲得実験研究に関してはSu and Crain (2000)およびSu (2001)が先駆的研究を行っている。中国語にも英語同様に二重目的語構文と与格構文が存在することを踏まえ、Su and Crain (2000)およびSu (2001)は英語母語話者と中国語母語話者の幼児を対象としたScope-freezing現象についての比較言語第一言語獲得実験を実施した。被験者は24名の英語母語話者(平均年齢5.3歳)と27名の中国語母語話者(平均年齢5.7歳)であり、以下の(9)のようなScope-freezing現象に関する刺激文がそれぞれの母国語にて提示される真理値判断課題を遂行した。その実験結果からScope-freezingについての知識が幼児の言語知識に内在しているかどうかを検討した。

- (9) a. Snow White gave a lady every cupcake. $a > \text{every}; * \text{every} > a$
b. Snow White gave every cupcake to a lady. $\text{every} > a; a > \text{every}$

真理値判断課題は、被験者の眼前であるストーリーが(アニメーション、人形劇などで)展開され、そこで起こったことを実験者が刺激文を用いて被験者にコメントする形式をとる実験方法である。被験者は実験者のコメントに対してその真偽を問われ、その回答を通して被験者の刺激文に対する文解釈を把握するという手法である。

Su and Crain (2000)およびSu (2001)の実験では、中国語を話す子どもたちは大人と同様のふるまいをみせたが、英語を話す子どもたちはそうではなかった。すなわち英語を話す子どもたちには(9a)のような刺激文に対しScope-freezing効果は表れず、72%の割合で大人の文法において不正な読み、everyがaより広い作用域をとる解釈を受け入れた。つまり、(10)のようにすべての女性にカップケーキが配られたストーリーに対して、'Snow White gave a lady every cupcake.'という刺激文が与えられた際に、英語母語話者の子どもたちは72%の割合で、それをストーリーに合致する文だと回答を返したということである。これに対し、中国語母語話者の子どもたちは同様のストーリーを提示されたあとに、(9a)に対応する中国語の刺激文を与えられた際にはそれをストーリーに合致すると回答を返した割合は7%とほとんどみられなかった。

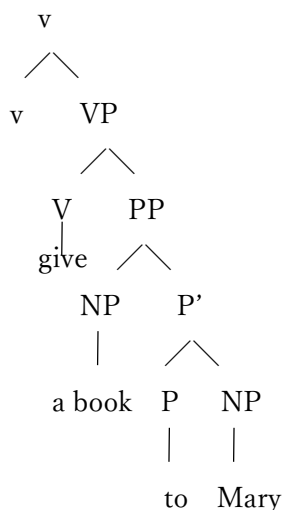
- (10) [] → []
[] → []
[] → []
[] → []

- 'Who sees whom?'
- b. *Kogo koj vizda?
- c. koj kogo t_{subj} vizda t_{obj}
-

以上のように、Bruening (2001)はScope-freezingの構文でも2つの数量詞はQRを起こし、その移動はSuperiorityに従うため、移動後も2つの数量詞の構造上の上下関係は不変であると分析し、二重目的語構文でのScope-freezing現象に対する説明を与えた。

一方で(4)の与格構文はScope-freezing現象はみられないが、Bruening (2001)はこちらの構文には以下のMarantz (1993)の提案する構造を採用し、動詞の2つの項は単一のPP内に収まっているものと分析した。

(8) Bruening (2001; P266)



この構造によると、2つの項であるNP ('a book')とP' ('to Mary')は構造上、姉妹関係であり、vから

i) Daniels gave me everything that Dan did [...].

i) の先行詞内削除構文の削除部の復元をそのまま試みると ii) のように削除部が再度現れてしまう。

ii) Daniels gave me everything that Dan did [gave me everything that Dan did [...]].

これは先行詞内削除における regress problem と呼ばれるものであるが、May(1977,1985) ではQRが適応されていれば先行詞内削除の削除部を適切に解釈できると主張した。iiia) のように数量詞句を繰り上げ、そのあと iiib) のように削除部の復元を試みれば復元部に削除部は表れず、適切な解釈に到達できる。

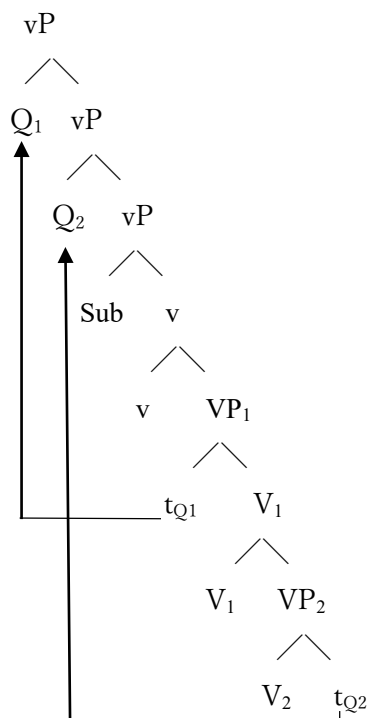
iii) a. [everything that Dan did [...]]_i Daniels gave me t_i (QR)

b. [everything that Dan did [gave me]]_i Daniels gave me t_i

以上のことから i) のような二重目的語構文でもとくに第二目的語がQRの対象となっているのがわかる。よって、Bruening(2001) は二重目的語構文でのScope-freezing現象は第二目的語が文字通り表層の位置に"凍てついて"いるからではないと主張した。

さらに、Bruening (2001)では2つの目的語(Obj₁とObj₂)が数量詞であればQRが適用されると主張し、Scope-freezingは数量詞が移動しないために生じる現象ではないとした²。その代わりにQRが可視的なwh-移動同様、superiorityに従うと提案した。Bruening (2001)によるScope-freezingの構文は次のような派生をたどる。

(6) Bruening (2001)



(6)の派生では、2つの数量詞Q1とQ2がQRを起こした後も、元々構造上上位にあるQ1が移動先でもQ2より構造上上位のままである。これはブルガリア語での複数のwh-移動で観察される現象で、(7)にあるように移動元の2つのwh-句の語順が文頭への移動後も保持される。この複数wh-移動におけるSuperiorityに対してRichard (2000)は構造上位のwh-句が文頭に移動した後に下位のwh-句がその下の指定部に押し込まれる(tuck-in)と分析した(7c参照)。

(7) Bulgarian (Rudin 1988, Bruening 2001)

- a. Koj kogo vizda?
who whom sees

² Bruening (2001) は二重目的語構文でも先行詞内削除が成立することから QR が二重目的語構文の数量詞にも適用されると指摘した。

(3) a. I told someone you would visit everyone. (Johnson 2000)

b. Lisa gave some boy every cookie.

(a, bのいずれの文もeveryがsomeより広い作用域をとる解釈は不可)

これに対し、(4)の例、すなわち(3b)の文から与格交代が起きている文(与格構文)では、前置詞句補部のeveryが直接目的語のsomeより広い解釈をとることも可能である。この点で(4)の例はあいまいな文である。

(4) Lisa gave some cookie to every boy. some > every; every > some

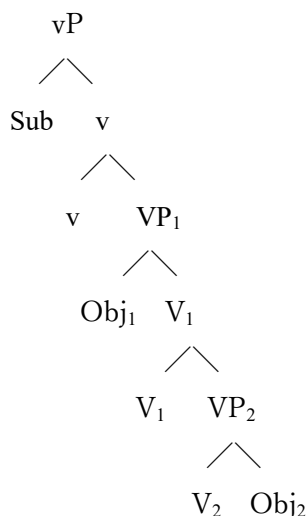
このように三項動詞句内の2つの補部の間で、とくに二重目的語構文においては作用域が表層の構造のみに従うことが観察されている。

3. これまでのScpoe-Freezingの統語分析

もしQRの存在を前提とすると、先に紹介したScope-freezingは問題となる現象である。上でみたように相互対応する三項動詞構文において、与格構文は構造的に下位と思われる位置にある数量詞が上位にあるそれより広い作用域をとることが可能であり、もう一方の二重目的語構文ではそれが許されないからである。

この問題を解消するためにBruening (2001)では QRもsuperiorityに従うとする統語的分析が提案されている。Bruening (2001)では英語の二重目的語構文の動詞句を以下のような構造をしていると分析した。

(5) Bruening (2001)



〈研究ノート〉

第一言語獲得論の観点からみる Scope-Freezing の制約について¹

木口 寛久

1. はじめに

数量詞句は、実際の語順に影響を与えない抽象的なレベル(Logical Form: LF)で移動していると考えられており、この操作は数量詞繰り上げ(Quantifier Raising: QR)と呼ばれている。

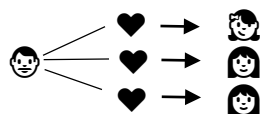
(1) a. Some guy loves every lady. (everyがsomeより広い作用域をとることも可)

b. every lady₁ [some guy loves _{t₁}] (数量詞繰り上げ：LFでの不可視的移动)



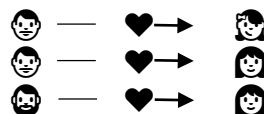
(1a)では、主語の数量詞が目的語の数量詞よりも広い作用域をとる表層構造に即した解釈(すなわち、「特定の男性が全ての女性を愛している」とする読み)に加えて、目的語の数量詞が主語の数量詞よりも広い作用域をとる解釈(すなわち、「すべての女性がそれぞれある男性に愛されている」とする読み)も許容されることが確認されている。((2)参照)

(2) 表層の構造に対応した解釈



some > every

目的語が主語より広い作用域をとる解釈



every > some

この現象についてMay (1977)は、(1b)のようにLFで数量詞を伴った目的語が主語より高い位置に移動することで、表層の構造と相いれない解釈が文法構造より得られると提案した。このLFでの移動は数量詞繰り上げ(Quantifier Raising: QR)と呼ばれている。

2. Scope-freezing

さらに後の研究においてQRの制約は可視的移动の制約よりも厳しいと思われる事例が報告されている。(3)の文はいずれもeveryがsomeより広い作用域をとる解釈は許されない。すなわち、(3a)はQRが定形節からの抜け出しを容認しないことを示している。(3b)は、Scope-freezingと呼ばれる現象で、二重目的語構文の第二目的語がQRによって第一目的語より広い作用域をとる解釈は容認されない。(Larson 1990, Fox 2000, Johnson 2000など)

¹ 本研究は科学研究費補助金(研究課題 24K03898, 代表: 木口寛久)の助成を受けたものである。

Tremaine directs her attachment to her mother, in psychoanalysis, the desire for the continuation of a sexual attraction and relationship, toward Cinderella's late mother. The stepmother's jealousy and restraint are manifestations of her complex homosexual desire for Cinderella and her mother.

Chapter 3 analyzes the dress and staircase scenes common to both films using Mary Ann Doane's masquerade theory. This chapter explains that "masquerade" through dress functions as a device for subverting heterosexual society and narratives, in which women wear dresses as excessive femininity to gain their subjectivity behind accepting patriarchal expectations. In narrative cinema, women have traditionally been the object of spectacle. The fact that women, who are considered passive in "woman's films" that are heteronormative and aim to "educate" women, gain subjectivity through "masquerade" is a clear resistance to heteronormativity. The daughter in her mother's dress, and the stepmother (Lady Tremaine) who envies her, these dynamics indicate the mother-child identification and thus the continuation of the homosexual relationship and its desires.

This research, through its analysis of *Rebecca* and *Cinderella* as exemplars of the "woman's film" genre, uncovers the queer longings and subversion of heteronormative standards hidden beneath superficial heterosexual narratives. This paper concludes that the relationship between stepmother and daughter is not merely a conflict, but rather represents lesbianism between the two, subverting heterosexual norms.

Queer Reading of Stepmother and Daughter Relations in Cinderella Story Films: *Rebecca* and *Cinderella*

Saki Takeda

Abstract

This study examines the subversion of heteronormativity that lies in the traditional stepmother and daughter relationship and representation portrayed in Cinderella Story and the woman's film genres, focusing on Alfred Hitchcock's *Rebecca* (1940) and the Disney film *Cinderella* (1950).

In fairy tales, the "witch" is also depicted as an evil stepmother in conflict with her stepdaughter, the heroine, and must ultimately be eliminated from the story. In addition, these films are categorized as "woman's films," reflecting the social role of women at the time and dealing with themes considered to be women's issues, such as marriage and childbirth.

In both works, which are typical heterosexual narratives of the Cinderella story, the conflict between "stepmother and daughter" involves the demonization of the stepmother as a woman who has "deviated" from the heterosexual norm, like a witch. This suggests that behind the fulfillment and reinforcement of the heterosexual narrative, there are homosexual desires and relationships that threaten heteronormativity. In the previous study by Yoichi Ohashi (2004), using Sigmund Freud's Oedipus complex, he interprets the first wife Rebecca, and the second wife heroine in *Rebecca* as a mother-daughter or stepmother-stepdaughter relationship. This study uses Ohashi's framework to examine the stepmother-stepdaughter relationship and uncover the lesbian relationship and desire in the two films.

Chapter 1 applies Laura Mulvey's gaze theory to analyze the heroine's gaze toward Rebecca, categorizing it into voyeuristic and fetishistic gazes. This analysis clarifies Rebecca's dual representation as a good mother figure and a bad mother/stepmother one. The image of Rebecca as the stepmother is portrayed as sexually excessive and controlling, exerting power over both people and the narrative itself, while also disrupting and challenging heterosexual conventions with a supernatural presence. The heroine's obsessive gaze and return in her dreams to the burnt Manderley mansion, which symbolizes Rebecca as the stepmother, indicates the lesbianism that persists in this seemingly heterosexual story.

Chapter 2 examines the stepmother's jealousy and obsessive restraint of Cinderella as an attachment to her (symbolic) mother in Freudian psychoanalysis. It also analyzes Cinderella's mansion and windows as a female sphere separated from the outside world, a male sphere, and these as symbols of her stepmother's restraints. Applying the Oedipus Complex triangle, Cinderella's biological mother is a symbolic mother to Lady Tremaine. Through Cinderella, Lady

羅的にとらえることができた。また、その中から、「アラ」「オヤ」「イヤ」「ヤ」「オラ」「ドゴニ」「ホレ」「マダ」、これら8つの感動詞を取り上げ、それぞれの感動詞の意味分析を行った。そして、形態的操作と音調的操作を観察することにより、それらが語の意味とどのように関わっているかなどの特徴をそれぞれの感動詞から見出した。しかし、談話調査によって得られた感動詞のうち、意味分析を実施できたのは一部の形式にとどまった。また、感動詞の意味分析を行うにあたっては、談話調査に加えて質問形式の調査を実施して、両者の結果を使用した作業が必要であると考えている。

引用文献

- 東北大学方言研究センター編(2013)『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集―宮城県沿岸15市町―』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編(2019)『生活を伝える方言会話[資料編]―宮城県気仙沼市・名取市方言』ひつじ書房

板調イントネーションのセットが用いられる。基本義に感情的意味「狼狽」が加わる場合、「オヤオヤオヤ」といったような畳語化単独の形式と平板調イントネーションの組み合わせが使用される。また、高い位置から声が発せられる。基本義に感情的意味「あきれ」が加わる場合は、「オヤオヤオヤオヤ」といった畳語化単独の形式や「オヤオヤオヤー」といったような畳語化＋長音化の形式と平板調イントネーションがセットで用いられる。なお、畳語化単独の場合、低い位置から声が発せられる。基本義に感情的意味「落胆」「不安」といった負の感情が加わる場合は、「オヤー」といったような長音化単独の形式や「オヤオヤー」のような畳語化＋長音化の形式と上昇調イントネーションのセットが使用される。

(e)感動詞「オラ」の基本義は「想定外の事態を認知した際、その事態を受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせる感動」であることが考えられる。基本義がそのまま実現義になる場合は、基本形の「オラ」と平板調イントネーションの組み合わせが用いられる。基本義に感情的意味「あきれ」が加わる場合、「オラー」のような長音化単独の形式と下降調イントネーションの組み合わせで使用される。基本義に感情的意味「うれしさ」が加わる場合は、「オラー」のような長音化単独の形式と上昇調イントネーションのセットが用いられる。基本義の度合いが強まる場合は、「オラー」というような長音化単独の形式と平板調＋下降調イントネーションのセットが使用される。

(f)感動詞「ドゴニ」の基本義は「話者の常識から外れた事態を認知した際、その事態を起こした人を咎める感動」である。基本義がそのまま実現義になる場合、基本形の「ドゴニ」と上昇調＋下降調イントネーションの組み合わせが用いられる。

(g)感動詞「ホレ」の基本義は「相手の注意を特定のものや特定のことに向けさせる」であることが考えられる。基本義がそのまま実現義になる場合は、基本形の「ホレ」と下降調イントネーションのセットが使用される。基本義の度合いが強まる場合、「ホーレ」のような長音化単独(語中)の形式と上昇調＋下降調イントネーションの組み合わせが用いられる。基本義に感情的意味「感激」が加わる場合は、「ホレー」といったような長音化単独(語尾)の形式と上昇調＋下降調イントネーションの組み合わせが使用される。

(h)感動詞「マダ」の基本義は「話者にとって意外な事態を認知した際、その事態にデジャヴ現象を感じたときに用いられる感動」であると考えられる。基本義がそのまま実現義になる場合、基本形の「マダ」と平板調イントネーションのセットが用いられる。基本義に「相手への確認」が加わる場合は、「マダー」のような長音化単独の形式と下降調イントネーションの組み合わせが使用される。

5. 今後の課題

本研究では、場面設定会話の収録という談話調査を通して、女川町で使われる感動詞の種類を網

4. 考察および結論

本論文では、上記の感動詞の中から、形態のバリエーションが豊富な形式および筆者の日頃の観察から女川町において頻繁に使用される形式を選び、それらを今回意味分析の対象とした。選択したのは「アラ」、「オヤ」、「イヤ」、「ヤ」、「オラ」、「ドゴニ」、「ホレ」、「マダ」、これら8つの感動詞である。これらの感動詞について形態的操作と音調的操作を観察し、それが感動詞の意味とどのように関わっているのかを考察した。その結果、それぞれの感動詞について、以下のことが明らかになった。

(a)感動詞「アラ」の基本義は「話者の予想や想定範囲外にある意外な事態に気づいた際に発せられる感動」である。基本義がそのまま実現義になる場合は基本形の「アラ」と平板調イントネーションの組み合わせが用いられる。基本義に感情的意味「ばたつき」が加わる場合は、「アララララ」といったような重音化単独の形式と平板調イントネーションの組み合わせが用いられる。基本義に感情的意味「うれしさ」が加わる場合は、「アララララ」のような重音化単独の形式と下降調イントネーションの組み合わせが使用される。基本義に感情的意味「不思議」が加わる場合、「アラ―」といったような長音化単独の形式と上昇調イントネーションの組み合わせで用いられる。基本義に感情的意味「ばたつき」と「不思議」が加わる場合、「アラララ―」のような重音化＋長音化の形式と上昇調イントネーションがセットで使用される。

(b)感動詞「イヤ」の基本義は「想定外の事態を認知した際、本来その状況はありえない、あるはずがないと状況を否定する感動」であることが考えられる。基本義がそのまま実現義になる場合は基本形の「イヤ」と平板調イントネーションの組み合わせが用いられる。基本義の度合いが強まる場合には、「イヤイヤイヤ」といったような畳語化単独の形式と平板調イントネーションの組み合わせで用いられる。基本義に「脱力感」が加わる場合は、「イヤイヤ」といったような畳語化単独の形式や「イヤイヤ―」のような畳語化＋長音化の形式と下降調イントネーションの組み合わせが使用される。基本義に感情的意味「不信」が加わる場合、「イヤイヤイヤ―」のような畳語化＋長音化の形式と上昇調イントネーションがセットで用いられる。

(c)感動詞「ヤ」の基本義は「想定範囲をはるかに超えた事態に対する驚き」であると考えられる。基本義に感情的意味「恐縮」が加わる場合は「ヤヤヤ」のような畳語化単独の形式と平板調イントネーションの組み合わせが使用される。基本義に感情的意味「あきれ」が加わる場合は、「ヤーヤーヤー」といったような長音化＋畳語化の形式と平板調イントネーションの組み合わせが用いられる。また、発音のスピードが比較的ゆっくりで、低い位置から声が発せられる。基本義に感情的意味「安堵」が加わる場合、「ヤーヤーヤー」のような長音化＋畳語化の形式と平板調イントネーションの組み合わせで使用される。なお、発音のスピードが比較的速く、高い位置から声が発せられる。

(d)感動詞「オヤ」の基本義は「意外な事態を認知した際に、その事態や理由がにわかには飲み込めず、信じがたく感じる感動」である。基本義がそのまま実現義になる場合は、基本形の「オヤ」と平

会話を収録した。本調査における話者は筆者の祖父母、計2名であり、各場面を話者に演じてもらいながら、普段のことばで会話してもらった。談話の音声データは、東北大学方言研究センター編(2013、2019)で示されている「文字化の方法」を参考に文字化作業を行い、作成した談話資料を用いて感動詞の抽出を行った。

3. 調査結果

調査の結果、談話資料から抽出した感動詞は以下の種類が明らかになった。「基本形(想定される形を含む)：語形」のように50音順で示す。

ア：ア、アー、アーー、アーーーー、アッ

アーオラ：アーオラ、アーオラヤ

アイ：アイ、アイヤイ

アラ：アラ、アラー、アラーー、アララ、アラララ、アララララ、アラララララ、
アララララララ、アララー、アラララー、アララララー

アレ：アレ、アレー、アレーー

イヤ：イヤ、イヤイヤ、イヤイヤイヤ、イヤイヤイヤイヤ、イヤイヤー、
イヤイヤイヤー

ウ：ウー、ウーー、ウーーーー

ウワ：ウワー、ウアー、ウンアーーーー

オ：オ、オー、オーー、オーーーー

オヤ：オヤ、オヤオヤ、オヤオヤオヤ、オヤオヤオヤオヤ、オヤー、オヤーー、オヤーーー、
オヤオヤー、オヤオヤオヤー

オラ：オラ、オラー、オラーー、オラーーーー、オラナー

ダレ：ダレ

ドゴニ：ドゴニ

ドラ：ドラ

ドレ：ドレ

ナニ：ナニ、ナヌー

ナンダイ：ナンダイ、ナーンダイ

ナンダベ：ナンダベ、ナンダベー、ナンーダベ、ナンーダベナー、ナンーダベヤー

ナンダヤ：ナンダヤ

ナント：ナント、ナンツ、ナンットヤー

ホレ：ホレ、ホーレ、ホレーー、ホレーーーー

マ(ン)ズ：マ(ン)ズ、マーンズ、マ(ン)ズマ(ン)ズ

マダ：マダ、マダー

ヤ：ヤー、ヤヤヤ、ヤーヤー、ヤーヤーヤー、ヤーヤーヤーヤー

ワ：ワッ、ワー

感動詞の意味分析

—— 宮城県牡鹿郡女川町における談話調査から ——

木村 安未紗

1. 問題の所在と研究の目的

感動詞は品詞論上の位置付けが難しいことから、研究者によって定義が異なる。感動詞の主要な要素は「感動」「呼びかけ」「応答」の3つとされることが多いが、感動詞の範囲はさらに広げられることもある。例えば、挨拶、歓声・命令などを表すもの、呪文・まじないことば、はやし文句、合いの手、かけ声、表情音、泣き声や笑い声などの自然音、フィラー、遊びのことばなども感動詞としてとらえられることがある。このように、さまざまなものが感動詞としてまとめられている。そのため、感動詞は範疇が複雑すぎると考えられてきたり、また、言語にとって周辺のものとみなされてきたりしたため、感動詞研究は研究が遅れている分野であることが指摘されている。近年、談話研究の中で感動詞の果たす役割が注目され始め、日本語学での感動詞研究が進展してきている。それを受け、方言学においても感動詞研究が進んできており、宮城県内では気仙沼市での調査が盛んである。しかし、方言学における感動詞研究は限られた地域でしか研究が行われていないことが課題である。

本論文では、宮城県牡鹿郡女川町における談話調査によって得られた感動詞の意味を分析する。女川町は方言調査の事例が極めて少ないことから、特に感動詞の使用実態も不明である。また、気仙沼市と同じ方言区画に属していながら、たとえば気仙沼方言の感動詞「バ」が女川方言には存在しないなどの相違点があり、同じ沿岸部でも地域的なバリエーションが存在する。このことから、女川町における感動詞の使用実態を明らかにすることを研究の目的とし、女川町ではどのような感動詞がどのように使われているのかを問題とする。そして、会話の中から感動詞を抽出し、感動詞の種類を整理する。その中から形態のバリエーションが多いものや、女川町の日常での使用頻度が高い感動詞を一定数取り上げ、その形態的操作と音調的操作を観察し、それが感動詞の意味とどのように関わっているのかを明らかにする。

2. 調査の概要

調査方法については、談話調査を実施する。本調査の前に、自由会話を収録するという事前調査を行った。その結果、大枠の話題だけの自由会話だけでは、感動詞が出現しにくいということがわかった。また、感動詞は現地の人々が日常生活で実際に生起する話題が盛り込まれる何気ない会話の中で出現しやすいという特徴があることが確かめられた。このことから、自由会話よりも場面設定会話の方が有効であると判断した。そのため、日常生活のさまざまな場面が切り取られ、細かい場面要素で場面設定がされている、東北大学方言研究センター編(2019)の場面設定会話を本調査で使うことにした。地域特有の感動場面があることから、女川町の祭りや特産物、行事、日常の様子などを場面要素に取り入れた地域オリジナルの場面設定会話の収録も行い、本調査では計65場面の場面設定

参考文献

菊池勇夫『飢饉の社会史』(校倉書房、1994 年)

菊池勇夫『近世の気象災害と危機対応』(吉川弘文館、2024 年)

武井弘一「日本近世の気候変動と食糧危機・試論」(『日本史研究』739、2024 年)

山田龍雄 [ほか] 編『日本農書全集』1 (農山漁村文化協会、1978 年)

山田龍雄 [ほか] 編『日本農書全集』12 (農山漁村文化協会、1978 年)

鶴岡市史編纂会編『庄内藩農政史料 上巻』(鶴岡市、1999 年)

鶴岡市史編纂会『庄内史要覧』(鶴岡市、1985年)

古島敏雄『古島敏雄著作集』6 (東京大学出版会、1975 年)

おわりに

酒井氏が治めた表高14万石の庄内藩領を対象として、農政史料や御用留帳から領主と百姓双方の視点から気候対策を探った。同藩の農政史料を確認すると、早稲を選び十分な肥料を施すことなど心がけや努力次第で天候の悪影響を克服できると認識されていた。天候が作柄を左右する一方で、施肥などの田の手入れによって天候不順による農作物への悪影響を克服可能と記されていた。また、農政上の取り組みでは、上穀という晩稲品種植付けの禁止と早稲品種の栽培推奨に加え、肥料確保が行われていた。

藩から郷方へ行われた肥料確保の促進は、草肥や廐肥や尿尿などの自給肥料の確保を促していたほか、油粕類の流通規制を命じていた。正月から油断なく草肥を貯めるよう指示していた他に、肥料である草糞の価格高騰で用意が難しい百姓へ藩は資金手当等、単に肥料確保を促すのみにとどまらず、具体的な支援策を郷方へ提示している。他にも藩では特に農業計画を重要視し、田地管理の徹底や肥料確保の計画的に行うよう、農業目付による監督が指示されていた。稲の植付などの耕作時期や休日が定められていたが、郷方では休日を自分勝手に増やす百姓がいたため、農業目付に監督させた。天候にあわせて適切な農作業が行えるように監督を命じているのは、作柄を左右する天候を意識せず農作業を行うことが凶作を招く一要因であるという認識に基づくと共に、そもそも農作業を怠ることで食糧不足や年貢未進が発生することを防ぐための措置だろう。農業計画の指示や資金手当を行うなど、藩は郷方の農業経営へ積極的にかかわっていた。

食糧危機を凶作と飢饉に分けて検討を行った場合においても、凶作の要因に社会的要因が影響する余地が十分にあり、場合によっては凶作の要因は人災的と導き出せるだろう。庄内藩において、施肥不足が凶作をもたらす要因のひとつだという認識のもと、積極的に行われていた油粕類の肥料確保の一連の農政は、一時的な食糧危機である凶作への対策であり、それが天候を意識した取り組みだったことから気候対策のひとつに位置付け、評価することができるのではないだろうか。

油粕類の確保は農業振興策の一環として重視され、荏・菜種の脇売禁止や沖止を通じて領内肥料の流出を防ぎ、価格高騰の抑制を図った。

3章 庄内藩領における肥料確保の事例

肥料確保に際して藩側と領民側の双方が具体的にどのような行動を取っていたか、遊佐郷江地組の大組頭を勤めていた菅原家に所蔵されている帳簿、「北目村菅原家御用留帳」(以下、御用留帳とする。)から油粕類に関係する史料を中心に分析した。

御用留から領内の肥料流通を探ると、藩側が行った規制は沖止(領外への移出禁止)と脇売(無許可での販売)禁止の大きくふたつがあげられる。領内では、百姓の所有する油粕類を油屋へ売り渡させることで所有や流通に制限をかけ、油屋には事業者や事業規模の厳密な申請を行わせていた。また、売買は村が藩へ書類申請した油粕類の数を油屋が販売するという正規の販売以外を認めず、領内での流通は厳格に制限されていた。複数回出された沖止通達からは、油粕類が領内から領外へ流通することを阻止し、領内の供給を量・価格共に安定させる意図がうかがえる。百姓側の請願を背景に何度も沖止を命じられた沖止通達から、百姓にとっても肥料が農業経営上重要なものと捉えていたことがうかがえる。農政役人が十分な施肥で天候を克服可能として肥料確保を督励した一方で、百姓側の肥料確保の姿勢からは、施肥が天候を克服するとまではいかないものの、施肥が生産力増加を実感し農業経営に必要な不可欠だと感じていたという認識がうかがえ、これが沖止の請願といった行動につながったと考えられる。しかし、文化9年に藩が出した廻状では、油粕類の沖出(領外移出)を咎める文言が確認でき、肥料の必要性を認めつつも個人の利益を重視する百姓の存在が示唆された。これまでの天災への適応では、気候に適した稲品種の栽培が東北諸藩でおこなわれてきた。東北では、気候災害を含め夏季の寒冷な気候へ適応するために、中稲・晩稲品種の栽培を禁止し、早稲品種の栽培を推奨しており、それは庄内藩でも同様であった。しかし、最適品種栽培を奨励する藩側に対して、百姓は実際には収穫量が多い傾向にある中稲・晩稲品種を栽培していたという利益重視の行動が指摘されてきた¹⁰。

庄内藩の肥料確保から天災への対策では、天候の影響を肥料によって克服可能と認識のもと、田の肥料とされていた油粕類の流通を厳しく制限していた。油粕類の肥料確保に奔走したこの一連の流れを気候適応のひとつに見出すことができるのではないだろうか。百姓側の行動についても、郷方という村単位であれば、沖止の請願によって肥料確保を図り、天災を施肥によって適応しようとしたといえる。しかし、最適品種栽培を奨励する藩側に対して、百姓は実際には収穫量が多い傾向にある中稲・晩稲品種を栽培していたという利益重視の行動が指摘されてきた¹¹ように、肥料が重要と認識する中で油粕類の領外への移出が禁じられる中、百姓個人単位では藩や郷方の意向を無視した行動があった。

10 菊池勇夫『近世の気象災害と危機対応』(吉川弘文館、2024年、94－128頁)、武井弘一「日本近世の気候変動と食糧危機・試論」(『日本史研究』739、2024年)

11 菊池勇夫『近世の気象災害と危機対応』(吉川弘文館、2024年、94－128頁)、武井弘一「日本近世の気候変動と食糧危機・試論」(『日本史研究』739、2024年)

百姓の怠慢を咎めている。また村役人が、自分勝手に休日を増やす百姓を咎め、怠けずに農作業を行うように監督し、それでも怠ける百姓が存在する場合には、大庄屋へ報告する役割を担っていた。百姓の怠慢が耕作時期などの農業計画を崩すことを懸念して計画性を持った労働を促していた。

また、栽培品種の指定が行われ、晩稲品種である「上穀」の植付けが禁止され、早稲が推奨されている。同藩では、寛延2年(1749)には、「御国之儀晩稲不相応」であるとして、晩稲・中出稲(中稲)の植付禁止と早稲の植付が推奨されている⁷。

2章 食糧危機と肥料

2章では、『農業全書⁸』をはじめとする農書から肥料の効能や役割の認識と、庄内藩の農政資料から天候と肥料の関係性の認識を探った。

17世紀末に宮崎安貞によって著された『農業全書』によると、人口増加で食糧の需要拡大で休耕地を設けることが難しくなり、地力の消耗が農耕作上の課題だった。そこで、肥料は田畑の土壌を改善し、農業生産を継続的に行うために必要な道具として、肥料確保の必要性が指南されている。また、中村喜時によって安永5年(1776)に津軽で著された『耕作話⁹』では、「天の時の冷氣にも負ず、土地の善悪にもまけず、稔よき稲を取事は人の仕方にも有」という老農の教えを引き、気候風土に適した稲品種の栽培を行うことで、天候や土地の良し悪しを克服可能だという認識がうかがえる。

庄内藩では、天候が農業に与える影響として天候が作柄を左右する一方で、田の手入れ(施肥)などの努力で天候不順の悪影響を克服可能と認識していた。草肥や廐肥や人糞尿などが使用され、藩が百姓へ肥料確保を促した。肥料確保は農業計画のひとつとして、夏には草、冬には糞というように具体的に指示が出されている。農業目付への指示の中で、天候を意識しつつ耕作時期や作業の計画性を重視し、百姓が自分勝手に休日を増やすなど農業をおろそかにする態度を問題視して村役人へ監督させている。農業目付への指示の中で指示している肥料確保では、草糞の価格高騰で肥料の用意が難しい百姓へ資金の手当てを行おうとしていることから藩は百姓の農業経営へ積極的に関わっている。藩財政が困窮していた庄内藩では、藩が農業計画へ積極的に介入することで、農業生産による年貢上納を安定させ、財政収入を確保する意図はあっただろう。

庄内藩では、草肥や人糞尿を基本としつつ、油粕類などの金肥の使用もみられた。

また、いかわたも肥料として活用するなど、限定的ではあるが魚肥の活用も確認できた。そのうち、荳粕や菜種粕などの油粕類を肥料として確保を図る沖止などの施策は寛政年間頃に藩から郷方へいくつかみられ、このことから同藩は金肥の中でも油粕類を重要視していた。寛政前後には油粕類の使用と需要の高まりがみられる。

藩は肥料確保のために、草肥や廐肥、尿尿などの自給肥料の利用を促し、油粕類の流通規制を行った。また、草肥の価格高騰に苦しむ百姓には資金援助を行い、農業目付による監督を通じて農業計画の徹底を図った。耕作時期や休日の管理を強化することで、天候に対応する努力が進められた。特に

7 鶴岡市史編纂会編『庄内藩農政史料 上巻』(鶴岡市、1999年、111頁)

8 山田龍雄[ほか]編『日本農書全集』12(農山漁村文化協会、1978年)

9 山田龍雄[ほか]編『日本農書全集』1(農山漁村文化協会、1978年)

ができていなかった場合には、凶作という一時的な食糧危機においても人災的側面が強調されるだろう。

そこで、本研究では、天明から文化年間を対象に、庄内藩の領主と百姓双方の視点から食糧危機回避をめぐる肥料の役割を論じた。飢饉を長期的・持続的な食糧危機、凶作を短期的・一時的な食糧危機のふたつに分ける研究にならい、そのうち、凶作という飢饉の前段階へ注目して、領主と百姓双方の気候対策を探った。

1章 庄内藩の環境

1章では、天明から文化年間の庄内藩農政の推移と、平均免を確認して作柄をまとめた。9代藩主酒井忠徳の政治課題は財政難解消であった。財政難の要因には江戸藩邸における出費増加、領内で頻発する凶作を要因とした年貢未進などがあげられる。

天明年間には同4年に東北を中心とした夏季の異常低温による不作が発生したことでよく知られている。『庄内史要覧⁵』から同時期の庄内藩の平均免を確認すると、平均免は大凶作より豊作の基準を上回る場合が多かった。平均免は一般的に藩が知行地を家臣に与える際、各村落の年貢収納率が一定の基準率となるように調整することで、庄内藩の場合はその年の年貢率を指している。おおよそ4ツ5歩を定免の平均として、4ツ7歩5厘以上は豊作年、3ツ7歩5厘以下は大凶作年という基準で確認した。

天明から文化年間の中で、寛政7年(1795)が3ツ6歩3厘1毛1払と唯一の大凶作年である。さらに平均免4ツ以下の年まで範囲を広げると、天明3年、同6年も該当する。一方、天明4年は4ツ7歩6厘1毛5払、同7年は4ツ7歩5厘9毛7払、続く寛政年間でも寛政2年(1790)は4ツ7歩5厘5毛4払、同9年は4ツ7歩5厘1毛0払と平均免は豊作年の基準を超えていた。また米の値段は高い順から、天明3年は金10両あたり18俵4分、同6年は19俵4分、寛政7年は20俵5分であり、米が高価な年は凶作年の平均免である傾向が確認できた。ここから、天明3年、同6年、寛政7年は平均免で判断すると凶作年といえることができる。

領内で地域差はあるものの天明期間は天候不順に見舞われていることは、金10両あたりの米の値段からうかがうことができる⁶。平均免では凶作年といえる年の金10両あたりの米の値段は、天明3年に18俵4分、同6年に19俵4分、寛政7年に20俵5分と高騰している。平均免上の豊作年では、天明4年に24俵7分、同7年は24俵7分、寛政2年(1790)は34俵5分、同9年は27俵6分だった。凶作時の平均免と作柄の傾向は概ね一致していた。ただ、平均免上の豊作年と米の値段は必ずしも一致していない。

天明3年の凶作を契機とした農村疲弊と財政難解消のため、寛政年間から郡代白井矢大夫による藩政改革が進められた。そこでは、貸付米・貸付金の切り捨て、地主に対する困窮と内米の賦課、村土地の主付が行われた。また、農政改革では、農作手順の徹底や休日の指定、晩稲品種作付の禁止、肥料用油粕の確保が実施された。

農業振興策では、藩は農業計画を重要視していた。田地管理の徹底、肥料確保の計画性を重視し、

5 鶴岡市史編纂会『庄内史要覧』(鶴岡市、1985年、224-227頁)

6 前掲『庄内史要覧』

〈修士論文題目及び内容の要旨〉

天明から文化年間における庄内藩の肥料確保

— 気候対策の観点から —

阿曾 愛絵花

はじめに

本論文では、天明から文化年間における庄内藩の気候や食糧危機対策、特に肥料確保を中心に領主・領民の取り組みを明らかにすることを目的とする。

近世の食糧危機のうち、気候変動への適応に失敗した結果である「飢饉」の要因に藩政上の失策を指摘し、飢饉を人災的とする結論は研究史上の到達点といえるだろう¹。また、近世の領主と領民の気候対策または気候適応を巡っては、気候と歴史事象の関係への考察や気候変動への社会応答、飢饉の要因に迫る研究が行われてきた²。

飢饉という長期的な食糧危機に対して、凶作という一時的・短期的な食糧危機の要因やその評価は、武井弘一氏が積極的に行っている。近世の加賀藩を事例に気候変動・魚肥・農業経営の3つの視点から分析を行い、凶作を農作物の実りが非常に悪いこと(一時的)、飢饉を農作物の実りが非常に悪く、食糧が欠乏すること(長期的)と定義し、両者を含めた食糧危機の根本的な要因についての評価を試みている³。それによると、近世の食糧危機は気候変動が根本的な要因と言い切ることはできず、稲作を営み村社会で生きる百姓たちの判断に起因するとして、飢饉の発端となる凶作もその要因は人災的と結論づけた。

凶作への対策では、気候風土に適した栽培品種の選択によって天候への適応が試みられてきたことが明らかになっている。例えば、東北地方は晩稲禁止・早稲推奨の傾向にあったと指摘される⁴。藩側の施策に対して、百姓側が晩稲の栽培を行っていたことで稲の収穫前の自然災害を回避できず不作を迎えた事例では、凶作に品種選択の失敗という人災的要因を指摘することができる。

このように、飢饉や凶作といった長期的・短期的な食糧危機への適応失敗が明らかにされている。食糧危機への対策が取られてきたにもかかわらず、凶作が発生し飢饉へと連鎖した要因には、自然的要因のみならず、その過程に寒冷リスクを度外視した利益重視の農政や百姓個人の判断といった人災的要因が関連していることが指摘された。凶作への対策のひとつには、気候風土にあった稲品種の栽培を勧めることが農政の中で行われていた。しかし、稲の育成に使用されていた肥料が食糧危機回避において果たした役割を検証する試みがなされていない点は課題である。肥料の観点から検証することで、食糧危機の人災的要因の検討をより多角的に行うことが可能になる。例えば、領内で肥料確保

1 菊池勇夫『飢饉の社会史』(校倉書房、1994年)

2 特に近年の研究成果は、中塚武『気候変動から読みなおす日本史(全6巻)』(臨川書店、2020—2021年)にまとめられている。

3 武井弘一「日本近世の気候変動と食糧危機・試論」(『日本史研究』739、2024年)

4 古島敏雄『古島敏雄著作集』6(東京大学出版会、1975年、582頁)

ハ学校長²⁶」が定めるとしている。

大正10年以降に提出された設立認可申請書は、市町村関係なく、おおむね実業補習学校学則標準の内容が明記されており、文言もほとんど一致をみせている。また、それに基づいて改正認可申請書も多く出された。これによって、これまで郡によって実業補習学校の整備が統一されていたのが、「訓令甲第九號」によって、宮城県による実業補習学校の整備となった。また、郡から宮城県の整備への移行が行われたのが大正6年から大正10年の間である。この宮城県の実業補習学校の整備の統一は大正15（1926）年まで積極的に進められ、それ以降は、ほとんど新たに学校が設置されることはなく、改正の手続き以外の申請書の提出はほぼ見られなくなる。以上より、第3期は宮城県による実業補習学校整備の時期であるといえる。

おわりに

以上より、2つのことが明らかになった。まず、宮城県の実業補習学校の展開は3つの整備主体の変化によっても区分できることである。第1期が町村による実業補習学校運営の時期、第2期が郡による実業補習学校整備の時期、第3期が宮城県による実業補習学校整備の時期である。

この区分方法によって、従来言われてきた実業補習学校の町村運営から国家による整備という流れではなく、その2つの時期の中間に郡という地域行政組織も実業補習学校の整備に大きく関わっていたことが明らかになった。このことは、郡と実業補習学校との間に深い関係性があったことを示唆しており、実業補習学校の研究と郡の研究、両者の研究を発展させていくうえで注目すべき点であると考ええる。

特に、郡は常に廃止論にさらされていた²⁷ことから実業補習学校の整備が郡にとっていかなる利益をもたらしたのか、実業補習学校の発展が郡存続の実績として取り扱われたのかについては今後もっと深めていく必要がある。また、郡制は大正10（1921）年に廃止案が発布され、その2年後の大正12（1923）年に施行される。なお、大正15（1926）年には郡役所そのものが廃止されるため、大正10年から大正15年にかけては郡組織の解体が行われた時期であるといえる。その解体の時期と実業補習学校の規程の改正の時期が重なっていることから、郡の廃止と実業補習学校の全国統一化に関係性があるのかという問いは、それぞれの研究分野において新たな知見を見出すきっかけになるのではないだろうか。今後の研究においてその部分を追求していきたい。

また、本研究では、当初予定していた地域社会と実業補習学校の関係性について深く検討することができなかった。今後の研究において実業補習学校の実態と地域社会とのかかわりがいかなるものだったのか、また今回明らかにした整備主体の変容によって実業補習学校と地域の関係性に变化があったかについて今後検討を加えていく所存である。

26 19と同史料の「実業補習学校学則標準」の附則より一部引用

27 12と同上書。以下の郡に関する説明は本書より参照する。

また、廃止申請書にも変化が見られた。それは郡ごとに複数あったすべての学校を廃止して当たらに1つの学校を設立、もしくは従来存在していた学校のうち1校を改正し、残りの学校をすべて廃止する傾向がみられた。これは、第1期の廃止要因ではみられなかった傾向である。このことから、この時期から1市町村につき1校の実業補習学校を設置する様子がみられはじめ、宮城県による実業補習学校の統一化がはじまったといえる。ただし、義務同様の学校になったとはいえ、「訓令甲第二十二號」の段階では、まだ地域の状況に応じた運営であったことを言及する。

宮城県において実業補習学校の運営が本格的に統一されていくのは「訓令甲第九號¹⁹⁾」からである。この訓令は、大正9(1920)年の実業補習学校規程改正²⁰⁾をもとに発布された。なぜなら、この大正9年の実業補習学校規程の改正が明治35(1902)年より大幅に改定がされたからである。大正9年の改正によって実業補習学校設置の基準が定まったことである。これまで規程内容の多くが「土地ノ状況」によって適宜定めることとしていたが、大正9年の改正では実業補習学校の本旨をはじめ、学校の課程や教授時数、女子の教科目、設置場所などが定められた²¹⁾。

また、本規程の第15条「実業補習学校ハ学校、試験場、講習所等ニ併設スルコトヲ得.²²⁾」が明記された。このことから、これまで附属の学校として取り扱われていた実業補習学校が、「併設」となったことがわかる。すなわち、実業補習学校は独立の学校として扱われることになったことを意味する。これは実業補習学校規程が改正されたことによる実業補習学校の大きな変化であるといえる。なお、この規程の施行は「大正十年四月一日ヨリ」となっているため、大正10(1921)年2月8日に発布された「訓令甲第九號」は大正9年の実業補習学校規程の改正をもとに作られたと考える。

「訓令甲第九號」は実業補習学校教育実施要項と実業補習学校学則標準が示されている。

この2つの実業補習学校の整備が行われたことによって、宮城県の実業補習学校の設立認可申請書にも影響を与えた。この実施要項は第11章と附則で構成されている。それぞれ「設置」、「名称」、「就学及修業年限」、「教科及編制」、「教授時間及教授時数」、「教授訓練」、「設備」「実習」「入学及出席」「教員」「経費」である²³⁾。この11章にそれぞれ実業補習学校の教育を行うにあたっての必要事項が示される。その内容の詳細を紹介するのは本研究では避ける。また、附則に、要項の実施日が「大正四年四月ヨリ之ヲ実施ス²⁴⁾」と示される。この「訓令甲第九號」が発布された日が大正10年であることから、この県報を作成する際に誤って記載したものと推察される。

次に、実業補習学則標準は第7章と附則で構成されている。「総則」、「修業年限及休日」、「教科」、「入退学」、「修業及卒業」、「授業料」、「賞罰」である²⁵⁾。また、附則において、「本則ノ実施ニ関スル細則

19 「宮城県報 第八百十六號 大正十年二月八日 訓令甲第九號」宮城県公文書館所蔵

20 「官報 第二千五百十四號 大正九年十二月十七日 文部省令第三十二號 実業補習学校規程」国立国会図書館デジタルコレクション

21 ²⁰⁾の史料および佐藤守(1984)「第2章：実業補習学校成立と展開—わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄(p21-93) 東京大学出版会を参照

22 ¹⁹⁾の史料の「第十五條」より引用

23 ¹⁹⁾の史料の「実業補習学校教育実施要項」より参照

24 ¹⁹⁾の史料の「実業補習学校教育実施要項」の附則より引用

25 ¹⁹⁾と同史料の「実業補習学校学則標準」より参照

き点がある。それは郡長が地方改良講習会に参加をしていたことである。すなわち、郡長が講習会で地方改良を行うためには実業教育の発展が必要であることを説かれていた可能性があるということである。では、その地方改良運動において、郡の実業補習学校の整備に変化はあったのか。

結論を言えば、変化があったといえる。明治42（1909）年に宮城県の牡鹿郡で独自の実業補習学校の設立認可申請書の雛形を作成し、今後それを使用していくことを宮城県に示した文書¹⁵が発見された。この影響から、牡鹿郡では実業補習学校の設置が相次ぐ。これは申請書の書くべき項目や文言が一字一句はっきりと示されたことにより、事務手続きが以前より容易になったものとする。

また、この雛形が独自に作成されたのは牡鹿郡だけであったかといえ、そうではない可能性があることが明らかとなった。この時期の他の郡の設立認可申請書¹⁶を確認すると、申請書内に記載すべき項目の種類が、郡ごとにある程度統一されていることが明らかとなった。すなわち、郡ごとに独自の申請書の雛形を作成していた可能性があることがここから言える。ただし、郡独自の雛形が残っていたのは牡鹿郡の事例のみである。しかし、郡による実業補習学校の整備が行われていたことがここから言えるのである。よって、第2期は郡による実業補習学校整備の時期といえるのである。

第4章 第3期—宮城県による実業補習学校整備の時期

第3期は宮城県による実業補習学校整備の時期である。その期間は、大正6（1917）年から昭和9（1934）年にかけてである。高橋氏¹⁷の研究では第3期を宮城県における実業補習学校完成の時期とした。

これまでは郡による実業補習学校の整備が行われてきたが、大正6年度以降から宮城県による実業補習学校整備が見られ始める。まず、大正6年に宮城県より「訓令甲第二十二號¹⁸」が發布された。この訓令では、実業補習学校が義務同様の学校として位置づけられ、義務同様の学校としていくために設置標準が定められた。ここでは主に修業年限や教科目に関する事、教授時数や授業料に関する事、教員に関する事、実施年度などが明記されている。なお、この訓令の実施年度は訓令が發布された次年度の大正7（1918）年であった。

この訓令發布以降、実業補習学校の設立認可申請書が多く各市町村より提出されたが、それと同時に改正認可申請書も多く提出された。改正認可申請書が多くみられる現象は、この訓令によって義務同様の実業補習学校へと変わった影響があると考えられる。もっといえば、「実業補習学校設置標準」の第8項が明記されたことが実業補習学校の改正を最も促した要因であると考えられる。第8項は従来から存在していた季節実業補習学校に対して、設置標準で定めたすべての趣旨に改めることとしている。その対象となる実業補習学校は尋常小学校卒業後2年以内の者を収容しているところであった。よって従来の実業補習学校は第8項に基づいて改正していったと考えられる。

15 「牡学第一、三六四号」「明治四十二年 学校 市町村立学校 実業学校 報告 教科用図書」宮城県公文書館所蔵

16 「明治四十二年 学校 市町村立学校 実業学校 報告 教科用図書」宮城県公文書館所蔵 に綴られている25校分の設立認可申請書の調査項目

17 4と同上

なお、高橋氏はこの第3期を大正6（1917）年から大正10（1921）年までとしている。

18 「宮城県報 第四百九十三號 大正六年十月五日 訓令甲第二十二號」宮城県公文書館所蔵

の研究では、この増加の要因を宮城県による「実業補習学校教員俸給補助規程¹⁰⁾」の発布をみこしたものと¹¹⁾。しかし、この規程が明治42年以降の実業補習学校数の急増の要因であるとは必ずしもいいきれない。それは明治42年、明治43（1910）年に設立した実業補習学校のうち、「実業補習学校教員俸給補助規程」において補助を受けられる条件を満たしていない学校がほとんどであったためである。

「実業補習学校教員俸給補助規程」が受けられる学校は2つの条件を満たしている必要があることがわかる。1つは、修業期間が2年以上かつ通年教授である学校の場合である。もう1つは実業補習学校教員として養成した者、もしくは明治40（1907）年の文部省令第28号「実業学校教員資格ニ関スル規程」に該当する者のなかで知事が指定した教員を任用している学校の場合である。

この点から、明治期の実業補習学校の発展の要因は他にあると考えられる。その要因は郡と地方改良運動が結びついて実業補習学校の整備を行ったことである。

まず地方改良運動とは「日露戦後、町村への国政委任事務が急増するなか、財政基盤・行政機能を強化するなどの町村自治再編が求められ、青年会・報徳会・斯民会・戸主会などの補助団体の「自発性」を引き出しながら、これらを内務省一府県知事一郡長一町村長の行政系統に組み込み、町村住民の統合・国家のための共同体作り¹²⁾」であった。この地方改良運動は実業補習学校の増加にも関わっていた¹³⁾が、実業教育の発展のみに影響を与えたわけではなかった。地方行政、とくに郡の改革にも影響を与えていた。特に郡長の改良が郡改革の主であった。

ただし、郡は明治期から存在する地方行政単位において唯一現存していない組織である。そもそも明治期の時点で郡そのものの必要性は問われており、明治の後半期に郡制を廃止させようとする動きが何度かあった。明治39（1906）年、明治40（1907）年、大正3（1914）年に郡制廃止の法案が提出される。どれも可決はされていないが、郡の不要論というのは常にあったことがここからうかがえる。この郡の不要論に対し、内務省は郡長の改良を行った。郡長を改良した要因は、これより前から、「郡長老朽問題」が上がっていたためである。

この問題を解決すべく、郡長の改良が行われる。改良内容は主に3つで、「有資格者の郡長任用」、「特別任用郡長の採用」、「地方改良講習会の開催」である。とくに「地方改良講習会の開催」が地方改良運動と結びついており、谷口氏はこの地方改良講習会が「郡長の再教育の場」となっていたことを述べている¹⁴⁾。それはこの講習会に郡長が多く参加していたため、郡長を意識した講習になったとされているからである。

実業補習学校と郡はそれぞれ地方改良運動とのかかわりがあったことが分かった。ここで注目すべ

10 宮城県報 第千五百八十四號 明治四十四年八月十五日 「県令第十八號 実業補習学校教員俸給補助規程」宮城県公文書館所蔵

11 4と同上書（p23）

12 谷口裕信（2022）「近代日本の地方行政と郡制」吉川弘文館（p 140）

郡に関する説明は本著を参照する。

13 佐藤守（1984）「第2章：実業補習学校成立と展開—わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄（p21-93）東京大学出版会（p59-60）

14 85と同上書（p300）

期区分は行われている⁷。本研究では、宮城県の実業補習学校の展開を時期区分した高橋氏の研究を参照し、宮城県の実業補習学校数の推移の変化から時期区分を行っていく。時期区分は次のとおりである。第1期が「町村による実業補習学校運営の時期」、第2期が「郡による実業補習学校整備の時期」、第3期が「宮城県による実業補習学校整備の時期」である。第2章以降で実業補習学校の整備主体の変遷の実態に迫っていく。

第2章 第1期—町村による実業補習学校運営の時期

第2章では第1期における宮城県の実業補習学校数の実態に焦点をあて、この時期がなぜ、町村による実業補習学校運営の時期であるといえるのかについて論じていった。まず第1期は明治33(1900)年から明治41(1908)年にかけてである。高橋氏の研究⁸では、第1期を実業補習学校の不振の時期とされてきた。それは宮城県において、この時期は実業補習学校の数が伸びず横ばいの状態が続いているからである。それを指摘した高橋氏は停滞の要因を義務教育の就学率を上げることが当時の教育会の課題であったこと災害や凶作などによる財政ひっ迫があったことを実業補習学校不振の要因として挙げた。当時の設立申請書だけではなく、廃止申請書の提出・認可もみられたことから第1期は実業補習学校不振の時期であったといえる。

しかし、はじめから不振であったわけではなく、初期の頃は設立申請書の提出・認可がほとんどであった。前年度と比較して明治35(1901)年には19校、明治36(1902)年には8校増えている。この時期の実業補習学校の設立はおもに明治35年の実業補習学校規程の改正の影響によるものと考えられる。この改正によって、規程内容が緩和されたことと、実業補習学校設立の際に示す学則の項目が定められ、事務手続きが容易になったことが設立を促すきっかけになったと考える。

ただし、明治37(1903)年以降、廃止申請書の提出・認可がその年の設立申請書の提出・認可と同等に行われたことから、この時期の学校設置が不振となった。廃止の理由は高橋氏の指摘通り、宮城県内で発生した凶作や災害などによる財政ひっ迫や義務教育の延長によって、学級編成に影響が出て学校運営に支障をきたしたことである。これらの複合的な要因によって、この時期は学校の設置を制限せざるを得なかったといえる。しかし、この不振の時期にも拘わらず運営を行っていた実業補習学校は存在しており、かつ不況の時期に学校の設置を試みている学校もある。すなわち、設置も廃止の有無は町村に委ねられていたと考える。このことから、第1期は町村による実業補習学校運営の時期であるといえる。

第3章 第2期—郡による実業補習学校整備の時期

第2期は郡による実業補習学校整備の時期である。その期間は明治42(1909)年から大正5(1916)年にかけてである。高橋氏⁹はこの時期を宮城県における実業補習学校の発展の時期とした。それは第2期には実業補習学校設立してから始めて実業補習学校数が大幅に増加したからである。高橋氏

7 これまでの実業補習学校の展開の時期区分は佐藤守氏と高橋満氏の研究がある。佐藤氏は実業補習学校に関する規程の制定と改正の切り替わった年を起点として時期区分している。

8 ⁴と同上

9 ⁴と同上

明らかにするために、学事簿冊に綴られた実業補習学校の申請書類²を扱った。

第1章 実業補習学校の推移と時期区分

第1章では『宮城県統計書』より、宮城県の実業補習学校数の推移を把握し、その推移から宮城県の実業補習学校の展開を時期区分した。まず、宮城県の実業補習学校数の展開は次のとおりである。

宮城県において初めて実業補習学校が設置されたのは明治33（1900）年のことである。東北地方のなかでは最も遅く設置された³。この年を境に宮城県では実業補習学校が設立されていく。しかし、明治33年から明治41（1908）年にかけては学校の設置と廃止が繰り返され、学校数は大きく伸びず、横ばいの状態が続いた⁴。明治41年時点では30校の実業補習学校が宮城県内に設立された。

その状態から脱したのは、明治42（1909）年のことである。前年とは異なり、学校数を大きく伸ばした。その数は64校である。その後、明治45（1912）年まで学校を大幅に増やし、明治末期には165校の実業補習学校が宮城県内に設立された。この時期の学校数の増加量は宮城県において実業補習学校が初めて設立されてから、昭和9（1934）年に至るまで最も多かった。よって、この明治42年から明治末期にかけては宮城県における実業補習学校設置のピークであった。

大正2（1913）年以降は明治末期の増加と比較して著しい増加は見られなくなる。しかし、大正6（1917）年を境に再び学校数が大きく増加し始める。大正8（1919）年までその増加傾向がみられる。この時期の増加量は明治末期の増加量には及ばないが、この時期はもう1つの宮城県における実業補習学校増加のピークであったといつてよい。大正9（1920）年以降、実業補習学校数が大幅に減少し、その傾向は大正11（1922）年までみられる。大正12（1923）年から大正15（1926）年にかけては実業補習学校数が増加するものの、2回あったピーク期ほどではない。

昭和期になると、かつての増加傾向はほとんどみられなくなる。表9をみても明らかのように昭和2（1927）年から昭和9（1934）年にかけては実業補習学校数の増加と減少を繰り返し、ほぼ横ばいとなる。そして昭和10（1935）年に実業補習学校は青年訓練所と合併をし、青年学校となった⁵。青年学校になった年から『宮城県統計書』には実業補習学校関連の統計は一切みられなくなる⁶。以上が宮城県における実業補習学校の展開過程である。この実業補習学校の展開過程を時期区分していく。

実業補習学校の展開過程は3つの時期に区分できる。これまでの研究においても実業補習学校の時

2 宮城県の実業補習学校関連の資料は宮城県が整理保存をしていた「宮城県庁文書」の1つである。現在は宮城県図書館、宮城県公文書館に移管され、実業補習学校関連の資料はすべて宮城県公文書館に所蔵されている。移管後「県庁文書」と呼ばれた。「県庁文書」は地域史研究の基礎資料となっており、本研究で参考にした高橋氏もまた、実業補習学校の申請書類を利用している。（千葉千恵子「県庁文書」（1980）宮城県図書館杜の会『杜 第二号』）

3 高橋満（1984）「明治末―大正期における農村青年教育の構造と機能―主に農民支配とのかかわりで―」『長野大学紀要 6（2）』p19-38 長野大学（p21）

4 宮城県の実業補習学校数の推移の説明に関しては、以下の資料を参照する。

『宮城県統計書（学事編）』（明治34年から昭和9年まで）

5 佐藤守（1984）「第2章：実業補習学校の成立と展開―わが国実業教育における位置と役割―」豊田俊雄『わが国産業化と実業教育』（p21-93）東京大学出版会 p91

6 宮城県総務部統計課『昭和十年 宮城県統計書 第三編（教育）』（1937年3月刊行）

みやぎ資料室所蔵

明治後半期から大正期における実業補習学校の整備主体の変容

— 宮城県を事例に —

下山 千晴

はじめに

実業補習学校は義務教育を修了した勤労青少年に対して、普通教育の補習と職業に関する知識技能を授けた教育機関である¹。その修業年限は2年から3年とされ、尋常小学校を卒業した者、もしくは、卒業しなくても学齢を過ぎた者が学校に通っていたとされる。教授した科目はおもに、修身、国語(読み書き)、算術(計算)、実業科目である。この実業科目は学校によっては内容が異なり、農業を教授する学校もあれば、工業を教授する学校もあるなど、町村ごとの産業状況に応じて展開されていた。なお、女子ための実業補習学校も存在しており、そこでは裁縫や家事などの実業科目が行われていた。

また授業に関しては休日や夜間、農閑期など、時期を限定して行われた。ただし、通年教授を行っていたとされる学校も存在していたため、実業補習学校は学校の種類や地域によって差があることをここで言及する。

従来の実業補習学校の研究は、実業補習学校の実態に焦点を当てた研究が多かった。そのため、先に示した実業補習学校の基本事項は明らかにされてきたが、地域ごとの実業補習学校の整備過程や実業補習学校の浸透過程にはまだまだ検討の余地があるといえる。また、これまでの研究において実業補習学校の評価は二分しており、地域社会と勤労青少年それぞれの教育要求を満たした学校という見方と国民を統合するための学校という見方である。しかし、この町村運営から国家による統一的な整備に至る過程は常に町村か国家のどちらかの視点でしか語られていない。実業補習学校の法律や制度の変遷に対して、それを設置する町村がいかなる対応をしたのか、整備主体がどのように変化したのかについてはまだまだ検討の余地がある。

本研究では、実業補習学校の整備過程や地域ごとの設立状況がいかなるものであったかを宮城県の実業補習学校を事例に論じていく。ここでいう整備過程は実業補習学校の設立や廃止、学則などの改正に関する申請手続きのことを指す。この手続きが実業補習学校の歴史的展開のなかでいかなる変化を及ぼしたのかを検討・考察することが本研究の課題である。なお、実業補習学校の整備主体の変化を

1 実業補習学校の説明については以下の論文を参照する。

佐藤守 (1984) 「第2章：実業補習学校成立と展開—わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄 (p21-93) 東京大学出版会

木下路子 (2009) 「実業補習学校における実業教育—日露戦後期の神奈川県高座郡を対象として—」『史勸 (160)』早稲田大学史学会 (p1-17)

山岸治男 (1977) 「明治後期農村における実業補習学校—宮城県の場合—」『教育社会学研究 32 (0)』(p139-149) 日本教育社会学会

Jackson, Wilfred, Clyde Geronimi and Hamilton Luske. *Cinderella*. Walt Disney Productions, 1950.
Disney +.

- Mulvey, Laure. "Visual Pleasure and Narrative Cinema." *Feminist Film Theory*, edited by Sue Thornham, Edinburgh University Press, 1999, pp. 58-69.
- Lee, Myong-ok. *Famu Fataru: Yōfu Den* [Femme Fatale]. Translated by Yōko Higuchi, Sakuhin-Sha, 2008.
- Osoliová, V. "Framing the Absence and Presence of Rebecca: Female Subjectivity and Voyeurism on and Off-Screen in Alfred Hitchcock's Rebecca." *AMERICANA E-Journal of American Studies in Hungary*, vol. 17, no. 1, Dec. 2021. Web. Accessed January 4, 2025.
- Rivière, Joan. "Womanliness as a masquerade." *International Journal of Psycho-Analysis*, vol 9, 1929, pp. 303-313. Web. Accessed December 26, 2024.
- Shinjo, Daich. "Staircases in Classical Hollywood Musical Film: A Focus on Vincent Minnelli's Films." The 13th Annual Meeting of The Japan Society for Cinema Studies, Senshu University on June 29, 2024, Conference Presentation.
- Takeda, Mihoko. *Atarashii Onna no Keihu: Jendā no Gensetsu to Hyoushou* ["Genealogy of the 'New Woman': Gender Discourse and Representation]. Sairyu-Sha, 2003.
- Terunuma, Kaoru. "Purinsesu ni 'Tomo' wa Iru no? - Dizunii Purinsesu no Yukue Bangaihen" [Does the Princess Have/Need a Friend? Tracing the Histories of the Disney Princesses, the Spinoff]. *Gyosei Syakai Ronshu*, vol. 34, no. 4, 2023, pp. 21-37. Web. Accessed January 12, 2025.
- Tsukada, Yukimitsu. "Hanten suru Shiza: Hitchcock no 'Rebecca' ni okeru Janru to Jendā (Jendā to Hyoushou)" [Subversive/Reversal Gaze: Genre and Gender in Hitchcock's Rebecca (Gender and Representation)]. *Rikkyo American Studies*, vol. 24, 2002, pp. 183-224. Web. Accessed 25 July 2024.
- Ohashi, Yoichi. "Nizyuka suru Yokubo, arui wa Kuia Senryaku: Hitchkokoku 'Rebekka' ni okeru "[Double Desire, or Queer Strategy: Hitchcock's Rebecca]. *Kuia Hihyo*, edited by Kayoko Fujimori and Seori Shobo, 2004, pp. 247-289.
- Uchida, Tatsuru. *Eiga no Kouzou Bunseki: Hariuddo Eiga de Manabu Gendai Shisō* [Modern Thoughts Learned from Hollywood Movies: Structural Analysis of Movies]. Shōbunsha, 2003.
- Wakakuwa, Midori. *Ohimesama to jendā* [Princess and Gender]. Chikuma Shinsho, 2003.
- Warner, Marina. *The story of the 19th century: from the Otogibanashi to the Katariite bank*. Translated by Mami Adachi, Kawade Shobō Shinsha, 2004.
- Yi, Sookyung, and Satomi Takahashi. "Dizunii Eiga no Purinsesu Monogatari ni Kansuru Kousatsu" [Thinking about the Princess Movies of Disney]. *Academic Information Committee, Tokyo Gakuji University I*, vol. 62, 2011, pp. 87-122. Web. Accessed 23 June 2024.

• Films

- Branagh, Kenneth. *Cinderella*. Walt Disney Studios Motion Pictures, 2015. *Disney +*.
- Hitchcock, Alfred. *Rebecca*. United Artists, 1940. Amazon Prime.

not limited to marriage have appeared, and sexuality that is not bound by the existing dualistic gender perspective has spread. The heterosexual themes that are the focus of this paper, “Cinderella Story” and “Stepmother and Daughter” stories, seem to be issues that Disney films are still addressing today. Disney is about to release a live-action remake of *Snow White and the Seven Dwarfs*, the prime example of a “stepmother and daughter” fairy tale. The presence and threat of the witch or stepmother figure who ensnares young girls remains potent in contemporary society. However, the path of empathy and connection with “deviant” women like them has not been cut off. In recent years, there has been a tendency to retell the story from a different perspective such as *Maleficent*. With a character who was a witch in the original animated version as the main protagonist, the film ultimately shows solidarity and independence among women. The stepmother and witch, necessary in the Cinderella story, are depicted as deviations from heterosexual norms, and there is not a division between them and their daughters, but rather an intimate relationship intertwined with desire. It may be the witch and stepmother, rather than the ideal prince, who breaks the curse of heterosexuality placed on the princess.

Works Cited and Consulted

- Bell, Elizabeth, et al., editors. *From Mouse to Mermaid: The Politics of Film, Gender, and Culture*. Indiana University Press, 1995.
- Cashdan, Sheldon. *The Witch Must Die: The Hidden Meaning of Fairy Tales*. Basic Books, 1999.
- Doane, Mary Ann. *The Desire to Desire: The Woman's Film of the 1940s*. Indiana University Press, 1987.
- ... “Film and the Masquerade: Theorising the Female Spectator.” *Feminist Film Theory: A Reader*, edited by Sue Thornham, New York University Press, 1999, pp. 131-144.
- Dowling, Colette. *The Cinderella Complex: Women's Hidden Fear of Independence*. New York: Summit Books, 1981.
- Freud, Sigmund. *New Introductory Lectures on Psycho-analysis, and Other Works*. London: Hogarth Press: Institute of Psycho-Analysis, 1960.
- Hirono, Yumiko. *Shisen wa Hito wo Korosuka: Shosetsuron 11-kō* [Can Eye be a Killer?]. Minerva Shobō, 2008.
- Iwamoto, Kenji, et al., editors. *Shin Eiga Riron Shusei 1: Rekishi, Jinsha, Jendā* [A New Anthology of Film Theories, vol 1: History, Race, and Gender]. Film Art-Sha, 1998.
- Kanno, Yuuka, editor. *Kuia Sinema Sutadiizu* [Queer Cinema Studies]. Koyo Shobō, 2021.
- ... *Kuia Sinema* [Queer Cinema]. Film Art - Sha, 2023.
- Kato, Mikirou. “Memai to Rakka Hitchikokku Eiga Rebekka no Tekusuto Bunseki Rebekka to Deyu Moria” [Vertigo and Fall: A Textual Analysis of Hitchcock's Rebecca]. *The Rising Generation*, vol. 154, no. 2, Kenkyu-Sha, 2008, pp. 77-83.

departing the mansion with the prince. This line shows Cinderella's virtue and practices the teachings that Cinderella's late mother taught her daughter to have courage and be kind. The relationship between stepmother and daughter will not end in division but will be allowed to connect through empathy and forgiveness. Everyone was once a young girl, dreaming and happy. One day we grow old and become disappointed with ourselves and our lives. The cycle of life is a universal experience, but in a heteronormative society, women in particular are subjected to a system where youth and beauty are idealized as "good," while old age and ugliness are associated with "evil/bad." Cinderella's forgiveness is not a break with understanding and solidarity among women, but an act of defiance against the divisions and prohibitions fueled by heterosexual society. This bonding represents a new path forward as a challenge to heterosexual norms.

In *Rebecca*, just as Fontaine returns to Manderley many times in her dreams, the connection between Rebecca and Fontaine is never severed. Ohashi concludes that the film *Rebecca*, which begins with a return to Manderley in a dream, is a film of time that goes beyond the linear time dominated by heterosexuality, a time of rebellion and return, a time of repetition, a ghost time that knows no end (277). The story, which seems to end with heterosexual romance, is constantly reminded of the possibility and threat of homosexuality by the intense "deviant" presence of Rebecca. Rebecca repaints Fontaine, who was a blank slate without a name at the beginning of the story and continues to possess her. Fontaine continues to connect spiritually with Rebecca even beyond the end of the story. This enduring homosexual-based bond and desire to stay connected between two women captured by their stepmother and daughter is the singularity and lesbianism of the work *Rebecca*.

The mother's dress, which plays a significant role in both works, is a device for subverting heterosexuality, but at the same time it is an element that shows the connection between women and lesbianism. Through the dresses, the daughters wear and feel the presence of their mothers and imitate them. The wearing of femininity is a performance, but it also represents a material and physical connection between women. For it is the dress of an absent mother, the past and the present, the living and the dead, non-linear time and space, which intersect and are connected to each other. Just as for Maxim and others, the dressed Fontaine overlaps with Rebecca's image, the dress blurs the boundary between the two women, daughter and stepmother. Just as Lady Tremaine was once a girl like Cinderella but is also an alter ego that Cinderella could have become, the daughters in both works who wear their mother's dresses show that the relationship between stepmother and daughter is like two sides of the same coin. The dress scene, which is depicted as an object of eeriness, disgust, and jealousy, is an expression of fear and homophobia toward witch-like women. In the connection between mother and daughter through the dress, there is lesbianism that shakes heterosexual norms.

Although, heteronormativity is still deeply rooted in society today, compared to the era when "woman's films" were made, women's participation in society has progressed, diverse life choices

is persistently repeated and projected as images and stories. That “deviation” is the lesbianism in the relationship between the stepmother and her daughter.

Thus, it became clear that homosexual desires and relationships lie hidden in the conflicts between women over men in traditional heterosexual films, and in the relationships between evil witches/stepmothers and daughters in fairy tales. The heroines are able to recognize and acquire their own desires and subjectivity through their relationships with witches/ stepmothers. Evil witches/stepmothers were once innocent, hopeful, dreaming young girls, just like the heroines. From watching fairy tales and children’s movies, women learn at a young age that if they deviate from the beauty and obedience that men desire, they will be punished just like the witches in the stories. Behind the desire to be younger and more beautiful like the princesses in fairy tales is the obsession to not to become a “deviant” woman like the witch or stepmother. The more we strive to obtain the beauty and kindness of Snow White, the more we see in the mirror the witch who envies the youth and beauty of others and is afraid of growing old and ugly herself. In this mirror image, like two sides of a coin, the stepmother-daughter relationship is not a conventional confrontation or division, but a “bond based on desire.”

As mentioned above, in *Cinderella*, while the possibility of homosexuality is suggested, as evidenced by the very use of ‘Cinderella’ in the term “Cinderella Story,” the narrative concludes with a solid victory of heterosexuality. For an orthodox “Cinderella Story,” this may be a narrative and chronological limitation. However, the representation of the stepmother-daughter relationship, which was the seed of lesbianism in the film, has changed over the years. In the live-action remake of *Cinderella* in 2015, the stepmother is even more jealous of Cinderella than in the animated version, seeing Cinderella as the reflection of her late mother, but she also seems to regret her past behavior toward Cinderella. The following monologue of stepmother reveals that she was once a girl like Cinderella, highlighting the difficulties and complexities of a woman’s life.

Once upon a time, there was a beautiful young girl, who married for love. And she had two loving daughters. All was well...but, one day, her husband, the light of her life, died. The next time, she married for the sake of her daughters. But that man, too, was taken from her. And she was doomed to look every day upon his beloved child. She had hoped to marry off one of the beautiful, stupid daughters to the prince. But his head was turned by a girl with glass slippers. And so...I lived unhappily ever after.

It is a promise of fairy tales and Disney princess movies that the story after the princess marries the ideal prince is never told, but this line from the stepmother clearly shows the harsh reality that a woman’s life does not end happily with her marriage to a man. The stepmother’s abuse of Cinderella is indefensible, but this monologue creates room for Cinderella and the audience to empathize with the stepmother. With her true identity proofed by wearing the glass slipper, Cinderella says “I forgive you” to her stepmother, who is standing alone on the stairs, just before

femininity. It is evident that the dress functions as both an adornment and a garment that women remove and replace in order to express their femininity. The duality of the dress as a “masquerade,” a device of potential resistance to patriarchy, is a representational and visual device for subverting heterosexual norms.

Conclusion

This study focuses on the relationship between stepmother and daughter in *Rebecca* and *Cinderella*, which are woman’s films with Cinderella story plots, to reveal homosexual desire and subversion of heterosexual norms hidden beneath the superficial heterosexual story, rather than the traditional conflict between women.

The 1940s, when many “woman’s films” were produced, was a time when existing gender perspectives were shaken by the war. Women, who had been previously confined to the domestic sphere, became the main labor force and consumers in society to “fill” the shortage of men serving in the military. Eventually, after the end of the war, they were expected to return to the domestic roles as angels of the home to comfort the men who returned from the war. The “woman’s film” genre portrayed women taking the lead role in the story. They took action because of their romantic relationships with men or family problems, but once these problems were resolved, they end up settling into domestic life as wives and mothers. The “woman’s film” symbolizes the rapidly changing role of women at the time and reflects the social expectations of women in a society that was once progressive and regressive. “The woman’s films as a genre, together with a massive extracinematic discursive apparatus, ensure that what the woman is sold is a certain image of femininity” (Doane 1987, 30).

However, because of this characteristic of the “woman’s films,” the representation of “deviant” women and homosexuality, which are excluded in an attempt to influence heterosexuality, seems particularly important. Conflicts between women over men, as represented by the relationship between stepmothers and daughters, have been used simply as a spice to enhance the romance between men and women, overlooking the desires and complex relationships between women that exist within them. In “woman’s films” that aim to “educate” women by imposing an image of femininity and to reinforce heterosexual ideology, stepmother/witch women such as Rebecca and Lady Tremaine are demonized and eliminated in order to secure the heroine’s heterosexuality. In particular, in the case of *Cinderella*, as the name “Cinderella Story” suggests, the story ends with the fulfillment of heterosexual romance and its praise. There is no mention of what happens to Lady Tremaine after Cinderella and the Prince married, and she is eliminated once their romance is established. She cannot leave her shadow behind in the narrative like Rebecca, who appears many times in dreams even after the story ends. However, there are certainly seeds of homosexuality that aim to overturn heterosexuality within the story. The fact that it is “deviant” figures like these that put heterosexuality in danger

once worn by Rebecca, who was sexually prominent and feared and rejected by Maxim because of her sexual excess. Rebecca, as an idealized figure of the perfect wife, and Fontaine's masquerade, adorned with the dress of Rebecca - who possessed an excessive femininity deemed deviant by heterosexual society - demonstrates that this "masquerade" is both an ideal for patriarchy and simultaneously a threat, as Maxim revealed his anger and fear. Fontaine, whose identity was tenuous and unstable at the beginning of the story, through this scene as a turning point in the narrative, transforms into a woman with a sense of subjectivity while settling into her position as Maxim's wife. There is a scene in which Maxim is questioned about Rebecca's murder during the trial, and Fontaine quickly faints and saves him in a predicament. Fontaine becomes Mrs. de Winter, and more specifically, a motherly figure who protects Maxim and it becomes evident that her performance is an acquisition of subjectivity. Before her death, Rebecca had declared that she would perform the role of a perfect wife that everyone would admire, even though she was in a relationship with another man. Just as Rebecca was able to hide her "deviant" subjectivity behind the mask of a wife and play out, Fontaine's wearing of the symbol of femininity as Maxim's wife and mother figure is connected to her acquisition of her own subjectivity.

In *Cinderella*, the excessive femininity represented by Cinderella's dress is torn apart by her stepmother and stepsisters. The tearing of the dress, which serves as a heterosexual norm of excessive femininity, is an occasion for Cinderella to be "restrained," but also, as mentioned above, an opportunity to obtain a pure white dress - a device for acquiring her subjectivity.

As we have seen, in woman's films, "masquerade" shows women not merely as passive objects, but as individuals actively constructing their own identity and resisting the patriarchal gaze. Female audiences consume the heroine, who acquires subjectivity through "masquerade" and deceives patriarchy, as if they were window shopping. As Doane says, the frame of the film is like a "display window." Women go to the cinema to see the heroine on the silver screen and buy what the heroine is wearing" (Tsukada, 187). The "masquerade" encourages female audiences to wear dresses or femininity as a possibility of subversion and allows them to have a simulated experience on the screen. While depicting the heroines who dress up for men as a favorable thing that promotes consumption, the female audience is indirectly presented with an opportunity to acquire subjectivity that deceives the male heterosexual society. This is exactly the challenge and possibility of the subverting heterosexual society that resides within.

Thus, in woman's films made for female consumers, "masquerade" at first glance appears to promote consumption and window shopping, and to enforce the heteronormative societal norm of a passive female image as a spectacle. However, at the same time, "masquerade" was also a "device" for overthrowing heterosexual society by acquiring female subjectivity. A subversive device that shakes heterosexual society from within lurks as "consumption" closely related to woman's films. A dress is a typical object of female longing and an item that symbolizes

Cinderella on the stairs and her stepmother and stepsisters watching her, never showing them in the same frame. Even as Cinderella descends the stairs, it continues to function as a stage. When the stepmother and stepsisters are in the same frame as Cinderella, the staircase is no longer staged, and Cinderella is forced to stop performing her femininity. However, later, this mother's dress which Cinderella wears, as a symbol of femininity becomes the foundation of the pure white dress that allows Cinderella to successfully enter the patriarchy in a sense. The dresses bestowed upon Cinderella by the Fairy Godmother are a magical transformation of the dress torn by her stepmother and stepsisters. When the magic wears off, it reverts from the pure white gown back to the torn dress. Moreover, the magical effect ensures that no one can recognize Cinderella's identity. This aligns with the general purpose of masquerade balls, where participants conceal their identities for enjoyment, and corresponds with Doane's concept of 'masquerade' where femininity is done as a weapon. While the pure white dress represents the ideal female image desired by patriarchal society, it simultaneously preserves Cinderella's hidden subjectivity symbolized by her mother's dress underneath. In essence, she is performing a double masquerade.

In *Rebecca*, Fontaine's intention of the performance is easier to understand. Just before Fontaine comes down the stairs to show off her dress to Maxim and the others, she looks at the portrait hanging on the wall that was the basis for her costume and poses by stretching her back and right arm just like the portrait. Maintaining that posture, Fontaine comes down the stairs, clinging to the banister. From these, it is clear that Fontaine consciously manipulates and "performs" her femininity. The camera shows Fontaine's subjective perspective and shots that capture her objectively, and the camera moves along with Fontaine's descent. The camera shows the backs of Maxime and the others from Fontaine's point of view, gradually approaching them. Fontaine and Maxime are not on the same screen on the stairs until Maxime turns around. In this scene, the "distance" between the stage and the audience is maintained as well. Fontaine temporarily becomes the subject of the gaze, and this scene is a visual expression of Fontaine's acquisition of subjectivity.

In these two works, both Rebecca and Cinderella's mother have already died in the story, but they have left a strong impression on Fontaine and the other people of Manderley, as well as on the conflicting Cinderella and Lady Tremaine. The dead women neither age, nor engage in battles physically, and while the living women age, they remain to exist unchanged. The dresses of Rebecca and Cinderella's mother are symbols of mature "women," unlike the young girls who wear them. The women who once wore those dresses continue to exist there, without ageing or changing, even after death. To the girl, her (symbolic) mother's dress, which appears as "excessive" femininity, is suitable for her to wear as a "masquerade." Doane stated that the excessive femininity that she wears through the masquerade corresponds to the femme fatale, who is inevitably seen by men as evil incarnate (139, 1999). The dress that Fontaine wears was

Femininity functions as a removable mask, just like dresses and accessories. This “masquerade” is a strategic performance and a “device” for women to resist patriarchy and gain subjectivity. Doane states the duality of the masquerade as follows:

The very fact that we can speak of a woman ‘using’ her sex or ‘using’ her body for particular gains is highly significant - it is not that a man cannot use his body in this way but that he doesn’t have to. The masquerade doubles representation; it is constituted by a hyperonization of the accoutrements of femininity. (Doane 1999, 138-39)

Dresses worn for heterosexual society and displayed as products like in a shop window are, on the surface, intended to represent the femininity of heterosexual society. However, the “masquerade” of wearing these dresses also serves as a way for women to gain subjectivity by deceiving patriarchy by manipulating and acting out their femininity while wearing the mask of femininity demanded by patriarchy. In heterosexual societies, women have traditionally been regarded as passive and compelled to embody this passive role. However, by “masquerading” in the easily recognizable femininity of dress, women play the role of spectacle and passive participants in heterosexual society. In reality, however, they are masterfully manipulating their femininity to obtain subjectivity. This clearly shows the subversion of the heterosexual system and society.

In both works, Fontaine and Cinderella choose to wear the dresses of their late mothers (or the person who represents her) as their “masquerade” to gain subjectivity, and they show them off on the “staircase,” the most prominent location where spectacle takes place. The “staircase” becomes the stage, and Fontaine and Cinderella’s dressing up for men = “masquerade” becomes a performance of femininity.

In the case of *Cinderella*, the intention of the performance can be seen when Cinderella shows off her dress to her stepmothers. As the stepmother and stepsisters are about to leave the mansion because Cinderella cannot prepare her dress and will not be able to go to the ball, they unexpectedly hear Cinderella calling to them from the top of the stairs, without Cinderella being seen on screen. One by one, from the back of the frame to the front, the stepmother and stepsisters turn, deliberately directing the audience’s gaze to the following shot of the staircase. The screen is fixed on their point of view at the bottom of the stairs, and Cinderella is shown descending the stairs. Cinderella lifts the hem of her dress, spins around, revealing her dress to them. Her femininity is emphasized by Cinderella’s transition from a sober-colored rag to a gaudy pink dress with a prominent ribbon decoration. By having Cinderella descend the stairs in a dress that symbolizes femininity, her dress appearance (“masquerade”) is presented more dramatically. Cinderella shows off her dress on the landing after descending the stairs, but from the above-mentioned perspective and on-screen direction, the scene where she comes down the stairs in her dress seems to be intended to charm the audience with her dress. Until the scene where the stepmother and stepsisters tear Cinderella’s dress, a distance is maintained between

1940s, the consumer culture was centered around women, and movie theaters also became feminized. Doane describes the interaction between woman's films and female consumers as follows:

If the film frame is a kind of display window and spectatorship consequently a form of window-shopping, the intimate association of looking and buying does indeed suggest that the prototype of the spectator-consumer is female" (27, 1987).

Women who experienced the fulfillment of their material desires in the "consumer culture" of the 1920s could be said to have enjoyed window shopping by watching movies, as an escape from the restrictions and suppression of material desires brought about by the war. For female spectators, seeing the heroines in the gorgeous dresses worn for men, and their beauty and femininity emphasized by putting them on the stairs, was window shopping that projected their desires. Fontaine and Cinderella, who dress up like clothes displayed in a showcase, emphasize their femininity as a spectacle. This is due to the effect of the "staircase," where women are traditionally displayed, and "the female spectators are invited to her own commodification" (Doane 1987, 24). Fontaine's dress is open at the shoulders, has a wide hem that drags on the floor, and a tight waist that emphasizes her slenderness. It is decorated with large frills and delicate embroidery. In contrast to sober Fontaine, it gives a glamorous and enchanting impression. The dress worn by Cinderella is pink-based and decorated with lace and ribbons. Fontaine's dress is elegant and sophisticated, while Cinderella's dress is designed to be cute and simply admired by girls. Both dresses exaggerate and symbolize femininity not only for male spectators but also for female spectators. In *Cinderella*, after her mother's dress is torn apart by her stepmother and stepsisters, the pure white dress that the Fairy Godmother magically gives to Cinderella is reminiscent of a wedding dress. In the 1940s, during World War II, women entered the workforce. However, in the 1950s after the war, women were expected to return to their families or to start new families through marriage and having children. This means that women expected to become the angel of the home. Cinderella's white dress and remarkable glass slippers, which won heart of the prince, are seen as symbols that respond to the idealization of marriage and family building by female audiences and their social expectations. The masquerade of wearing dresses in both films can be said to play the role of heterosexual society and woman's films, and to reinforce these institutions. Because the setting is the staircase, the heroines in the dresses become a spectacle and are displayed as products that heterosexual society encourage to women to consume. However, when this "femininity" emphasized in response to heterosexual society is a "masquerade," the dress takes on a different meaning.

5. "Masquerade" as a Subversion of Heterosexuality

The emphasis on femininity through the stairs and dresses of Fontaine and Cinderella is, on the one hand, "acting." While the masquerade allows women to flaunt their femininity, it also distances itself from femininity, allowing women to manipulate their own image of femininity.

subjectivity that is considered masculine in heteronormative society and classical Hollywood cinema, and conceals her possession of it, so the female subject on the screen through “masquerading” assumes a subjectivity that performs and manipulates her own feminine image while becoming a spectacle. John Riviere, on whom Doane relies, describes masquerade and femininity as follow:

Womanliness therefore could be assumed and worn as a mask, both, to hide the possession of masculinity and to avert the reprisals expected if she was found to possess it [...] The reader may now ask how I define womanliness or where I draw the line between genuine womanliness and the ‘masquerade’. My suggestion is not, however, that there is any such difference (306)

As Mulvey explains about the image of woman, “She holds the look, and plays to and signifies male desire” (63), femininity is staged and a kind of fiction. While women accept the patriarchal system of passive spectacles, through disguise, women can conceal and acquire subjectivity that is considered “masculine” in heterosexual society. Therefore, the “staircase,” which is a stage that focuses the audience’s gaze on the female image and makes it a spectacle, can be a visual device that indirectly reinforces the performance of the female image of “masquerade.”

3. The Duality of “Masquerade” Through Dress

By interpreting the scene where Fontaine’s Cinderella wears her late mother figure’s dress on the staircase as a form of ‘masquerade’ as explained by Doane, we can see different meaning in this staircase and dress scene beyond merely objectifying the heroines. Two meanings emerge from the “masquerade” in which women dress up in the staircase, a place of spectacle. One is the “masquerade” of wearing dress as part of woman’s films and heterosexual society. The other is the “masquerade” of dressing up as a means of resistance and subversion against patriarchy and heterosexual society by acquiring subjectivity.¹

4. “Masquerade” as Heterosexual Society

First, Fontaine and Cinderella’s dressing up is a “masquerade” for heterosexual society. The dresses they wear in heterosexual society are a device to display women as objects of the male gaze and meet social expectations. In particular, woman’s films from the 1940s that Doane focuses on have a background of consumer culture that developed around women at that time. There was a war in the 1940s and the decade before and after, and filmmakers intended that women would be the main movie audience while men were away on military service. While war and propaganda films aimed at male audience were being produced, many woman’s films were being produced that dealt with “feminine” issues such as family life, marriage, pregnancy. Durig

¹ Daichi Shinjo points out the same thing in his analysis of staircases and masquerades in musical films. This paper applies these concepts in the analysis of the “stepmother-daughter” relationship in *Rebecca* and *Cinderella*. Shinjo’s study was presented at the 13th Annual Meeting of The Japan Society for Cinema Studies held at Senshu University on June 29, 2024.

mother's dress is torn apart by her stepmother and stepsisters, but it later leads to the film's most significant moment, when Cinderella is given a beautiful dress by the Fairy Godmother. This pivotal event marks an important turning point for Cinderella. Additionally, it is also on these stairs that Cinderella descends in the climax of the story, after escaping from the attic and holding off the Grand Duke in order to put on her glass slipper (furthermore, although not in the mansion, the renowned scene where Cinderella drops her glass slipper is also set on the "stairs" of the palace).

Both films have a similar scene where the heroines come downstairs wearing the dress of their late mother or a figure symbolizing her, Rebecca. Fontaine and Cinderella prepare and wear their dresses for the ball. The stairs become a stage on which their beauty and femininity in their dresses are displayed. Both Fontaine and Cinderella dress up to be the object of the gaze and desire of Maxime and the Prince, a male audience. This spectacle is presented on the "stairs," a traditional and ideal location of displaying women.

The spectacle of the female image on the stairs is related to "distance." The stairs set a "distance" between the woman in the dress and those who see her, making it possible to display the female image. Mulvey states that the pleasure male spectators get from the act of gazing creates "a separation of the erotic identity of the subject from the object on the screen" (62). Because women's physical differences (i.e., not possessing a penis) constantly cause castration anxiety for men, it is necessary to create "distance" by fetishizing the female image. This "distance" allows men to "safely" possess the female image. The "stairs" creates distance between the bearer of the gaze on the screen and the male spectator, thereby enabling the display of women within the screen. On the other hand, Doane says that unlike male spectators, female spectators are unable to create an appropriate distance from the image and over-identifies with it because her own "that body which is so close continually reminds her of the castration which cannot be 'fetishized away'" (137, 1999). To achieve this "distance," Doane explains the "masquerade."

2. Mary Ann Doane's Masquerade Theory

In "Film and Masquerade," Doane writes that the "masquerade" performed by female spectators is a way for women to distance themselves from femininity while adopting a masculine perspective. Because female spectators' images of women in films are similar to their own images of castrated and spectacted bodies, they tend to identify excessively with them, and it is difficult for them to distance themselves from the female image. However, Doane argues that female spectators can distance themselves from the female image by "masquerading," that is, by disguising their femininity, which can be put on and taken off like a mask, making the female image manipulable, productive, and readable by women themselves. Doane also considers the "masquerade" in which women use femininity as a weapon as an oppositional aspect to patriarchy (138-142, 1999). Just as the female spectator through "masquerading" assumes a

to prevent homosexuality, and her desire to restrain her symbolic mother is directed towards both Cinderella and her mother. Therefore, she tries to prevent Cinderella from being sent to the prince, who is a symbol of patriarchy, by confining and restraining her. In conclusion, Lady Tremaine's jealousy and "restraint" of Cinderella are not the typical behavior of witches or stepmothers in fairy tales or conflict between women, but are acts to perpetuate the mother-child union with Cinderella, who is a copy of the first wife, Cinderella's mother, who is a symbolic mother to Lady Tremaine, and can be interpreted as a manifestation of repressed homosexual desire.

III. Dresses and Staircases in *Rebecca* and *Cinderella*

So far, this analysis has examined the stepmother-daughter relationship in *Rebecca* and *Cinderella*. In addition to the fact that a young, poor woman's social ascension by marrying a wealthy man and the confrontation between her stepmother and herself, is characteristic of both films, they each have a scene in which we can find another important meaning hidden behind the "woman's film" that reinforces heterosexual norms. It is the scene where the daughters - Fontaine and Cinderella - come down the stairs wearing the dress that their late (symbolic) mother once wore. The purpose of this analysis is to clarify how the scene of the staircase and the dresses function as a visual device that represents the overthrow of heterosexual society in the two woman's films.

1. Symbolism of the Staircase

In both works, the staircase functions as a place that attracts the audience and an important scene in the story and appears repeatedly in the films. Doane states that stairs in cinematic narratives have traditionally served as a crucial site for the representation of women.

An icon of crucial and repetitive insistence in the classical representation of the cinema, the staircase is traditionally the locus of secularization of the woman. It is *on the stairway* that she is displayed as spectacle for the male gaze (136, 1987).

The stairs focus the audience's gaze on the female image, functioning as a stage prop for women to display and direct their beauty and splendor. Similarly, in *Rebecca* and *Cinderella*, stairs appear as an impressive place to make a spectacle of women.

In *Rebecca*, when Fontaine is lost in Manderley, a large staircase is shown, as if emphasizing the vastness and grandeur of the house and Fontaine's small presence. It is also on this staircase that Fontaine walks to present her dress for the masquerade ball to her husband. This masquerade ball night serves as a crucial turning point in the story, where the truth about Rebecca, which had remained a mystery until then, is finally revealed. It becomes a pivotal scene that dramatically shifts the relationships between characters and propels the plot forward.

In *Cinderella*, Cinderella sings while cleaning at the bottom of the stairs and comes down this staircase in her dress for the ball, just like Fontaine. This is a shocking scene in which Cinderella's

existence of homosexual desire that tries to prevent the fulfillment of heterosexual love.

(4) Lady Tremaine's Bedroom

At the beginning of the film, Cinderella enters Lady Tremaine's bedroom for a sermon after being told off by her stepsisters. Lady Tremaine's bedroom is dimly lit, and the entire room is shrouded in shadow, covered with heavy curtains. As Cinderella stands with her back to the large door, the window lattice casts a shadow over her, as if restraining her. Tsukada states that in *Rebecca*, when the heroine Fontaine tries to touch upon Rebecca's past, the camera frame showing the screen and the corridor arch, door, window frame, portrait, etc. that completely encase Fontaine's body become a second frame, doubly framing her. He analyzes Fontaine's situation as being captured and deprived of her freedom by the mansion that has turned into Rebecca (192-197). In Lady Tremaine's bedroom in *Cinderella*, Cinderella, in Lady Tremaine's bedroom, with the large door behind her and covered by the shadows of window lattice, is framed in the same way as Fontaine, and can be said to be restrained by her stepmother. For Cinderella, the window is a boundary between her and the outside world, and a place that indicates her being restrained by her stepmother. The way the shadow of the window lattice falls over Cinderella's body visually emphasizes that she is as imprisoned as a bird in a cage.

The situation in the bedroom truly shows Lady Tremaine's sexual desire for Cinderella. Lady Tremaine gazes at Cinderella, standing alone, from the bed, which is covered by a canopy in a particularly dark shadow, and her cat eyes shine suspiciously. In this scene, Cinderella is interrupted by Lady Tremaine, and Cinderella is not allowed to speak back. The power relationship between the two is clear. The bedroom is a closed and very private space, and it is exactly where sexual acts take place. In the bedroom, which is closed, dark, and the most common place for sexual desire, Cinderella is alone with her stepmother and oppressed. Lady Tremaine's restraint of Cinderella in the bedroom arouses homosexual desire and eroticism between them.

(5) Devices as Restraint in *Cinderella*

So far, the relationships in *Cinderella* have been organized as a female Oedipal love triangle, and Lady Tremaine's jealousy and restraint towards Cinderella have been analyzed as a possibility of homosexual desire towards Cinderella and her late mother. Lady Tremaine's actions of trying to restrain Cinderella by keeping her away from the patriarchal/masculine space/outside of the castle and confining her to the feminine space/inside of the mansion such as the windows and attic are a manifestation of the maternal restraint that contains homosexuality. Lady Tremaine's actions of preventing her daughter from being sent into heterosexual society by confining Cinderella to a feminine space are a resistance to prevent the reproduction of Oedipal heterosexual society and are also rooted in homosexual desire and possibility. Lady Tremaine's jealousy towards the first wife and Cinderella, which at first glance appears as a conflict between women over a man (her husband/prince), is merely a safety measure or unconscious self-defense

feminine space of family and reproduction and the masculine space of production. It facilitates communication by means of the look between two sexually differentiated spaces. That interface becomes a potential point of violence, violence and intrusion and aggression in paranoid woman's films" (138, 1987). Thus, Cinderella's view of the masculine space of the castle from the boundary of the window simultaneously represents her spectacle (in this scene, Cinderella sings and dances with the animals, and the attic becomes the stage) and also represents the house where Cinderella lives as a feminine space of family and reproduction. The attic where Cinderella lives is at the highest point of the house and has a tower-like appearance. Cinderella's view of the castle from the tall tower window shows that she is a "damsel in distress." The window marks the boundary with the outside, and the castle is a symbol of the outside world, a place that Cinderella is forbidden to approach. And the mansion, which is inside, is a place that forbids Cinderella from going outside and captures her.

(3) The Glass Slipper

Lady Tremaine purposely makes the messenger fall and break the glass slipper so that Cinderella, who has escaped from the attic, cannot put on the slipper. The shape of the slipper represents female genitalia, and the transparency and fragility of glass are symbols of virginity (Wakakuwa, 127). Putting the foot, which symbolizes male genitalia, into the slipper implies sexual nuances (furthermore, the glass slipper will allow Cinderella to marry the prince, and thus the loss of virginity that awaits her afterwards). The fact that Lady Tremaine deliberately breaks the glass slipper to prevent Cinderella from putting on the slipper can be seen as an act of her desire to prevent her from being handed over to the man.

Lady Tremaine quickly realizes that Cinderella is the woman whose glass slipper the prince is looking for and locks her in the attic to avoid meeting the messenger from the castle. This is the only scene in which Lady Tremaine locks the door and imprisons Cinderella, and she is shown clutching the attic key in her pocket, emphasizing her restraint, confinement, and obsession with Cinderella. The marriage between the prince and Cinderella, which can be seen as a symbol of a male-dominated society and heterosexual system, is something that Lady Tremaine, who aims to perpetuate the identification of mother and child, must prevent. While Lady Tremaine stubbornly restrains Cinderella, she encourages her own daughters to attend the ball and wear the glass slipper, actively sending them into a heterosexual society. This means Lady Tremaine restrains Cinderella and keeps her remaining with her to satisfy her own desire. It is evidence of Lady Tremaine's obsessive restraint and strong homosexual desire for both Cinderella and her mother.

For the heterosexual love between Cinderella and the prince to be fulfilled, Cinderella needs to be freed from the homosexual existence and curse of Lady Tremaine, who is the stepmother and witch in the fairy tale. If the glass slipper fitting perfectly is a symbol of the fulfillment of heterosexual love, then Lady Tremaine, who breaks the glass slipper, is nothing more than the

outside world and the inner world of the mansion are clearly separated by the characters (animals). The only people living in Cinderella's mansion are Cinderella, her stepmother, her stepsisters, animals such as mice, cats, and birds, and the Fairy Godmother. Like Cinderella's late father, human men have little connection to the mansion. On the other hand, the castle where the prince lives is clearly a male domain. Apart from the girls invited to the ball, only male characters such as the prince, the king, and Grand Duke appear. Also, animals that are friendly with humans, such as Cinderella and the mice, do not appear in the castle.

Animal companions who can communicate with humans, such as the mice in *Cinderella*, typical of Disney princess films, are their alter egos and feminine beings. Kahoru Terunuma has stated about the animals in Disney princess movies, "Most of the Disney princesses are separated from their families and are lonely, and until they meet their 'true love' - a prince or a man who has an equal status in the story - the 'animals' support them" (22), which shows that the animals are very close to the princesses. The animals are kind-hearted like princesses and support them to make their wishes and happiness come true. They can also be said to be the princesses alter egos (imaginary beings) who play a motherly role in sending women to the men's side.

Like the mice for Cinderella, Lady Tremaine's cat, Lucifer, is an alter ego for her. Just as the mice and other animals are kind and gentle, as if reflecting Cinderella's inner self, Lucifer the cat is mean and cunning, just like his owner Lady Tremaine. Parallel to the conflict between humans, Lucifer and the mice also have a fateful relationship. Lucifer stands in the way of the mice who have stolen the attic key from Lady Tremaine to save Cinderella who is locked in the attic and interferes with them. In other words, Lady Tremaine is even making the cat play a part in imprisoning Cinderella. Or it can be said that Lucifer is an alter-ego to fulfill Lady Tremaine's wish to keep Cinderella locked up and keep her away from the outside world.

While the royal palace is a place made up of men, and more specifically, humans, symbolizing patriarchy, Cinderella's mansion is feminized by the presence of animals. And it is Lady Tremaine who rules this feminized space. The dimly lit spiral staircase leading to Cinderella's attic can be seen as a metaphor for the birth canal, and the attic as a metaphor for the womb. Tremaine's confinement of Cinderella is an attempt to prevent her daughter from being sent to the side of a man and symbolizes her confinement to the femininity/mother's domain/womb.

(2) The Windows

The scene where Cinderella looks out the attic window at the castle and sings, "if you keep on believing the dream that you wish will come true" is one of the most memorable scenes in the movie. However, there is an important meaning hidden in this window.

Doane cites windows as an example of the spectacle of women in domestic spaces in paranoid woman's films: "The window has a special important in terms of the social and symbolic positioning of woman - the window is the interface between the inside and the outside, the

obsession and restraint towards the symbolic mother. In *Cinderella*, Cinderella's father, like the prince, is a mere symbol, and is not given a clear personality by death at the beginning of the story, and his marital relationship with Lady Tremaine is never mentioned. Her interest is directed towards Cinderella rather than her second husband. It is questionable whether this stepmother, who "deviated" from the image of a happy family and a good mother in a heterosexual marriage, loved her husband "normally" in a heterosexual normative sense, or whether she needed his love. Therefore, Cinderella's biological mother, who is her symbolic mother figure, and the stepmother's jealousy and obsession towards her daughter, Cinderella, can be seen as a continuation of the mother-child identification. Ohashi explains mother-child identification, or an attachment to her mother as follows, and touches on the homosexual potential inherent in the heterosexual system that this indicates.

Freud terms this mother-child identification 'attachment to her mother'. In patriarchal ideology, it is desirable for a girl to come to hate her mother, to end the attachment to her mother, and move towards father constrain and then towards the opposite sex. [...] However, Freud also acknowledges that what 'exists in an attachment to her mother' is 'later transferred to the father' (481). In other words, the attachment to her mother does not end, but rather "disguises itself and blends into the attachment to her father. (286)

As Ohashi explains, the girl's attachment to her father (heterosexuality) is merely a transference of her attachment to her mother (homosexuality). Attachment to and hatred of the mother are two sides of the same coins, and the process leading to heterosexual love has homosexual potential lurking behind it. As applied to *Cinderella*, Lady Tremaine continues her attachment to her symbolic mother, Cinderella's mother. Now that her object (Cinderella's mother) is absent due to death, Lady Tremaine projects her onto the daughter of the first wife, Cinderella. The connection between Cinderella and her mother is indicated by the name "Cinderella," which means ash covered. Lady Tremaine's jealousy and her persistent restrains can be interpreted as an act of continuation of the attachment to and identification with the mother, as expression of repressed lesbian desire for Cinderella, and Cinderella's mother.

2. Lady Tremaine's Restrain of Cinderella: Restrain and Lesbianism

As discussed above, the relationship between Lady Tremaine, Cinderella, and her deceased mother in *Cinderella* was organized using the Oedipus complex. It has been noted that Lady Tremaine's restraint of Cinderella is a continuation of an attachment to her mother, Cinderella's late mother, who is a symbolic mother to Lady Tremaine, and thus, the possibility of homosexual desire. This analysis will describe how Lady Tremaine restrains Cinderella in the animation.

(1) The Mansion and the Attic

Lady Tremaine's act of confining Cinderella to the mansion and the attic can be interpreted not as simple abuse, but as an expression of her desire to monopolize Cinderella. In this film, the

seen as homosexual desire toward Cinderella and her mother. Mihoko Takeda, citing Freud theory, states that “‘jealousy’ is nothing more than a manifestation of ‘repressed homosexual impulses and a defense against those impulses.’ In other words, jealousy functions as a safety device to prevent the perversion of homosexual impulses, so it can be said that homosexuality lies behind all heterosexuality” (169). As mentioned in part I on *Rebecca*, in an Oedipal love triangle, a daughter and her mother fall into a relationship of rivals over her father. The “jealousy” that Lady Tremaine directs toward Cinderella and, through Cinderella, her own mother, proves that Lady Tremaine is a symbolic daughter to her predeceased wife, Cinderella’s mother.

The proof that Lady Tremaine sees her mother in Cinderella is in the name “Cinderella” . The name “Cinderella” , which means covered in ashes, was given to her by her stepmother and stepsisters. Marina Warner (2004) points out that it is not just an insulting name for Cinderella, who sleeps in front of the fireplace to keep warm and is covered in ashes, but that the ashes are a mourning for her dead mother and a bond between mother and daughter.

Cinderella is a child in mourning for her mother, as her name tells us; her penitential garb is ash, dirty and low as a donkeyskin or a coat of rags, but more particularly the sign of loss, the symbol of mortality, [...] The lays and romances of mediaeval literature are thronged with bereaved heroes and heroines who will not wash, or cut their hair or their beard, but hug the dirt to keep close to their lost loved one; to be outcast as they are in death, to keep their own personal Lent, wearing sackcloth and ashes. The knowing Basile writers that mourning lasts as short a moment as pain in the funny bone, but Cinderella, in her rags, in her sackcloth and ashes, is a daughter who continues to grieve.” (206-207)

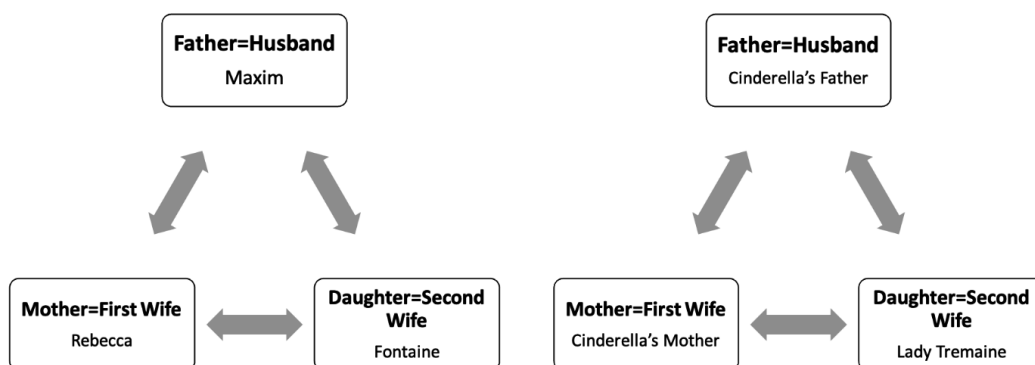
In the animated version, Cinderella’s real name is never revealed, and she is always referred to as Cinderella. However, in the live-action version, the heroine’s real name is set as Ella, and the use of the name Cinderella is clearly differentiated between characters. Only Lady Tremaine and her daughters call her Cinderella, and the mice, who call her Cinderella in the animated version, always call her by her real name, Ella. In the animated version, there is no scene in which the stepsisters name Cinderella, as in the live-action version, but based on the content of the fairy tale, it is assumed that she was named by the stepsisters. The name Cinderella implies a connection between Cinderella and her late mother. The fact that she is named Cinderella and called by her stepmother and stepsisters is, of course, a derogatory term that hurts her and shows the distance that they are not related by blood. However, it can also be seen as evidence that the stepmother and stepsisters unconsciously acknowledge the connection between real mother and daughter. The name Cinderella brings to light and makes the presence of the now deceased real mother conscious.

In a female Oedipal love triangle, Lady Tremaine’s jealousy towards Cinderella’s mother, who is symbolic mother to Lady Tremaine, and her daughter by blood, Cinderella, leads to her

Mihoko Takeda (2003) has seen Rebecca as a kind of Cinderella story, a female version of the Oedipus drama in which the heroine achieves “the archetypal Oedipal wish held by women” by “marrying a surrogate father who rescued her from an oppressive old woman (her mother)” (160).

Love triangle in *Rebecca*

Love triangle in *Cinderella*



(3) Jealousy and an Attachment to Her Mother

After her husband (Cinderella's father) died, Lady Tremaine revealed her cold nature, and the narrator describes her as “cold, cruel and bitterly jealous of Cinderella's charm and beauty.” Lady Tremaine was jealous of Cinderella, even compared to her real daughters, who were plain. However, considering the Oedipal love triangle mentioned above, Lady Tremaine tries to win the love of Cinderella's father, whom she remarried to, and takes a detour to desire by identifying with Cinderella's real mother, who was the object of his desire. For both boys and girls, the first object of sexual love is their mother. While boys can be separated from their mothers by castration anxiety, in the case of girls, there is no powerful opportunity to renounce the mother as there is with castration anxiety. This identification of mother and child contains the “danger” of homosexuality, because it is a state in which the daughter remains with her mother, i.e., her sexual love for her mother continues. For Lady Tremaine, Cinderella's mother, who is the symbolic mother to identify with, is already dead and unknown. Therefore, it would be natural that she would see the image of her preceded wife in Cinderella, the daughter of the first wife. Lady Tremaine's desire to identify with the first wife/ her symbolic mother is directed toward Cinderella. Ohashi explained that in the case of a girl's Oedipus complex, the daughter needs to “demonize the mother” in order to have the opportunity to separate from her mother. Lady Tremaine's jealousy towards Cinderella can be seen as the demonization of the first wife, who is her symbolic mother.

However, her jealousy is not simply a process of entering into heterosexuality but can be

(1) Restrain in *Cinderella*

In the Disney film *Cinderella* (1950), what is remarkable is the restraints placed on Cinderella by her stepmother, Lady Tremaine. After her husband's death, Lady Tremaine treats Cinderella, who is her stepdaughter from her second husband, like a servant, and rules the mansion as the mistress of the house. There are many scenes in the movie where Lady Tremaine restrains Cinderella from leaving the mansion by forcing her to do household chores, not making her go to balls, and locking her in the attic, and even breaking the glass slipper that is the key to her union with the prince.

Thus, in the film, Cinderella is constantly restrained in the mansion by her stepmother, who restricts and prevents her from contacting the outside world and the prince. It is typical in fairy tales for a princess to be held captive by a mean stepmother or a witch. However, why does Lady Tremaine restrain Cinderella so persistently? It may be because this restraint has a meaning that goes beyond mere abuse and harassment, and more to the point, there is a hidden desire for Cinderella. The analysis of Disney's *Cinderella* explores the constraints imposed on Cinderella by her stepmother.

(2) Stepmother and Stepdaughter in *Cinderella*

In this section, the relationship between the stepmother Lady Tremaine, her stepdaughter Cinderella, and Cinderella's mother by blood in *Cinderella* is considered as an Oedipal love triangle of "father-mother-daughter" as Ohashi organized in Rebecca. As mentioned in part I, in the Oedipus complex, the boy first has sexual desire for his mother and becomes a rival to his father. Thus, a "father-mother-son" love triangle is established. Soon, being anxious about being castrated by his father, the boy gives up his desire and separates from his mother and finally joins society. In other words, without any castration anxiety, the boy would never be separated from his mother and would remain with her. On the other hand, the girl, like the boy, initially feels sexual desire for her mother. However, penis envy - the realization that she does not have a penis - causes her to hate and blame for her mother. Gradually, she shifts her affection and desire for her mother to her father. This "father-mother-daughter" love triangle means that the mother sends her daughter off to a man, or to society in general, in order to maintain patriarchy. Later, the daughter herself will eventually become a mother and send her own daughter off to a man, so this love triangle continues to circulate. Therefore, it is organized as a first-generation and second-generation love triangle. The first-generation triangle can be explained as follows: "father = husband Maxim = Cinderella's late father," "mother = first wife Rebecca = first wife Cinderella's late mother," and "daughter = second wife Fontaine = second wife Lady Tremaine." The second-generation relationships are as follows: "father = husband Maxim, Cinderella's late father = Prince Charming", "mother = first wife Rebecca, Cinderella's late mother = Lady Tremaine", "daughter = second wife Fontaine, second wife Lady Tremaine = Cinderella". By placing them in this relationship diagram, we can see common relationships and stories in *Cinderella*, just as

fetishized as the image Rebecca as an image of Rebecca as a stepmother, and there is a gaze of sexual desire from Fontaine towards the stepmotherly Rebecca. Seeing Manderley in a dream is an act of idealizing and obsessing over Rebecca, an absent presence. The fetishistic gaze allows for maintaining psychological distance by mystifying and idealizing the female body that causes castration anxiety, making it a safe object of observation different from the actual female body. Manderley, finally shown at the end of the long forest path in the prologue, is indeed “secretive and silent” as the narrator says. Through the fetishistic gaze, Fontaine “possesses” and “controls” the burned-down Manderley, symbolizing Rebecca as a stepmother figure, in the safe distance of a dream, directing a gaze of sexual desire.

In *Rebecca*, the audience identifies with the heroine Fontaine and views Rebecca with a voyeuristic gaze while simultaneously sharing the pleasure of fetishization. Rebecca, though “absent,” is fetishized or idealized throughout the story, creating a powerful presence for both the audience and the characters. The idealization and obsession with Rebecca by the heroine and those around her are a fetishistic visual pleasure that excessively beautifies Rebecca and portrays her as an object of desire. At the same time, Fontaine directs a persistent gaze at the mansion and Rebecca’s personal belongings and eavesdrops on conversations of those around her. This can be interpreted as a voyeuristic gaze attempting to peek into Rebecca’s private domain, with Fontaine directing a sexual gaze and desire towards her. With Max, Fontaine shares Rebecca’s true nature, unknown to others, placing Rebecca under the control of a voyeuristic gaze, while the idealized/ fetishized image of Rebecca temporarily disappears. The daughter’s identification with the mother ends with the demonization of the mother, and the female Oedipus complex is completed by acquiring the father. With the demonization of the mother, and the burning of Manderley, which can be said to symbolize Mrs. Danvers and Rebecca who bear lesbian sexuality, it seems that the heterosexual romance between Maxim and Fontaine is fulfilled in the story. However, the audience and Fontaine know from the return to Manderley in the dream at the beginning of the film that Rebecca’s presence and the homosexual desire for her have not disappeared. The burned-down Manderley symbolizes the stepmotherly Rebecca, and it can be said that a voyeuristic gaze is directed from the closed space of a dream and the transcendent position of a narrator. Moreover, due to the burning down / physical absence, Manderley is fetishized as an object distanced from Fontaine = audience. The return to the burned-down Manderley / stepmother-like Rebecca disrupts the heterosexual narrative. Rebecca is still an object of sexual gaze for Fontaine, and that desire and obsession, like Manderley and Rebecca, will never fade.

II. Lesbian Desire by Restrain in *Cinderella*

1. Restrain and Maternal Attachment in *Cinderella*

a homosexual relationship between the stepmotherly Rebecca and Fontaine becomes definitive through the return to Manderley in the dream sequence of the prologue, preventing this story from ending as a mere fulfillment of heterosexual romance.

The film begins with Fontaine's narration, "Last night I dreamt I went to Manderley again," showing a scene passing through an overgrown forest to reveal the burned Manderley. This prologue is the scene that demonstrates Fontaine's sexual desire for the stepmotherly Rebecca through both voyeuristic and fetishistic gazes. The story only depicts the past recollection starting from this prologue dream scene, never narrating the present, repeatedly returning both Fontaine and the audience to Manderley. In the dream, Fontaine describes Manderley's beauty. The depiction of Fontaine returning to Manderley in her dreams suggests that Rebecca's influence has not completely disappeared. Manderley, existing outside the linear timeframe of reality in Fontaine's "dream" even after being burned down, symbolizes Rebecca, who still exudes her presence even after death.

Seeing Manderley in a dream is an act of peeking into a space that cannot be entered in reality. "Peeking" at Manderley, representing Rebecca, through a dream, is intrusion into Rebecca's private domain. In the prologue, Fontaine is a narrator recalling the past from her current position. In *Rebecca*, which is composed of past recollections except for this brief two-minute prologue, the narrator in the present state, knowing a past that is not revealed to the audience, is in a transcendent position compared to other characters and the audience. Fontaine's narration from this dominant position describes the burned-down Manderley. The sight of the ruins covered in vegetation represents Rebecca's devilish nature and her immortal power. Fontaine is not returning to Manderley before it burned down. This suggests that the idealized image of Rebecca has collapsed, but the underlying sexual desire and bond to Rebecca as a stepmother continue.

At the same time, the fetishized Rebecca is not completely destroyed and continues to exist within Fontaine. Rather, the fetishization of Rebecca is strengthened by her absence, i.e., Manderley's burning down. As Mulvey states, while voyeurism occurs within the frame of linear time, fetishistic visual pleasure, focusing on the look alone, can exist outside the concept of time that connects linearly from past to future (65). Fontaine's fetishism of Rebecca continues precisely because it is a dream that is outside the real linear time of reality. In fact, the fetishistic visual pleasure is strengthened by the absence of the object (Manderley/Rebecca). In the prologue, as the camera moves along the path leading to Manderley, the narration continues, "Nature had come into her own again, and little by little had encroached upon the drive with long, tenacious fingers." Like the sea that is repeatedly referenced in the work, nature symbolizes Rebecca's power, richness, and sexual excess. The narration praises the beauty of the burned-down Manderley, saying "Time could not mar the perfect symmetry of those walls," and although it's impossible to physically return to Manderley, she repeatedly returns in dreams. Manderley is

you? Sometimes when I walk along the corridor, I fancy I hear her just behind me. That quick, light step. I couldn't mistake it anywhere. It's not only in this room. It's in all the rooms in the house. I can almost hear it now. Do you think the dead come back and watch the living?" Mrs. Danvers maintains Rebecca's bedroom as it was during her lifetime, but the absence of the room's occupant is clear to everyone. This series of words and actions by Mrs. Danvers, who reveres and worships Rebecca who should not be there, paradoxically strengthens the sense of Rebecca's "absence" in that place. Rather, because Rebecca is "absent," the image of the maternal Rebecca is excessively idealized and viewed upon by Fontaine – and by the audience as extension – as a mystical existence.

However, Rebecca's fetishization collapses when Maxim reveals Rebecca's true nature to Fontaine. The confession scene with Maxim is crucial in bringing the "absent" Rebecca concretely to Fontaine and the audience. In this confession scene, the camera follows Rebecca's movements in sync with Maxim's narration. Although her body remains "absent," the "absent" Rebecca appears before Fontaine and the audience through Maxim's voiceover and camera movements. The Rebecca revealed by Maxim is a femme fatale figure, sexually promiscuous and enjoying the destruction of Maxim. By seeing Rebecca as sexually excessive and deviating from the ideal, Fontaine succeeds in the voyeurism of knowing a Rebecca that others do not know. In other words, Fontaine exposes Rebecca as a stepmother, whom she had idealized as a mother figure by blood, through a voyeuristic gaze shared in secret with Maxim.

From this point on, Fontaine becomes a confident woman, assured of Maxim's love for her, and no longer shows fear towards Rebecca or Mrs. Danvers. As Ohashi stated, in order to strengthen the heterosexual norm as a family plot, the daughter (= Fontaine) surpasses the mother (= Rebecca) by "demonizing" her, thus obtaining the father (= Maxim) who is the object of desire. With the revelation that Rebecca was a bad wife (= stepmother figure), the idealized image of Rebecca = the maternal Rebecca image, is removed. Maxim's confession about Rebecca's true nature brings an end to the fetishization of Rebecca as a maternal figure. By revealing Rebecca's secret – that she is a stepmother figure unknown to others – this confession provides Fontaine and the audience with the voyeuristic and sadistic pleasure of punishing her.

(2) The "Voyeuristic" and "Fetishistic" Gaze Revealing "Homosexual Desire"

After Maxim's confession, fetishized Rebecca – the maternal Rebecca – is "demonized" and transformed into a stepmotherly image of Rebecca. This allows Fontaine to surpass Rebecca as a mother figure and truly unite with Maxim. When Mrs. Danvers learns that the cause of Rebecca's death was ruled to be suicide rather than murder by Maxim, she sets fire to Manderley. Mrs. Danvers, who worships Rebecca and even seems to direct her sexual desire toward Rebecca, as a representation of "demonized lesbianism" (Ohashi, 268) in a heteronormative society, burns along with Manderley, which symbolizes Rebecca. This seems to allow Fontaine and Maxim to finally escape Rebecca's domination. However, as Ohashi previously suggested, the implication of

only visible on screen, turns her head sideways, showing a frozen expression to the audience. Overwhelmed by the presence of the “absent” Rebecca, who was so deeply revered by Mrs. Danvers, whom even Fontaine and those around her fear, Fontaine simultaneously idealizes Rebecca, wondering just how admirable a woman, wife, and mistress she must have been.

Instances of Fontaine comparing herself to Rebecca and idealizing her are also observed. After visiting Rebecca’s boathouse, Fontaine hears from Frank Crawley, who manages Maxim’s estate, about the boathouse keeper Ben and Rebecca in her lifetime. Regarding Rebecca, who drowned after being thrown overboard when her boat capsized, Fontaine asks Frank, “Wasn’t she afraid to go out like that alone?” When Frank replies, “She wasn’t afraid of anything,” Fontaine’s expression freezes once again. After hearing the cause of Rebecca’s death, Fontaine confides in Frank that she feels everyone is comparing her to Rebecca. As Fontaine states, “every day I realize things that she had and that I lack: Beauty and wit and intelligence...and, oh, all the things that are so important in a woman.” Rebecca is, for Fontaine, an object of admiration and ideal, possessing all the qualities of an ideal woman, fearless even in the face of death.

From an Oedipal perspective, Fontaine, as the daughter, idealizes Rebecca, the mother figure, and aims to identify with her in order to win Maxim, the father figure. When Beatrice asks if she’s not worried about Maxim being particular about hairstyles and clothing, indirectly comparing her to Rebecca, Fontaine immediately asks Maxim if he likes her hairstyle and orders a more mature dress from London. Just as she expressed her desire to be “a woman of 36, dressed in black satin, with a string of pearls” during their drive in Monte Carlo, Fontaine’s attempt to dress up like Rebecca, an “adult” woman, to please Maxim indicates that she views Rebecca as the ideal wife or mother figure and aims to identify with her. Moreover, although not Fontaine’s intention, the scene where she wears the exact costume that Rebecca wore a year ago at the masquerade ball also demonstrates the mother-child identification between the maternal Rebecca and Fontaine. As mother-child identification must be disrupted for the reinforcement and reproduction of heterosexuality and patriarchy, Maxim becomes furious upon seeing Fontaine identified with the mother figure, Rebecca. In the narrative, unaware of Maxim’s true feelings of dislike towards Rebecca, Fontaine’s anxiety and the idealization of Rebecca as the ideal wife, or Fontaine’s maternal Rebecca, are further escalated when Maxim does not approve of her costume.

The “absence” of Rebecca as the object of the gaze makes it superficially difficult to satisfy voyeuristic pleasure, but on the other hand, it strengthens her mystique. Mrs. Danvers, who worships Rebecca, contributes most significantly to Rebecca’s fetishization. The Rebecca described by Mrs. Danvers simultaneously strengthens Rebecca’s idealization and emphasizes her “absence.” When Mrs. Danvers speaks of Rebecca, she directs her gaze towards the mansion and space, as if she can see the “absent” Rebecca. In fact, Mrs. Danvers describes the presence of the “absent” Rebecca to Fontaine as follows: “You wouldn’t think she’d been gone so long, would

described in the previous section.

First, Fontaine directs a voyeuristic gaze at Rebecca. She persistently directs her gaze towards objects that evoke traces of Rebecca and is frequently depicted eavesdropping on conversations of those around her from hidden vantage points. Fontaine's gaze towards the mansion and her attempts to grasp Rebecca through the conversations of those around her can be interpreted as a "voyeuristic gaze," secretly attempting to observe the "invisible" Rebecca. This gaze aims to unravel Rebecca's mystery, strip away her mystique as the marvelous former wife described by others, and bring her under control.

Fontaine surveys the labyrinthine expanse of Manderley. Guided by Mrs. Danvers through Manderley, Fontaine moves with her gaze fixed on the door to Rebecca's bedroom. The "R" embroidery in Rebecca's handwriting on the diary in her former study is shown in a long shot. At this point, the camera movement and gaze are linked to Fontaine's off-screen gaze. Consequently, the audience, identifying with Fontaine, persistently pursues and attempts to expose traces of the "absent" Rebecca, who is spoken of as a good wife, or is driven by the desire to know about Rebecca, who, despite being "absent," maintains a strong presence. The audience, too, "peeps" at Rebecca.

The act of eavesdropping on conversations of those around her not only represents Fontaine's lack of confidence and her precarious position at Manderley. For Fontaine, it is an act of capturing the "absent" Rebecca, who she can neither see nor hear, and dominating her as an object of the gaze. Fontaine is overcome with anxiety and fear each time she hears about aspects of Rebecca that she was unaware of. Maxim stubbornly refuses to speak about Rebecca. When Maxim's sister mentions that Fontaine must have already heard from Maxim about what happened to Rebecca, Fontaine is once again exposed to anxiety. Through the act of eavesdropping and peeping on others' conversations that she is not supposed to know, Fontaine derives pleasure from dominating Rebecca from a sadistic, superior position.

On the other hand, Rebecca is fetishized throughout the narrative, which is an idealization and deification as the ideal wife/mother. Despite Rebecca's "absence" in the story, her influence is extremely strong, and she is fetishized - excessively mystified and idealized - by those around her and by Fontaine herself. The way Manderley's people praise Rebecca's beauty and talent portrays her as the perfect wife, increasing Fontaine's feelings of inferiority and anxiety as the new bride.

The relationship between Mrs. Danvers, who reveres Rebecca, and Rebecca herself enhances the mystification of her as the ideal wife and mistress. For instance, there is a scene where Maxim's sister, Beatrice, asks if Fontaine is getting along well with the difficult Mrs. Danvers. Sensing Fontaine's fear of Mrs. Danvers from her demeanor, Beatrice says, "You see, she's bound to be insanely jealous at first, and she must resent you bitterly." When Fontaine asks, "Why should she?" Beatrice replies, "Don't you know? I should have thought Maxim would have told you. She simply adored Rebecca." After Beatrice's words, Fontaine, whose back of the head was

represents “the visually ascertainable absence of the penis” (65), simultaneously providing pleasure to the male spectator while constantly evoking castration anxiety. To escape this unconscious anxiety, men take two strategies: voyeurism and fetishism. The former refers to the pleasure derived from secretly observing others. It manifests in investigating female characters, punishing them as guilty to demystify them, or deriving pleasure from dominating them. Mulvey links voyeurism with sadism, explaining that this aspect drives narrative and character development. Conversely, fetishism involves excessively beautifying the female body or specific parts, making them objects of satisfaction in themselves. The overvaluation of the female image - excessive idealization or mystification - functions as a defense mechanism against castration anxiety for men, allowing them to derive visual pleasure by portraying women as non-threatening objects. Thus, cinematic representation of women involves two “contradictory” mechanisms working interactively: voyeurism, which gives visual pleasure by demystifying and dominating the object, and fetishism, which gives visual pleasure by mystifying the object.

While Mulvey’s “gaze” primarily focuses on the male spectator’s perspective, Rebecca is one of the so-called “woman’s film” produced in the 1940s under the wartime regime, targeting predominantly female audiences (Doane 1987, 4). Tsukada points out the dual characteristics in Hitchcock’s heroines: their “detective-like series of active behaviors” and their “passive behavior of eventually settling into ‘marriage’ or ordinary domestic life” (188-189). The female characters in *Rebecca* embody this role of the “woman’s film” genre, possessing an “active gaze” through “peeping” while simultaneously being “fetishized” and “looked at,” thus occupying a “passive gaze” position. This results in what Tsukada terms the “reversal of the seeing/being seen perspective” (210) being repeatedly enacted.

For example, the absent Rebecca is both a seeing and seen entity. Manderley mansion symbolizes Rebecca’s powerful presence. Through the mansion and her possessions, the “absent” Rebecca asserts her strong presence. The vast, maze-like mansion becomes one with Rebecca and threatens Fontaine. Tsukada analyzes that Rebecca is Manderley itself, and when Fontaine encounters events related to Rebecca in Manderley, the mansion’s doors, arches, staircases, and windows create a secondary frame within the camera’s primary frame, doubly constraining Fontaine (192-200). As a woman (Rebecca united with Manderley) frames another woman (Fontaine = audience), Rebecca intervenes in Fontaine’s subjectivity and active “gaze” with which the audience identifies. Both Fontaine and Rebecca have an active gaze while simultaneously being subjects of a passive gaze.

Section 2 The Gaze of Fontaine towards Rebecca

(1) The Gaze of “Voyeurism” and “Fetishism” in *Rebecca*

In *Rebecca*, the heroine Fontaine has a complex gaze toward Rebecca. This gaze can be divided into two categories, the voyeuristic gaze and the fetish gaze, based on Mulvey’s theory

former wife Rebecca arguably mirrors the situation of a stepdaughter in relation to her stepmother in a fairy tale. Ohashi also explains the “demonization” of the mother by stating that “all mothers become stepmothers” (255). However, while Ohashi recognizes lesbianism in Fontaine’s desire to identify with Rebecca, i.e., he concludes that the film *Rebecca* reinforces patriarchy by demonizing the mother, characterizing lesbianism as a “non-erasable residual” (278). Nevertheless, when focusing on the “gaze” of the characters in the film, it can be argued that the lesbianism represented therein is not merely a passive “residual,” but rather strongly emphasizes queer sexuality. This paper will examine in detail the relationship between “stepmother and stepdaughter” by focusing on their “gaze,” and provide an in-depth analysis of the lesbianism that emerges from this perspective.

(2) Laura Mulvey’s Theory of the “Gaze”

The concept of the “gaze” plays a crucial role in *Rebecca*. The film depicts how the gaze from the “absent” Rebecca, who never physically appears, as well as the gazes from Mrs. Danvers and the inhabitants of Manderley, progressively unsettle the protagonist, Fontaine. However, within the “woman’s film” genre, the heroine also becomes the subject of the gaze in order to facilitate audience identification. This section explores queer desire towards Rebecca through the lens of the protagonist Fontaine’s gaze.

The central theoretical framework for this analysis is Laura Mulvey’s concept of the gaze, particularly focusing on scopophilia and fetishism. Mulvey’s theory of the gaze provides a crucial paradigm for analyzing gender power dynamics and structures in Hollywood cinema through the act of “looking.” In her seminal work “Visual Pleasure and Narrative Cinema” (1975), Mulvey describes how classical Hollywood cinema constructs its narrative structure through the male gaze, depicting women as objects of desire to be looked at, subject to scopophilia and fetishism. Mulvey explains two contradictory aspects of the pleasure in looking:

The first, scopophilic, arises from pleasure in using another person as an object of sexual stimulation through sight. The second, developed through narcissism and the constitution of the ego, comes from identification with the image seen. Thus, in film terms, one implies a separation of the erotic identity of the subject from the object on the screen (active scopophilia), the other demands identification of the ego with the object on the screen through the spectator’s fascination with and recognition of his like. (62)

In classical Hollywood cinema, the pleasure of looking is typically structured as “active = male” and “passive = female”. Furthermore, women in film function doubly as erotic objects: firstly, for the characters in the story, and secondly for the audiences. The narrative is supported by the male spectator’s perspective, with the audience identifying with the male protagonist and indirectly possessing the woman in the story (Mulvey, 62-64).

As Mulvey notes, it is crucial that women are both on display for the male gaze and a threat to men’s castration anxiety. From a psychoanalytic perspective, the woman, lacking a penis,

subjectivity and a challenge to heteronormativity norms. Finally, these analyses reveal the lesbian relationship between stepmother (witch) and daughter and the subversion of heterosexual norms that underlies the “woman’s film” genre.

I . Queer Gaze in *Rebecca*

1. Female Oedipus Love Triangle and Gaze in *Rebecca*

(1) “Mother and Daughter” in *Rebecca*

Rebecca (1940) is a Gothic suspense film directed by Alfred Hitchcock, based on the 1938 novel of the same name by Daphne du Maurier. The narrative commences with the young, naive, and impoverished protagonist (since the heroine has no name, I will follow Ohashi referring to the heroine as the actor Fontaine) encountering and subsequently marrying the wealthy Englishman Maxim de Winter (played by Laurence Olivier) in Monte Carlo, a year after the death of his wife, Rebecca. Fontaine begins a new life at Manderley, Maxim’s grand mansion in England. However, the estate is permeated by the lingering presence of Maxim’s deceased wife, Rebecca. Everywhere Fontaine looks and with everyone she speaks, Manderley is replete with traces of the “absent” Rebecca. From Rebecca’s personal belongings, including embroidered “R” s, to her closed bedroom, and the recollections of Rebecca shared by Maxim, Mrs. Danvers, and others at Manderley, Fontaine becomes increasingly psychologically distressed. To Fontaine, Maxim, who is old enough to be her father, appears unable to forget his late wife, Rebecca. The new bride, thus, attempts to obtain her husband’s affection by trying to surpass Rebecca through identification with her unseen rival.

In his paper “Doubled Desire or Queer Strategy” (2004) on *Rebecca*, Yoichi Ohashi interprets the relationship between Rebecca, Maxim, and Fontaine as a female Oedipal triangle of “mother-father-daughter.” In the male Oedipus complex, the boy’s sexual desire for his mother and his wish to identify with her are inhibited by the anxiety of castration inflicted by the absolute father figure. In the female Oedipal triangle, as interpreted by Ohashi, Fontaine, as the daughter, competes with the mother figure, Rebecca, and seeks to identify with her in order to gain the affection of the father figure, Maxim. However, the mother-child identification delays the girl’s transition to the paternal/masculine realm or integration into broader society. To disrupt this identification, Maxim’s confession that Rebecca was not an ideal wife but a malicious woman who deceived those around her to ruin him serves to “demonize” Rebecca. For girls who lack a penis to be castrated, this demonization of the mother functions as a substitute for castration anxiety. Through this process, the daughter surpasses the mother, idealizes the father, and ultimately attains the father’s affection.

This paper proposes to view Rebecca and Fontaine not merely within the framework of former and current wife, or even beyond Ohashi’s female Oedipal triangle of “mother and daughter,” but as a incorporating a “stepmother and stepdaughter” relationship. The way in which the subsequent wife Fontaine suffers due to the overwhelming presence of the absent

submissiveness, and compassion. Although Cinderella's stepmother does not use magic, her actions and characteristics are clearly witch-like, including abusing and imprisoning Cinderella. In *Rebecca*, the late first wife, Rebecca, exerts a powerful charm over those around her—even after her death. Her influence pervades the entire film, dominating not only the heroine and other characters but also the overarching narrative. Based on these traits and actions, Cinderella's stepmother and Rebecca can be interpreted not merely as villains opposing the heroines but as “witches” in the tradition of fairy tales.

From a psychological perspective, Sheldon Cashdan notes that in fairy tales, the image of the mother experienced by the child is split into a “good mother” and a “bad mother,” and the witch is a representation of the “bad mother” (26-30). Regarding these two types of women in fairy tales and their opposing structures, Midori Wakakuwa (2003) indicates that “patriarchal society, which considers virginity and chastity indispensable for women to guarantee the lineage of the children to be born, has made purity the highest virtue for women” (99). It conveys the norms of a patriarchal society and the social roles of women/mothers by distinguishing between “good” and “bad” images of women based on their blood relation.

The “stepmother-daughter” relationship based on heterosexual norms is portrayed on the surface as a competitive or antagonistic relationship over men, but the structure itself suggests an underlying intimate relationship between women. In *Rebecca*, Fontaine's admiration and threatening fear of Rebecca can also be interpreted as an expression of desire and attachment to Rebecca. The stepmother's persistent attitude towards Cinderella may also hide homosexual desire and intimacy beneath the surface coldness and desire to dominate. These gazes and obsessive behaviors between women suggest the possibility of hidden homosexual desires and bonds that could separate women from men and challenge the foundations of heterosexual society. This is why stepmothers, equated with witches, must be despised and banished in heteronormative society – their rejection serves to guarantee and reinforce heteronormativity. However, on the flip side, doesn't this suggest that the figure of the witch has the power to disrupt and deconstruct heterosexual society? By reinterpreting the relationship between women not as mere conflict but as expressions of homosexual or queer desire, we can gain a new perspective on these works. This approach challenges social structures and narrative frameworks rooted in heterosexual norms.

The structure of this paper is as follows. First, we analyze Fontaine's (the heroine's) gaze toward Rebecca, classifying it into voyeuristic and fetishistic gazes based on Laura Mulvey's theory of the gaze, and show that these gazes are manifestations of lesbianism. Next, an examination of the lesbian relationship in *Cinderella* by interpreting the stepmother's relentless restraint of Cinderella as love for Cinderella and her late mother. Then, an analysis of the dress and staircase scenes common to both *Rebecca* and *Cinderella* using Mary Andone's theory of masquerade. The analysis reveals that the masquerade with dresses is a manifestation of female

Lesbian Relationships in Cinderella Story Films: *Rebecca* and *Cinderella*

Saki Takeda

Introduction

This study focuses on the relationship between “stepmothers and daughters” in Disney’s film *Cinderella* (1950) and Alfred Hitchcock’s film *Rebecca* (1940) based on the novel by Daphne du Maurier. In fairy tales, stepmothers are traditionally depicted as witches, and their representations are imbued with a queerness that can be said to “deviate” from patriarchy and heterosexual norms. The term “queer” refers to people or concepts whose sexual orientation or gender identity “deviate” from social norms. Through a queer perspective, this study analyzes the relationship and representation of stepmothers and daughters in Disney and Hitchcock films with a focus on lesbian relationships and attempts to deconstruct heterosexual norms. In this paper, the term “queer” is also defined as “a concept that critically questions heterosexual norms as a powerful magnetic field where not only homophobia but also sexism and racism, which are implied in viewing heterosexuality as common sense and natural, intersect in a complex manner” (Kanno 2023, 21).

Both films are typical “Cinderella stories” in which a young, poor woman marries a wealthy man and becomes happy. While the “Cinderella Story” is widely accepted in society as a tale of the realization of the hopes, dreams, social advancement and success of women, it also coincides with conservative values as a story that reinforces traditional gender roles and family values centered on heterosexuality. Also, both films, produced and released in the 1940s and 1950s, can be regarded as part of the “woman’s film” genre that flourished under the influence of World War II. While these films deal with problems that are considered “female” such as the domestic life, family, children, self-sacrifice, and production (Doane, 3). They reinforce heteronormativity that limit women’s social roles to the home.

In these films, the “stepmother” or “witch” plays a paradoxically important role in fulfilling the “Cinderella story” in which the two heroines marry the man of their dreams. In fairy tales, the witch is simultaneously portrayed as a stepmother who falls into a confrontational relationship with the heroine, her (step)daughter, and is ultimately eliminated. According to *The Longman Dictionary of English Language and Culture*, the term “witch” is defined as a woman who has magic powers to cause harm, and also a woman who seems to have unusual power to attract men (1506-07). From those definitions, witches are figures that deviate from social norms and are the polar opposite of the Christian ideal of womanhood, something characterized by piety,

—」『別府大学紀要』 56, p.11-22

森山卓郎(1996)「情動の感動詞考」『語文』 65, p.51-62

- 小林隆編(2022)『全国調査による感動詞の方言学』ひつじ書房
- 小林隆・澤村美幸(2012)「驚きの感動詞「バ」」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室, p.165-188
- 小林隆・澤村美幸(2017)「感動詞の方言学」『方言学の未来をひらくーオノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房, p.87-205
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構ー心的操作標識「ええと」「あの(一)」」『言語研究』108, p.74-93
- 佐藤亮一(1966)「宮城県北部における三音節名詞のアクセント」『国語学研究』6, p.16-29
- 澤村美幸・小林隆(2005)「「しまった！」に地域差はあるか？」『月刊言語』34-11, 大修館書店, p.30-33
- 渋谷勝己(2002)「山形市方言の談話マーカ「ホレ・ホリヤ；アレ・アリヤ」」『阪大社会言語学ノート』4, p.131-142
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版, p.257-279
- 田附敏尚(2018)「青森県五所川原市方言の感動詞「アツァ」について」小林隆編『感性の方言学』ひつじ書房, p.233-251
- 田附敏尚(2022)「青森県五所川原市方言の感動詞「ワイ」について」日本方言研究会編『方言の研究8』ひつじ書房, p.93-114
- 土井八枝(1938)『仙臺の方言』春陽堂書店
- 東北大学方言研究センター編(2013)『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集ー宮城県沿岸15市町ー』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編(2019)『生活を伝える方言会話[資料編]ー宮城県気仙沼市・名取市方言』ひつじ書房
- 東北大学方言研究センター編(2021)『文化庁委託事業報告書 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開4』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編(2022)『文化庁委託事業報告書 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開5』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編(2023)『文化庁委託事業報告書 東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 富樫純一(2005)「驚きを伝えるということー感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通してー」串田也・定延利之・伝康晴『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房, p.229-251
- 船木礼子(2009)「感動詞ー詠嘆表現2ー」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック3』国立国語研究所, p.77-103
- 方言研究ゼミナール編(2006)『方言資料叢刊9 巻 日本語方言立ち上げ詞の研究』方言研究ゼミナール
- 辯天丸孝編(1932)『石の巻辯』郷土社書房
- 松田美香(2015)「大分と首都圏の依頼談話ー大分方言の「アンタ」「オマエ」のフィラー的使用について

5. おわりに

本稿では感動詞「オラ」の意味分析を中心に考察を行い、また、男女差や人称代名詞との関係、出現位置など感動詞「オラ」に特徴的な要素についても述べ、用法を明らかにした。しかし、感動詞の詳細な意味と用法を見出すためには、談話調査のほか、複数名に質問形式の面接調査を実施することも必要であると考ええる。さらに、感動詞「オラ」の場合、代名詞との区別が非常に曖昧である用例も存在するため、その区別の方法を模索する必要もあると考える。これらを今後の課題としたい。

注

- (1) 小林・澤村(2012)において示される「形態的操作」「音調的操作」の方法を本研究でも取り入れた。
- (2) 東北大学方言研究センター編(2019)における「解説」の「2.2 場面設定会話の有効性」(p.4-5)を参考とし、引用した。
- (3) 小林・澤村(2017)における「2.3. 場面および調査項目の設定」(p.120)を参考にした。
- (4) 東北大学方言研究センター編(2019)では、「初物のカツオ(タケノコ)を食べる」として掲載される項目であるが、「地域で一般的な魚や野菜を指定してよい」との注記がある。全国有数のサンマ水揚げ漁港であり、収穫祭もある調査地女川町に合わせて設定した。
- (5) 2024年12月19日、「オラ」は聞き手がいない場合でも用いられるかどうかを話者に確認したところ、「聞く相手がなくても独り言のように使う」と説明を受けた。また、その説明に対して、自分に言い聞かせるように使用するのかどうかを話者に確認したところ、「その通りで、自分に言い聞かせるように使う」と説明があった。
- (6) 『日本語文法大辞典』(2001), p.545-546を参照。
- (7) 原文は縦書き・右傍線であるところを、横書き・上線に改めた。
- (8) 2024年11月14日、本調査とは別に話者から説明を受けた。
- (9) 同書p.300-301による。

参考文献

- 浅野建二編(1985)『仙台方言辞典』東京堂出版
- 阿部勝雄(1993)『石巻地方の方言』ひたかみ
- 石川鈴子『自伝的仙台弁』(1966) 審美社
- 石巻市史編さん委員会(1988)『石巻の歴史 第三巻 民俗・生活編』石巻市
- 勝又琴那(2024)「気仙沼方言における疑問詞系感動詞の体系的記述の枠組みの提案―「ナニ」を中心として―」『日本語学会2024年度春季大会発表原稿集』 p.119-124
- 加藤正信(1992)「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院p.89-92
- 琴鍾愛(2005)「日本語方言における談話標識の出現傾向―東京方言、大阪方言、仙台方言の比較―」『日本語の研究』 1-2, p.1-18
- 小林隆(2011)「感動詞「猫の呼び声」」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』, p.162-172

表2 感動詞「アーオラ」の出現情報

代表形	語形	場面	該当文脈
アーオラ	アーオラ	タバコをやめない夫を叱責する	003 B: アラ ナンダベ アラ ナンダベ アーオラ ントニ シン デーゴド。イッカイ ヤメデ マダ。アンダバツテネグ マコ ^o サ ワリーッ テ ユワイッカラ ヤメライン。ホッテ ントニ ズブンノ カラダ イズ バン ダイズダベツチャー。
アーオラ	アーオラヤ	ガソリンの値上がりについて話す	004 B: ンダナー。(A ウン) アーオラヤ コマツタナヤー。クルマ ネーズド カイサ イカ ^o イネシナー。
アーオラ	アーオラヤ	食事の内容が気に入らない	004 B: ナンダ アーオラヤー シンデーゴダナー。
アーオラ	アーオラ	猫を追いつ	006 B: アーオラ。アー アラララ トライダヨー オラ。イダマスゴダ ナ ンダベヤー。
アーオラ	アーオラ	入院中の知り合いを見舞う	003 B: アラー アーオラ ナンダベ ケカ ^o シタノスー。
アーオラ	アーオラ	入院中の知り合いを見舞う	013 B: ウン。イヤイヤ ンデモ イガッタ マズ ホノッケデ スンデ。 アーオラ ナンダベ。ホンデネ ダイズニネー。

4- 5. 人称代名詞との関係

「オラ」は女川町で一人称代名詞として用いられているほか、感動詞としても用いられている。土井(1938)には、「間投詞的なもの」の一つに「おら」を挙げ、「人稱代名詞中のもの」という説明をしている⁽⁹⁾。また、感動詞「オラ」が「自分に言い聞かせる」といった特徴を持っているのは、人称代名詞用法の名残があるからではないかと筆者は考えている。

今回の談話資料を観察すると、感動詞「オラ」と認められる用法に加え、代名詞「オラ」との区別が曖昧な用例も存在した。その例として、「お茶をこぼす」場面における「アー ザブドン ヨゴシテシマッター オラ。」「アラララ ナンダベ ナンズスッペ オラー。」という用例がある。加えて、「花瓶を倒す」場面における「イヤイヤ アー マズマズ オラ ナンベン ヤルモンダガ。」という用例がある。これらは発話した話者Bによって、「自分のことを表す」と説明があったため、人称代名詞と判断した。また、一方で「福引の当たりに出会う」場面における「イキ^o デクテ イキ^o デクテ イダノニ イガッタヤー オラ。」という用例は、発話した話者Bによって「自分を表すものではない」と説明を受けたため、感動詞と判断した。

4- 6. 感動詞「オラ」の出現位置

表1における該当分脈欄を見ると、感動詞「オラ」は文中および文末に出現し、主に文末に出現していることがわかる。一般に感動詞は文頭に現れるとされており、今回談話調査によって得られたほかの感動詞も、文頭に現れることが多かった。しかし、「オラ」の場合は以下のように主に文末に現れる。そのため、感動詞「オラ」の持つ「事態の受け入れがたさを自分に言い聞かせる」という意味が文全体に関わるという特徴を持つ。

- ・アラララララ ド ナニシテキタノ ソドサ イッテ コノサミノニ オラ。
- ・ンオー オヤオヤオヤ ナヌーステヤノ アンダ ト イートスステ ハスゴサ
アガッテ アンブネデバ オラ。

(1)基本義がそのまま実現義になる場合

形態的操作：なし。(例：ア ナンダ ナニシタンダベ オラ。〈あ 何だ どうしたんだろう
まあ。〉)

音調的操作：イントネーションは平板調である。

(2)基本義に感情的意味「あきれ」が加わる場合

形態的操作：語尾に長音が付く長音化の操作によって「オラー」のような長音化単独の形式が作られる。(例：ア ヨグモ マー コンナニ イッペー モラーシタゴドオモデノニ オ
ラー。〈あ よくも まあ こんなに いっぱい もらってきたこと 重たいのに ま
あ。〉)

音調的操作：イントネーションは下降調である。

(3)基本義に感情的意味「うれしさ」が加わる場合

形態的操作：語尾に長音が付く長音化の操作によって「オラー」のような長音化単独の形式が作られる。(例：アラ リッパナナスナゴド オラー。)

音調的操作：イントネーションは上昇調である。

(4)基本義の度合いが強まる場合

形態的操作：語尾に長音が付く長音化の操作によって「オラーー」「オラーーー」のような長音化単独の形式が作られる。長音の拍数が多くなるほど、基本義の度合いも強まる(例：マズ
マズ マダ ハズモンダデバ オラーー。)

音調的操作：イントネーションは平板調から語尾にかけて下降調になる。

4-4. 感動詞「アーオラ」との共通点

感動詞「オラ」に似た形式として、本研究で意味分析の対象としなかった「アーオラ」がある。以下の表2に感動詞「アーオラ」の出現情報を示す。まず、「アーオラ」と「オラ」は女性が使用する感動詞という点で共通している。今回の調査で得られたデータからは、女性である話者Bのみに、ともに感動詞としての「アーオラ」と「オラ」の使用が認められた。また、「アーオラ」系感動詞については、女川周辺の方言集などにより、女性によく使用されることばという記述があり、その例を次に挙げる。

- ・「あおらあ(——)(語尾が上る) 女達に多く使用される。「まあ」と云ふ一般的感動詞。」(『石の巻辯』p.1)⁽⁷⁾
- ・「アオラー(感・ああ・俺は?) 女性が用いるあいのてのことば。」(『石巻の歴史 第三巻 民俗・生活編』p.683)
- ・「あおらや たまげた、あきれたという意、女性によく用いる感動詞。」(『石巻地方の方言』p.7)

「オラ」系感動詞については男女差に関する記述は見られなかったが、話者Aにより、男性がオラ系感動詞を使用しているのは聞いたことがなく、自身も使ったことはないという内省が得られた⁽⁸⁾。なお、話者Bは感動詞「オラ」と代名詞「オラ」の区別がほぼできていた。一方の男性話者Aは代名詞の「オラ」しか使用したことがないと言い、感動詞としての「オラ」が存在していることに少々驚いたようであった。これらのことから、「アーオラ」と同様に「オラ」も女性によく用いられる感動詞の可能性はある。

- ・006 B：アララララ。コノ アズノニ オラ ヨグ。アラ リッパナナスナゴド オラ
ニ。コイズ ナニ ミンナ イーノ。

平板調イントネーションと下降調イントネーションが組み合わされたイントネーションとともに用いられる長音化単独は、「初物のサンマを食べる」場面および「入院中の知り合いを見舞う」場面で出現している。「初物のサンマを食べる」場面では、相手が初物のサンマをもらってきたと言い、誰からもらってきたのかと尋ねると、漁師の知り合いと偶然会い、初物のサンマをもらってきたという。そこでは、初物のサンマを相手がもらってきたということだけで想定外なうえ、さらに、漁師の知り合いと偶然会ったことで初物のサンマをもらったという想定外な事態を連続で認知している。それを受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを重ねて自分に言い聞かせているとき、「オラー—」が現れている。

- ・006 B：マズマズ マダ ハズモンダデバ オラー—。

「入院中の知り合いを見舞う」場面では、怪我をして入院したと聞いていた相手のお見舞いに行くと、相手は脚立から落ちて腰を打ちつけてしまったため入院したという。入院した理由が想定外で、歳を取っているため気をつけなければならないと話者は思っているため、その入院の理由が受け入れがたく、その受け入れがたさを重ねて自分に言い聞かせているときに「オラー—」が用いられている。

- ・005 B：トスダガラ キツケネゲネーノニ オラー—。

長音の拍数が増えるとともに、基本義の度合いも強まることが考えられる。イントネーションは平板調から語尾にかけて下降調になる。

感動詞「オラ」の例外としてとらえた「オラナー—」は、「帰宅の遅い孫を心配する」場面において現れている。出かけた孫がいつもの時間になっても帰って来ず、暗くなっても帰って来ていないという想定外の事態に対して、それを受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせているときに「オラナー—」が用いられていた。

- ・007 B：イツツモダド トックニ ケツケンノニ ナニシテンダベ オラナー—
シンペーナゴドー。

そのため、「オラ」系感動詞全てに通用する基本義と「オラナー—」の用法は共通することから、感動詞として拾った。「オラ」の後ろに付く「ナー—」は、終助詞、間投助詞として考えることができる。また、「ナー—」は嘆きの気持ちや相手に念を押したり、言い聞かせたりする気持ちを表す⁽⁶⁾。イントネーションは「ナ」で上がり、長音の2拍目あたりから下がるという上昇調+下降調のイントネーションが用いられる。

ここまでの考察をまとめると次のようになる。

・006 B：アーオラ。アー アラララ トライダヨー オラ。

また、基本形が現れる例として「福引の大当たりに出会う」場面が挙げられる。そこでは、町内会の福引を引きに行ったところ、温泉旅行を引き当て、さらにその温泉は行きたくてしかたがなかった場所であるという想定外の事態が起こる。温泉旅行が当たっただけでも喜ばしいことであるのに、その上温泉は念願の場所であったため、その事態を受け入れがたく、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるように「オラ」が用いられている。

・016 B：イキ° デクテ イキ° デクテ イダノニ イガッタヤー オラ。イダマスゴダ
ナンーダベヤー。

そのため、ほかの形式でみられる「あきれ」「うれしさ」「基本義の度合いの強調」といったものは含まれていない。このことから、基本形の「オラ」は基本義がそのまま実現義になると思われる。イントネーションは平板調が用いられる。

長音化単独は、例えば、「荷物運びを頼む」場面において出現している。そこでは、道で休んでいる相手を見かけ、休んでいる理由は人からもらってきた野菜が重すぎるためだという。その休んでいる理由が話者にとって想定外の事態であり、重くて一人で運べないほどの野菜を相手がもらってきたことを受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるとともに相手にあきれているとき「オラー」が使用されている。

・005 B：ドッカラ ホーバリ モラーシタノー オラー。ドレ。

また、似たような使われ方が同場面で現れている。そこでは、相手が一人で運べないほどの野菜をもらってきた理由は、誰かにおすそ分けするわけではなかったことが話者にとって第一の想定外な事態である。さらに、その事態を受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるとともに欲張りな相手にあきれているとき、「オラー」が現れている。

・011 B：オヤオヤオヤオヤ。ア ヨグモ マー コンナニ イッペー モラーシタゴド
オモデノニ オラー。ドレ モッテスケッカラ。

これら2つは下降調イントネーションとともに用いられる。

上昇調イントネーションとともに用いられる長音化単独は、「野菜をおすそ分けする」場面において現れている。そこでは、とても暑い中、相手が自分の畑で収穫された茄子をおすそ分けしに家まで来てくれ、さらに、その茄子がとても立派な茄子であったということが話者にとって想定外の事態である。そして、その事態を受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるとともに、喜ばしさを感じているとき、「オラー」が使用されている。

4. 考察

4- 1. 感動詞「オラ」の基本義

表1において、出現語形が確認できる「該当文脈」やその前の文脈が確認できる「前文脈」から、「オラ」は、反射的な反応ではなく、何らかの事態を認知した上で発せられていることがわかる。例えば、「福引の大当たりに出会う」場面において、念願の温泉旅行が当たったという事態を認知した上で「オラ」が出現している。そして、その事態というのは話者にとって想定外の事態であり、「オラ」はその事態を受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるときに用いられている⁽⁵⁾。例えば、「足をくじいた相手を気遣う」場面を挙げる。そこでは、一緒に歩いていた相手が階段で足をくじいてしまった際、目的地まであと少しのところでは相手が足を痛めるという想定外の事態が起こる。相手の足を心配するものの、なぜこのタイミングで足を痛めるのかとその事態を受け入れがたく、受け入れがたさを自分に言い聞かせるように「オラ」が用いられている。「ハサミを取ってきてもらおう」場面の例では、庭木の剪定をしていた相手から大きなハサミを取ってくるよう頼まれ相手の様子を見に行ってみると、相手は想像以上の高さで作業をしている。相手が自分の年齢を考えずに高いところで作業をしているという想定外の事態を受け入れがたく、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるように「オラ」が出現している。このことから、「オラ」は「想定外の事態を認知した際、その事態を受け入れがたく感じ、その受け入れがたさを自分に言い聞かせる感動」であることが考えられる。これを「オラ」の基本義としたい。

4- 2. 感動詞「オラ」の実現形のバリエーション

表1の語形欄に示した全ての語形について、長音化の有無と形式から、形態面において感動詞「オラ」の実現形のバリエーションを整理すると次のようになる。

A. 基本形

オラ

B. 長音化単独

オラー

オラーー

オラーーー

例外

オラナーー

4- 3. 形態的操作および音調的操作と感動詞の意味の関係

形態的操作および音調的操作が感動詞の意味とどのように関わっているのかを考えてみる。

基本形は、例えば、「猫を追ひ払う」場面で見られる。そこでは、魚を干していたところ、その魚を野良猫に持って行かれるという話者にとって想定外の事態が起こる。今日の夕食にする予定であった魚を目の前で持っていかれたため、その事態を受け入れがたく、その受け入れがたさを自分に言い聞かせるとき「オラ」が用いられている。

該当文脈	後文脈	長音化	平板調	下降調	上昇調
005 B: ドッカラ ホーバリ モラーシタ ノー オラー。ドレ。	006 A: スコ スコシ モッテケロー ン デー。	○	×	○	×
011 B: オヤオヤオヤオヤ。ア ヨグモ マー コンナニ イッペー モラーシタ ゴド オモデノニ オラー。ドレ モッテ スケッカラ。	012 A: ホレ ワリゲット ンデ タカ イデケロ コイズ。	○	×	○	×
006 B: アララララ。コノ アズノニ オ ラ ヨグ。アラ リッパナナスナゴド オ ラー。コイズ ナニ ミンナ イーノ。	007 A: コドシ ジマンスルワゲデネゲッ ト ン ナス ンット イクテヤー。	×	○	×	×
006 B: アララララ。コノ アズノニ オ ラ ヨグ。アラ リッパナナスナゴド オ ラー。コイズ ナニ ミンナ イーノ。	007 A: コドシ ジマンスルワゲデネゲッ ト ン ナス ンット イクテヤー。	○	×	×	○
004 B: オヤオヤ ナンダベ コゴマデチ テ。ア ナンダ ナニシタンダベ オラ。	005 A: アルガイネガモシンネ。ドレ カ ダ カシテケロ イットギー。	×	○	×	×
007 B: イッツモダド トックニ ケッテ クンノニ (A ンダナー) ナニシタンダベ オラナー―― シンペーナゴドー。	008 A: ホントダ。ンデ トナリサ イッ テ キーデコイ。	―	―	―	―
004 B: ンオー オヤオヤオヤ ナヌース テヤノ アンダ ト イートスステ ハ スゴサ アガッテ アンブネデバ オラ。 マンズマズ コノ ズー。	005 A: アブネグネーゲットモヤー。	×	○	×	×
006 B: アアラ ダメダ ダメダ。アブネ ガラ ヤメデケライン。アララララ ナン ダッテ オラ。トシ カンケ° ネデ イズ マデ アガッテンダベ。ヤメライン ダ メダ ダメダ アブネガラ。	007 A: ンデ ヤメツカラ イー ン デ。	×	○	×	×
007 B: ンットニ ンットニ オラ。ホラ ヘ口。	008 A: イヤイヤイヤ。ウーン ツギアイ (B マズマズ) アッテナ。	×	○	×	×
006 B: マズマズ マダ ハズモンダデバ オラー。	007 A: ンダヨ。ハズモンダガラ コンバ ン スク° スオ フッテ ヤイデ ク ーベス。	○	○	○	×
008 B: ナンーダベ オラ コノヒトモヤ 。	009 A: ナンーダ ホレ チカラモズナゴ ド。	×	○	×	×
002 B: アラララララ ド ナニシテキタ ノ (A イ) ソドサ イッテ (A イマ) コノ サミノニ オラ。	003 A: イマスコシ ホレ スコシ ハダ ゲッコ ミデキタンダゲット トッテモ イライネ。 サミ サミ。	×	○	×	×
016 B: イキ° デクテ イキ° デクテ イ ダノニ イガッタヤー オラ。	017 A: オー イガ オー イ オ。	×	○	×	×
006 B: アーオラ。アー アラララトラ イダヨー オラ。イダマスゴダ ナンーダ ベヤー。	005 A: ンダベツチャー コンヤ クーガ ド オモッテヤ サガナ トライデシマ ッタ ンットニ チクショー。	×	○	×	×
005 B: トスダガラ キツケネゲネーノニ オラー――。	006 A: イヤイヤ ドーモ イソカ° スド ギ キテモラッテ。	○	○	○	×

表1 感動詞「オラ」の分析結果一覧

代表形	語形	場面	前文脈
オラ	オラー	荷物運びを頼む	004 A: イマサー ダイゴンド ハクサイ ドッサリ モラッテ モ モ オモデクテヤー (B ヤーヤーヤーヤー) コゴデ ヤスンデヤンダー。
オラ	オラー	荷物運びを頼む	010 A: ケルワゲデネゲット アンダサ スコシ ワゲデヤッカラ。
オラ	オラ	野菜をおすそ分けする	005 A: イマサー ハダゲサ キタゲット ナス ドッサリ ナッテ (B アー) ナリスキ [°] ダガラ スコシ オイデインカド (B ウン) オモッテヤー。
オラ	オラー	野菜をおすそ分けする	005 A: イマサー ハダゲサ キタゲット ナス ドッサリ ナッテ (B アー) ナリスキ [°] ダガラ スコシ オイデインカド (B ウン) オモッテヤー。
オラ	オラ	足をくじいた相手を気遣う	003 A: アシ クジーダガモシンネ。
オラ	オラナー――	帰宅の遅い孫を心配する	006 A: ウーン。
オラ	オラ	ハサミを取ってきてもらう	003 A: アレ ナヤガラ シ シ シ シェンテーバサミ バ キル。コレゴレ シェンテーバサミ ミジケクテ タゲードゴ トドガネガラヤー。ナヤニ アッカラ。
オラ	オラ	ハサミを取ってきてもらう	005 A: アブネグネーゲットモヤー。
オラ	オラ	夫が飲んで夜遅く帰る	006 A: タッテライネガラ。サミクテ ワガンネー アゲデケロ。
オラ	オラ――	初物のサンマを食べる	005 A: アレ フネノ シッテルヒト イッペー。 アノ チョード イギアッテ (B アー――) キョー チョード ミズアケ [°] シタンダッツガラ。
オラ	オラ	瓶の蓋が開かない	007 A: オヤオヤ。
オラ	オラ	外が寒いことを話す	001 A: イヤイヤイヤ キョー ンット サミー ソド。ヒョーテンカ ナンドダベナー コンデナー。
オラ	オラ	福引の大当たりに出会う	015 A: オー―― オラ ハズレダデバ。
オラ	オラ	猫を追い払う	005 A: ウアー。
オラ	オラ――――	入院中の知り合いを見舞う	004 A: ンダガラネー。 キャダズ オッテ (B ナンーダベ トス) コスブッテシマッテ。

危なくないけどもさ。

006 B：アララ ダメダ ダメダ。アブネガラ ヤメデケライン。アララララ ナンダッテ
あらら 駄目だ 駄目だ。危ないから やめてください。あらららら なんと

オラ。 トシ カンケ° ネデ イズマデ アガッテンダベー。ヤメライン ダメダ
まあ。 歳 考えないで いつまで 上がってんだろう。やめなさい 駄目だ

ダメダ アブネガラ。
駄目だ 危ないから。

007 A：ンデ ヤメツカラ イー ンデ。
じゃあ やめるから いいよ じゃあ。

3. 調査結果

表1は、場面設定会話全65場面の談話資料を対象に、感動詞「オラ」を抜き出して分析したものである。表1の「長音化」の有無から、感動詞「オラ」は形態面では基本形と長音化の2種類が認められる。また、表の「平板調」「上昇調」「下降調」の有無から、音調面では平板調イントネーション、下降調イントネーション、上昇調イントネーション、平板調＋下降調イントネーションの4種類が認められた。なお、「帰宅の遅い孫を心配する」場面で現れた「オラナーー」という語は、感動詞「オラ」に「ナーー」という終助詞が付いている。そのため本来であれば、形態上感動詞として扱うべきではないのかもしれないが、代名詞の「オラ」ではなく、以下に示すように感動詞としての用法を持っているため、今回は感動詞として拾うことにした。ただし、「オラナーー」という語は、ほかのオラ系感動詞との混同を避けるため、表1における「長音化」「平板調」「上昇調」「下降調」の有無を表示することはしない。また、感動詞として不完全な「オラナーー」の感情的意味を考察するのは、用例が一つしかないことから難しいと判断したため、今回は感情的意味を考察しないこととする。

010 B：ウン ハイハイ。(A ウン) ドーモドーモネ。アリカ° ドネー。ドーモー。
うん はいはい。(A うん) どうもどうもね。ありがとうね。 どうも。

011 A：ウンウン。ハイ ドーモー。
うんうん。はい どうも。

[談話資料の例2]

収録日時 2023 (令和5)年 10月29日

話者 A 男性 1936 (昭和11)年 (収録時87歳) [Bの夫] 出身地：女川町石浜
B 女性 1942 (昭和17)年 (収録時81歳) [Aの妻] 出身地：旧河南町須江

収録担当者 木村安未紗

文字化担当者 木村安未紗

〈場面〉ハサミを取ってきてもらう

001 A：アンダー。
あんた。

002 B：ハイイ。
はい。

003 A：アレ ナヤガラ シ シ シ シェンテーバサミバ キル。コレゴレ
あれ 納屋から × × × 剪定バサミを 切る。これこれ

シェンテーバサミ ミジケクテ タゲードゴ トドガネガラヤー。ナヤニ
剪定バサミ 短くて 高いところ 届かないからさ。 納屋に

アッカラ。
あるから。

004 B：ンオー オヤオヤオヤ ナヌーステヤノ アンダ ト イートスステ ハスゴサ
おー おやおや 何してたの あんた × いい歳して 梯子に

アガッテ アンブネデバ オラ。マンズマンズ コノ ズー。
上がって 危ないのに まあ。まあまあ この 爺。

005 A：アブネグネーゲットモヤー。

〈場面〉野菜をおすそ分けする

001 A：コンニチワー。

こんにちは。

002 B：ハーイ。

はい。

003 A：イダー。

居る？

004 B：イダヨー。

居るよ。

005 A：イマサー ハダゲサ キタゲット ナス ドッサリ ナッテ (B アー)

今さ 畑に 来たけど 茄子 どっさり なって (B あー)

ナリスキ° ダガラ スコシ オイデインカド (B ウン) オモッテヤー。

なりすぎたから 少し 置いて行こうかと (B うん) 思っさ。

006 B：アララララ。コノ アズノニ オラ ヨグ。アラ リッパナナスナゴド

あらららら。こんなに 暑いのに まあ よく。あら 立派な茄子なこと

オラー。コイズ ナニ ミンナ イーノ。

まあ。これ 何 みんな いいの？

007 A：コドシ ジマンスルワゲデネゲット ン ナス ンット イクテヤー。

今年 自慢するわけでないけど × 茄子 すごく 良くてさ。

008 B：ンーー マズ コノマスゴダ。(A ウン) ヤヤヤ オモデーノ (A ウン)

ふーん まあ 好ましいこと。(A うん) いやいやいや 重たいの (A うん)

モッテスケデ (A ウン) アリカ° ドネー。ドーモドーモ。

持ってくれて (A うん) ありがとうね。 どうもどうも。

009 A：マダ モッテクッカラヤー。

また 持ってくるからね。

- ・足をくじいた相手を気遣う
- ・夫が飲んで夜遅く帰る
- ・隣人が回覧板を回さない
- ・瓶の蓋が開かない
- ・孫が一等になり喜ぶ
- ・孫が一等を逃しがっかりする
- ・福引の大当たりについて話す
- ・買ってくるのを忘れる
- ・景品がみずばらしい
- ・タバコをやめない夫を叱責する
- ・孫の大学合格を褒める
- ・食事の内容が気に入らない
- ・嫁の起きるのが遅い
- ・タバコのことを隠している夫を疑う
- ・冷房の効いた部屋から出る
- ・暖房の効いた部屋から出る
- ・沸騰した薬缶に触れる
- ・初物のサンマを食べる⁽⁴⁾

- ・ハンカチを落とした人を呼び止める
- ・バスの中で声をかける
- ・スーパーで声をかける

[地域オリジナル場面設定会話一覧]

- ・カメムシが服に入っていた
- ・秋刀魚祭りで焼きたてのサンマを食べる
- ・魚屋にサンマを買いに行く
- ・みなと祭りの花火を見に行く
- ・みなと祭りの海上獅子舞で自分の地区の船が岸壁に近づいてくる
- ・山にコゴミを採りに行く
- ・獅子振りの獅子が天井を噛む
- ・出島架橋の移動を見る
- ・潮干狩りに行く
- ・道路にシカがいた
- ・夫が釣りから帰ってきた

2-3-5. 文字化作業

東北大学方言研究センター編(2013、2019)で示されている「文字化の方法」を参考に、方言文字化部分を表音的片仮名表記で示し、共通語訳を漢字仮名交じり表記で併記しながら、収録した場面設定会話の文字化作業を行った。また、文字化した会話の例として、「野菜をおすそ分けする」および「ハサミを取ってきてもらう」の2場面の談話資料を以下に載せる。なお、録音した音声データには、話者2名の会話が重なっている部分が多々あった。本研究では会話の中の感動詞を抜き出すことを目的としているため、今回は会話の重なり部分を表示することはせずに談話を提示する。

2-3-6. 感動詞の抽出

収録した会話の文字化作業を経て作成した談話資料を用い、感動詞の抽出を行った。

[談話資料の例1]

収録日時 2023年(令和5年) 10月17日

話者 A 男性 1936(昭和11)年 (収録時87歳) [Bの夫] 出身地: 女川町石浜
B 女性 1942(昭和17)年 (収録時81歳) [Aの妻] 出身地: 旧河南町須江

収録担当者 木村安未紗

文字化担当者 木村安未紗

がいったという確認が取れ次第、話者に自由に会話をしてもらい、収録を行った。

一方、筆者の日頃の観察を通すと、上記の設定場面以外にも、地域特有の生活事象や年中行事から現れる感動場面もあると思われた。そこで、女川町の祭りや特産物、行事、日常の様子などを場面要素に取り入れた地域オリジナルの設定場面を用意し会話の収録も行い、計11場面の会話を収録した。地域オリジナルの場面設定会話については、話者と相談しながら具体的なタイトルや場面設定を決めていき、同じように収録前の練習を経て会話の収録を行った。収録は2024年4月から5月にかけて行った。地域オリジナルの場面設定会話の各項目を取り入れた具体的な理由として、「みなと祭り」や「秋刀魚祭り」、「獅子振り」などの祭りや行事は、住民にとって気持ちが昂る出来事の一つであることが挙げられる。それに伴う様々な感動詞も得られることを想定し、場面設定会話に取り入れた。食材を買いに、あるいは採りに行く場面要素が含まれるものは、それを発見したときに感動詞が発せられることを想定し、場面設定会話に取り入れることにした。「出島架橋の移動を見る」という場面については、祖父母が実際にその現場を見に行った際、人の多さとクレーンの大きさに圧倒されたと話していたことから、なんらかの感動詞が得られると考えた。地域オリジナルの場面設定会話は、全て実際に話者が経験した実話をもとに場面設定を行っている。

本調査全体で合計65場面の会話を収録した。東北大学方言研究センター編(2019)を参考に収録した場面設定会話と地域オリジナルの場面設定会話の一覧を以下に示す。

[場面設定会話一覧]

○要求表明系－要求反応系

- ・荷物運びを頼む
- ・ハサミを取ってきてもらう
- ・旅行へ誘う
- ・庭にきた鳥を見せる
- ・預かった荷物を届ける
- ・頭痛薬を勧める
- ・入山を翻意させる
- ・病院の受診を促す

○疑問表明系－疑問反応系

- ・玄関の鍵が開いていて不審がる
- ・天気予報を不審がる
- ・玄関の鍵をかけたか確認する
- ・魚の新鮮さを確認する

○感情表明系

- ・お茶をこぼす
- ・よそ見をしていてぶつかる
- ・のど自慢での優勝を祝う
- ・福引の大当たりに出会う

- ・駐車の許可を求める

- ・バスの時間が近づく
- ・車の危険を知らせる
- ・写真を撮る

○恩恵表明系－恩恵反応系

- ・野菜をおすそ分けする
- ・渋い柿を食べる
- ・畑の処理を迷う
- ・帰宅の遅い孫を心配する
- ・花瓶を倒す
- ・久しぶりに友人に出会う
- ・猫を追いかう

○主張表明系

- ・メガネを探す
- ・自動車同士が接触する
- ・外が暑いことを話す
- ・外が寒いことを話す
- ・ガソリンの値上がりについて話す

○関係構築系

- ・入院中の知り合いを見舞う

きる。また、感動詞の調査現場では、話者に具体的な場面に身を置いている実感が生まれてこそ、ことばの持つ適切な情報が得られるものである⁽³⁾。このことから、感動詞の調査では、自由会話よりも場面設定会話の方が有効であると判断した。以上の理由から、日常生活のさまざまな場面が切り取られ、細かい場面要素で場面設定がされている、東北大学方言研究センター編(2019)の場面設定会話を本調査でも使用することにした。

2-3-2. 話者

事前調査における話者は2名で、女川に生まれ育った、筆者の祖父と祖父の姉であった。

本調査における話者は、筆者の祖父母とし、本論文では祖父を話者A、祖母を話者Bと表示する。話者Aは女川町出身であるが、話者Bは旧河南町(現石巻市)出身である。旧河南町と旧石巻市は隣接している。本来であれば、女川町出身の話者同士の会話が望ましいが、より自然な会話の収録を試みるため、夫婦とした。話者Bは21歳の時に女川町へ嫁ぎ、出身地を離れてから現在までの期間が長く、ほかの女川町出身者が話者Bの会話を聞いてもことばへの違和感はないとのことである。筆者の普段の聞き取りにおいても、話者AとBの間に異なる部分は聞かれない。また、話者Aの出身地女川町石浜と話者Bの出身地旧河南町須江は、2-2にも示した加藤(1992)による県内方言区画では女川町と同じ県北半方言に属している。本調査における話者の情報をまとめると次のようになる。

話者A 男性 1936(昭和11)年(収録時87歳) 女川町石浜出身、林業

話者B 女性 1942(昭和17)年(収録時81歳) 旧河南町須江(現石巻市須江)出身、専業主婦

2-3-3. 収録地点

収録地点は、女川町石浜である。話者の自宅にて会話の収録を行った。

2-3-4. 場面設定会話の選択と会話収録の実施

談話調査における場面設定会話は、東北大学方言研究センター編(2019)に記載されている「設定場面一覧」と「各場面の解説」を参考にし、150を超える場面の中から54場面を選択して会話の収録を行った。収録は2023年10月から12月の期間中、6期に分けて実施した。具体的な場面の選択について、感動詞は感情が伴うことばであることから、初めに感情の動きが著しいと思われる場面(例：場面「孫が一等になり喜ぶ」など)をピックアップした。一方で、そうした場面のみを選択した場合、感動詞に偏りが出る可能性も考えられたため、比較的感情の動きが小さいと思われる場面(例：場面「畑の処理を迷う」など)も適宜選択した。東北大学方言研究センター編(2019)の場面設定会話を選択したのは、①感動詞が出やすい場面が積極的にとられている、②自由会話に比べて日常会話に深く入り込めるという理由からである。収録の際は、まず書かれている具体的な場面の場面設定を話者に伝えた。伝える際、書かれていることをそのまま読み上げるのではなく、場面における話者同士の関係性を伝えた上で、「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「いかにして」といったことを方言で伝えていった。次に、筆者が伝えた場面設定を話者2名が正しく理解できているかを確認するために、話者に設定場面の概要を説明してもらった。理解できていない場合は、指定した場面内容を再度説明するという過程に戻り、理解できていた場合、話者に収録前の練習を行ってもらった。最終的に話者2名から練習で納得

のかを問題とした。データ収集は場面設定会話を収録し、それを文字化した上で感動詞を抽出して形式の種類を明らかにした。また、談話調査によって得られた感動詞の中から、「アラ」「オヤ」「イヤ」「ヤ」「オラ」「ドゴニ」「ホレ」「マダ」、これら8つの感動詞を取り上げ、意味分析を中心に考察を行った。

本稿では、意味分析を行った感動詞の中から、男女差が顕著に現れ、さらに、形式の出現位置がほかの感動詞と異なるという特徴がみられた感動詞「オラ」を取り上げる。感動詞「オラ」にどのような形態的操作と音調的操作が見られるのか、それが形式の意味とどのように関わっているのかを明らかにする⁽¹⁾。また、類似する感動詞「アーオラ」との共通点を示し、人称代名詞との関係や形式の出現位置の特徴を考察することで、感動詞「オラ」の用法を明らかにする。

2. 調査の概要

2- 1. 調査地女川町の概観

今回、調査地として選んだのは、上述の通り宮城県牡鹿郡女川町である。女川町は宮城県の東側、牡鹿半島の付け根に位置する。北部、西部、南部にかけて石巻市に隣接し、西部の一部と東部は太平洋に面している港町である。また、東日本大震災後に創設された「三陸復興国立公園」地域に指定されている。北上山地と太平洋が交わるリアス海岸は天然の良港を形成し、カキやホタテ、ホヤ、銀鮭などの養殖業が盛んである。世界三大漁場の一つである金華山沖漁場が近いことから、魚市場には年間を通じて豊富な魚種が数多く水揚げされている。

2- 2. 女川町の方言

女川町の方言は、加藤(1992)による方言区画では、「県北半方言①」に分類される。気仙沼市から牡鹿半島にかけての三陸沿岸、また北上川以東地域の方言に該当する。過去には、佐藤亮一(1966)によるアクセント調査が、女川町の尾浦地区と鷺神浜地区で行われたことがある。また、東北大学方言研究センター編(2013)が、宮城県被災地沿岸15市町の方言会話収録を行った際、女川町も当該調査地域に含まれていた。そこでは、自由会話や場面設定会話が収録された。また、会話に現れた特徴を中心に、伝統的な女川町方言の音声や文法が「宮城県牡鹿郡女川町の方言概観」としてまとめられている(p.213-218)。

2- 3. 調査の方法

2- 3- 1. 調査方法の選択

事前調査として、2023年9月10日、女川町在住の話者2名による自由会話を収録した。そこでは会話の場面を設定せずに、話題(テーマ)のみを提示して、話者2名に自由に会話してもらった。この事前調査の結果から、大枠の話題だけの自由会話だけでは感動詞が出現しにくいということがわかった。加えて、感動詞は日常生活で実際に生起する話題が盛り込まれる何気ない会話の中に出現しやすいという特徴があることが確かめられた。自由会話は、会話が自然なものに近いという特徴があるものの、座談会風の会話であることから、会話の内容が説明的なものになりやすく、相手に働きかけるような表現が現れにくいという面を持ち合わせている⁽²⁾。一方で、場面設定会話は演技性が高くても、自由会話に現れにくい言語現象や、実際の行動の中で行われる話者同士のやりとりを捉えることがで

感動詞「オラ」の用法

—— 宮城県牡鹿郡女川町における談話調査から ——

木村 安未紗

はじめに

地域の感動詞の使用実態はどのようになっているのか。方言調査の事例が極めて少なく、特に感動詞の使用実態も不明である宮城県牡鹿郡女川町において、この課題を調査・考察してきた。本稿は、修士論文において意味分析を実施した感動詞の中から、感動詞「オラ」を取り上げたものである。感動詞「オラ」の形態的操作と音調的操作を観察し、それが感動詞の意味とどのように関係しているのか、その特徴を見出す。また、類似する感動詞「アーオラ」との共通点や人称代名詞との関係、形式の出現位置についても触れ、感動詞「オラ」の用法を明らかにする。

1. 問題の所在と本稿の目的

感動詞は言語にとって周辺的な要素とみなされたり、範疇が複雑すぎると考えられてきたことなどから、研究が遅れている分野である。近年、日本語学では談話の中で感動詞を扱う研究に注目が集まるようになり、感動詞がフィラー、あいづち、応答詞、心的処理標識、心的情動標識などといった機能を果たすものとして研究が行われている(定延・田窪1995、田窪・金水1997、富樫2005、森山1996など)。日本語学での感動詞研究の進展を受け、近年では方言学においても研究が進んできている。全国的な地域差を扱うものには、澤村・小林(2005)や方言研究ゼミナール(2006)、小林隆編(2022)などがある。渋谷(2002)や琴(2005)、松田(2015)は、談話の中で感動詞を扱っている。地域ごとの感動詞研究には、船木(2009)や小林隆(2011)、田附(2018、2022)などがある。宮城県内では気仙沼市で感動詞研究が進んでおり、小林・澤村(2012)や東北大学方言研究センター編(2021・2022・2023)、勝又(2024)などがある。しかし、方言の感動詞研究は限られた地域でしか調査が行われていない。また、東北大学方言研究センター編(2021・2022・2023)の中で小林隆氏は、オノマトペ、感動詞、言語行動といった分野が、全国の中でも東北方言に特徴が色濃くにじみ出ていることから、被災地方言についての記録は、それらの分野の調査に優先的に取り組む必要があることを述べている。

今回筆者が調査地とした女川町は東日本大震災で大きな被害を受けた地域であり、住民の高齢化が年々進行している地域である。また、同地域での方言感動詞の使用は高年層に多く見られるということが日頃の筆者の観察からわかっており、早急に調査を行う必要性があると考えられる。また、感動詞研究が進展している気仙沼市と同一の方言区画内に位置していながらも、筆者の調査から両地域には異なりがあることがわかってきた。例えば、気仙沼市の感動詞「バ」が女川町にはなく、同じ県内の沿岸部でも地域的なバリエーションが存在する。そこで、女川町における感動詞の使用実態を明らかにすることを研究の目的とし、修士論文では、女川町でどのような感動詞がどのように使われている

表2 明治42年 学事簿冊内に綴られている申請書一覧(種類別) 「明治四十二年 学校 市町村立学校 実業学校 報告 教科用図書」より作成

郡名	町村名	学校名	備考
杜鹿郡	蛇田村	蛇田農業補習学校	季節教授(10月下旬から12月下旬まで)
	渡波村	町立渡波農業補習学校	季節教授(10月下旬から12月中旬まで)
	稲井村	稲井村立稲井農業補習学校	季節教授(11月上旬から翌年1月下旬まで)
		稲井村立眞野農業補習学校	季節教授(11月上旬から翌年1月下旬まで)
		稲井村立金山農業補習学校	季節教授(11月上旬から翌年1月下旬まで)
刈田郡	大平村	大平村立実業補習学校	季節教授(12月1日から翌年2月28日まで)
	根白石村	村立根白石農業補習学校	季節教授(冬季・農業間隙)
宮城郡	利府村	村立利府農業補習学校	季節教授(11月15日から翌年2月15日まで)
	岩切村	村立岩切農業補習学校	季節教授(12月1日から翌年3月31日まで)
	宮澤村	村立宮澤農業補習学校	季節教授(11月16日から翌年2月28日まで)
栗原郡	金成村	村立金成実業補習学校	季節教授(12月1日から翌年3月31日(裁縫科))
	高清水村	高清水町立高清水実業補習学校	通年教授
	藤里村	村立瀬峰実業補習学校	季節教授(12月1日から翌年3月31日まで、女子は翌年4月20日まで)
	村立大里	村立大里実業補習学校	季節教授(12月1日から翌年3月31日まで、女子は翌年4月20日まで)
	清滝村	村立山田農業補習学校	季節教授(10月20日から12月20日まで)
柴田郡	長岡村	村立長岡実業補習学校	季節教授(12月1日から翌年3月31日(農業科)、翌年4月30日まで)
	姫松村	姫松村立姫松農業補習学校	季節教授(9月21日から翌年3月20日まで)
	相岡村	相岡村実業補習学校	季節教授(10月から翌年4月の7か月間、間隙を利用)
	宮戸村	宮戸村立宮戸実業補習学校	季節教授(11月から翌年2月(農業科)、裁縫科は小学校の休業時間(準準))
	前谷地村	前谷地村立前谷地実業補習学校	季節教授(10月16日から翌年2月28日まで)
柳生郡	鹿又村	村立鹿又実業補習学校	季節教授(11月から翌年1月まで)
	赤井村	村立赤井実業補習学校	季節教授(11月1日から翌年2月末日まで)
	中津山村	中津山村立実業補習学校	季節教授(10月から12月まで)
	楳生村	楳生村立実業補習学校	季節教授(10月から12月まで)
	野蒜村	野蒜村立野蒜実業補習学校	季節教授(10月から12月まで)

郡名	町村名	学校名	改正内容	手続最終の日付	備考
名取郡	秋保村	村立野尻工業補習学校	位置と名称の変更	明治41年7月29日(発送)	村立野尻工業補習学校⇒秋保村立秋保工業補習学校と改称
栗原郡	若柳町	若柳町立女子実業補習学校	名称と学則の変更	明治42年1月14日(発送)	若柳町立女子実業補習学校⇒若柳実業補習学校と改称、男子のために商業の授業を設ける。
	清滝村	清滝村立清滝農業補習学校	学則の変更	明治42年12月24日(発送)	修業期間等の変更など。
通田郡	寛銀村	寛銀村立吉住農業補習学校	学則の変更	明治42年4月16日(発送)	修業年限の延長など。
宮城郡	岩切村	岩切村立岩切農業補習学校	学則の変更	明治42年11月9日(発送)	第五条の変更⇒「及農業間隙ノ時」を削除
柳生郡	鷹来村	鷹来村立鷹来農業補習学校	名称の変更と学則変更	明治42年12月2日(発送)	鷹来村立鷹来農業補習学校⇒鷹来村立鷹来実業補習学校と改称、教授期間の変更

表1 宮城県の実業補習学校数推移(明治34(1901)年から昭和9(1934)年の『宮城県統計書』(学事編)
明治34(1901)年から明治42(1909)年の学事簿冊より作成)

	実業補習 学校数 (宮城県統 計書)	前年対比
明治33年(1900年)		
明治34年(1901年)	3	
明治35年(1902年)	20	17
明治36年(1903年)	28	8
明治37年(1904年)	25	-3
明治38年(1905年)	25	0
明治39年(1906年)	32	7
明治40年(1907年)	30	-2
明治41年(1908年)	30	0
明治42年(1909年)	64	34
明治43年(1910年)	106	42
明治44年(1911年)	145	39
大正元年(1912年)	165	20
大正 2 年(1913年)	171	6
大正 3 年(1914年)	164	-7
大正 4 年(1915年)	171	7
大正 5 年(1916年)	169	-2
大正 6 年(1917年)	187	18
大正 7 年(1918年)	207	20
大正 8 年(1919年)	222	15
大正 9 年(1920年)	201	-21
大正10年(1921年)	200	-1
大正11年(1922年)	193	-7
大正12年(1923年)	196	3
大正13年(1924年)	210	14
大正14年(1925年)	217	7
大正15年(1926年)	222	5
昭和 2 年(1927年)	218	-4
昭和3年(1928年)	222	4
昭和4年(1929年)	222	0
昭和5年(1930年)	217	-5
昭和6年(1931年)	213	-4
昭和7年(1932年)	213	0
昭和8年(1933年)	215	2
昭和9年(1934年)	217	2

も多く出された。これによって、これまで郡によって実業補習学校の整備が統一されていたのが、「訓令甲第九號」によって、宮城県による実業補習学校の整備となった。また、郡から宮城県の整備への移行が行われたのが大正6年から大正10年の間である。この宮城県の実業補習学校の整備の統一は大正15（1926）年まで積極的に進められ、それ以降は、ほとんど新たに学校が設置されることはなく、改正の手続き以外の申請書の提出はほぼ見られなくなる。以上より、第3期は宮城県による実業補習学校整備の時期であるといえる。

おわりに

以上より、2つのことが明らかになった。まず、宮城県の実業補習学校の展開は3つの整備主体の変化によっても区分できることである。第1期が町村による実業補習学校運営の時期、第2期が郡による実業補習学校整備の時期、第3期が宮城県による実業補習学校整備の時期である。

この区分方法によって、従来言われてきた実業補習学校の町村運営から国家による整備という流れではなく、その2つの時期の中間に郡という地域行政組織も実業補習学校の整備に大きく関わっていたことが明らかになった。このことは、郡と実業補習学校との間に深い関係性があったことを示唆しており、実業補習学校の研究と郡の研究、両者の研究を発展させていくうえで注目すべき点であると考えられる。

特に、郡は常に廃止論にさらされていた⁶⁵ことから実業補習学校の整備が郡にとっていかなる利益をもたらしたのか、実業補習学校の発展が郡存続の実績として取り扱われたのかについては今後もっと深めていく必要がある。また、郡制は大正10（1921）年に廃止案が發布され、その2年後の大正12（1923）年に施行される。なお、大正15（1926）年には郡役所そのものが廃止されるため、大正10年から大正15年にかけては郡組織の解体が行われた時期であるといえる。その解体の時期と実業補習学校の規程の改正の時期が重なっていることから、郡の廃止と実業補習学校の全国統一化に関係性があるのかという問いは、それぞれの研究分野において新たな知見を見出すきっかけになるのではないだろうか。今後の研究においてその部分を追求していきたい。

また、本研究では、当初予定していた地域社会と実業補習学校の関係性について深く検討することができなかった。今後の研究において実業補習学校の実態と地域社会とのかかわりがいかなるものだったのか、また今回明らかにした整備主体の変容によって実業補習学校と地域の関係性に变化があったかについて今後検討を加えていく所存である。

65 12と同上書。以下の郡に関する説明は本書より参照する。

二號」の段階では、まだ地域の状況に応じた運営であったことを言及する。

第2節 「訓令甲第九號」と宮城県の実業補習学校の変化

宮城県において実業補習学校の運営が本格的に統一されていくのは「訓令甲第九號⁵⁷⁾」からである。この訓令は、大正9(1920)年の実業補習学校規程改正⁵⁸⁾をもとに発布された。なぜなら、この大正9年の実業補習学校規程の改正が明治35(1902)年より大幅に改定がされたからである。大正9年の改正によって実業補習学校設置の基準が定まったことである。これまで規程内容の多くが「土地ノ状況」によって適宜定めることとしていたが、大正9年の改正では実業補習学校の本旨をはじめ、学校の課程や教授時数、女子の教科目、設置場所などが定められた⁵⁹⁾。

また、本規程の第15条「実業補習学校ハ学校、試験場、講習所等ニ併設スルコトヲ得。⁶⁰⁾」が明記された。このことから、これまで附属の学校として取り扱われていた実業補習学校が、「併設」となったことがわかる。すなわち、実業補習学校は独立の学校として扱われることになったことを意味する。これは実業補習学校規程が改正されたことによる実業補習学校の大きな変化であるといえる。なお、この規程の施行は「大正十年四月一日ヨリ」となっているため、大正10(1921)年2月8日に発布された「訓令甲第九號」は大正9年の実業補習学校規程の改正をもとに作られたと考える。

「訓令甲第九號」は実業補習学校教育実施要項と実業補習学校学則標準が示されている。

この2つの実業補習学校の整備が行われたことによって、宮城県の実業補習学校の設立認可申請書にも影響を与えた。この実施要項は第11章と附則で構成されている。それぞれ「設置」、「名称」、「就学及修業年限」、「教科及編制」、「教授時間及教授時数」、「教授訓練」、「設備」「実習」「入学及出席」「教員」「経費」である⁶¹⁾。この11章にそれぞれ実業補習学校の教育を行うにあたっての必要事項が示される。その内容の詳細を紹介するのは本研究では避ける。また、附則に、要項の実施日が「大正四年四月ヨリ之ヲ実施ス⁶²⁾」と示される。この「訓令甲第九號」が発布された日が大正10年であることから、この県報を作成する際に誤って記載したものと推察される。

次に、実業補習学則標準は第7章と附則で構成されている。「総則」、「修業年限及休日」、「教科」、「入退学」、「修業及卒業」、「授業料」、「賞罰」である⁶³⁾。また、附則において、「本則ノ実施ニ関スル細則ハ学校長⁶⁴⁾」が定めるとしている。

大正10年以降に提出された設立認可申請書は、市町村関係なく、おおむね実業補習学校学則標準の内容が明記されており、文言もほとんど一致をみせている。また、それに基づいて改正認可申請書

57 「宮城県報 第八百十六號 大正十年二月八日 訓令甲第九號」宮城県公文書館所蔵

58 「官報 第二千五百十四號 大正九年十二月十七日 文部省令第三十二號 実業補習学校規程」国立国会図書館デジタルコレクション

59 58の史料および佐藤守 (1984) 「第2章：実業補習学校成立と展開—わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄 (p21-93) 東京大学出版会を参照

60 58の史料の「第十五條」より引用

61 57の史料の「実業補習学校教育実施要項」より参照

62 57の史料の「実業補習学校教育実施要項」の附則より引用

63 57と同史料の「実業補習学校学則標準」より参照

64 57と同史料の「実業補習学校学則標準」の附則より一部引用

この影響から、牡鹿郡では実業補習学校の設置が相次ぐ。これは申請書の書くべき項目や文言が一字一句はっきりと示されたことにより、事務手続きが以前より容易になったものとする。

また、この雛形が独自に作成されたのは牡鹿郡だけであったかといえば、そうではない可能性があることが明らかとなった。【表3】をみてほしい。これは明治42年の学事簿冊に綴られた25校分の設立認可申請書の調査項目番号を郡ごとに可視化した表⁵⁴である。これこれを確認すると、申請書内に記載すべき項目の種類が、郡ごとにある程度統一されていることがみて明らかである。このことから、郡ごとに独自の申請書の雛形を作成していた可能性があると言える。ただし、郡独自の雛形が残っていたのは牡鹿郡の事例のみである。しかし、郡による実業補習学校の整備が行われていたことがここから言えるのである。よって、第2期は郡による実業補習学校整備の時期といえるのである。

第4章 第3期—宮城県による実業補習学校整備の時期

第1節 「訓令甲第二十二號」と実業補習学校運営の変化

第3期は宮城県による実業補習学校整備の時期である。その期間は、大正6(1917)年から昭和9(1934)年にかけてである。高橋氏⁵⁵の研究では第3期を宮城県における実業補習学校完成の時期とした。

これまでは郡による実業補習学校の整備が行われてきたが、大正6年度以降から宮城県による実業補習学校整備が見られ始める。まず、大正6年に宮城県より「訓令甲第二十二號⁵⁶」が發布された。この訓令では、実業補習学校が義務同様の学校として位置づけられ、義務同様の学校としていくために設置標準が定められた。ここでは主に修業年限や教科目に関する事、教授時数や授業料に関する事、教員に関する事、実施年度などが明記されている。なお、この訓令の実施年度は訓令が發布された次年度の大正7(1918)年であった。

この訓令發布以降、実業補習学校の設立認可申請書が多くの市町村より提出されたが、それと同時に改正認可申請書も多く提出された。改正認可申請書が多くみられる現象は、この訓令によって義務同様の実業補習学校へと変わった影響があると考えられる。もっといえば、「実業補習学校設置標準」の第8項が明記されたことが実業補習学校の改正を最も促した要因であると考えられる。第8項は従来から存在していた季節実業補習学校に対して、設置標準で定めたすべての趣旨に改めることとしている。その対象となる実業補習学校は尋常小学校卒業後2年以内の者を収容しているところであった。よって従来の実業補習学校は第8項に基づいて改正していったと考えられる。

また、廃止申請書にも変化が見られた。それは郡ごとに複数あったすべての学校を廃止して当たらに1つの学校を設立、もしくは従来存在していた学校のうち1校を改正し、残りの学校をすべて廃止する傾向がみられた。これは、第1期の廃止要因ではみられなかった傾向である。このことから、この時期から1市町村につき1校の実業補習学校を設置する様子がみられはじめ、宮城県による実業補習学校の統一化がはじまったといえる。ただし、義務同様の学校になったとはいえ、「訓令甲第二十

54 「明治四十二年 学校 市町村立学校 実業学校 報告 教科用図書」より作成

55 4と同上

なお、高橋氏はこの第3期を大正6(1917)年から大正10(1921)年までとしている。

56 「宮城県報 第四百九十三號 大正六年十月五日 訓令甲第二十二號」宮城県公文書館所蔵

第六條 教科目及其程度ハ別表ノ如シ。但、教科目ハ總テ必須科トス。

第七條 入退學ニ関シテハ、學校長ニ届出ツベシ。

第八條 授業料ハ之ヲ徴収セズ。

第九條 在學期間ノ終リニ於テ、本校所定ノ教科ヲ履修シタルモノト認ムルモノニハ、左ノ証書ヲ授与ス。

證書

族籍

氏名 生年月日

本校所定ノ学科(何期分)ヲ修了シタルコトヲ證ス

年月日

授印

学科	每週時数	課程			
		一期間	二期間	三期間	四期間
国語	三	日常須知ノ文字、普通文ノ読方、書方、綴方	〃	〃	〃
算術	二	整数、小数、諸等数、分数、歩合算、比例、珠算	〃	〃	〃
農業	一二	物理、化学、博物、土壤、肥料、作物、耕耘、農具、病虫害、養蚕、家畜	〃	〃	〃
水産	一二	水産ニ関スル事項、漁撈、養殖、製造、漁船	〃	〃	〃
商業	一二	何々	〃	〃	〃
修身	一	道德ノ要旨	〃	〃	〃
計	一八		〃	〃	〃

備考 【十時】「【内抹消】一日三時間ニシテ、午後六時ヨリ九時迄トス。（始終時間ノ伸縮スル■■ナシ）

（参考 壮丁ノ補習教育モ此時期ニ於テ、同時ニ教育スルコト）

【史料1】が申請の趣旨が示されており、明治42（1909）年の10月2日に提出された。【史料2】は牡鹿郡内で実業補習学校を設置の申請を行う際の雛形が示されている。明記されているものは申請趣旨の雛形、調書の雛形、学則の雛形である。調書の雛形は9項目と実業補習学校の収支予算表で構成されており、学則の雛形は9条と證書の雛形、教授時数表で構成されている。

この2つの史料から注目すべき点は、町村発端ではなく、郡が雛形を作成し、宮城県にこの雛形を進めていくことを進言していることである。通常実業補習学校の設置等の認可申請書類は町村が郡を経由して提出されるものである。しかし、これをみると郡が直接宮城県に進言しており、郡が独自に実業補習学校に関する変更点を宮城県に進言していたことがここから明らかである。

【史料6】「牡学第一,三六四号」(設立設置趣旨申請様式)

本村ハ従来農業ヲ以テ, 生業トナシ居候ニ付, 今後尋常小学校以上ノカアルモノニ, 右実業ニ関スル補習教育ヲ施シ度, 別記, 農業補習学校設置致度, 村会ノ決議ヲ全六条, 御認可相成度, 此段申請候也.

年 月 日 町村長 何誰 ㊤

知事宛

(別紙)

農業補習学校設置ニ関スル調書

一、名称 何々農業補習学校

二、位置, 何小学校ニ付設ス.

三、学則 別紙ノ通

四、生徒定員 何人

五、開校 年 月 日

六、敷地建物図面(坪数)

何小学校ニ付設ニ付, 省略ス.

七、収支予算 別紙ノ通

八、職員数 何人

九、区域内実業ノ状況

明治四十二年度 補習学校収支予算表

収入		支出	
一、町村費	何円	雑給	何円
二、寄付	〃	雑費	〃
三、雑収入	〃		
計	〃		〃

第一條 本校ハ農業補習学校規程ニ依リ, 農事ニ従事シ, 又ハ従事セントスルモノニ農業ニ関スル知識技能ヲ授クルト同時ニ, 普通教育ノ補習ヲナスヲ以テ, 目的トス.

第二條 本校生徒ハ, 年齢十二年以上ニシテ, 尋常小学校卒業者, 又ハ之ト同等以上ノ学力アルモノニ限ル.

第三條 本校修業期間ハ何期間トシ, 每期十月下旬ヨリ翌年何月下中迄, 夜間教授ヲナスモノトス.

第四條 授業日数ハ, 其期間ニ於ケル日曜及祝祭日ヲ除キ, 凡何日間トス.

第五條 休業日ハ日曜日及, 祝祭日トス.

た⁵¹が、実業教育の発展のみに影響を与えたわけではなかった。地方行政、とくに郡の改革にも影響を与えていた。特に郡長の改良が郡改革の主であった。

ただし、郡は明治期から存在する地方行政単位において唯一現存していない組織である。そもそも明治期の時点で郡そのものの必要性は問われており、明治の後半期に郡制を廃止させようとする動きが何度かあった。明治39（1906）年、明治40（1907）年、大正3（1914）年に郡制廃止の法案が提出される。どれも可決はされていないが、郡の不要論というのは常にあったことがここからうかがえる。この郡の不要論に対し、内務省は郡長の改良を行った。郡長を改良した要因は、これより前から、「郡長老朽問題」が上がっていたためである。

この問題を解決すべく、郡長の改良が行われる。改良内容は主に3つで、「有資格者の郡長任用」、「特別任用郡長の採用」、「地方改良講習会の開催」である。とくに「地方改良講習会の開催」が地方改良運動と結びついており、谷口氏はこの地方改良講習会が「郡長の再教育の場」となっていたことを述べている⁵²。それはこの講習会に郡長が多く参加していたため、郡長を意識した講習になったとされているからである。

実業補習学校と郡はそれぞれ地方改良運動とのかかわりがあったことが分かった。ここで注目すべき点がある。それは郡長が地方改良講習会に参加をしていたことである。すなわち、郡長が講習会で地方改良を行うためには実業教育の発展が必要であることを説かれていた可能性があるということである。では、その地方改良運動において、郡の実業補習学校の整備に変化はあったのか。

第3節 郡の整備と実業補習学校

結論を言えば、変化があったといえる。明治42（1909）年に宮城県の新潟県で独自の実業補習学校の設立認可申請書の雛形を作成し、今後それを使用していくことを宮城県に示した文書⁵³が発見された。それが【史料5】と【史料6】である。

【史料5】「牡学第一,三六四号」(牡鹿郡長からの申請趣旨)

牡学第一三六四号

学則ニシテ、最モ地方ニ適切ナル実業補習学校ヲ各小学校ニ付設セシメ度、別紙様式、学則案ヨリ、奨励ヲ加ヘ居候ニ付、為御参考相添ヘ、此如申進候也。

明治四十二年十月二日

牡鹿郡長 清野喜左衛門 ㊤

内務部長 鈴木邦藏殿

郡に関する説明は本著を参照する。

51 佐藤守（1984）「第2章：実業補習学校成立と展開－わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄（p21-93）東京大学出版会（p59-60）

52 ⁵⁰と同上書（p300）

53 「牡学第一,三六四号」「明治四十二年 学校 市町村立学校 実業学校 報告 教科用図書」宮城県公文書館所蔵

いない郡も存在するのである。

以上の3点から、実業補習学校の運営は地域によって差があったことがわかる。すなわち、この時期の実業補習学校は設置するも廃止するも地域の運営次第であったといえる。明治35年の規程改正や災害などの状況の変化によって実業補習学校の運営が左右した時期であった。勿論、高橋氏のいうように実業補習学校不振の時期とみることもできる。しかし、第1期は町村による運営の時期であったとも以上の点からいえるのである。

第3章 第2期一郡による実業補習学校整備の時期

第1節 「実業補習学校教員俸給補助規程」と明治42年以降の実業補習学校数の増加

第2期は郡による実業補習学校整備の時期である。その期間は明治42(1909)年から大正5(1916)年にかけてである。高橋氏⁴⁷はこの時期を宮城県における実業補習学校の発展の時期とした。それは第2期には実業補習学校設立してからはじめて実業補習学校数が大幅に増加したからである。高橋氏の研究では、この増加の要因を宮城県による「実業補習学校教員俸給補助規程⁴⁸」の発布をみこしたものとした⁴⁹。しかし、この規程が明治42年以降の実業補習学校数の急増の要因であるとは必ずしもいえない。それは明治42年、明治43(1910)年に設立した実業補習学校のうち、「実業補習学校教員俸給補助規程」において補助を受けられる条件を満たしていない学校がほとんどであったためである。

「実業補習学校教員俸給補助規程」が受けられる学校は2つの条件を満たしている必要があることがわかる。1つは、修業期間が2年以上かつ通年教授である学校の場合である。もう1つは実業補習学校教員として養成した者、もしくは明治40(1907)年の文部省令第28号「実業学校教員資格ニ関スル規程」に該当する者のなかで知事が指定した教員を任用している学校の場合である。【表2】をみてほしい。【表2】は明治42年に提出された設立認可申請書の通年教授か季節教授かを一覧できる。これをみる限り、通年教授の学校はほとんどないため補助を受けたいがために実業補習学校を設立しようとしているわけではないことがわかる。

この点から、明治期の実業補習学校の発展の要因は他にあると考えられる。その要因は郡と地方改良運動が結びついて実業補習学校の整備を行ったことである。

第2節 地方改良運動期の実業補習学校と郡

まず地方改良運動とは「日露戦後、町村への国政委任事務が急増するなか、財政基盤・行政機能を強化するなどの町村自治再編が求められ、青年会・報徳会・斯民会・戸主会などの補助団体の「自発性」を引き出しながら、これらを内務省一府県知事一郡長一町村長の行政系統に組み込み、町村住民の統合・国家のための共同体作り⁵⁰」であった。この地方改良運動は実業補習学校の増加にも関わってい

47 4と同上

48 宮城県報 第千五百八十四號 明治四十四年八月十五日 「県令第十八號 実業補習学校教員俸給補助規程」宮城県公文書館所蔵

49 4と同上書 (p23)

50 谷口裕信 (2022) 「近代日本の地方行政と郡制」 吉川弘文館 (p 140)

上記の史料は登米郡吉田村の廃止認可申請書である。その下に廃止の理由が掲げられていた。これを見ると、この学校の廃止の要因は尋常小学校の修業年限の延長によるものであった。この明治41年に小学校令が改正され、もともとの4年制であった尋常学校の修業年限が6年制へと引き上がった⁴⁵。なぜ義務教育の修業年限の延長が廃止の要因になるのか。それは実業補習学校に入学する予定の生徒が入学しないことや高等小学校等への小学校へ転校などの状況が発生するからである。

本史料の下線の部分をみてほしい。この理由書によれば、尋常科の義務教育年限の延長のため、入学すべき児童は9人に過ぎないことによって、実業補習学校の学年編制ができないのは、勿論のこと、同じ村内にある桜岡尋常高等小学校へ転校する児童も多く、附設学校としての存在を認めがたくなったため、廃止を村会において議決するものとした。また生徒の処分方法をみると、実業補習学校に残留した生徒は善王寺尋常小学校に第6学年を設けてそこに生徒をすべて入学させることにしている。

明治41年は廃止認可申請書が6校提出されている。これまで提出された廃止申請書よりもずっと多い。これらの廃止要因は災害や財政ひっ迫ではなく義務教育の延長による廃止であった。この廃止要因から実業補習学校は法律の変遷などの状況変化によっても実業補習学校の運営が左右されることがこの史料から明らかである。

以上の点から、実業補習学校の不振の大きな要因は災害やそれにとまなう財政ひっ迫であると同時に義務教育の修業年限の変化による実業補習学校の廃止が挙げられる。

この時期の複合的な不振要因や実業補習学校の廃止要因から実業補習学校を不振時期とみるのは妥当である。

しかし、その反面不況の時期でありながらも学校を設置運営していた事例もみられた。まず、明治35(1902)年の規程によって実業補習学校の設立の促しが行われた。それによって宮城県も明治35年、明治36(1903)年には実業補習学校を町村が積極的に設置している。

明治37(1904)年以降、実業補習学校の設立数は落ち込むが、実業補習学校の申請書類の提出状況を見ると、明治40(1907)年を除けば、毎年1校以上は設立しているのである。それこそ、明治38(1905)年の凶作の次の年にも1校設立されている。この実業補習学校は大正7(1918)年には廃校になるが、少なくとも、設立してすぐに廃校になることはなく、災害が多かった明治後半期に学校運営を行っていた。

廃止認可申請書についてである。高橋氏の言う通り、この時期は設立後すぐに廃校になる実業補習学校もある。しかしその反面、不振の時期でも運営を続けている町村の実業補習学校もあるのである。災害や財政ひっ迫、義務教育の延長など、この時期は廃止になる要因が至る所にある。しかし、そのなかでも、不振の時期を乗り越え、実業補習学校が青年学校になるまで存続する実業補習学校もある。

最後に、実業補習学校の地域ごとの設立状況である。宮城県では仙台市を抜くと16郡存在している⁴⁶。その郡ごとに設置状況が異なるのである。設置が多い郡もあれば、1回は設立したが、廃止後、設立認可申請書を提出していない郡もみられる。また、この第1期において実業補習学校を設立して

校 町村立学校 教育会 報告 教科用図書」宮城県公文書館

45 佐藤守 (1984)「第2章：実業補習学校成立と展開－わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄 (p21-93) 東京大学出版会 (p61)

46 宮城県『宮城県史3(近代史)』(1964) 宮城県史編纂委員会 (p327-335)

どである⁴¹。その災害のなかでも高橋氏は凶作による教育財政のひっ迫を指摘している。

以上の点から、この時期の実業補習学校の不振の要因は複合的なものであったといえる。しかし、その複合的な要因のなかでも実業補習学校の不振にとくに影響を与えたのは、災害による財政ひっ迫であると考えられる。実業補習学校と災害、財政ひっ迫の関わりについては、廃止認可申請書や『宮城県統計書』の「第一編 管内学事之状況」からもみられる。実際に、高橋氏も研究のなかで実業補習学校の廃止申請書や『宮城県統計書』を参照している。本吉郡にある3校の廃止例を挙げ、その学校の廃止要因は財政緊縮による郡費補助の打ち切りであったとした⁴²。なお、その3校は本吉郡の戸倉村、階上村、御岳村にあった学校である。その3校の廃止認可申請書をみると確かに郡費補助の打ち切りによって学校が廃止となっていた。しかし、そのなかでも財政緊縮による郡費補助の打ち切りともう1つ別の背景によって廃校せざるを得なくなってしまう学校があった。それが本吉郡御岳村の事例である。本吉郡御岳村の廃止認可申請書の廃止の理由は次のとおりである。

本村々立農業補習学校ノ経費、四百六拾円四銭ノ内、参百円ノ郡補助ヲ得、維持セシモ、今回ノ時局ニ関シ、経費緊縮ノ結果、郡補助ヲ削除セラレタルノミナラス、本村ハ明治卅二年赤痢病流行以来、卅五年凶作之影響ニテ、経済上多大ナル損害ヲ来シ為メニ、之ガ経費ノ負擔ニ不堪、到底維持ノ目的無之候。⁴³

御岳村の廃校の理由として経費緊縮も述べてられているが、それだけではなく、明治32（1899）年に赤痢病が流行して以来、明治35（1902）年の凶作の影響によって経済上の多大なる損害をしたため、経費負担に耐えられず、とても維持する目的がないことを述べている。このことから、学校の廃止は単なる経済緊縮だけではなく、病気や災害などの背景があつて起こることがわかる。また、これまでの不振の要因として、凶作や災害などが考えられてきたが、病気の流行もまた実業補習学校の廃止や不振の要因になっていることがこの史料によって明らかになった。

また、高橋氏が挙げた複合的な要因のほかにも廃止認可申請書より、実業補習学校の不振に影響を与えたものがあつた。その理由は次のとおりである。

本補習学校ハ、小学校令改正ノタメ、本校尋常科義務年限延長ノタメ、入学スヘキ児童ハ僅カニ九名ニ過キサルヲ以、学年編製シ能ハサルハ勿論、全村内ニ櫻岡尋常高等小学校ノアルヲ以、転校児童多ク、附設学校トシテ存在ヲ認メ難キタメ、廃止ヲ村会ニ於テ議決セルモノトス。

生徒処分方法

残留生徒九名、善王寺尋常小学校ニ第六学年ヲ設ケ、全部入学セシムルモノトス。⁴⁴

41 4と同書（p25）

宮城県『宮城県史 22（災害） 災害史 災害金石志 疫病志』（1962）

42 4と同書（p 23）なお高橋氏は本論文中の註などでどの史料からの参照が明らかにしていなかった。学事簿冊を確認のところ、学事簿冊「明治三十七年 学校 実業学校 教科用図書」の史料を参考にしていたことが判明した。

43 「御発第七〇七号 村立農業補習学校廃止認可申請」「明治三十七年 学校 実業学校 教科用図書」宮城県公文書館所蔵

44 「吉農発第八六八號 善王寺農業補習学校廃止認可申請」「明治四十一年 学校 皇室 御真影 勅語 郡立学校 実業学

該当する。)

第十條 卒業者ニハ、其証書ヲ授与ス。

第十一條 授業料ハ徴収セズ。(⇒同規程、第7条、第8項に該当する。)

まず、【史料2】は設立や廃止、もしくは改正などを認可してもらうために、市町村が申し立てを行っている書類である。ここでは「村立の小学校に実業補習学校を附設致したため、本村の村会の賛同も得ましたので、御許可いただきたく、このことを申請しました」と趣旨を述べている。

【史料3】は鷹来村ではタイトルが示されていないが、調書と呼ばれる実業補習学校の事項が示された書類である。この書類では名称、学校の位置、生徒の定員など学校に関する事項が簡潔に示される。これによって、どのような実業補習学校を設立しようとしているのかある程度分かるようになっている。

【史料4】は実業補習学校の学則である。これは、学校の組織編制や教育課程、管理事項などが定められている。これが明治35(1902)年の規程と関係している書類である。鷹来村の学則中、下線を引いた箇所が第7条の規定に該当している。また、同学則中に()を付して第7条の規定に該当する項を示した。これをみる限り、明治35年の実業補習学校規程第7条が実際の学則中にすべて反映されていることがここから分かる。つまり、この規程による事項の明確化は実業補習学校設立に影響を与えていたということである。

以上よりこの改正によって、規程内容が緩和されたことと、実業補習学校設立の際に示す学則の項目が定められ、事務手続きが容易になったことが設立を促すきっかけになったと考える。

第3節 実業補習学校運営と廃止申請書

しかし、実業補習学校の設置が促されているきっかけがあったとは言え、宮城県が明治37(1904)年以降、実業補習学校の整備が不振であったことに変わりはない。高橋氏は論文中にその不振の理由を取り上げている。

宮城県の実業補習学校の不振の最大の要因は当時の宮城県の教育会の当時優先すべき課題が義務教育段階、すなわち小学校教育段階の就学の確保であったとしている。

それと合わせて高橋氏は当時の実業補習学校の不振の要因を宮城県の教育会などの発言から3つ挙げている。1つ目は、中等教育の大衆化である。当時の青年たちが実業補習学校ではなく、中学校へ入学しようとしていたことを指摘した。2つ目は財政難であったこと、3つ目は実業補習学校の教員確保が困難だったことを指摘している³⁷。よって、高橋氏は当時の実業補習学校不振の課題は、「児童の就学確保³⁸」、「財政的補助³⁹」、「教員の量的・質的確保⁴⁰」であるとした。また、明治の後半期は凶作等の災害も多かった。実際に起こった災害は明治35(1902)年の凶作、明治38(1905)年の大凶作、明治39(1906)年の飢饉、明治42(1909)年の米価暴落、明治43(1910)年の洪水による大水害な

37 4と同書 (p22)

38 4と同書 (p22)

39 4と同書 (p22)

40 4と同書 (p22)

位置

鷹来尋常高等小学校ニ附設シ、本校内ニ置ク。

教員

鷹来尋常高等小学校教員ヨリ、兼務申請ノ見込

器具

器具、器械ハ本校ノモノ使用ノ見込

(実、三〇)

【史料4】 村立鷹来農業補習学校々則³⁶

村立鷹来農業補習学校々則

第一條 本校ハ農業ニ必要ナル智識技能ヲ授クルト同時ニ、普通教育ノ補習ヲナシ、一ハ以テ実業ノ発達ヲ分リ、一ハ以テ、青年ノ品行ヲ修養シ、風規【ママ】ヲ維持スルヲ以テ目的トス。(⇒明治35年の実業補習学校規程第7条、第1項に該当する。)

第二條 修業年限ハ二ヶ年トス。(⇒同規程、第7条、第2項に該当する。)

第三條 生徒ノ定員ヲ八十名トスルモ、時宜ニヨリ、百二十名マテ増加スルコトアリ。

第四條 生徒ハ尋常科卒業以上トス。

第五條 授業ハ毎日小学校児童退散後、二時間トス。

第六條 大祭祝日及農事繁忙ノ節ハ休業シ、農閑ノ節ハ三時乃至五時間ノ教授ヲナス【コト】「【】内抹消」モノトス。(⇒同規程、第7条、第3項、第4項に該当する。)

第七條 教科目及程度毎週授業時数左表ノ如シ。(⇒同規程、第7条、第5項、第6項に該当する。)

第一学年			第二学年	
教科目/学年	毎週教授時数	要旨	毎週教授時数	要旨
修身	二	人道実践ノ方法	二	前年ノツヽキ
国語	二	漢字交文、読方、及綴方	二	前年ノツヽキ
算術	二	諸等及比例	二	求積及開■方
作物	六	総論及各論 飼育及製種 病虫害ノ性状及駆除予防	四	前年ノツヽキ、及主要農産ノ製造
養蚕				
病虫害				
養畜			二	家畜ノ種類、及飼育管理、繁殖
計	一二		一二	

第八條 入学志願者ハ願書ヲ出スヘシ。(⇒同規程、第7条、第7項に該当する。)

第九條 半途ニ退学セントスル者ハ、其事由ヲ記シテ出願スヘシ。(⇒同規程、第7条、第7項に

36 ³⁴と同史料

続きが容易になったということである。では、実業補習学校の申請書の手続きはどのようなものであったのか。手続きの実態をみていく。

まず、実業補習学校の申請書類の認可の受け方は明治32（1899）年に出された勅令第二十九號実業学校令の第7条³²によって定められた。その内容は「第七条 工業学校、農業学校、商業学校、商船学校ノ設置廃止ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ、実業補習学校ノ設置廃止ハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ」となっている。すなわち、実業補習学校の設置と廃止は地方長官の認可を受けるのである。宮城県の場合は県知事の認可を受けることになっていた。

そのため、町村は実業補習学校の設置や廃止、また改正などの認可を受ける際は、県知事宛に町村が申請書を提出することになっている。また、申請書類の提出は市町村長から直接県知事に提出ではなく、1度郡を経由してから、県知事に提出・認可を受ける流れになっていた。これは基本的な実業補習学校の申請書類提出の流れであり、宮城県では大正13（1924）年度までそれが郡を経由した提出・認可方法が行われていた³³。しかし、大正14（1925）年以降はその方法が行われなくなる。それは郡制が廃止したことが要因となっている。

次に、認可を受ける際に市町村が提出する申請書類についてである。市町村が申請を行う際に提出すべき書類は大きく3つある。以下に鷹来村の例を示す。

【史料2】「鷹第一,二三〇號 村立実業補習学校設置申請書」³⁴

鷹第一,二三〇號

桃学第八三四號

明治卅五年五月三日

村立実業補習学校設置申請書

今般、文部省令第一號ニヨリ、本村小学校ニ実業補習学校附設【置】「【】内抹消」致度候ニ付、本村々村会ノ賛同ヲ得候間、御許可相成度、此段申請候也。

明治三十五年五月一日

桃生郡鷹来村長 佐藤久三郎 ㊤

宮城県知事 宗 像政殿

【史料3】鷹来村農業補習学校の調書³⁵

名称

村立鷹来村農業補習学校

32 「官報 第四六七八號 明治三十二年二月六日 勅令第二十九號 実業学校令」国立国会図書館デジタルコレクション

33 大正13年の栗原郡の事例

「農業補習学校学則変更二関スル件」大正十三年 学校 営立学校 県立学校 実業学校 郡立学校 図書館 教育会 宮城県公文書館所蔵

34 「鷹第一,二三〇號 村立実業補習学校設置許可申請」明治三十五年 学校 実業学校ノ二 宮城県公文書館所蔵

35 ³⁴と同史料

有し、地方長官の許可を受けた人のうちのどれかを満たしている人でなければ教員になることはできなかった。その制限がなくなったということは、これも実業補習学校規程の大きな緩和の1つであるといえる。なお教員の資格の緩和については山岸氏も指摘していた²⁹。

以上の点から、明治35年の実業補習学校規程は大幅な緩和がなされたことが明らかである。この規程の緩和が実業補習学校の設置のハードルを下げたと考えてまず間違いないだろう。なお、宮城県の実業補習学校もこの規程によって申請書を提出したことは学事簿冊の設立趣旨申請書においても明らかになっている³⁰。

第2節 設置事項と申請手続き

もう1つは明治35年の規程の第7条である。これが実業補習学校の設置を促した理由であると考ええる。第7条の内容は以下のとおりである。なお、史料内において記述されていた句読点を「。」「、」で表記、論者が付した句読点を「.」「,」と表記する。また資料中の下線も論者が引いたものである。以下に示していく史料は全てこの通りに表記するものとする。

【史料1】「明治三十五年文部省令第一号 実業補習学校規程」³¹より抜粋

第七條 実業補習学校ノ学則中ニ規定スヘキ事項凡左ノ如シ。

一 学校ノ目的

二 修業期間ニ関スル事項

三 教授ノ季節ニ関スル事項

四 休業日ニ関スル事項

五 教科目及其ノ程度ニ関スル事項

六 教科目ノ教授時間及時数ニ関スル事項

七 入学退学ニ関スル事項

八 授業料等ニ関スル事項

これは、実業補習学校の学則中に規定すべき事項が定められている。学則というのは実業補習学校の申請書、特に設立趣旨申請書を提出する際に添付すべき書類の1つである。明治35年の規程において学則中に規定すべき事項が出されたということは、実業補習学校の申請書、特に設立認可申請書を提出しやすくなったことを意味する。言い換えれば、実業補習学校の申請書を出す際の事務手

29 山岸治男（1977）「明治後期農村における実業補習学校—宮城県の場合—」『教育社会学研究 32（0）』p139-149 日本教育社会学会（p141）なお、山岸氏は明治35年の規程について「その基本的内容に大きな変化がなかった」ことを指摘している。しかし、規程をみる限り変化は存在していると考ええる。よって、山岸氏のこの説は採用しないこととする。

30 「筈第一、〇〇三號 村立尋常小学校ニ農業補習学校附設認可申請」「明治三十五年 学校 実業学校ノ二」宮城県公文書館所蔵

31 「官報 第五千五百五十七號 明治三十五年一月十五日 文部省令第一號 実業補習学校規程」国立国会図書館デジタルコレクション

まり、修業年限に限りがなくなったということである。

教科目については、明治35年の規程において水産の科目が明記されるようになったこと以外、明治26年の規程との内容に大きな変化はみられない。しかし、明治35年の第1条に「実業補習学校ニ於ケル教科目ノ修業期間及教授時数ハ、土地ノ情況ニ依リ、適宜之ヲ定ムヘシ²¹。」とあることから、教科目に関する修業期間や教授時数を土地の状況に応じて定めることがここで明確化された。だからこそ、緩やかになったと佐藤氏は考えているのだろう。

また、明治35年の第2条に「実業補習学校ニ於テハ、土地ノ情況及職業ノ種類、繁閑等ニ、生徒ノ修業ニ、最モ便宜ナル時間及季節ヲ擇ビ、教授スヘシ²²。」とある。佐藤氏が明治35年の規程が大幅にゆるやかになったと述べたのは第2条が掲げられたからであると考ええる。ここでは、実業補習学校は土地の状況、職業の種類、繁閑、生徒の修業に応じて最も都合のよい時間や季節を選んで教授をせよとしている。

もちろん、明治26（1893）年の規程にも、第9条「実業補習学校ハ、日曜日、又ハ夜間タリトモ便宜教授時間ヲ設クルコトヲ得²³」や第10条「実業補習学校ハ土地ノ情況ニ応シ、季節ヲ限り教授スルコトヲ得²⁴」のように教授時間や教授季節の便宜を図る規程内容もみられた。しかし、明治26（1893）年の規程は第2条1項「実業補習学校入学者学力ノ程度ハ、尋常小学校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ。但、尋常小学校卒業ノ者ニアラサルモ、学齡ヲ過キタル者ニ限り、実業補習学校ノ教科ノ全部又ハ一部ノ教授ヲ受クル為ニ、特ニ、学校長ノ許可ヲ得テ入学スルコトヲ得²⁵」や第2条2項「実業補習学校ニ於テハ、男女ヲ混同スルコトヲ得ス²⁶」のように、学齡を過ぎた生徒が学校長の許可を得ないと入学できないことや、男女別学であるなどの規程が示されている。つまり、教授時間や教授季節の便宜は図られたがそれ以外のことでは制限もみられた。

そのため、明治35（1902）年の規程では第1条、第2条が明記されたことによって、明治26年の規程よりも大幅に緩和されたといわれるのだろう。

他にも教員の資格についても緩和がなされている。明治35年規程の第8条「実業補習学校ニ於テハ教科目、教授時数及学級数ニ応シ、相当ノ教員ヲ置クヘシ²⁷」である。ここでは実業補習学校の教科目、教授時間、学級数に応じて相当の教員を置くこととしている。逆に、明治26年の規程では第11条に示されており、内容は「実業補習学校ノ教員ハ小学校教員又ハ其ノ資格アル者、又ハ相当ノ普通教育ヲ受ケ、実業ノ知識、又ハ経験ヲ有シ、地方長官ノ許可ヲ得タル者ヲ以テ、之ニ充ツヘシ²⁸」と教員の資格は小学校教員、その資格を持っている人、相当の普通教育を受けていて、実業の知識か経験を

21 「官報 第五千五百五十七號 明治三十五年一月十五日 文部省令第一號 実業補習学校規程」国立国会図書館デジタルコレクション

22 ²¹ と同史料より引用

23 ²⁰ と同史料より引用

24 ²⁰ と同史料より引用

25 ²⁰ と同史料より引用

26 ²⁰ と同史料より引用

27 ²¹ と同史料より引用

28 ²⁰ と同史料より引用

2期が「郡による実業補習学校整備の時期」、第3期が「宮城県による実業補習学校整備の時期」である。第2章以降で実業補習学校の整備主体の変遷の実態に迫っていく。

第2章 第1期一町村による実業補習学校運営の時期

第1節 明治35年の実業補習学校規程改正と宮城県の実業補習学校

第2章では第1期における宮城県の実業補習学校数の実態に焦点をあて、この時期がなぜ、町村による実業補習学校運営の時期であるといえるのかについて論じていった。まず第1期は明治33(1900)年から明治41(1908)年にかけてである。高橋氏の研究¹⁶では、第1期を実業補習学校の不振の時期とされてきた。それは宮城県において、この時期は実業補習学校の数が伸びず横ばいの状態が続いているからである。それを指摘した高橋氏は停滞の要因を義務教育の就学率を上げることが当時の教育会の課題であったこと災害や凶作などによる財政ひっ迫があったことを実業補習学校不振の要因として挙げた。当時の設立申請書だけではなく、廃止申請書の提出・認可もみられたことから第1期は実業補習学校不振の時期であったといえる。

しかし、はじめから不振であったわけではなく、初期の頃は設立申請書の提出・認可がほとんどであった。【表1】をみると明らかなように、前年度と比較して明治35(1901)年には19校、明治36(1902)年には8校増えている。この時期の実業補習学校の設立はおもに明治35年の実業補習学校規程の改正の影響によるものと考えられる。

この改正は、これまでの研究において明治26(1893)年の実業補習学校規程とどのように変わったのか分析されてきた。それにより、かつての内容よりも規程が緩和されているという評価がなされる¹⁷。どの点が緩和されたのか。これまでの研究からそれをみていく。なお、指摘する際は、実業補習学校規程の史料を原文より引用する。

明治35年の実業補習学校規程の改正には2つの特徴がある。1つは、明治26(1893)年の実業補習学校規程よりも、その内容が大幅に緩和された点である。

佐藤氏は、明治26(1893)年と明治35(1902)年の実業補習学校規程の内容を研究でふれている。その際に、明治35年の実業補習学校規程改正で大幅に緩やかになったのは「修業年限、教科目、教授時期、教授時数等に関する規程¹⁸」であるとした。佐藤氏の言っている規程はどの部分が変化したのか¹⁹。まず修業年限をみていこう。明治26年の規程は第8条に修業年限が定められている。その期間は「三箇年以内²⁰」であった。しかし、明治35年の規程では修業年限については記載されなくなる。つ

16 ⁴と同論文

17 ・佐藤守(1984)「第2章：実業補習学校成立と展開—わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄(p21-93) 東京大学出版会(p53)

・木下路子(2009)「実業補習学校における実業教育—日露戦後期の神奈川県高座郡を対象として—」『史勸(160)』早稲田大学史学会(p1-17)(p2)

18 ¹⁷の佐藤氏同論文(p53)

19 以下、¹⁷の佐藤氏と同論文の内容を参照する。

20 「官報 第三千二百二十一號 明治二十六年十一月二十二日 文部省令第十六號 実業補習学校規程」国立国会図書館デジタルコレクション

第2節 実業補習学校と時期区分

実業補習学校の展開過程は3つの時期に区分できる。これまでの研究においても実業補習学校の時期区分は行われている⁹。その事例を2つ挙げる。

まずは佐藤氏¹⁰の研究である。佐藤氏は実業補習学校規程の変遷で時期区分を行っている。前期、中期、後期の3つに区分した。まず、前期は実業補習学校規程が制定された明治26（1893）年から明治35（1902）年の実業補習学校規程改正までの9年間としている。この時期の実業補習学校の特徴として「義務教育の補完、小学校教育の補習¹¹」に力をいれていたことを挙げている。次に、中期は明治35年の実業補習学校規程改正から大正9（1920）年の実業補習学校規程改正までの18年間としている。この時期の特徴として実業教育に重点が置かれていたことを挙げている。最後に、後期は大正9（1920）年の実業補習学校規程改正から昭和10（1935）年の青年学校令制定までの15年間としている。この時期の特徴として、「実業教育だけではなく公民教育¹²」にも力が注がれることになったことを挙げている。

佐藤氏の定めた実業補習学校規程の変化による時期区分は実業補習学校そのものの歴史的展開をみていくうえでは大変効果的である。しかし、宮城県の実業補習学校そのものの展開や推移をみていく際には佐藤氏の時期区分では対応できない点がある。それは、宮城県では明治26（1893）年に制定した実業補習学校規程よりもあとに、はじめてその学校の設立をみることである。佐藤氏のいう前期は殆どと言っていいほど、宮城県では実業補習学校が設立していない。佐藤氏の言う中期以降からその数を伸ばし始める。よって、宮城県の実業補習学校の展開から整備主体の変遷をみていくためには、宮城県独自の実業補習学校の時期区分をしていく必要がある。

宮城県の実業補習学校の展開を時期区分した例として、高橋氏が挙げられる。高橋氏の時期区分は次のとおりである。第1期は「実補不振の時期¹³」とし、明治33（1900）年から明治41（1908）年の時期にあたる。次に第2期は「実補急増の時期¹⁴」とし、対象年度は明治42（1909）年から大正5（1916）年である。最後に第3期は「実補完成の時期¹⁵」とし、大正6年（1917）年から大正10（1921）年である。

高橋氏は実業補習学校数の増減の切り替わりを時期区分の起点にしている。区分の特徴は宮城県における実業補習学校設置の状況の変化を取り上げている。この点から高橋氏は設置の状況の変化から宮城県の実業補習学校の整備過程の変化に焦点を当てたといえる。

本研究ではそれを参照して時期区分をする。ただし、本研究は政策の変化ではなく、整備主体の変容を区分した時期から見ていく。

本研究の時期区分の内容は次のとおりである。第1期が「町村による実業補習学校運営の時期」、第

9 これまでの実業補習学校の展開の時期区分は佐藤守氏と高橋満氏の研究がある。佐藤氏は実業補習学校に関する規程の制定と改正の切り替わった年を起点として時期区分している。

10 7と同論文 以下の説明は本論文による。

11 7と同論文（p82）

12 7と同論文（p82）

13 4と同論文（p20）

14 4と同論文（p22）

15 4と同論文（p23）

宮城県において初めて実業補習学校が設立されたのは明治33(1900)年のことである⁴。なお、【表1】では明治34(1901)年から数値が示されているが、史料や論文等では明治33(1900)年に設立されたことが明らかになっている。ただし、【表1】は『宮城県統計書』則り作成したため、明治34(1901)年から数値を示している。

宮城県は東北地方のなかでは最も遅く設置された⁵。この年を境に宮城県では実業補習学校が設立されていく。しかし、明治33年から明治41(1908)年にかけては学校の設置と廃止が繰り返され、学校数は大きく伸びず、横ばいの状態が続いた⁶。明治41年時点では30校の実業補習学校が宮城県内に設立された。

その状態から脱したのは、明治42(1909)年のことである。前年とは異なり、学校数を大きく伸ばした。その数は64校である。その後、明治45(1912)年まで学校を大幅に増やし、明治末期には165校の実業補習学校が宮城県内に設立された。この時期の学校数の増加量は宮城県において実業補習学校が初めて設立されてから、昭和9(1934)年に至るまで最も多かった。よって、この明治42年から明治末期にかけては宮城県における実業補習学校設置のピークであった。

大正2(1913)年以降は明治末期の増加と比較して著しい増加は見られなくなる。しかし、大正6(1917)年を境に再び学校数が大きく増加し始める。大正8(1919)年までその増加傾向がみられる。この時期の増加量は明治末期の増加量には及ばないが、この時期はもう1つの宮城県における実業補習学校増加のピークであったといつてよい。大正9(1920)年以降、実業補習学校数が大幅に減少し、その傾向は大正11(1922)年までみられる。大正12(1923)年から大正15(1926)年にかけては実業補習学校数が増加するものの、2回あったピーク期ほどではない。

昭和期になると、かつての増加傾向はほとんどみられなくなる。表9をみても明らかのように昭和2(1927)年から昭和9(1934)年にかけては実業補習学校数の増加と減少を繰り返し、ほぼ横ばいとなる。そして昭和10(1935)年に実業補習学校は青年訓練所と合併をし、青年学校となった⁷。青年学校になった年から『宮城県統計書』には実業補習学校関連の統計は一切みられなくなる⁸。以上が宮城県における実業補習学校の展開過程である。この実業補習学校の展開過程を時期区分していく。

4 初めて宮城県で実業補習学校が設立した年は以下の資料および論文にて確認ができる。

「五九〇號 実業補習学校設置同規則認可 指令案 志田郡 古川町長」「明治三十四年学校 実業学校」宮城県公文書館所蔵 文部省総務局文書課 (1902)『日本帝国文部省 第二十八年報 自明治三十三年 至明治三十四年』(p630) 国立国会図書館デジタルコレクション

高橋満 (1984)「明治末―大正期における農村青年教育の構造と機能―主に農民支配とのかかわりで―」『長野大学紀要6 (2)』p19-38 長野大学

5 ⁴と同論文 (p21)

6 宮城県の実業補習学校数の推移の説明に関しては、以下の資料を参照する。

『宮城県統計書(学事編)』(明治34年から昭和9年まで)

7 佐藤守 (1984)「第2章：実業補習学校の成立と展開―わが国実業教育における位置と役割―」豊田俊雄『わが国産業化と実業教育』(p21-93) 東京大学出版会 p91

8 宮城県総務部統計課『昭和十年 宮城県統計書 第三編 (教育)』(1937年3月刊行)

みやぎ資料室所蔵

学校のなかでも多く数を伸ばしたのは農業補習学校であった。

大正9(1920)年になり、実業補習学校規程は再び改正されることになる。この改正によって実業補習学校制度は完成した。大正15(1926)年に青年訓練所令が制定される。この青年訓練所令によって青年訓練所ができ、そこで勤労青少年に対して軍事教育が行われていくことになる。この時期の勤労青少年たちは実業補習学校だけではなく、青年訓練所にも収容されるようになった。そして昭和10(1935)年に青年学校令制定とともに、実業補習学校は青年訓練所と統合し、青年学校となった。

従来の実業補習学校の研究は、実業補習学校の実態に焦点を当てた研究が多かった。そのため、先に示した実業補習学校の基本事項は明らかにされてきたが、地域ごとの実業補習学校の整備過程や実業補習学校の浸透過程にはまだまだ検討の余地があるといえる。また、これまでの研究において実業補習学校の評価は二分しており、地域社会と勤労青少年それぞれの教育要求を満たした学校という見方と国民を統合するための学校という見方である。しかし、この町村運営から国家による統一的な整備に至る過程は常に町村か国家のどちらかの視点でしか語られていない。実業補習学校の法律や制度の変遷に対して、それを設置する町村がいかなる対応をしたのか、整備主体がどのように変化したのかについては検討する必要があるだろう。

本研究では、実業補習学校の整備過程や地域ごとの設立状況がいかなるものであったかを宮城県の実業補習学校を事例に論じていく。ここでいう整備過程は実業補習学校の設立や廃止、学則などの改正に関する申請手続きのことを指す。この手続きが実業補習学校の歴史的展開のなかでいかなる変化を及ぼしたのかを検討・考察することが本研究の課題である。なお、実業補習学校の整備主体の変化を明らかにするために、学事簿冊に綴られた実業補習学校の申請書類²を扱った。

第1章 実業補習学校の推移と時期区分

第1節 宮城県における実業補習学校数の推移と展開

第1章では『宮城県統計書³』より、宮城県の実業補習学校数の推移を把握し、その推移から宮城県の実業補習学校の展開を時期区分した。まず、宮城県の実業補習学校数の展開は次のとおりである。**【表1】**をみてほしい。

2 宮城県の実業補習学校関連の資料は宮城県が整理保存をしていた「宮城県庁文書」の1つである。現在は宮城県図書館、宮城県公文書館に移管され、実業補習学校関連の資料はすべて宮城県公文書館に所蔵されている。移管後「県庁文書」と呼ばれた。「県庁文書」は地域史研究の基礎資料となっており、本研究で参考にした高橋氏もまた、実業補習学校の申請書類を利用している。(千葉千恵子「県庁文書」(1980)宮城県図書館杜の会『杜 第二号』)

3 『宮城県統計書』は現在宮城県図書館内にあるみやぎ資料室と国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧することができる。みやぎ資料室で閲覧できる『宮城県統計書』は明治11(1878)年から昭和13(1938)までである。ただし、一部残っていない年度もある。なお、『宮城県統計書』は奥付が存在することから本研究で『宮城県統計書』を表現する際は『』で表記する。

『宮城県統計書』が4巻構成になったのは明治36(1903)年の『宮城県統計書』からである。それ以前は明治33(1900)年までは1冊にまとめられており、明治34(1901)年の『宮城県統計書』にて5巻構成となる。『宮城県統計書』学事編は年によって呼び方が異なる。明治34(1901)年から明治38(1905)年までは「学事之部」、明治39(1906)年以降「学事」である。

明治後半期から大正期における実業補習学校の整備主体の変容

— 宮城県を事例に —

下山 千晴

はじめに

実業補習学校は義務教育を修了した勤労青少年に対して、普通教育の補習と職業に関する知識技能を授けた教育機関である¹。その修業年限は2年から3年とされ、尋常小学校を卒業した者、もしくは、卒業しなくても学齢を過ぎた者が学校に通っていたとされる。教授した科目はおもに、修身、国語(読み書き)、算術(計算)、実業科目である。この実業科目は学校によっては内容が異なり、農業を教授する学校もあれば、工業を教授する学校もあるなど、町村ごとの産業状況に応じて展開されていた。なお、女子ための実業補習学校も存在しており、そこでは裁縫や家事などの実業科目が行われていた。

また授業に関しては休日や夜間、農閑期など、時期を限定して行われた。ただし、通年教授を行っていたとされる学校も存在していたため、実業補習学校は学校の種類や地域によって差があることをここで言及する。このように、実業補習学校では単に義務教育の補完と実業の知識・技能を伝授していたわけではなく、学校や地域の状況に応じた授業や運営体制が行われていた。そのため、多種多様な実業補習学校があり、その地域の特色が学校に現れていた。

そんな実業補習学校だが、制度上あらわれたのは、明治23(1890)年の小学校令改正からである。小学校令改正の第2条によって、実業補習学校は小学校の一種として位置づけられた。小学校令中の実業補習学校に関する規程にもとづいて実業補習学校規程の制定が計画され、明治26(1893)年に実業補習学校規程が制定された。この規程により、実業補習学校が整備されはじめるが、主に西日本での設置が多く、全県に設置するに至らなかった。

その後、日清戦争において日本が勝利すると、日本の工業が発展を遂げる。その社会背景によって、明治32(1899)年に実業学校令をはじめとした実業教育制度が確立する。この実業学校令の制定によって、小学校の一種であった実業補習学校は実業学校の一種として位置づけられていく。実業学校令が公布されると、かつて明治23(1890)年の小学校令中にあった実業補習学校に関する規定はその効力を失う。実業学校令をふまえたうえで、明治35(1902)年に実業補習学校規程は改正をする。それ以降、実業補習学校は全県で設置されはじめ、学校数を全国的に伸ばしていく。なお、実業補習

1 実業補習学校の説明については以下の論文を参照する。

佐藤守 (1984) 「第2章：実業補習学校成立と展開－わが国実業教育における位置と役割」『わが国産業化と実業教育』豊田俊雄 (p21-93) 東京大学出版会

木下路子 (2009) 「実業補習学校における実業教育－日露戦後期の神奈川県高座郡を対象として－」『史勸 (160)』早稲田大学史学会 (p1-17)

山岸治男 (1977) 「明治後期農村における実業補習学校－宮城県の場合－」『教育社会学研究 32 (0)』(p139-149) 日本教育社会学会

総務省(2006)「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～」
https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf

にほんごぷらねっと(2018)「特集 日本語教育と地方創生」

https://www.nihongoplat.org/feature_page/chihososei/ (2025年2月4日最終閲覧)

野山広・福島育子・帆足哲哉・山田泉・横山文夫(編)(2022)『地域での日本語活動を考えるー多文化社会 葛飾からの発信』ココ出版

服部圭子(2022)「地域在住の外国人との「多文化共生」の街づくりに向けてー企業における外国人労働者の日本語学習に関する調査ー」『近畿大学生物理工学部紀要』49, pp.11-25

東川町立東川日本語学校ウェブサイト <https://higashikawa-jls.com/> (2025年2月4日最終閲覧)

宮城県(2023)「令和4年度宮城県多文化共生アンケート調査について」

https://www.pref.miyagi.jp/site/tabunka/r4questionnaire_2.html (2025年2月4日最終閲覧)

文部科学省総合教育政策局日本語教育課(2024)「日本語教育実態調査 令和5年度報告 国内の日本語教育の概要」



写真7 西古川振興協議会によってJR西古川駅
に掲示された横断幕
(2025年1月31日撮影)



写真8 開校2か月前のおおさき日本語学校
(2025年1月31日撮影)

謝辞

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C) 24K03974の研究成果の一部です。調査にあたっては、大崎市市民協働推進部政策課の茂和泉浩昭氏、鈴木俊光氏、瀬戸稔彦氏、熊谷賢一氏、秋山千恵氏、おおさき日本語教室代表の鈴木裕子氏をはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

参考文献

大崎市(2024)「多文化共生の推進について」

<https://www.city.osaki.miyagi.jp/shisei/soshikikarasagasu/shiminkyodousuishimbu/seisakuka/tabunkakyouseisuishin/19856.html> (2025年2月4日最終閲覧)

大崎市(2025)「令和7年1月1日住民基本台帳人口(日本人+外国人)」

<https://www.city.osaki.miyagi.jp/shisei/soshikikarasagasu/somubu/somuka/8/15556.html> (2025年2月4日最終閲覧)

大崎市立おおさき日本語学校公式ウェブサイト <https://www.osaki-jls.com/> (2025年2月4日最終閲覧)

是川夕(2025)「拡大する国際人口移動と多様化する日本語教育の役割」令和6年度文部科学省日本語教育大会基調講演配布資料

公益財団法人とよなか国際交流協会(編)、牧里毎治(監修)(2019)『外国人と共生する地域づくり—大阪・豊中の実践から見えてきたもの—』明石書店

佐野香織(2022)「多文化共生社会実現に求められる「日本語教育」とはなにか— IR 誘致をめざす佐世保市を事例として—」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』5巻, pp.37-49

澤邊裕子・瀬戸稔彦・早矢仕智子(2025)「もしあなたが住む地域に公立日本語学校があったら—作りたい学校・地域づくりのアイデアを出してみよう—」『第11回言語文化教育研究会年次大会予稿集』pp.50-55

「おおさき日本語学校は何を目指すのか」という明確なビジョンの共有が、これからも全ての取り組みの根幹となり、教育実践や地域での活動を支えるものとなっていくだろう。特に、おおさき日本語学校が認定日本語教育機関であり、登録日本語教員の資格を持った教員がその専門性を活かして地域に貢献できるという点は重要である。今後、地域では生活や就労のため、また帯同家族として日本語学習を必要とする外国人住民の増加が予想される。そうした状況の中、大崎市がおおさき日本語学校の人的リソースを活かしながら、多様な日本語学習ニーズに対応できる日本語教育人材育成の拠点となる可能性も期待される。

おおさき日本語学校が2024年10月末に認定日本語教育機関として文部科学省の認定を受けた後、学校ができる西古川地区では、「歓迎 おおさき日本語学校」の横断幕が、西古川地区公民館とJR西古川駅に掲示された(写真7)。2025年1月1日には宮城県大崎地方を中心に県北のニュースを報道している新聞、「大崎タイムス¹⁹⁾」で一面と二面において、おおさき日本語学校の誕生について特集記事が掲載された。さらに2025年2月には地元住民を対象とした校舎見学会と住民を留学生に見立てて行われる日本語模擬授業体験がおおさき日本語学校(写真8)において行われ、定員をはるかに超える約100名が参加した。こうした過程からは、現時点で日本語学校が地元住民から大きな関心を持って受け止められていることがうかがえる。今後、地域において、おおさき日本語学校はどのような存在として受け止められていくだろうか。おおさき日本語学校の歩みが、公立日本語学校として、新たな法律の下に認定された認定日本語教育機関として、日本語教育を核とした多文化共生のまちづくりに関心を持つ自治体をはじめとした多くの人々にとって参照され得る重要な事例となるのは間違いない。宮城県は全国で初めて「多文化共生社会の形成の推進に関する条例」(2007年7月施行)という多文化共生社会推進の条例を制定した県である。しかし「国籍、民族等の違いにかかわらず県民の人権の尊重と社会参画が図られる地域社会を作る」という多文化共生社会づくりの理念が宮城県でいかに実践されてきたかについては十分に明らかになっていない²⁰⁾。多文化共生の理念や目標を掲げ、自治体、地域、学校、産業が連携しながら構築するモデルを宮城県大崎市から社会に発信する意義は大きいだろう。今後、住民、留学生双方にとってのおおさき日本語学校が持つ機能について検討するとともに、公立日本語学校が地域の多文化共生に果たす役割について考え続けていくことを課題としたい。

19 宮城県大崎市に本社を置く(株)大崎タイムス社が発行している。

20 宮城県では多文化共生施策の基本的方向性を探るために、県民(18歳以上の日本人県民及び外国人住民)に多文化共生アンケート調査を実施しており、宮城県(2023)でその結果を公開しているが、日本人対象の調査は2022年度の実施が初めてであり、過去の結果との比較は現時点ではできない。県によると、次回の調査は令和9年度(2027年)に実施される計画であるという。宮城県や大崎市の多文化共生に対する意識を追跡して調査し、その結果から多文化共生の現状の変化を捉えていくことが求められる。

6. まとめと今後の展望

本稿では2025年4月に開校する本州初の公立日本語学校、おおさき日本語学校がどのような地域に誕生するのか、多文化共生のまちづくりを目標にしながら開校までにどのような取り組みがなされてきたか、また、地域社会はどのような関心を持ってそれらを見つめてきたか、日本語学校関係者はどのような思いでこの壮大なプロジェクトに向き合い、今後を見据えているか、などを2022年から2024年の3年間の調査データから3つの研究課題に基づいて分析し、考察した。本章ではこれらの結果を踏まえ、大崎市が目指す多文化共生のまちづくりの課題と展望について述べる。

研究課題(1)「大崎市における外国人住民を取り巻く状況はどのようなものか」については、3章でおおさき日本語学校の開設を契機とした市による多文化共生推進事業が精力的に進められている現状を報告した。その評価や改善は今後、日本人住民、外国人住民双方のデータから地域の多文化共生の現状、成果と課題について検証していく必要がある。また、「おおさき日本語学校」は留学の課程を持つ認定日本語教育機関であり、主に留学生を対象としているが、市民主体の「おおさき日本語教室」のようなボランティア活動を行う市民アクターとの連携やボランティアに依存しすぎない体制整備も含め、生活のため、就労のために日本語を必要としている外国人を支える仕組みが今後さらに求められていくと考える。

研究課題(2)「大崎市の多文化共生のまちづくりに関して、地元新聞はどのように報じてきたか」については、4章で地元新聞紙である「河北新報」の朝刊記事を対象に、2022年2月から2025年1月までの大崎市の多文化共生のまちづくりに関する記事を分析した。その結果、新聞報道では大崎市の日本語学校誘致名乗り、日本語学校推進室の設置、校舎選定、学生寮の場所や業者の選定、市予算の確保、教員の採用といったハード面、ソフト面の整備の過程だけでなく、地域住民を対象とした多文化共生セミナー、「やさしい日本語」講座の開催など多文化共生のまちづくりを進めていく過程についても関心を持って報道されていることがわかった。一方で、大崎市の多文化共生に関しては「おおさき日本語学校」の開設が主な関心の対象であり、「おおさき日本語教室」のような草の根的なボランティア活動や既に市に定住している外国人住民についての報道があまり行われてきていないことも明らかとなった。新聞報道等マスメディアの報道によって、おおさき日本語学校の開設が地域の多文化共生への関心が高められる可能性は高いが、それと同時に「留学生」以外に多数いる外国人住民との共生についても現状を振り返り、今後の在り方を考えていくような機会の創出が求められていくのではないかと考える。

研究課題(3)「大崎市は多文化共生のまちづくりを進めるために、開設準備過程においてどのような取り組みを行ってきたか。また、これからどのような取り組みを行っていくとしているか」については、5章で2024年のフィールドワークの記録、インタビュー調査に基づいて「開校前夜」の今を報告した。インタビューにおいては、行政、公教育、日本語教育の現場のエキスパートが対話を重ね、それぞれの知見を尊重しながら作り上げてきた学校の理念と人材育成のビジョン、また、これから起こり得る課題を乗り越え、目指す方向性に向かい続けていくという強い思いをうかがい知ることができた。おおさき日本語学校は、公立日本語学校の先進例である東川日本語学校に学びながらも、新たな法律の下で認定日本語教育機関として出発する初の日本語学校として、大崎市が持つビジョンに照らした日本語学校の目指す方向性、地域連携の在り方が検討され、着実に歩みが進められている。

校じゃないので、そこですかね。それをきちんと分かるように説明したりとか。あとは学校が始まってからも地域の方に学校に入ってきていただいたりとか、関わっていただく必要があるので、関係構築とかをしなきゃいけない。あと、東川にこの間行った時とかも、あれも東川を見ていただくっていうのもそうだったんですけど、私としては一緒に日程を過ごしてお互い顔も分かったし、どんな方かも分かったし、話ができたっていうのが大きかったなと思って。」

市職員だからこそ直面するこのような難しさはある。また、これまで関わってこなかった行政や教育分野の人々と接し、議論を重ねて物事を決めていく過程は決定まで時間がかかることもある。しかし多様な観点が入ることで、ブラッシュアップされているような感覚があると語った。日本語学校の開設準備は、行政、公教育、日本語教育のエキスパートの協働によって進められてきた。室長、校長、主任教員の三人を例にしてもそれぞれ、今まで何年、何十年と経験を積み重ね、培ってきた現場のスキルや方法、信念がある。それぞれが交じり合って、より良いものが作り出されているという実感がこうした語りからうかがえた。さらに、民間の日本語学校で教えているだけでは見えていなかった世界に飛び込み、開設過程におけるこのような経験を重ねてきたことが自身のキャリアやスキルアップにもつながっているという語りの中で、「日本語教育を専門としない人々に、知ってもらい、広げていく」役割の大きさについても語られた。

「まず個人的なことで言うとかキャリアアップなのかは分からないですけど、スキルアップができているなどはすごく思います。今まで日本語教育とか日本語学校の中だけでも一部しか見えていなかったし、ましてや、行政のこととか裏側とかバックオフィスみたいなことを経験したことは、当然ながらなかったの、そういったところに今携われているというのは非常に大きいかなと思いますし、あとと思うのはこの業界というか、日本語教育って多分、一般の方々、特にこの辺の地域の方々とか行政の方々にとっては知らない世界だったと思うんですよ。それを少しずつですけど広めていけるっていうのが、この学校だけじゃなくて日本語教育の世界から見ても、これは良いことなんじゃないかな、というふうに思いますね。(中略)結果どうなるか分かんないですけど、知ってもらおう。まずは、そこは非常に大きいかなと思います。」

行政の人や地域の人々に多文化共生、日本語教育について知ってもらおう、その第一歩として、好評なのは「やさしい日本語」講座だそうだ。

「またやるっていう話もありますし、今までは地域というか、ここ(学校周辺)とまた寮が建設される場所のコミュニティセンターみたいなところでやったんですけど、今度は市役所とかでももう少し規模を大きくしてやろうかみたいな話もあったり、あとは新入職員研修って私も受けたんですけど、そこでいろんなことを教えてもらったりとか体験したりとかするんですけど、その一つとして入れてもいいんじゃないかみたいな話も出てるので。そういう意味でもいろいろできることがありますし。」

一般の市民にはなかなか「日本語教育」の中身やその意義が何かが伝わりにくい、「やさしい日本語」をツールとすれば、興味を持ってもらいやすい。日本語教育の専門性を活かし、地域や関わる行政の人々に理解してもらいやすい形で、日本語教育の世界や多文化共生への理解を広げていくことができる。地域社会と行政における意識向上と理解促進の有効な手段として、今後もさらにこうした「やさしい日本語」を広げていく活動を継続、発展させていくことの可能性がうかがえた。

面接をしてみて)わざわざ日本に留学に来たいという人たちはやっぱりすごいな、必死なんだなど。留学してもっと日本語を勉強したい、勉強して働いて一旗あげたいとか、志と意気込みを強く感じました。」

鈴木校長は、長年教育業界にいたことから学校関係を含めたネットワークが広く、また、フットワークが軽い。4月に着任してからまず行ったのは、近隣の小中学校、高校に訪問することだった。各校の校長とあいさつを交わし、おおさき日本語学校について説明し、今後の交流について意見交換を行ったそう。そこで全ての校長から要望があったのは、留学生と子どもたちとの交流機会を作っていくことだったという。

「市内の全部の小中学校の校長先生にお会いしたんですけども、この辺ですとパキスタンの子どもたちが入ってくる状況にあると。ですから外国人の子どもが入ってくるのは案外慣れていると。でもまだまだ一人二人入ってきたからって国際交流ができるというわけではないと。実際に(留学生の)いろんな方の話を聞くということで、ぜひ交流したいという要望は非常に多かったですね。全てのどの校長先生もお話をされてましたね。」

交流の機会として、例えばPTA総会など、子どもたちの保護者が集まる機会を活用したり、交流の前に「やさしい日本語」を学べる機会を作ったりすることもアイデアとしてあるという。地域住民、学校、日本語学校それぞれの理解が深まる良い機会になるのではないかと語った。このような交流機会を積極的に、地道に重ねていくことで、徐々に多文化共生の土壌が耕されていくことを願っている。

「東川は、お話を聞いたときに、必ずしもうちの地域に残ってもらわなくてもいいんですよ、とにかく東川の良さを全世界に発信してもらって町を活性化したいという明確な意図がありました。それはそれですごい。うちは、大崎、宮城県で、住んで勉強し、いいところだなんて思ってもらって、最終的には、少しでも残って働いて住んでほしいというのがあります。」

このような語りからは、公立日本語学校が持つ意味が単純に留学生の日本語能力の向上を目指す日本語教育機関ではなく、ともに地域社会で主体的に行動していく市民を育てる場所であるという思いがうかがえた。まち全体として留学生のライフキャリアを支えながら、多様な背景を持つ人々にとって住みよい場所を形成していくために、公立日本語学校と地域の様々な団体、機関との連携は欠かせないものになるが、開校前から着実にその準備は進められていたのである。

5. 3. 3 地域や行政の人々に日本語教育への理解を広げていく——瀬戸主任教員の語りから

瀬戸主任教員は2023年10月1日に市政課の日本語学校推進室の職員となり、カリキュラムの作成など認定日本語教育機関の申請に向けて準備を進めてきた。大学卒業後、ずっと仙台市内の民間の日本語学校で専任教員として日本語教師のキャリアを順調に形成してきたが、「日本語学校(あるいは日本語学習者や日本語教師)が地域社会にうまく溶け込めていないのではないか。私たちはどのくらい地域社会に貢献できているのだろうか」という疑問があったという。そうした思いが公立日本語学校の教員に志願する後押しになったそう(澤邊・瀬戸・早矢仕, 2025)。実際に市職員として勤務を始め、戸惑ったことは、着任当初、日本語教育について経験を持っていたのが職場には自分一人しかいなかったこと、そして地域の人々との関係構築だったという。

「この中(日本語学校の中)だけでどうにかすればいい、内部だけでうまくやればいいっていう学

のは我々が思っているようなもんじゃないっていうのは、この2年間で、ちょっとは私も実感してるんですね。視野の広がりっていうんですか。それを交流なり、何なりこの学校ができて、それは期待しますよね。いわゆる人材を育てる一方で、教育的な観点っていうか。ぜひ、アメリカだ、中国だ、イギリスだ、ロシアだ、じゃない、国への契機というか、気づききっかけですよ。すごく勉強になるんじゃないですかね。(中略)例えばベトナムの子と触れ合うことによってベトナムの国の成り立ちまで分かるわけじゃないですか。日本も戦争を経験してるけど、それとまた違った戦争だったりするわけですよ。今、西側諸国の考え方に染まっている部分というのがたくさんあるけれども、そうじゃない視点っていうのも、多分垣間見るっていうか、理解できるっていうか、深められるっていうか、それはいいと思うんですよ。」

地域にいる若い世代に対する教育として視野の広がりという良い面を期待する一方で、これから起きる様々なトラブルに対しても覚悟をしているそう。例えば、留学生が地域でマナー違反をした際には、気づいた住民に注意をしてほしいと話している。顔が見える関係を作り、注意もできる関係性になることが大事だと伝えているという。

「よく多文化共生、多様性、ダイバーシティみたいな言葉で表現もされますけど、その中には定着するまでとか定着した後もしろんなことが起きてもいいですよ。でもそれも含めて我々はそこに行くんだと、その結果どういう社会を作るんだよねっていうところを明確にビジョンとして持っている必要があるんだろうなって。」

地域には、外国人を受け入れることに対して「治安が悪くなるのではないか」と心配する声も少なくある。住民説明会やその他の場面ではそうした懸念に真摯に向き合い、丁寧に理解を求めてきた。実際に受け入れが始まったら、トラブルが起きることもあるだろう。しかし、そのような中でも茂和泉室長が大事だと伝えるのは「それも含めて我々はそこ(多文化共生のまちづくり)に行くんだ」という明確なビジョンを持ち、前に進めていくということである。公立日本語学校の開設と運営という壮大なプロジェクトは、留学生一人ひとりを育て、そのライフキャリアを支えることを目指すだけでなく、地域(住民)の新たな文化の受け入れと創造をも目指すものである。それを支える明確なビジョンの共有と理解の獲得が最も困難であるが、最も重要であるということを改めて認識させられるインタビューであった。

5. 3. 2 公立日本語学校と近隣教育機関との連携交流を目指して——鈴木校長の語りから

鈴木校長は、長年小学校の教員として務め、地元の小学校の校長として定年退職した経歴を持っている。2024年4月に、開校予定のおおさき日本語学校の校長として採用された。4月から約半年間、日本語学校開設の業務に携わって変化したことについて質問をすると、「外国人の見方」とであると即答した。

「やっぱり外国人の見方ですよ。あと、(外国人のことを)知らないことも多かった。はっきりに言って日本に来る外国人に対して無関心。今までは、私の生活と何の関係もないですよ。私の教員生活の中でも、あんまり外国人との接触の機会もなかったし。学校にはALTさんがいましたが、何十年と日本人の他の先生方と変わりなく付き合っていたのであまり外国人として気にしていなかったです。変わったのは、特に東南アジアの方々への認識がすごく変わりました。(留学希望者と

と評価を行うところまで連携ができれば、連携先の学生、生徒、児童、そして教職員全ての関係者にとって教育的効果が高いものになるであろう。そしてそれは多様な地域のメンバーで、日本語教育を核とした新たな多文化共生のまちづくりを行う実践の貴重なモデルになり得ると考える。

5. 3 おおさき日本語学校開設の道のりを振り返り、未来を見据える

認定日本語教育機関の審査結果が間もなく来るというタイミングであった、2024年10月18日、おおさき日本語学校において日本語学校推進室の茂和泉室長、鈴木校長、瀬戸主任教員に個別に30分程度インタビューを行った。インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音し、文字化資料を作成した。本節では、インタビューの文字化資料に基づいて、実際の語りを引用しながら、公立日本語学校を作るにあたってのビジョンや今後の展望、課題についての考えを記述する。

5. 3. 1 公立日本語学校のビジョンと課題——茂和泉室長の語りから

2022年10月1日に大崎市市民協働推進部政策課内に設置された日本語学校推進室の中心となり、開校に至るまでの業務にあたってきたのが茂和泉室長である。インタビューではまず、「地域コミュニティの中でも高齢化、人口減少が進んでいて、自分たちでもうやりようがないところまで来ている」という現状から、なぜ大崎市が公立日本語学校を作るのか、何を目指していくのかというビジョンが語られた。大崎市に限らず、日本全体が共有している全国的に少子高齢化が進む一方の日本の現状と未来を見据え、どのような社会を目指し、作ろうとしているのかを一番考えるべきは国であるとしつつも、公立日本語学校としての存在意義について「国がどうであろうと我々どうするんだっていうところを、本当に本気になって考えないといけない」と語った。

大崎市議会において、公立日本語学校開設の意義を説明するのも茂和泉室長の役割である。市議会議員の日本語学校に関する質問に対しては、「地域に根差した活力ある人材を育てる」ことが公立日本語学校の一つの使命であると説明し続けてきたという。

「これも議会でも言ってるんですけど、日本語学校ができようできまいと、外国人材はどんどん入ってきますよって。しからば日本語学校の意味って何ですかっていう話になるわけじゃないですか。うちの方は、地域に目指した活力ある人材を育てるっていうのがうちの学校の一つの使命でもあるんですよ。(中略)そういうキーとなる人材を育てるっていうところを狙ってますから、いずれベトナム、インドネシア、台湾の方々が混在して住む。例えば台湾タウンみたいな独自のコミュニティを作るんじゃなくて、個々にはやっていいですけど、もちろんね。ただ例えばそこに日本人と一緒に住んでもらうっていうのを我々狙ってますから。」

日本人と外国人が混在するコミュニティにおいて確たる人物として活躍できる人を育てる役割を担っていくのがおおさき日本語学校のビジョンであるという。

一方で多文化共生のまちづくりをするうえで、欠かせないのは住民の理解であり、これからの地域を創っていく若い世代に対する多文化共生意識の涵養である。茂和泉室長は2年にわたる日本語学校開設の準備の過程において自身が感じた「視野の広がり」に触れ、若い世代にとって、公立日本語学校が地域にあることの教育的意味についても語った。

「世界ってこうなのかとその人となりなり、風習なり、もちろん国の成り立ち、歴史観っていう

スタッフと参加者の間で共有された。



写真5 グループでのアイデア出し
(2024年8月24日撮影)

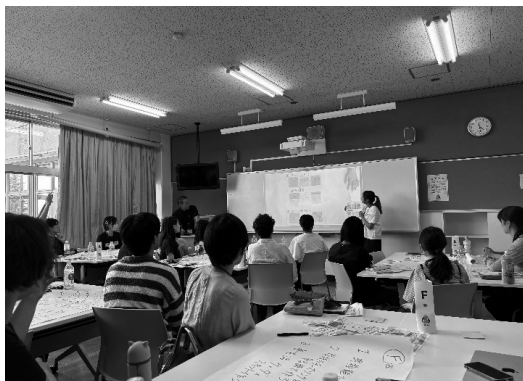


写真6 グループ代表によるアイデアの発表
(2024年8月24日撮影)

以下に参加した学生の感想の例を挙げる。

・地域住民は新しく知らないことは不安になると思いますが、地域とかかわりが持てる日本語学校という魅力で、よりよいまちづくりになってもらいたいと思います。そして、ワーク活動から、Oタイムでの内容を考えました。Oタイムは私たちにとって総合の時間と似ているのだと、校長先生からのお話で気がつきました。教科書からは知ることができない知識や経験、教案では予想できない返答がOタイムからは得ることができると思います。今回は地域の特産品と学生の郷土料理を組み合わせるという案を提案しました。ただ料理を作るだけではなく、実際に特産品を目で見てみたい、販売に携わることで得ることができる日本文化や日本語があると考えました。他のグループの防災を学ぶことや、運動会などの行事開催も自分たちにはなかった意見で参考になりました。今回出たものは、今後の実習などで参考にしていきたいと思いました。(学生A)

・日本語学校での活動を通じて、日本語を習得することはあくまでも手段で、日本語を学ぶ本質は地域で暮らせるような生きる力を身につけるなど、その先に目的や目標があるのではないかと考えました。その理由として、いままで日本語を教えること自体や学生ができるようになったことに集中しすぎるがあまり、学生が日本語を使って将来的にどんなことをしたいのかまで深く考えられていなかったからです。そこで、Oタイムなどのワークによって、将来の可能性を広げることができるのだと気付かされました。そのことから、今回ワークをしたOタイムのようにはっきりしたものはできないものの、自身がボランティアをしている日本語教室でも簡易的に似た活動を取り入れていきたいと考えました。(学生B)

このように、参加学生からは日本語教育と地域連携、多文化共生というキーワードで授業活動のアイデアを考えた経験をこれからの教育(実習)やボランティアでの日本語教室での活動に結びつけていきたいという前向きなコメントが多く寄せられた。このことは、公立日本語学校というものが、地域の課題に寄り添って活動をしていくための活動アイデアを生み出す要素として機能する可能性を示唆するものである。おおさき日本語学校では、大学、高校、中学校、小学校など様々な教育機関との連携交流を構想しているが、ともにアイデアを出し合うだけでなく、教育段階にもよるが、ともに実践

異なる点が多かった¹⁷。

視察に参加した大崎市の住民からは地域と日本語学校との関わりについての関心に基づいた質問が複数あった。例えば、公立日本語学校が開設されたことによる地域および住民の変化についてである。これについては、地域においてはより身近な存在として外国人を捉え、接することができていること、自治体としてのメリットは人口(関係人口)が増え、イベントが盛り上がった、地域ににぎわいが生まれてきていることなどであるとの回答があった。一方、大崎市には971人ほどの外国人住民がいるが、留学生がほとんどいないことが特徴である。そのため、大崎市の住民が持つ地域に暮らす外国人のイメージは、技能実習生など「働く外国人」のイメージしかないとも聞いた。そのような背景の下、留学生を地域で受け入れ、共に暮らし、地域を創っていくというイメージを地域の住民が持てるようになるには、当然時間がかかることだろう。しかし、この視察に同行している間、参加している大崎市の住民の方々から多く聞かれたのは留学生を受け入れた多文化共生のまちづくりに対して前向きな言葉だった。例えば、「地域の祭りに留学生に参加してもらいたいが、どうしたら良いか」、「日本語学校ができるA地区と、学生寮ができるB地区の住民が日本語学校の開校をきっかけにもっとつながり、日本人住民も含めて地域住民の相互理解が促進されるといい。それも多文化共生ではないか」などの言葉である。視察の間、東川町の先進事例から学びながらも、大崎市は大崎市だからこそ可能な多文化共生の新たなまちづくりを地域住民とともに目指していくという意志が、様々な会話のやりとりから感じられる場面があった。

5. 2 おおさき日本語学校の「O（オー）タイム」を活用した日本語×地域連携に向けた試み

日本語教育を核とした多文化共生のまちづくりを考えるおおさき日本語学校では、地域の住民や団体、学校などとの連携交流を積極的に行っていくことを計画している。それは日本語教育のカリキュラムの中に取り入れられ、学校独自の授業科目「Oタイム(オータイム)」という形で具現化されようとしている。「O」は「Osaki (…「地元」大崎を知り、大崎に触れる)」、「Open (…皆が心を開き、校内のみならず地域や社会に開かれている)」、「Oh ! (…驚きや感動を伴う)」、「Out (…教科書から離れ、教室や学校の外へも出る)」などの頭文字をとったもので、いわば日本語教育機関における「総合的な学習(探究)の時間」として位置づけられている(澤邊・瀬戸・早矢仕、2025)。2024年8月には、日本語教育や地域の多文化共生に関心を持つ大学生・大学院生22名が、開校予定のおおさき日本語学校においてワークショップ¹⁸を行い、グループで「Oタイム」の授業アイデアを出すという活動を行った(写真5、6)。大崎市の豊かな自然が育む食文化の体験、留学生ならではの媒体を活用した情報発信、防災教育と関連づけた実践など多様な地域連携のアイデアがファシリテーターを務めた日本語学校の

17 2025年1月現在、東川日本語学校は法務省告示校であり、文部科学省から認定を受けた認定日本語教育機関ではない。また、日本語教育担当の職員は、全て地域おこし協力隊の隊員(日本語教育担当)である。

18 「市民性×日本語教育」ワークショップのプログラムの一環として実施された。本ワークショップは科学研究費補助金基盤研究(C)24K03974、基盤研究(B)23K21943、文部科学省委託日本語教師養成・研修推進拠点整備事業(北海道・東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会)の助成を受けて実施されたものである。実施概要については、文部科学省委託日本語教師養成・研修推進拠点整備事業(北海道・東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会)ウェブサイトの報告(<https://www.hot-jet.jp/topics/detail/80/>)を参照されたい。

5. 多文化共生のまちづくりのために——2024年フィールドワークの記録から

本章では、市がおおさき日本語学校開設準備過程において、多文化共生のまちづくりのためにどのような取り組みを行ってきたか、また、これからどのような取り組みを行っていくとしているかについて筆者のフィールドワークの記録(2024年7月～2024年10月)をもとに考察する。

5. 1 全国初の公立日本語学校、東川町立東川日本語学校から学ぶ

大崎市による公立日本語学校は全国二例目となる公立日本語学校となるが、全国初の公立日本語学校が誕生したのは、2015年10月、北海道の東川町である。東川町立東川日本語学校は2025年で開校10年目を迎える。全国の自治体から視察を受け入れているが、最も多く受け入れてきたのが宮城県からの視察であるという。大崎市も、2022年から複数回視察に訪れている。2024年7月18日も大崎市から日本語学校及び学生寮の運営について学ぶための視察団が訪れている。この視察には、大崎市住民も宮城県大崎市市民協働推進部政策課日本語学校推進室の職員とともに参加しており、筆者もその視察に同行の許可を得て参加した。

2024年7月当時、東川日本語学校の教職員は30名(常勤10名、非常勤20名)で、2018年から開設されている学校内の多文化共生室のスタッフは6名(内、教員兼任が2名)という体制で運営されていた。コースは1年の長期研修のみで、中国、韓国、台湾、タイ、ベトナム、モンゴル、インドネシア、ウズベキスタンなど世界各国から留学生を受け入れている。留学生が東川日本語学校を選ぶ理由として「奨学金が手厚く、学費が安いこと」「四季があり、景色がきれいであること」「都会ではなく、ちょうどよい田舎であり過ごしやすいこと」「先生や町の人優しいこと」などが語られた。一方、日本語学校卒業後に町内に残る留学生はわずかであり、帰国が約半数(49.0%)で、就職が27.8%、進学が20.0%、その他3.3%であるとのデータが紹介された。

特筆すべきは同校に開設されている「多文化共生室」の存在であろう。多文化共生室の業務は外国人の相談窓口、イベントの企画・運営(ボランティアによる日本語会話練習、日本文化・アウトドア体験等のイベントの企画実施など)、留学生の就職支援、企業・自治体との連携、情報発信など、多文化共生が生まれるまちづくりを推進していく要となるものを担っている。一方、外部にも広く開放された多文化共生室ではあるが、17時に閉まり土日にも開いてはいないため、留学生以外の日中働いている地域の外国人¹⁵の利用はほとんどないということであった。

東川日本語学校における日本語教育を核とした多文化共生のまちづくりは、現時点において宮城県大崎市が参考にできる唯一の事例であり、おおさき日本語学校の開設に伴う大崎市の多文化共生担当職員の配置などは東川日本語学校の例を参考にしたものであると考ええる。一方、日本語教育の体制整備に関しては、大崎市のおおさき日本語学校の場合、2025年4月に新規開校予定であるため、2024年4月施行の日本語教育機関認定法の下、認定日本語教育機関¹⁶として国から認定される必要があった。そのため、日本語教育担当スタッフやカリキュラム整備の状況などは、東川日本語学校のそれらとは

15 特定技能や技能実習生など、町内には留学生の他にも100人程度の外国人住民がいる。

16 2024年7月時点では文科省への申請が終わり、審査を受けている過程の段階であった。

2025.1.5 (p.8)	大崎・日本語学校開校へ奮闘／多文化共生の種まく
2025.1.7 (p.14)	日本語学校推進「希う」／大崎で仕事始め式
2025.1.22 (p.14)	やさしい日本語 こつ学ぶ／日本語学校開校控え講座／大崎
2025.1.25 (p.12)	大崎市／西古川駅 有人化検討／日本語学校開校に合わせ

なお、このような公立日本語学校の体制整備に関する記事のほか、読者からの投書欄には、おおさき日本語学校の開設に関連するものも掲載されている。例えば2022年11月25日の「持論時論」欄では、「公設の日本語学校 地域課題解決の場所に」というタイトルで、グローバル化が進む地域社会が抱える課題の解決につながるような運営を望む内容が掲載されている。具体的には、公設の日本語学校がビジネススクールの考えで運営されることを危惧し、留学生の受け入れを民間の日本語学校に任せ、公設の日本語学校は在留外国人住民(子どもたちも含む)の日本語習得の場となることを望むという内容であった。また、2023年4月15日の朝刊「声の交差点」という読者の声欄には、3月25日に大崎市内で開催された「おおさき多文化共生セミナー」に参加した市民から多文化共生の実現が楽しみであるという内容の投書が掲載されている。

このような一連の報道からは、おおさき日本語学校の開設は大きな関心を持って地元新聞紙でも取り上げられてきたことがわかる。これらは「多文化共生のまちづくり」を目指す大崎市の取り組みの過程の貴重な記録となるものである。「多文化共生」というキーワードが見出しにも用いられることで、読者に対して「多文化共生」に対する関心を喚起することにつながる可能性もある¹²。一方で、3章で述べたように、既に大崎市には生活者として暮らしている外国人住民が少なからず存在しているが、前述の地域日本語教室である「おおさき日本語教室」のような市民による自発的で主体的な活動が継続してなされていることや、働いている外国人、その家族などについて取り上げた記事はほぼ見られなかった¹³。「おおさき日本語学校」の開設を契機として、既に身近にいる地域の外国人住民との共生が今までどうであったのか、それを踏まえて現在の課題は何で、これからどこまで目指していくのか、という地域の多文化共生への関心を高めていくことが今後の課題となる。大崎市における外国人との共生、多文化共生のまちづくりは外国人住民がゼロというところから開始されるわけではない。今後、おおさき日本語学校が留学生を受け入れる¹⁴予定の2カ国1地域(台湾、インドネシア、ベトナム)だけでなく多様な国・地域、多様な背景を持つ外国人住民との共生を進めていくための課題の整理や試みがなされていくことが必要であろう。

12 宮城県(2023)の調査結果によると、県内の日本人住民(回答者数 591)の「多文化共生」という言葉の認知度に関しては、「知らない」が最も多く 35.0%、次に「言葉の意味も含めて知っている」が 33.8%、「言葉の意味はわからないが、聞いたことはある」が 31.1%である。

13 大崎市在住の外国出身住民の声が記事となっているのは、2024 年度に大崎市が主催した「おおさき多文化共生シンポジウム 2024 ～日本語教育の充実から見えてくる地域の未来」の報告記事であるが、台湾、インドネシア、ベトナム出身のパネリスト 3 人の生の声を聞くパネルディスカッション「地域の未来を築く一員として、住み続ける理由」での発言内容を取り上げたものであった。これはごく一部の、特定の 3 地域出身者の声を聞いたシンポジウムの報告記事の中であり、実際の大崎市における多様な地域出身の外国人住民の声を上げたものではない。

14 おおさき日本語学校が受け入れる留学生の募集窓口は宮城県が担っているが、宮城県は 2025 年 1 月現在、おおさき日本語学校の留学生受け入れを台湾、インドネシア、ベトナムの 2 カ国・1 地域に限定して行っている。

「外国人との共生」を主題とした社説が掲載され、その中ではおおさき日本語学校の開校後の実践に注目する内容も含まれている。

表1 おおさき日本語学校と大崎市の多文化共生に関する河北新報の記事見出し
(2022.2.1 ～ 2025.1.31)

掲載日(掲載頁)	見出し
2022.2.5 (p.1)	宮城に日本語学校開設へ／県、新年度に検討着手
2022.3.3 (p.14)	日本語学校 「仙台以外に」／知事／効果、運営手法を調査
2022.9.30 (p.16)	県検討 公設日本語学校／大崎市、誘致に名乗り／推進室設置／在り方や課題探る
2023.3.7 (p.18)	公設日本語学校 25年にも／大崎市、新年度申請へ準備
2023.3.8 (p.16)	公設日本語学校 来春までに申請／大崎市方針
2023.3.21 (p.20)	大崎・公設日本語学校／25年開設を前に多文化共生学ぶ／25日セミナー
2023.3.26 (p.20)	公設日本語学校／外国人と市民 相互配慮促進／大崎でセミナー
2023.4.15 (p.15)	大崎市／日本語学校 準備急ぐ
2023.6.3 (p.12)	日本語学校 旧西古川小に設置／大崎市選定
2023.6.9 (p.15)	25年日本語学校開設／留学生の職場 近隣で確保へ／大崎市が支援目指す
2023.6.24 (p.12)	大崎市、教育課程策定へ全速／急募！日本語学校主任教員／25年開校後は運営の中核
2023.7.8 (p.12)	日本語学校／県と大崎市 13日覚書／モデル校に指定、開設支援
2023.7.14 (p.13)	日本語学校／25年春開校へ県支援／初モデル校 大崎市と覚書
2023.9.8 (p.16)	燃料費支援など7億円増額補正／大崎市予算案
2023.9.23 (p.15)	「やさしい日本語」住民学ぶ／大崎・西古川／多文化共生へ講座
2023.10.3 (p.15)	日本語学校教員に辞令／大崎市／開校準備の中核担当
2023.11.20 (p.12)	日本語学校開設 先行事例に学ぶ／大崎・シンポ
2023.11.25 (p.16)	日本語学校／学生寮、保育所跡に／大崎市方針／民間業者が整備
2024.2.8 (p.12)	大崎市予算案 0.7%増638億円／新年度一般会計
2024.3.26 (p.16)	日本語学校など政策課題に対応／大崎市人事
2024.4.11 (p.12)	大崎市立日本語学校／学生寮の事業者 早坂氏に決定へ
2024.6.18 (p.12)	多文化共生 理解に腐心／本州初の公設公営 大崎・日本語学校 来年4月開校／住民 摩擦懸念、市「丁寧説明」
2024.6.26 (p.10)	インドネシア人材受け入れ／民間学校に協力要請／県方針
2024.7.5 (p.12)	日本語学校開校へ／地域おこし隊員 多文化共生推進／大崎市が辞令交付
2024.7.13 (p.13)	多文化共生 理解深めて／日本語学校来春開校へ 大崎市が講座／食事、礼拝／アジアの 生活習慣学ぶ
2024.7.27 (p.12)	日本語学校 学生寮着工／大崎／来春開校 最大100人入居
2024.8.15 (p.14)	地域づくりへタウンミーティング／高校生 20年後の大崎「創造」／市長ら交え議論／「公 園増えたらいい」「にぎわいある市に」
2024.8.28 (p.14)	おいしく調理 台湾知ろう／大崎・日本語学校開校控え教室
2024.9.7 (p.10)	8億円増額補正 9月議会提出へ／大崎市、20議案発表
2024.10.2 (p.12)	大崎市が来春開設／日本語学校 37人が応募／県議会一般質問
2024.10.31 (p.18)	大崎・日本語学校を国認定／留学生 地域の活力に
2024.11.8 (p.10)	日本語学校 34人が合格／大崎市
2024.11.25 (p.12)	多文化共生 「地域から」／大崎・外国出身在住者が討論／祭り参加・あいさつ大切…／ 日本語学校開設控え提言
2025.1.3 (p.3)	社説／外国人との共生／対話重ね開かれた社会に



写真3 おおさき産業フェア2024に出展された大崎市立おおさき日本語学校のブース (2024年10月18日撮影)



写真4 おおさき日本語教室の案内看板 (2022年8月27日撮影)

4. 地元新聞紙の報道が示す「多文化共生のまちづくり」への道筋と課題

本章では、大崎市の多文化共生のまちづくりに対する地元新聞紙報道の調査結果について報告する。地元新聞紙の報道を分析することによって地域社会の関心の度合いや課題が見えてくると考えるからである。分析対象は宮城県の地元新聞社が発刊する「河北新報¹¹」における2022年2月1日から2025年1月末日までのおおさき日本語学校と大崎市の多文化共生に関する朝刊記事である。この分析結果から、「多文化共生のまちづくり」への道筋と課題について考察する。

調査の結果、表1に示す38の新聞記事が抽出された。宮城県による公立日本語学校開設の第一報は、2022年2月5日の朝刊第一面であり、2022年9月30日の記事では大崎市が日本語学校誘致に名乗りを上げ、同年10月1日付で市役所の政策課内に日本語学校推進室が開設されることが報じられた。2023年に入ると2025年4月開校を目指して開設準備が本格化していくが、それに伴い新聞報道でも主に日本語学校の体制整備に関するニュースが多くなり、日本語学校の校舎決定や日本語学校開設のための市の予算、主任教員決定に関する報道がなされている。「多文化共生」というキーワードが見出しにも使われている記事は地元住民に対する多文化共生セミナー（2023年3月21日記事）、「やさしい日本語」講座（2023年9月23日記事）、住民説明会の実施や校長の談話（2024年6月18日記事）、多文化共生理解講座（2024年7月13日記事）、多文化共生シンポジウム（2024年11月25日記事）、多文化共生担当（日本語学校）の地域おこし協力隊の活躍（2025年1月5日記事）などがある。主に日本人住民を対象とした啓発活動に関する記事が2023年以降見られるようになり、2025年1月3日の朝刊では、

11 宮城県仙台市に本社がある河北新報社が発刊する日刊新聞（地方紙）で、東北六県での朝刊の発行部数は2022年1月～6月の平均で382,997部（<https://www.kahoku.co.jp/pub/media/about/index.html#about01> 2025年2月4日最終閲覧）。

まな形で暮らしている住民であり、日本での生活に不安やストレスを抱えている人も多いという。そのような背景の下、おおさき日本語教室では、参加者同士の交流をはかり、教室という枠組みを越えたつながりを促す場としての機能を果たそうと活発に活動を行っている。

教室代表の鈴木氏は2023年11月に宮城県が主催した「多文化共生シンポジウムinおおさき」において、パネルディスカッションのパネリストとして登壇し、「おおさき日本語教室」の活動を紹介するとともに地域の多文化共生について思いを語っている。その中で「多文化共生というのは、市民一人ひとりが外国人を対等な立場の市民として受け入れることから始まると思う。私の教室では簡単な日本語で常にコミュニケーションを取りながら、相手を理解するように努め、会話することを大事に考えている。」と述べ、「外国人住民とたくさん会話をしてほしい。でも、市民側には(外国人住民についての)情報があまりない。市には、市民に対して、日本語学校ではどんな人たちが学び、どんな生活をしているか、たくさん発信してほしい。こんな楽しいことをしたんですよ、ということを発信しただけでも、お話をするきっかけができてと思う。」と、市による積極的な情報発信の重要性を指摘している。

おおさき日本語教室は外国人配偶者、就労者、その帯同家族など、教室に通う外国人住民の幅広い学習のニーズに対応しており、大崎市の多文化共生を語るうえで欠かすことのできない、市民主体の社会的意義の大きい活動である。しかしながら個人による運営であり、多くの市民に広がっていくという点や継続的な運営という点では難しさもある。地域の日本語教室は全国的にボランティアがその担い手となっており、学習支援者の不足や高齢化が課題となっている。今後、市が情報発信を含め、多文化共生の推進を活発化させていくことによって、より多くの市民の多文化共生に対する関心と理解を深めていくことはもちろん、ボランティアに任せきりにしない体制整備が必要になってくると考える。

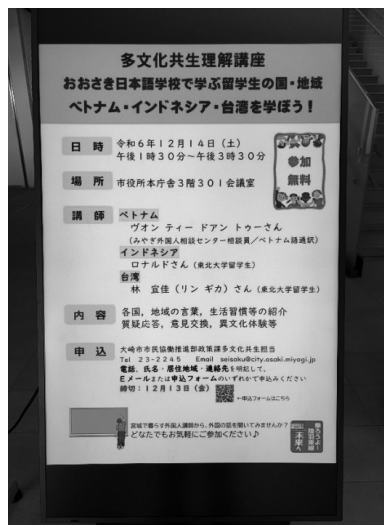


写真1 多文化共生理解講座の案内パネル
(2024年12月14日撮影)



写真2 大崎市図書館における「多文化共生」展示
(2024年12月14日撮影)

2024の開催⁸、⑥みやぎ外国人相談センター利用、⑦多文化共生啓発(写真2)がある。2024年10月に開催された「おおさき産業フェア」においても、おおさき日本語学校のブースが作られ、学校の紹介や多文化共生啓発のための資料展示が行われていた(写真3)。このほか、市内高校における探究学習(異文化理解や多文化共生に関するもの)への助言・協力も行っている(澤邊・瀬戸・早矢仕, 2025)。

このような大崎市による事業は⑥を除くと主に日本人住民を対象に進めているものであるが、市には地域で生活する外国人住民のために市民によって自発的になされてきたボランティア活動もある⁹。その例として2018年9月に元高校教員の鈴木裕子氏によって始められた「おおさき日本語教室」がある。大崎市の古川地区では2018年3月まで外国人住民のための「古川日本語教室」が市民ボランティアによって約20年間継続されていたが、受講者が少なくなったことや、ボランティアの高齢化が進んだことにより、閉鎖することとなった。しかし、この地区には数多くの外国人が生活をしており、地域の日本語教室が空白地区となることを懸念した鈴木氏がおおさき日本語教室を立ち上げることにしたという¹⁰。2025年現在、月に3回(土曜日)、大崎市の吉野作造記念館の講座室(写真4)やラウンジを利用し、ボランティア参加者4～6名が一斉授業ではなく一人ひとりの日本語学習ニーズや日本語能力に合わせてマンツーマン学習や2～3名のグループ学習を対話型交流形式で行っている。これまでの教室参加者は15カ国103名である(2025年1月時点)。

2022年8月27日、おおさき日本語教室を訪れ、交流活動に参加した筆者のフィールドノートには次のような記述がある。生活者として大崎市に暮らす外国人住民との交流の様子を示す例として、以下に引用する。

時間になり、2つのグループに分かれて活動が始まった。今日の参加者は、支援者が3人＋代表の鈴木さん、外国人参加者は4人であった。(中略)中国出身のCさんは今年11月に第一子出産予定だそう。子どもが生まれたら忙しくなると思うが、「赤ちゃんを抱っこして教室に来たらいいですよ」と支援者のIさんがCさんに伝えた。「ずっと家にいて育児ばかりしていたら産後うつになるかもしれないから」とノートに「産後うつ」と書いて、教室に来た方がいいと勧めていた。隣にいたタイ出身のWさんも「産後うつ」の英語訳を見て、「そうそう」とうなずき、自分も産後にそうなりそうだったと話した。Wさんはアウトドア派で、家でじっとしてられないタイプだと話し、午前中のパートの仕事が決まってうつにならずに済んだ、また、この日本語教室に通っていたことも良かったと話していた。どちらのグループもしゃべりっぱなし、笑い声であふれていた。(2022/8/27 筆者のフィールドノートより)

教室に通う外国人参加者は日本人の配偶者や外国人労働者(及びその家族)など、大崎地域にさまざま

8 大崎市が2024年11月に開催した「おおさき多文化共生シンポジウム」には関係者、地元住民を含め87名の参加者があった。

9 地域の日本語教室は基本的にボランティア主体で運営がされている。文部科学省総合教育政策局日本語教育課(2024)によると、日本語教師の数で最も多いのは「ボランティアによる者」で23,281名となっており、日本語教師全体の約5割を占めている。また、宮城県内の地方公共団体の中で日本語教室がある割合は59.0%であるが、この数は全国平均の53.7%よりやや高い程度である。

10 鈴木氏への聞き取り調査による(2022年7月3日)。

を扱い、2024年度に進められてきた多文化共生推進事業と地域の日本語教室について、筆者のフィールドワークの記録から報告する。

4章では研究課題(2)「大崎市の多文化共生のまちづくりに関して、地元新聞はどのように報じてきたか」を扱う。「河北新報」の朝刊記事(2022年から2025年1月末日までの記事⁶⁾)の中から、おおさき日本語学校の開設と地域の多文化共生に関連した記事見出しを分析し、その結果から見える地域社会の公立日本語学校開設への関心と課題について報告する。

5章では研究課題(3)「大崎市は多文化共生のまちづくりを進めるために、開設準備過程においてどのような取り組みを行ってきたか。また、これからどのような取り組みを行っていくとしているか」について述べる。主に2024年に行った筆者のフィールドワークの記録および関係者へのインタビュー調査に基づき、開校前のおおさき日本語学校における活動の事例をもとに、地域や様々な団体・機関との連携の可能性について考察する。

最終章である6章では、これらの結果をまとめ、おおさき日本語学校と大崎市の多文化共生のまちづくりについて今後の展望を述べる。

3. 大崎市における外国人住民を取り巻く状況

2025年2月1日時点での大崎市の統計によれば、市内に住む人口は121,831人で、そのうち外国人住民数は971人で大崎市人口に占める外国人比率は0.8%となっており、10年前の外国人比率0.48%と比較してその割合は増加傾向にある。大崎市(2024)によると、2023年12月末日時点において39カ国・地域の外国人が在留しており、国籍で最も多いのは東アジアの中国、次に韓国であるが、ベトナム、フィリピン、インドネシアなど東南アジアの国々やパキスタンも多い。在留資格別では永住者が35.0%、技能実習生が18.9%で、家族滞在、技術・人文知識・国際業務がそれぞれ約8%を占めている。なお、大崎市には民間の日本語学校が存在しないため、市内の留学生の割合は非常に少ない。そうした中、大崎市の伊藤康志市長は「地域の活力となるような留学生を招き、地域との交流を深めながら多文化共生の花を咲かせ結実するよう取組みたい」と市で開催されている多文化共生シンポジウムや取材などでも発信している。留学生の招致が大崎市の多文化共生のまちづくりにおける大きな推進力になることが期待されていることがわかる。

大崎市は公立日本語学校として先進地である北海道東川町立東川日本語学校の視察を2022年から複数回行っているが、東川日本語学校には多文化共生室というものがある。多文化共生室支援員として東川町地域おこし協力隊員を配置し、様々な地域連携の多文化共生の取り組みを実施しているが、大崎市でも2024年度より新たに多文化共生担当職員(地域おこし協力隊を含む)を配置し、多文化共生推進事業を進めている。大崎市(2024)によると、2024年度に市が実施している多文化共生事業としては、①日本語学校および学生寮整備に係る説明、意見交換、②東川町立日本語学校先進地視察、③多文化共生理解講座⁷(写真1)、④「やさしい日本語」講座、⑤おおさき多文化共生シンポジウム

6 河北新報データベースを用いて公立日本語学校に関連する記事を検索した。

7 大崎市が2024年12月に開催した「多文化共生理解講座」には市民33名の参加者があった。

学生の受け入れを目指している。

国の動きとしては、総務省が2006年に「多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義し、地域における多文化共生の推進の促進に取り組んでいる。おおさき日本語学校は大崎市の多文化共生推進の要となることが期待されており、多文化共生のまちづくりや地域活性化を目指すことになる。大崎市では地域住民の理解の下、閉校した西古川小学校が日本語学校として利活用されることが決定し、地域の小中高校、おおさき産業推進機構、国際交流団体など多様な団体との連携交流が構想されている。地域住民が外国人との共生に対する意識や意欲を高めるとともに、留学生には将来的にその地でさらに学んだり働いたりしながら、新たな地域社会を創る担い手の一人になってほしいという願いが、地域の多様な団体、市民との連携交流を重視する構想につながっている⁵。

在留外国人との多文化共生に関する研究はこれまで特に地域社会における日本語教育に関して活発に議論され、研究が蓄積されてきた。例えば(公財)とよなか国際交流協会編(2019)による大阪府豊中市の事例や野山ほか(2022)の東京都葛飾区の事例などがある。また近年は多文化共生社会実現に求められる日本語教育の在り方を問い直す研究(佐野, 2022)や地域・企業・自治体が協力した体制づくりに関する研究(服部, 2022)など、地方都市のまちづくりの観点から日本語教育を捉えようとする研究も始められている。本研究はこうした国内の地域日本語教育研究の流れに連なるものであり、自治体を作る公立日本語学校の留学生と地域の多様な団体、市民がつながり、連携交流を重ねることによるまちづくりの課題や可能性を検討していくことを目指す。

筆者は宮城県の出身であり、20年あまり宮城県内の日本語教育に関わりながら、留学生に対する日本語教育と日本語教育人材養成に関わる教育研究を行ってきた。2022年には大崎市にあるボランティア日本語教室を対象としたフィールドワークを行い、2023年4月以降は県や市の依頼を受け、学校の選定などおおさき日本語学校開設準備の一部に関わるようになった。その過程で関係者が持つおおさき日本語学校に対する様々な思い、期待、展望について生の声を聞く機会や、おおさき日本語学校に関する報道を目にする機会が多くあった。本稿は大崎市における多文化共生のまちづくりの過程を捉える第一歩として、開校前3年間の調査の記録をもとにこれからの展望を述べていきたい。

2. 研究課題と研究方法

本研究の研究課題は次の3つである。

- (1)大崎市在住の外国人を取り巻く状況はどのようなものか。
- (2)大崎市の多文化共生のまちづくりに関して、地元新聞はどのように報じてきたか。
- (3)大崎市は多文化共生のまちづくりを進めるために、開設準備過程においてどのような取り組みを行ってきたか。また、これからどのような取り組みを行っていこうとしているか。

本稿ではまず、3章において研究課題(1)「大崎市在住の外国人を取り巻く状況はどのようなものか」

5 移住プロセスとしての留学について、是川(2025)は「日本の中長期在留外国人の移動過程に関する縦断調査(PSIJ)」の最新の調査結果の分析に基づき、日本では就労を契機とした留学や卒業後の就労を目的とした留学生が多いことを指摘している。

本州初の公立日本語学校の誕生と多文化共生のまちづくりの展望

— 開校前 3 年間の宮城県大崎市での調査から —

澤邊 裕子

1. はじめに

宮城県では2022年2月、村井嘉浩知事が県内に公立日本語学校を開設する方針を発表した。これは2021年の知事選で掲げた公約に基づくもので、地方の人口減が加速する中、留学生や外国人労働者など幅広い人材を呼び込み、産業振興と国際化推進を目指すとした。自治体の予算で設置されている地域の日本語教室は全国に数多く存在するが、留学生を対象としたカリキュラムを持つ「公立日本語学校」は北海道の東川町立東川日本語学校¹一校のみである。宮城県では大崎市²が「公設公営」の日本語学校の開設を目指して準備を進めており、2025年4月開校が決まった大崎市立おおさき日本語学校(以下、「おおさき日本語学校」とする)は「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」(2024年4月施行)が施行されて初めての「留学」の課程に認定された公設日本語学校として、地域の多文化共生の拠点化を目指す新しいスタイルの日本語学校になることが期待されている。

2022年10月1日に大崎市市民協働推進部政策課内に日本語学校推進室³が設置され、2025年4月の開校を目標にハード面とソフト面の準備、文部科学省への認定日本語教育機関の申請準備、および地域住民に対する説明・情報交換会や多文化共生理解講座、やさしい日本語講座などが精力的に進められた。2024年5月に文部科学省へ認定日本語教育機関としての認定の申請がなされ、同年10月30日に認定された⁴。これにより、おおさき日本語学校は国の新たな認定制度の下での初の公立日本語学校となることが正式に決定した。初年度である2025年度の4月には、台湾、インドネシア、ベトナムから28人が入学予定で、留学生はJR古川駅近くの新設された学生寮からJR陸羽東線を利用して通学することが計画されている。なお、5年後には1年、1年6か月、2年の3つのコースで合計100人の留

1 東川町立東川日本語学校については、公式ウェブサイト (<https://higashikawa-jls.com/>) とウェブサイト「にほんごぶらねっと」の阿久津大輔氏による 2018 年 2 月～4 月の特集記事「日本語教育と地方創生」シリーズ(第1回～第8回)を参照されたい (https://www.nihongoplat.org/feature_page/chihososei/)。

2 大崎市は宮城県の北西部に位置する農業を中心とした宮城米等の生産の中心地で、面積は栗原市に次ぎ県内 2 位の大きさを持ち、人口は仙台市・石巻市に次ぎ県内 3 位の人口(121,831 人／2025 年 2 月 1 日)を擁する。しかしこの 10 年間で 12,000 人以上の人口減となっており、人口減少の問題に直面している。

3 仙台市に次いで人口が多い宮城県石巻市でも 2022 年 11 月 1 日に日本語学校設置推進室を開設し、校舎の選定まで行ったが、2023 年 12 月、斎藤正美市長が「県の支援の様子を見てから結論を出したい」と設置の判断を先送りする考えを示している。

4 文部科学省の「日本語教育機関認定法ポータル」のウェブサイトでは、2024 年 10 月 30 日に認定された日本語教育機関のリスト(22 機関)がある。<https://www.nihongokyoku.mext.go.jp/top/guide-japanese-language-institution> (2025 年 2 月 4 日最終閲覧)

—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)

- Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., & Abramson, L. Y. (1987). Vulnerability to depressive mood reactions: Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 386-393.
- 村山 航・及川 恵(2005). 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか 教育心理学研究, 53, 273-286.
- Radloff, L. S. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘(1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 菅沼 慎一郎(2018). <前向きな諦め>を促すインターネット認知行動療法—日本文化にそくした心理支援のために— ミネルヴァ書房
- 鈴木 伸一(2004). 三次元(接近—回避, 問題—情動, 行動—認知)モデルによるコーピング分類の妥当性の検討 心理学研究, 74, 504-511.
- 友野 隆成(2010). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と特性的対人ストレスコーピングおよび精神的健康の関連性 社会心理学研究, 25, 221-226.
- 友野 隆成(2015). 曖昧さに対する態度と抑うつの関連性の素因ストレスモデルによる検討 ストレス科学研究, 30, 162-166.
- 友野 隆成(2017). あいまいさへの非寛容と精神的健康の心理学 ナカニシヤ出版
- 友野 隆成(2023). 新版曖昧さ耐性尺度作成の試み 宮城学院女子大学大学院人文学会誌, 24, 19-29.
- 友野 隆成・橋本 宰(2002). あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響 性格心理学研究, 11, 24-34.
- 友野 隆成・橋本 宰(2005). 抑うつの素質—ストレス・モデルにおける性差の検討: 対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として 健康心理学研究, 18, 16-24.
- 友野 隆成・橋本 宰(2006). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と精神的健康の関連性について 心理学研究, 77, 253-260.
- Wrosch, C., Scheier, M. F., Miller, G. E., Schulz, R., & Carver, C. S. (2003). Adaptive self-regulation of unattainable goals: Goal disengagement, goal reengagement, and subjective well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 1494-1508.

謝辞

本研究の実施にあたり、わりきり志向尺度(浅野, 2010)の原著者である千葉大学子どものこころの発達教育研究センター(現筑波大学人間系)の浅野憲一先生から、尺度の使用に関して多大なるご教示を賜った。加えて、多くの皆様に調査へご協力いただいた。記して深謝申し上げる。

からではなく両方向からの検証の重要性を示唆するものであると考えられる。本研究の意義として、この知見の獲得が挙げられる。

しかし、本研究では以下のことが検討課題として挙げられる。

まず、わりきりの有効性認知の不適応的側面と対処の限界性認知の適応的側面について、さらなる検討が必要である。特に、本研究では女性においてのみであるがわりきりの有効性認知の不適応的側面が一部示されたため、本当にわりきりの有効性認知が適応的な諦めなのか、精緻な検証が必要であると考えられる。一方、対処の限界性認知の適応的側面については、本研究では未検討であった。本研究における相関分析の結果においては、男女とも対処の限界性認知と抑うつとの関連は見受けられなかったため、対処の限界性をどのように認知するのか、あるいは認知したうえでどのように行動するのかによっては、必ずしも精神的健康を損なうわけではない可能性も想定される。

そして、本研究で得られた知見は、1時点のみの横断調査に基づくものであり、わりきり志向も普段の程度を測定したのみで実際に経験した出来事についてどのように諦めたのかを具体的に測定していないことから、より詳細な因果関係について言及できない。諦める必要がある状況に曖昧さ耐性の高い者が実際におかれた際に、わりきりの有効性を認知しない方が結果として精神的健康に結びつくのかどうかに加え、曖昧さ耐性の低い者がわりきりの有効性を認知するか否かで精神的健康にどのような影響を与えるのかどうかを、解決不可能課題などを用いた実験的なアプローチによる因果関係の検討が改めて必要であるように思われる。

さらに、本研究の調査協力者は、全て大学生かつweb調査会社のモニターという限られたサンプルであった。菅沼(2018)は、わりきりの有効性認知に類似した概念である諦めの「有意味性認知」が、女性においては年代差がある可能性を示唆していることから、曖昧さ耐性とわりきりの有効性認知の交互作用効果が精神的健康に及ぼす影響は年代によって異なる可能性も考えられる。以上のことから、今後は大学生以外の年齢層を加えたより広範な年代の調査協力者を対象とした研究も必要であろう。

引用文献

- Andersen, S. M., & Schwartz, A. H. (1992). Intolerance of ambiguity and depression: A cognitive vulnerability factor linked to hopelessness. *Social Cognition, 10*, 271-298.
- 浅野 憲一(2010) . わりきり志向尺度の作成および精神的健康, 反応スタイルとの関係 パーソナリティ研究, *18*, 105-116.
- Budner, S. (1962) . Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality, 30*, 29-50.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949) . Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality, 18*, 108-143.
- Frenkel-Brunswik, E. (1954) . Further explorations by a contributor to “The Authoritarian Personality.” In R. Christie, & M. Jahoda (Eds.) , *Studies in the scope and method of “The Authoritarian Personality.”* (pp.226-275) . New York: Free Press.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) . *Stress, appraisal, and coping*. Springer.
- (ラザルス, R. S., フォルクマン S. 本明 寛・春木 豊・織田 正美(監訳)(1991) . ストレスの心理学

をするのではなく、わりきりが有効か否かの認知的な判断を一旦保留し、ニュートラルな思考を維持することが動機づけられている可能性が考えられる。そのような思考が維持できると、おかれた状況があるがままに受け入れることができるために、結果として抑うつが低くなるのかもしれない。しかし、ひとたびわりきりの有効性を認知してしまうと、曖昧さ耐性が高い女性は安易なポジティブシンキングを行ってしまうことに繋がり、却って抑うつが高くなるのかもしれない。一方、曖昧さ耐性が低い女性は、わりきりの有効性認知の効果が見受けられず、わりきりの有効性を認知しない場合に曖昧さ耐性が高い女性とは異なるメカニズムで抑うつが高くなる可能性が示された。曖昧さ耐性が低い女性は、わりきりの有効性を認知することができないと、曖昧さ耐性が高い者が行うような認知的判断の停止(Andersen & Schwartz, 1992)をするのではなく、不適応的な諦めを行うことになって抑うつが高くなってしまふのかもしれない。

続いて、女性において有意な交互作用が得られなかった対処の限界性認知に関する結果について考察する。曖昧さ耐性の低い女性は高い女性に比べて抑うつが高いことが示されたものの、対処の限界性を認知するかしないかで抑うつの程度は変わらないことが示された。浅野(2010)は、わりきりの有効性認知と対処の限界性認知は両者が独立した概念であることを示唆している。また、両者間のバランスが抑うつに対して影響を及ぼすことを示唆している。一方、本研究では両者の相関係数の大きさは男女ともに中程度であり、わりきりの有効性認知と対処の限界性認知の両方が高いか、若しくは両方が低いかのどちらかに偏る可能性が示されていたため、2つが独立した概念とは言えない結果であった。これらのことから、わりきりの有効性を認知していても対処の限界性も併せて認知するか、逆にわりきりの有効性を認知しなかったら対処の限界性も併せて認知しないというように、対処の限界性認知を基準とした場合のみ諦めの適応的な側面と不適応的な側面が相殺することにより、抑うつの程度に影響を及ぼさなかったのかもしれない。

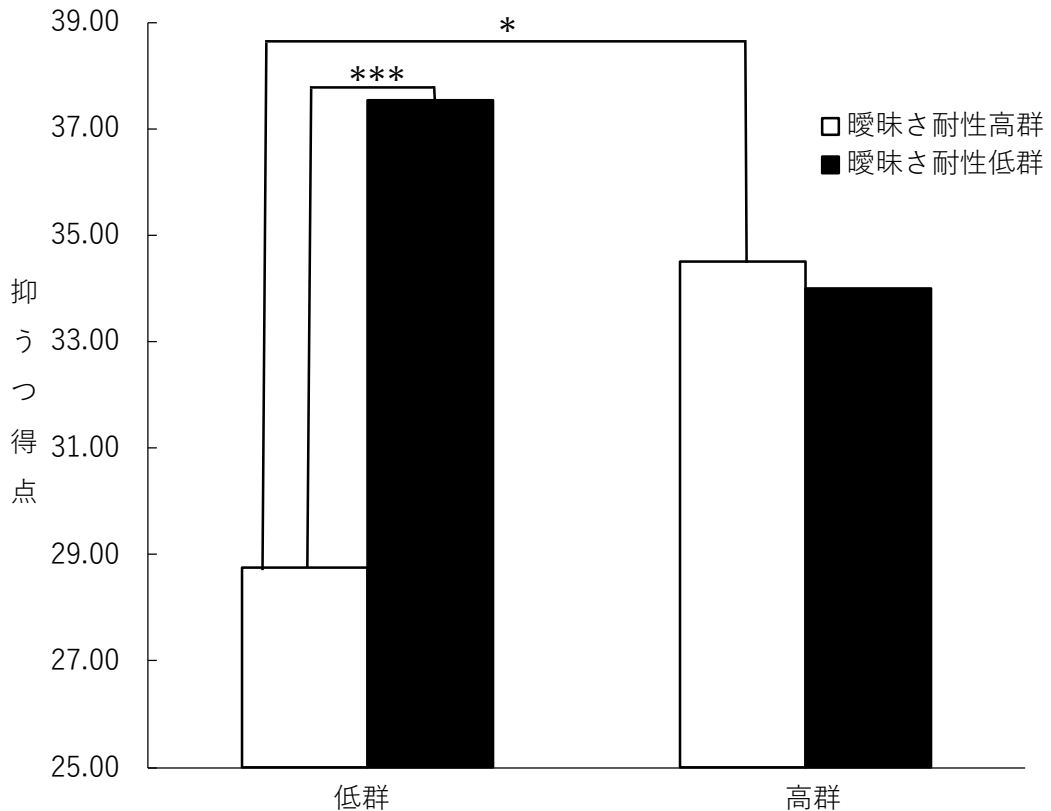
加えて、男性において有意な交互作用が得られなかったわりきりの有効性認知および対処の限界性認知に関する結果について、併せて考察する。さきに述べたように、曖昧さに耐えられない男性は対処に至る評価過程に分化と複雑化がみられる傾向がある(友野・橋本, 2002)ことと、本研究ではわりきりの有効性認知と対処の限界性認知の独立性が示されなかったことから、女性同様諦めの適応的な側面と不適応的な側面が相殺することにより、抑うつの程度に影響を及ぼさなかったのかもしれない。しかし、女性において有意な交互作用が得られた、わりきりの有効性認知を基準とした場合に、男性においては有意ではなかったという性差については、さらなる精査が必要であると考えられる。

以上のことをまとめると、男女とも仮説1および仮説2の両方が支持されず、本研究では曖昧さ耐性の低さに内包される適応性を検出することはできなかった。そして、従来から示されてきた、曖昧さ耐性が精神的健康と結びつく適応的な特性として捉えられている(友野, 2017)ことが一部再確認された。

最後に、本研究の意義と今後の検討課題について述べる。本研究では、当初の目的であった、曖昧さ耐性の低さに内包される適応性を見出すことはできなかったものの、従来の知見の延長線上にある曖昧さ耐性の高さに内包される適応性を再確認することができた。さらに、本来適応的であると考えられるわりきりの有効性認知は、曖昧さ耐性の高い者にとっては却って不適応的になってしまう可能性が示された。これらのことは、ある事象が適応的か不適応的かであるかを議論する際には、一方向

Figure 1.

女性における曖昧さ耐性とわりきりの有効性認知の抑うつに関する交互作用



* $p < .05$ *** $p < .001$

わりきりの有効性認知

考察

本研究では、わりきりの有効性認知若しくは対処の限界性認知と曖昧さ耐性との交互作用が精神的不健康の指標である抑うつに影響を与えるかどうか男女ごとに検討した。分散分析の結果、女性のみ有意な交互作用が得られ、曖昧さ耐性が高い女性はわりきりの有効性を認知しない場合の方が認知する場合に比べて抑うつが低くなること、わりきりの有効性を認知しない場合においてのみ曖昧さ耐性の高い女性の方が低い女性に比べて抑うつが低くなることが示された。一方、男性はいずれの組み合わせも有意ではなかった。

まずは、女性において有意な交互作用が得られたわりきりの有効性認知に関する結果について考察する。Andersen & Schwartz (1992)は、曖昧さ耐性が高い者は認知的判断の停止をおこない、ネガティブな出来事によって一時的に生じた不確実性をうまく対処することができることを示唆している。このことから、曖昧さ耐性が高い女性はわりきりの有効性を認知する・しないという二分法的な思考

分散分析

曖昧さ耐性とわりきり志向の組み合わせによって抑うつがどのように異なるのか検討するために、分散分析を行った。分析に先立ち、曖昧さ耐性とわりきり志向(わりきりの有効性認知・対処の限界性認知)を中央値分割し、それぞれ高群と低群に群分けした。そして、曖昧さ耐性の群(高・低)とわりきりの有効性認知の群(高・低)若しくは対処の限界性認知の群(高・低)をそれぞれ独立変数、抑うつを従属変数とする二要因参加者間計画の分散分析を男女別に行った。

まず、男性において曖昧さ耐性の群とわりきりの有効性認知の群を独立変数、抑うつを従属変数とした場合、曖昧さ耐性の群の主効果($F(1, 96) = 1.29, p = .259, \eta_p^2 = .01$)、わりきりの有効性認知の群の主効果($F(1, 96) = 0.09, p = .765, \eta_p^2 = .00$)、および交互作用($F(1, 96) = 0.72, p = .524, \eta_p^2 = .00$)はいずれも有意ではなかった。

続いて、男性において曖昧さ耐性の群と対処の限界性認知の群を独立変数、抑うつを従属変数とした場合においても、曖昧さ耐性の群の主効果($F(1, 96) = 0.91, p = .343, \eta_p^2 = .01$)、対処の限界性認知の群の主効果($F(1, 96) = 1.15, p = .287, \eta_p^2 = .01$)、および交互作用($F(1, 96) = 0.57, p = .454, \eta_p^2 = .01$)はいずれも有意ではなかった。

一方、女性において曖昧さ耐性の群とわりきりの有効性認知の群を独立変数、抑うつを従属変数とした場合、わりきりの有効性認知の群の主効果($F(1, 96) = 0.35, p = .555, \eta_p^2 = .00$)は有意ではなかったが、曖昧さ耐性の群の主効果($F(1, 96) = 5.00, p = .028, \eta_p^2 = .05$)が5%水準で有意であり、曖昧さ耐性高群($M=31.36$)に比べて低群($M=35.84$)の方が有意に抑うつの程度が高いことが示された。さらに、交互作用($F(1, 96) = 6.28, p = .014, \eta_p^2 = .06$)が5%水準で有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、曖昧さ耐性高群においてわりきりの有効性認知高群と低群の間に5%水準で有意差が認められ($F(1, 96) = 4.27, p = .041, \eta_p^2 = .04$)、わりきりの有効性認知低群($M=28.75$)に比べて高群($M=34.50$)の方が有意に抑うつの程度が高いことが示された。しかし、曖昧さ耐性低群においてはわりきりの有効性認知高群($M=34.00$)と低群($M=37.55$)の間には有意差が認められなかった($F(1, 96) = 2.09, p = .152, \eta_p^2 = .02$)。なお、わりきりの有効性認知低群において曖昧さ耐性高群と低群の間に0.1%水準で有意差が認められ($F(1, 96) = 12.05, p < .001, \eta_p^2 = .11$)、曖昧さ耐性高群($M=28.75$)に比べて低群($M=37.55$)の方が有意に抑うつの程度が高いことが示されたが、わりきりの有効性認知高群においては曖昧さ耐性高群($M=34.50$)と低群($M=34.00$)の間には有意差が認められなかった($F(1, 96) = 0.03, p = .854, \eta_p^2 = .00$)。これらの結果を、Figure 1.に示す。

最後に、女性において曖昧さ耐性の群と対処の限界性認知の群を独立変数、抑うつを従属変数とした場合においては、曖昧さ耐性の群の主効果($F(1, 96) = 5.22, p = .024, \eta_p^2 = .05$)が5%水準で有意であり、曖昧さ耐性高群($M=31.36$)に比べて低群($M=35.84$)の方が有意に抑うつの程度が高いことが示された。しかし、対処の限界性認知の群の主効果($F(1, 96) = 0.83, p = .364, \eta_p^2 = .01$)、および交互作用($F(1, 96) = 0.12, p = .730, \eta_p^2 = .00$)はどちらも有意ではなかった。

うつ状態の程度が高いほど得点が高くなるように構成されている。本研究では、各項目について調査協力者が直近の一週間の自分にどの程度あてはまるのか、「この1週間で全くないか、あったとしても1日も続かない(1点)」「週のうち1～2日続く(2点)」「週のうち3～4日続く(3点)」「週のうち5日以上続く(4点)」の4件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた。

倫理的配慮

回答に際し、調査協力者には以下の事項をあらかじめ伝えた。(1)本研究の趣旨、(2)回答に正解や不正解はないこと、(3)全ての項目が任意回答であること、(4)本研究の趣旨に同意できない場合は回答する義務はないこと、(5)個人が特定できる形で回答が外部に公表されることはないこと、(6)結果に対する問い合わせなどは調査会社を通じて合理的な範囲で対応すること。そして、調査協力者から同意が得られた回答のみ分析の対象にするなどの倫理的配慮を行った。

結果

各測度の記述統計量

Table 1に、各測度の記述統計量を男女別に示す。それに加えて、全ての尺度について α 係数を算出した結果、値は.71-.98の範囲であり、許容可能な内的整合性が確認された。なお、性差を検討するために各得点について対応のない検定を行った。その結果、すべての得点において有意差はみられなかった。

Table 1

各測度の記述統計量

	男性			女性			(df=198)		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>t</i> 値	<i>d</i>	<i>range</i>
曖昧さ耐性	64.38	19.95	.98	59.65	20.79	.98	2.23	.23	24-120
わりきりの有効性認知	22.04	4.67	.82	22.17	5.05	.83	0.19	.03	5-35
対処の限界性認知	17.00	3.92	.71	16.73	4.20	.73	0.47	.07	4-28
抑うつ	34.04	11.06	.91	32.87	9.61	.87	0.12	.11	20-62

相関分析

Table 2に、各測度間の相関係数を男女別に示す。女性において、曖昧さ耐性と抑うつとの間($r = -.173, p = .085$)に弱い有意な傾向である負の相関、わりきりの有効性認知と対処の限界性認知との間($r = .409, p < .001$)に中程度の有意な正の相関がそれぞれみられた。一方、男性においてはわりきりの有効性認知と対処の限界性認知との間($r = .618, p < .001$)に中程度の有意な正の相関がみられたのみで、その他の変数の組み合わせはいずれも有意ではなかった。

Table 2

各測度間の相関係数

	曖昧さ耐性	わりきりの有効性認知	対処の限界性認知	抑うつ
曖昧さ耐性	—	.000	-.006	-.130
わりきりの有効性認知	.106	—	.618***	-.005
対処の限界性認知	-.152	.409***	—	.103
抑うつ	-.173 [†]	-.017	.003	—

[†] $p < .10$ *** $p < .001$

右上：男性 左下：女性

として、曖昧さに耐えられない男性は対処に至る評価過程に分化と複雑化がみられる傾向があるのに対し、女性はより直截的に行動を起こす傾向がみられるという、ストレス状況下における認知処理の差異が指摘されている(友野・橋本, 2002)。よって、曖昧さ耐性とわりきり志向の交互作用を検討する際には、性差を念頭に置いた検討が必要であるように思われる。

そこで本研究では、曖昧さ耐性とわりきり志向の交互作用が精神的不健康の指標である抑うつに影響を与えるかどうか検討し、曖昧さに耐えられなくても適応的に諦めることができれば精神的不健康に陥らずに済むかどうか、曖昧さ耐性の低さに内包される適応性を男女ごとに探究することを目的とする。仮説は、「曖昧さ耐性が低い場合でも、わりきりの有効性認知が高ければ抑うつが低くなる(仮説1)」「曖昧さ耐性が低く、対処の限界性認知が高ければ抑うつが高くなる(仮説2)」とする。なお、性差については明確な仮説を設定することが困難であるため、本研究においては探索的に検討することとする。

方法

調査協力者および調査時期

調査協力者は、(株)クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースに登録された大学生モニター計200名(男性100名、女性100名)であった。平均年齢は20.86歳($SD=1.45$ 歳)であり、調査時期は2017年1月中旬であった。

測度

曖昧さ耐性 友野(2023)による新版曖昧さ耐性尺度24項目を用いた。この尺度は、個人が現在直面している、若しくは将来起こることが予測される曖昧さにどの程度耐えられるかの程度を測定するものであり、“曖昧さを統制する能力(項目例：将来のことがはっきりしていない状態に、耐えることができる。)”、“曖昧さを楽しむ能力(項目例：先行きが見通せない状況を、楽しめる。)”という2つの下位尺度がある。両下位尺度とも、曖昧さ耐性が高いほど得点が高くなるように構成されている。本研究では、調査協力者が各項目について普段の自分にどの程度あてはまるのかについて、「まったくあてはまらない(1点)」「ほとんどあてはまらない(2点)」「どちらでもない(3点)」「かなりあてはまる(4点)」「とてもあてはまる(5点)」の5件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた。

わりきり志向 浅野(2010)によるわりきり志向尺度9項目を用いた。この尺度は、個人の目標レベルでの諦めを測定するものであり、“わりきりの有効性認知(項目例：考え込むよりもわりきって次に進もうと思う)”、“対処の限界性認知(項目例：自分の限界を超えるようなことはあきらめた方がいいと思う)”という2つの下位尺度がある。両下位尺度とも、目標レベルでの諦めが高いほど得点が高くなるように構成されている。本研究では、調査協力者が各項目について普段の自分がどの程度考えるのかについて、「全く考えない(1点)」「ほとんど考えない(2点)」「あまり考えない(3点)」「どちらとも言えない(4点)」「たまに考える(5点)」「ほとんど考える(6点)」「いつも考える(7点)」の7件法で回答を求め、下位尺度ごとにそれぞれ合計得点を算出して用いた。

抑うつ 島他(1985)による日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D: Radloff, 1977) 20項目を用いた。この尺度は、個人の抑うつ状態の程度を測定するものであり、抑

ストレスフルだと認知していない場合(友野・橋本, 2005; 友野・橋本, 2006)は、曖昧さ耐性が高い場合よりもむしろ精神的健康が維持増進されていることが示されている。これらの知見の解釈として、さきに述べたFrenkel-Brunswik (1954)による曖昧さ耐性の低さの定義の一部である“白か黒か式の解決”がかかわっていることが仮定される。つまり、曖昧さ耐性が低くともストレスイベントの経験が少なかったりストレスフルだと認知しなかったりすれば、置かれた状況は黒ではなく白と判断され、結果として精神的健康が維持増進されるということである。このことから、従来の研究の主眼となっていた、曖昧さ耐性が低いことによる不適応性のみならず、曖昧さ耐性の低さに内包される適応性を探究することによって、曖昧さ耐性と精神的健康の関連についてのより多角的な理解が可能になってくるように思われる。

ところで、さきに述べた諦めについてであるが、こちらも時と場合によっては必ずしも精神的不健康に繋がらないことが示唆されている。Wrosch, et al. (2003)は、当初の目標を諦めコミットメントを放棄する「目標への非関与」や、新たな目標を設定しコミットしていく「目標の再関与」が、それぞれストレスや侵入思考の低さや自己統制感の高さなど精神的健康と関連することを示している。これらのことは、ひとくちに諦めと言っても、適応的にはたらく場合もあれば不適応的にはたらく場合もあることを示唆しているように思われる。関連して、村山・及川(2005)は、“行動レベルで回避的であっても、目標レベルで回避的でなければ不適応的にならない”と述べている。浅野(2010)によると、ここであいうところの行動レベルでの回避は目標達成のための行動をやめることを指し、目標レベルでの回避は目標を諦める際に「なぜ諦めるのか」という意図や動機を指している。ここでは、別の目標を有したうえで当初の目標を諦める場合であれば、目標レベルにおいては回避的ではない、すなわち適応的な諦めと捉えることが可能である。

以上を踏まえ浅野(2010)は、個人が葛藤状態にある際に目標レベルでの諦めを有する個人傾向を「わりきり志向」と定義し、他の問題や課題への移行が自身にとって有益であるという前向きな志向性である「わりきりの有効性認知」と、個人が抱えている問題や課題に対する対処の限界を動機として、問題や課題に対する対処をやめるという志向性である「対処の限界性認知」の2側面を有した「わりきり志向尺度」を開発している。そして、わりきりの有効性認知は抑うつと負の関連、対処の限界性認知は正の関連がそれぞれ示されている。このことから、前者は適応的な諦め、後者は不適応的な諦めとみなすことができよう。

ここまで述べてきたことを踏まえると、過去に得られてきた知見においては、曖昧さ耐性が低い場合は諦め方が不適応的であるが故に精神的健康を損ないやすいことのみが示されてきたのかもしれない。その一方で、曖昧さ耐性が低くとも諦め方が適応的であれば精神的健康を維持できるかもしれないことが仮定される。曖昧さ耐性と適応的な諦めについての関連を検証した研究はほとんどないため、諦めを適応的なものと不適応的なものとに分けて曖昧さ耐性との関連を検討することには意義があるように思われる。

なお、曖昧さ耐性と精神的健康の関連については性差の存在が指摘されている。たとえば、先述の曖昧さ耐性が低い方が高い場合よりもむしろ精神的健康を維持増進しているような交互作用が見受けられた知見を概観すると、友野・橋本(2006)では男性のみ、友野・橋本(2005)では女性のみ有意な交互作用が示されており、男女で結果が一貫していない。これらの性差が生じる原因の可能性の1つ

曖昧さ耐性とわりきり志向および精神的健康の関連について¹⁾

友野 隆成

Lazarus & Folkman (1984 本明他監訳 1991)は、“曖昧さは、その人が自分の個人的な気質・性向や信条、または経験に基づいた意味付けをするという意味では投影法的な状況を作り出す”と述べている。このことから、個人の主観的な要因が曖昧さを捉える際に大きく影響し、曖昧さを脅威と捉える個人がいる一方で、脅威と捉えない個人もいることが想定される。この、曖昧さを脅威と捉えるか否かを表わす個人要因を、「曖昧さ耐性」という。

曖昧さ耐性は、“曖昧な事態を好ましいものとして知覚(解釈)する傾向”と定義されており(Budner, 1962)、適応的なパーソナリティとみなすことができる。一方、この特性についての研究の源流を辿ると、Frenkel-Brunswik (1949)によって行われた一連の権威主義パーソナリティ研究に行き着く。この研究では、観察によって権威主義者の曖昧さ耐性が低いことが示されており、それを端緒にその後の曖昧さ耐性の研究においては主として曖昧さ耐性の低さについて論考されてきた。先述のBudner (1962)では、曖昧さ耐性の低さを“曖昧な事態を恐れの原因として知覚(解釈)する傾向”と定義しており、曖昧さ耐性の低さは精神的な不健康に繋がりやすい傾向があることが示唆されている(Andersen & Schwartz, 1992; 友野・橋本, 2006; 友野, 2010など)。

曖昧さ耐性の低い者が精神的な不健康に陥りやすいことを説明可能な要因は複数考えられるが、その一つとして、曖昧さ耐性が低い者はすぐに諦める(Lazarus & Folkman, 1984 本明他監訳 1991)ことが挙げられる。Frenkel-Brunswik (1954)による“対称性、熟知性、明確さ、規則性に対する過度の好み、白か黒か式の解決、過度に単純化された二分化、あれかこれかという無条件の解決、早すぎる終結、固執、ステレオタイプの傾向”という曖昧さ耐性の低さの定義からも、曖昧さ耐性が低い者は直面した事態に包含される曖昧さに耐えることができないために、物事を容易に諦めることが想定される。鈴木(2004)はストレス研究の文脈において、諦めをコーピングの一種として捉え、「放棄・諦め」のコーピングを用いると抑うつが高くなることを示していることから、曖昧さ耐性の低い者が行う諦めは、不適応的なコーピングを行った結果、精神的健康を損なうものであるように思われる。

その一方で、曖昧さ耐性が低くとも時と場合によっては必ずしも精神的な不健康には繋がらないかもしれない可能性を指摘する研究もいくつか見受けられる。例えば、個人の持つ認知的脆弱性と経験したストレスイベントの交互作用が精神的な不適応を予測するとされる素因ストレスモデル(Metalsky, et al., 1987)によって曖昧さ耐性と精神的健康の関連を検討した研究においては、曖昧さ耐性が低くともストレスイベントの経験が少ない場合(友野・橋本, 2006; 友野, 2015)や、ストレスイベントを

1) 本研究は、公益社団法人日本心理学会奥羽ネガティブ心理学研究会第1回公開研究集会「Negativityについて考える ― 社会生活における Negativity ―」において発表された内容を再分析・再構成したものである。

宮城学院女子大学大学院人文学会会則

第一章 名称及び事務所

第一条 本会は、宮城学院女子大学大学院人文学会と称する。

第二条 本会は、事務所を宮城学院女子大学大学院事務室内に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 本会は、人文科学に関する研究を推進し、会員の知見を高めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 各種研究会、研究発表大会及び講演会等の開催
- 2 機関誌、会報及び会員名簿等の発行
- 3 他の研究団体・機関等の連絡及び協力
- 4 その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

第三章 会員及び組織

第五条 本会は、次の一般会員及び特別会員をもって組織する。

1 一般会員

- (1) 本学大学院人文科学研究科に学生として在籍中の者及び同大学院を修了した者
- (2) 本学大学院に研究生又は科目等履修生として在籍中の者及び在籍したことのある者
- (3) 本学大学院を中途退学した者
- (4) 本学芸学部を卒業し、他学大学院に学生として在籍中の者及び他学大学院を修了した者

2 特別会員

- (1) 本学大学院人文科学研究科に専任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (2) 本学大学院に兼任又は併任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (3) 前号の規定する以外の者の有志で、本会則第七条に規定する委員会の推薦により、総会において承認された者。ただし、本号に該当する会員は、本会則第七条及び第八条の規定に係る権利をもたない。

第四章 会員の権利及び義務

第六条 会員は、次の権利及び義務を有する。

- 1 機関誌、会報等の配付及び本会が開催する諸事業の案内を受け、随時、研究成果を発表することができる。
- 2 会費は、毎会計年度内の指定された日までに納入しなければならぬ。
- 3 三年間継続して会費を滞納した場合には、会員の資格を失う。

第五章 役員及び任務

第七条 本会に、次の役員を置き、委員会を組織して、事務及び運営に当たる。

1 会長 一名

会長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 委員 若干名

委員は、委員会を組織して会長を補佐し、本会の事業を遂行するために、会務の運営と執行に当たる。

3 監査委員 二名

監査委員は、本会の会計を監査する。監査は、毎会計年度末に行う。ただし、必要に応じて、随時、行うことができる。

第六章 役員の選任及び任期

第八条 本会の役員は、次の方法によって選任する。

1 会長には、本学大学院人文科学研究科長を推薦する。

2 委員は、一般会員及び特別会員の中から推薦又は選挙によって選任し、総会の議を経て、会長から委嘱する。

3 委員会の委員長及び副委員長は、委員の互選によって選任する。

4 監査委員は、委員の中から互選によって選任し、総会の議を経て会長から委嘱する。

第九条 役員の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

第七章 会議等の開催及び議決

第十条 本会は、毎年一回定期総会を開き、会務について報告し、審議する。総会は、本会会員の二分の一以上の出席を持って成立する。ただし、委任状を含むものとする。議決には、出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十一条 会長は、会員の五分の一以上の要請又は委員会の議に基づいて、臨時総会を招集することができる。

第十二条 委員会は、随時、開くものとする。

第十三条 研究発表大会は、総会の日程に併せて開催するものとする。

る。

第八章 会計

第十四条 本会の経費は、会費その他の収入をもって充てる。

第十五条 本会の会費は、年額千円とし、四月末日までに納入するものとする。ただし、臨時に要する費用は、その都度、徴収することができる。

第十六条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十七条 本会の会計並びに監査に関する報告は、毎年一回、総会において行う。

第九章 会則の変更

第十八条 本会則の変更は、委員会の議を経て、総会の承認を得るものとする。

附則 本会則は、一九九八年十二月二十三日から施行する。

《執筆者紹介》

友野 隆成

本学大学院人文科学研究科人間文化学専攻
教授

木口 寛久

本学大学院人文科学研究科英語・英米文学専攻
准教授

澤邊 裕子

本学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻
非常勤講師

下山 千晴

本学大学院人文科学研究科人間文化学専攻
二十四年度修了生

阿曾 愛絵花

本学大学院人文科学研究科人間文化学専攻
二十四年度修了生

木村 安未紗

本学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻
二十四年度修了生

武田 紗輝

本学大学院人文科学研究科英語・英米文学専攻
二十四年度修了生

三浦 ひより

本学大学院人文科学研究科英語・英米文学専攻
一年

多勢 早智

本学大学院人文科学研究科生活文化デザイン学専攻
一年

編集後記

この度、『人文学会誌第二十六号』の編集を担当し、無事に本号をお届けできることを大変嬉しく思います。

本号では、本年度の修了生による論文や修士論文要旨、さらに在学生による研究ノートなど、幅広い内容を掲載することができました。それぞれの研究が生まれるまでの道のりは決して平坦ではなく、問題設定から執筆に至るまで、多くの試行錯誤と努力があったことと思います。誌面を通じて、院生一人ひとりの歩みを少しでも感じ取っていただければ幸いです。

編集作業は、限られた時間の中での原稿整理やレイアウト調整、校正作業など、想像以上に細やかな調整の連続でした。それでも、執筆者の皆さまのご協力、そして日頃から東誠社の皆さまにご尽力いただいたおかげで、こうして無事に刊行に至ることができました。心より感謝申し上げます。

本誌が今後も大学院生や会員の研究成果を共有し、互いに学び合える場であり続けることを願っています。今後とも『人文学会誌』へのご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

(木口)

宮城学院女子大学大学院人文学会誌

第 二 十 六 号

二〇二五年三月三十一日発行

編集及び
発行人

宮城学院女子大学大学院

〒九八一―八五五七

仙台市青葉区桜ヶ丘九一―一

人文学会 友野 隆成

☎〇二二―二七九―二三二(代)

印刷所

株式会社 東 誠 社
仙台市宮城野区岡田西町一―五五